

法住寺殿跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―一〇

法住寺殿跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

法住寺殿跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



最勝光院地業55（北西から）



最勝光院地業55（北西から）



1 最勝光院地業55（南西から）



2 竪穴住居全景（東から）



1 竪穴住居347（北西から）



2 竪穴住居321貯蔵穴512土器出土状況（北西から）

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、学校新築工事に伴う法住寺殿跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

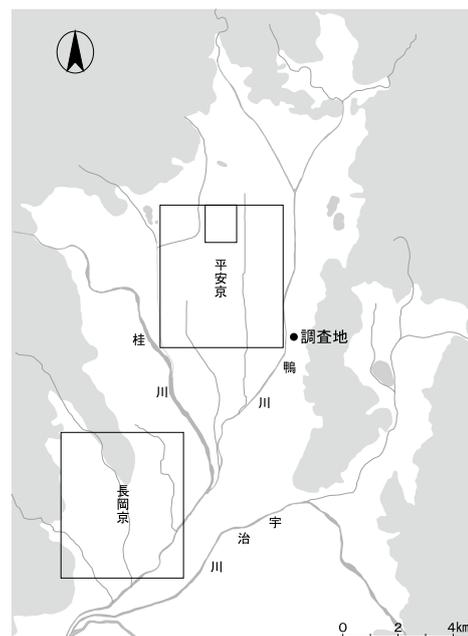
平成25年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 法住寺殿跡（文化財保護課番号 10 S 196） |
| 2 調査所在地 | 京都市東山区本町通10丁目下池田町（旧一橋小学校） |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 2012年1月10日～2012年7月31日 |
| 5 調査面積 | 2,285㎡ |
| 6 調査担当者 | 小檜山一良・津々池惣一・上村和直・金島恵一・柏田有香・菅田 薫 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「京都駅」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 小檜山一良・上村和直・津々池惣一 |
| 14 執筆分担 | 小檜山一良：1、3 - (1)・(2)、4 - (1)・(2)・(4)～(10)、5
津々池惣一：2
上村和直：3 - (3)・(4)、4 - (3)・(11)、5 |
| 15 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査の経過	2
2. 調査地の位置と環境	5
(1) 位置と環境	5
(2) 周辺の調査	7
3. 遺 構	13
(1) 基本層序	13
(2) 検出遺構の概要	17
(3) 1区の検出遺構	17
(4) 2区の検出遺構	43
4. 遺 物	52
(1) 遺物の概要	52
(2) 土器類	52
(3) 瓦類	73
(4) 銭貨	77
(5) 金属製品	78
(6) 木製品	78
(7) 石製品	85
(8) ガラス製品	86
(9) 動物遺体	86
(10) 月輪小学校内出土の古墳時代の土器	86
(11) 一橋小学校内2次調査出土の瓦類	89
5. まとめ	97

図 版 目 次

巻頭図版 1	遺構	最勝光院地業 55 (北西から)
巻頭図版 2	遺構	最勝光院地業 55 (北西から)
巻頭図版 3	遺構	1 最勝光院地業 55 (南西から) 2 竪穴住居全景 (東から)
巻頭図版 4	遺構	1 竪穴住居 347 (北西から) 2 竪穴住居 321 貯蔵穴 512 土器出土状況 (北西から)
図版 1	遺構	第 3 - 2 面中部遺構平面図 1 (1 : 200)
図版 2	遺構	第 3 - 2 面中部遺構平面図 2 (1 : 200)
図版 3	遺構	第 3 - 2 面南部遺構平面図 3 (1 : 200)
図版 4	遺構	第 3 - 1 面中部遺構平面図 (1 : 200)
図版 5	遺構	第 2 面北部遺構平面図 (1 : 200)
図版 6	遺構	第 2 面中部遺構平面図 (1 : 200)
図版 7	遺構	第 2 面南部遺構平面図 (1 : 200)
図版 8	遺構	第 1 - 3 面北部遺構平面図 (1 : 200)
図版 9	遺構	第 1 - 3 面中部遺構平面図 (1 : 200)
図版 10	遺構	第 1 - 3 面南部遺構平面図 (1 : 200)
図版 11	遺構	第 1 - 2 面北部遺構平面図 (1 : 200)
図版 12	遺構	第 1 - 2 面中部遺構平面図 (1 : 200)
図版 13	遺構	第 1 - 2 面南部遺構平面図 (1 : 200)
図版 14	遺構	第 1 - 1 面北部遺構平面図 (1 : 200)
図版 15	遺構	第 1 - 1 面中部遺構平面図 (1 : 200)
図版 16	遺構	第 1 - 1 面南部遺構平面図 (1 : 200)
図版 17	遺構	南部東西セクション断面図 (1 : 80)
図版 18	遺構	北部東西セクション断面図 1 (1 : 80)
図版 19	遺構	北部東西セクション断面図 2 (1 : 80)
図版 20	遺構	南北セクション断面図 1 (1 : 80)
図版 21	遺構	南北セクション断面図 2 (1 : 80)
図版 22	遺構	南北セクション断面図 3 (1 : 80)
図版 23	遺構	1 竪穴住居全景 (東から) 2 竪穴住居 559 (北から)
図版 24	遺構	1 竪穴住居 321 (北西から)

- 2 竪穴住居321炉452（北から）
 3 竪穴住居321土器出土状況（西から）
- 図版25 遺構 1 竪穴住居321貯蔵穴512（北西から）
 2 竪穴住居321貯蔵穴512（西から）
 3 竪穴住居347（北西から）
- 図版26 遺構 1 竪穴住居347貯蔵穴453（北東から）
 2 竪穴住居339（北西から）
 3 竪穴住居330（北東から）
 4 竪穴住居330貯蔵穴378（北東から）
- 図版27 遺構 1 竪穴住居340（東から）
 2 竪穴住居346（北東から）
 3 溝403（東から）
- 図版28 遺構 1 土坑434土器出土状況（西から）
 2 溝335土器出土状況（北から）
 3 土坑324土器出土状況（北から）
 4 竪穴住居314土器出土状況（南西から）
- 図版29 遺構 1 掘立柱建物全景（北西から）
 2 掘立柱建物318（北西から）
- 図版30 遺構 1 掘立柱建物263・268（西から）
 2 柱穴304（東から）
 3 柱穴261（南から）
 4 柱穴307（南から）
 5 柱穴250（東から）
- 図版31 遺構 1 1区北部第2面全景（南西から）
 2 1区南部第2面全景（東から）
- 図版32 遺構 1 濠150（北東から）
 2 濠150断面（東から）
- 図版33 遺構 1 濠150板列（東から）
 2 濠150杭と綱出土状況（南西から）
 3 濠150断面（東から）
- 図版34 遺構 1 2区第2面全景（北東から）
 2 路面900C（北から）
 3 路面900C拡大（北から）
- 図版35 遺構 1 1区土取穴群（南西から）
 2 2区土取穴群（北西から）

- 図版36 遺構 1 2区第1面全景（北東から）
2 2区西端部第1面（北から）
- 図版37 遺構 1 最勝光院整地層（西から）
2 最勝光院地業55（北西から）
- 図版38 遺構 1 最勝光院地業55石列（東から）
2 最勝光院地業55（北西から）
- 図版39 遺構 1 最勝光院地業55（南西から）
2 最勝光院地業55石面（北西から）
- 図版40 遺構 1 最勝光院整地層断割（南西から）
2 最勝光院整地層断割（西から）
- 図版41 遺構 1 最勝光院地業55拡張区1（南から）
2 地業60（南西から）
3 地業60（西から）
4 地業166（南東から）
- 図版42 遺構 1 溝833・路面900B（北から）
2 路面900B（北から）
3 拡張区3 溝880（北から）
- 図版43 遺構 1 1区北部第1面全景（南東から）
2 1区南部第1面全景（東から）
- 図版44 遺構 1 井戸767（北から）
2 井戸767曲物出土状況（北から）
3 土坑54瓦器盤出土状況（西から）
- 図版45 遺物 古墳時代の土器類
- 図版46 遺物 古墳時代・奈良時代の土器類
- 図版47 遺物 平安時代の土器類
- 図版48 遺物 平安時代から室町時代の土器類
- 図版49 遺物 江戸時代以降の土器類
- 図版50 遺物 江戸時代以降の土器類
- 図版51 遺物 軒丸瓦
- 図版52 遺物 軒平瓦
- 図版53 遺物 軒平瓦・その他の瓦
- 図版54 遺物 木製品
- 図版55 遺物 石製品
- 図版56 遺物 月輪小学校内出土土器

挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図3	周辺調査位置図 (1 : 6,000)	8
図4	基本層序1 (1 : 50)	14
図5	基本層序2 (1 : 50)	15
図6	溝403実測図 (1 : 50)	18
図7	竪穴住居559実測図 (1 : 50)	19
図8	竪穴住居314実測図 (1 : 50)	20
図9	竪穴住居321実測図 (1 : 50)	21
図10	竪穴住居330実測図 (1 : 50)	22
図11	竪穴住居339実測図 (1 : 50)	23
図12	竪穴住居347実測図 (1 : 50)	24
図13	土坑324実測図 (1 : 40)	25
図14	竪穴住居340実測図 (1 : 50)	26
図15	竪穴住居346実測図 (1 : 50)	26
図16	掘立柱建物318実測図 (1 : 50)	27
図17	掘立柱建物263・268実測図 (1 : 50)	28
図18	掘立柱建物325実測図 (1 : 50)	29
図19	掘立柱建物311実測図 (1 : 50)	30
図20	濠150実測図 (1 : 100)	32
図21	濠150内板列実測図 (1 : 50)	33
図22	濠150内綱167実測図 (1 : 20)	34
図23	掘立柱列176実測図 (1 : 50)	35
図24	地業55北部実測図 (1 : 50)	37
図25	地業55南部実測図 (1 : 50)	38
図26	地業60実測図 (1 : 50)	39
図27	地業62実測図 (1 : 50)	39
図28	地業166実測図 (1 : 50)	40
図29	柱列7実測図 (1 : 50)	41
図30	柱列127実測図 (1 : 50)	42
図31	窯19実測図 (1 : 50)	42
図32	路面900C平面図 (1 : 60)	44

図33	路面900B平面図（1：60）	45
図34	溝833・630実測図（1：100）	46
図35	柱列778実測図（1：50）	47
図36	柱列754実測図（1：50）	49
図37	柱列782実測図（1：50）	50
図38	柱列832実測図（1：50）	50
図39	竪穴住居314出土土器実測図（1：4）	53
図40	竪穴住居321出土土器実測図（1：4）	53
図41	竪穴住居347・330・412出土土器実測図（1：4）	54
図42	土坑324出土土器実測図（1：4）	55
図43	第2面掘下げ出土土器実測図（1：4）	55
図44	第3面掘下げ出土土器実測図（1：4）	56
図45	その他の古墳時代遺構出土土器実測図（1：4）	58
図46	土坑292出土土器実測図（1：4）	59
図47	土坑822出土土器実測図（1：4）	59
図48	土坑855出土土器実測図（1：4）	60
図49	土坑863出土土器実測図（1：4）	60
図50	ピット291出土土器実測図（1：4）	60
図51	溝833出土土器実測図（1：4）	61
図52	路面900A・900B・900C出土土器実測図（1：4）	61
図53	土坑682出土土器実測図（1：4）	62
図54	濠150出土土器実測図（1：4）	62
図55	地業55・60・166出土土器実測図（1：4）	63
図56	土坑171出土土器実測図（1：4）	64
図57	土坑173出土土器実測図（1：4）	64
図58	第1面掘下げ出土土器実測図（1：4）	65
図59	第2面掘下げ出土土器実測図（1：4）	65
図60	第3面掘下げ出土土器実測図（1：4）	66
図61	その他の平安時代遺構出土土器実測図（1：4）	66
図62	井戸767出土土器実測図（1：4）	68
図63	溝630・土坑54・405・第1面検出中出土土器実測図（1：4）	68
図64	井戸687出土土器実測図（1：4、281のみ1：6）	69
図65	井戸703出土土器実測図（1：4）	70
図66	井戸679出土土器実測図（1：4）	70
図67	土坑704出土土器実測図（1：4、290のみ1：6）	71

図68	井戸674出土土器実測図（1：4）	71
図69	その他の江戸時代遺構出土土器実測図（1：4）	72
図70	出土瓦拓影・実測図1（1：4）	74
図71	出土瓦拓影・実測図2（1：4）	76
図72	出土銭貨拓影（1：2）	77
図73	出土金属製品実測図（1：2）	79
図74	出土木製品実測図1（1：10）	80
図75	出土木製品実測図2（1：10、367のみ1：15）	81
図76	出土木製品実測図3（1：4）	82
図77	出土木製品実測図4（1：4）	83
図78	出土石製品実測図1（1：4、387のみ1：2）	84
図79	出土石製品実測図2（1：6）	85
図80	出土ガラス製品実測図（1：3）	86
図81	月輪小学校内出土土器実測図（1：4）	88
図82	一橋小学校内2次調査出土瓦類拓影・実測図1（1：4）	91
図83	一橋小学校内2次調査出土瓦類拓影・実測図2（1：4）	93
図84	一橋小学校内2次調査出土瓦類拓影・実測図3（1：4）	95
図85	古墳時代の遺構概要図（1：400）	98
図86	洛東地域南部の古墳時代遺構分布図（1：40,000）	99
図87	奈良時代の遺構概要図（1：400）	100
図88	洛東地域南部の奈良時代遺構分布図（1：40,000）	101
図89	平安時代前期の遺構概要図（1：400）	102
図90	平安時代中期の遺構概要図（1：400）	103
図91	平安時代後期前半の遺構概要図（1：400）	105
図92	平安時代後期後半（最勝光院期）の遺構概要図（1：400）	107
図93	鎌倉時代の遺構概要図（1：400）	110
図94	室町時代の遺構概要図（1：400）	111
図95	江戸時代以降の遺構概要図（1：400）	112

写 真 目 次

写真1	調査前風景（南東から）	3
写真2	重機掘削風景（南西から）	3
写真3	調査風景（南東から）	3
写真4	調査風景（南から）	3
写真5	調査風景（南東から）	3
写真6	現地説明会（北西から）	3
写真7	小学生見学会（南東から）	3
写真8	中学生チャレンジ体験（南東から）	3
写真9	土坑435B壁面	31
写真10	埋納土坑227	36
写真11	井戸687	51
写真12	平安時代の輸入陶磁器	67
写真13	出土金属製品	78
写真14	出土ガラス製品	86
写真15	月輪小学校内出土土器	89

表 目 次

表1	最勝光院関連略年表	6
表2	周辺既往調査一覧表	9
表3	遺構概要表	16
表4	遺物概要表	52

観 察 表 目 次

観察表 1	竪穴住居314・321・347・330・412出土土器一覧表	114
観察表 2	土坑324出土土器一覧表	114
観察表 3	第2・3面掘下げ出土土器一覧表	114
観察表 4	その他の古墳時代遺構出土土器一覧表	115
観察表 5	土坑292・822・855・863出土土器一覧表	115
観察表 6	ピット291出土土器一覧表	116
観察表 7	溝833出土土器一覧表	116
観察表 8	路面900A・900B・900C出土土器一覧表	116
観察表 9	土坑682出土土器一覧表	116
観察表 10	濠150出土土器一覧表	117
観察表 11	地業55・60・166出土土器一覧表	117
観察表 12	土坑171出土土器一覧表	117
観察表 13	土坑173出土土器一覧表	118
観察表 14	第1面掘下げ出土土器一覧表	119
観察表 15	第2・3面掘下げ出土土器一覧表	119
観察表 16	その他の平安時代遺構出土土器一覧表	120
観察表 17	井戸767ほか出土土器一覧表	120
観察表 18	井戸687出土土器一覧表	120
観察表 19	井戸703・687・679・674、土坑704出土土器一覧表	121
観察表 20	その他の江戸時代遺構出土土器一覧表	121
観察表 21	出土瓦類一覧表	122
観察表 22	出土銭貨一覧表	122
観察表 23	出土金属製品一覧表	123
観察表 24	出土木製品一覧表	123
観察表 25	出土石製品一覧表	123
観察表 26	出土ガラス製品一覧表	124
観察表 27	月輪小学校内出土土器一覧表	124
観察表 28	一橋小学校内2次調査出土瓦類一覧表	124

法住寺殿跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査対象地は、京都市東山区本町通10丁目下池田町に所在する京都市立一橋小学校の校内にあたり、京都市東山区南部小中一貫校（仮称）が新設されることになった。当地は法住寺殿跡の遺跡範囲にあっており、1982・1983年度に財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、小学校の体育館建設などで発掘調査を実施し、地表下約0.5mで平安時代後期の法住寺殿に関連する遺構を検出している。このため、京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）は京都市教育委員会に発掘調査の実施を指導した。調査は、京都市教育委員会から財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、文化財保護課の指導の下に、発掘調査を実施することとなった。

今回の調査では、周辺の発掘調査・立会調査などの調査成果に基づき、平安時代後期の法住寺殿最勝光院跡の遺構を検出するとともに、当地域の歴史的な変遷を明らかにすることを目的とした。

調査区は、文化財保護課の指導により、新校舎の建物範囲内に約2,200㎡の規模で設定した。土置き場を確保するために、北側の1区の調査を先行して、調査終了後に埋め戻し、南側の2区の調査を行うこととした。最終的に調査面積は、拡張区を3箇所設定したため、約2,285㎡となった。

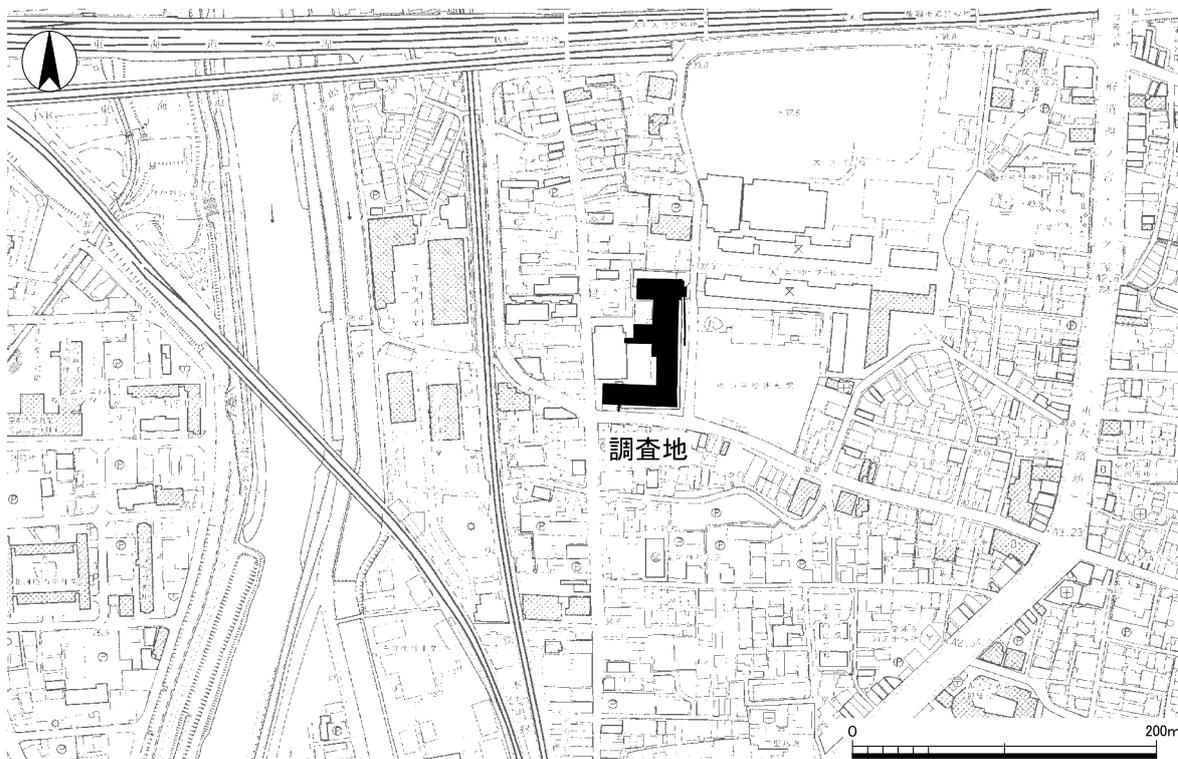


図1 調査位置図（1：5,000）

(2) 発掘調査の経過

発掘調査は、2012年1月12日に調査事務所を建ち上げ、機材・発掘用具の搬入を行い、16日から1区の調査を開始し、遺構面（第1面、地表下0.4～0.7m）までの機械掘削を実施した。旧校舎建物基礎などの攪乱を掘削した後、遺構検出状況を記録した。その後、1月19日から手掘りで中世以降の柱穴・土坑・溝などの遺構調査を開始した。中世以降の遺構の写真撮影や平面図を作成し、調査終了後に平安時代の遺構調査に着手した。

平安時代後期の遺構面では、最勝光院内の複数の建物地業と約2mの厚さにもなる整地層を検出した。3月1日に初回の全景写真撮影を行い、地業や整地土など遺構の実測図を作成した。整地層は良く締まり非常に堅いうえに遺物が少ないため、小型重機を使用して掘り下げた。整地層の下面では、柱穴群とともに、大規模な濠や多くの土取穴を検出した。3月28日に2回目の全景写真撮影を行い、柱穴や土取穴などの遺構の実測図を作成した。

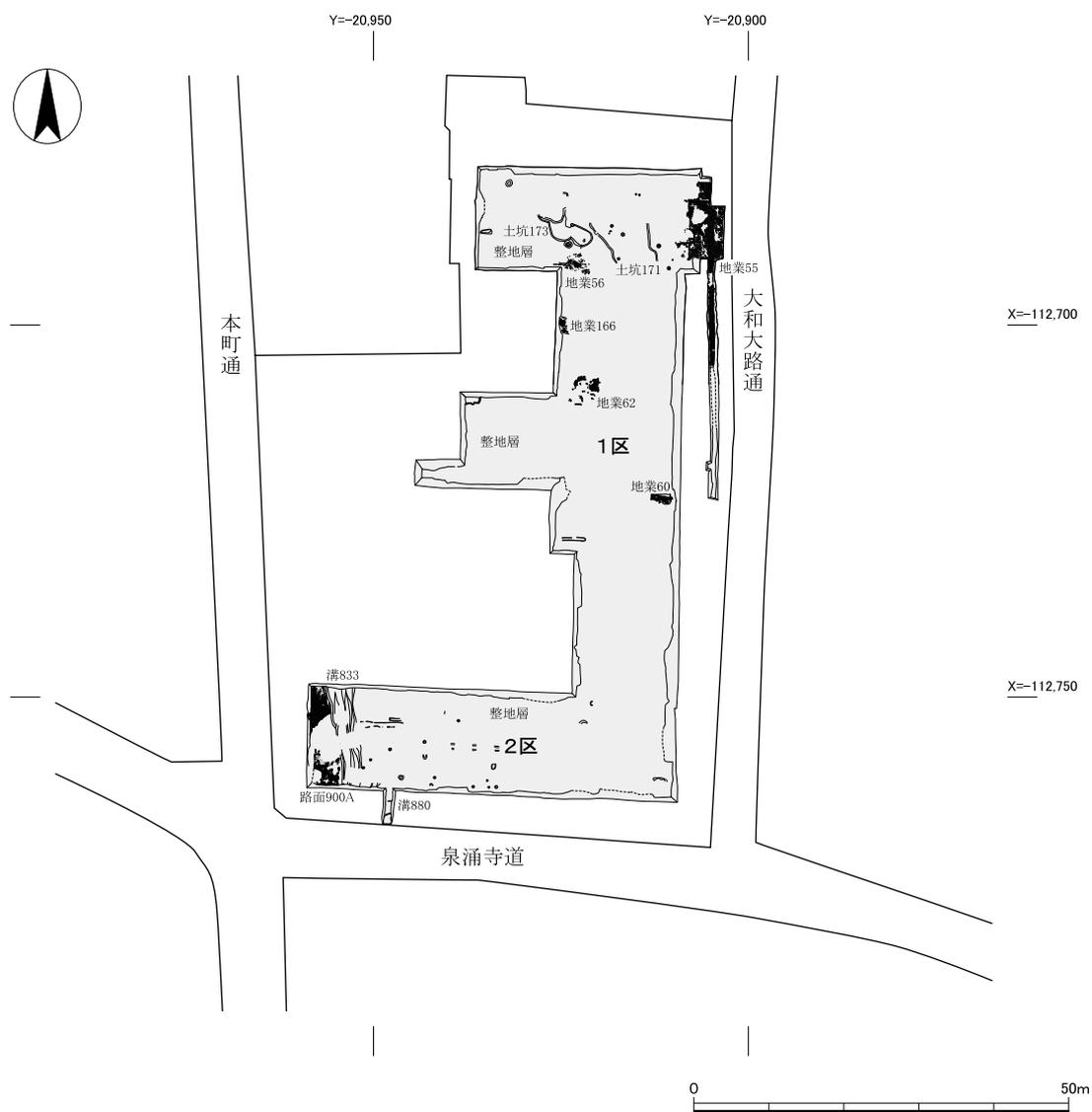


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)



写真1 調査前風景（南東から）



写真2 重機掘削風景（南西から）



写真3 調査風景（南東から）



写真4 調査風景（南から）



写真5 調査風景（南東から）



写真6 現地説明会（北西から）



写真7 小学生見学会（南東から）



写真8 中学生チャレンジ体験（南東から）

また、文化財保護課の指導により、平安時代後期の地業55の範囲確認のために1区北部の東側に拡張区1（約75㎡）を設定した。これにより地業55はさらに東側と南側に連続していくことを確認し、写真撮影および実測図の作成を行った。地業55の詳細な図面作成のため、オルソ測量を4月4日に実施した。また、平安時代に造成されたと考えられていた西側への段差の構造を知るため、1区中央部の西側に拡張区2を設定したが、近代の削平により成果は得られなかった。

平安時代後期の遺構調査終了後、調査区中部西側で、奈良時代の掘立柱建物を5棟検出した。4月18日に個別遺構の写真撮影を行った。同一面で、古墳時代初期の竪穴住居跡を10棟検出した。これらの住居跡は重複しているため、新しい住居跡から順次調査を進め、個別写真撮影・実測図作成を実施した。4月24日には古墳時代の全景写真撮影を行った。さらにその後、重複した竪穴住居跡などの調査を行い、個別写真撮影、平面・断面実測を実施した。

日程短縮のために、1区の竪穴住居跡の調査中に、調査に影響のない北側から埋戻し作業を開始し、埋戻し作業と並行して2区の重機掘削を開始した。

2区の調査では、平安時代後期の道路面・東側溝・築地基底部を検出し、第1面として全景写真撮影は5月31日に実施した。さらに、最勝光院の南限を確認するために、調査区西側部分に南に突出する拡張区3を設定した。その結果、敷地内南端で東西方向の溝状遺構を検出した。

第2面は、平安時代前期の道路面・東側溝を中心として、全景写真撮影を6月27日に実施した。その後、古墳時代の全景写真撮影を7月10日に行った。

さらに下層遺構の有無と堆積状況の確認をするため、調査区北・西・南の3面の壁沿いに断割を行い、断面写真撮影・土層断面実測図を作成した。調査終了後、速やかに埋戻し作業を完了した。

最後に、事務所の解体・搬出、資材を撤収し、7月31日に全ての作業を終了した。

なお、調査の進行に伴い、各遺構面において適時、文化財保護課の臨検を受け、その指導の下に調査を進めた。

3月10日には現地説明会を実施し、平安時代後期の法住寺殿最勝光院の建物跡（地業）を中心に発掘成果を公開した。あわせて最勝光院関連の出土遺物の展示なども行った（参加者約460名）。4月28日には周辺住民を対象とした説明会を開催し、古墳時代初期の竪穴住居跡や溝を公開した（参加者約250名）。

また、5月30日・6月12日の2回にわたり、中学生チャレンジ体験を受け入れ、市内4校10名の中学生が平安時代後期の遺物包含層の掘下げなど発掘調査を体験した。

2月23日・4月23日には、一橋小学校の6年生が社会科授業で発掘調査の見学を行った。

調査および報告書作成にあたり、下記の方々の御協力を得た。記して謝意を表する次第である。

浅田昌久、伊藤淳史（京都大学）、國下多美樹（龍谷大学）、鈴木久男（京都産業大学）、高橋昌明（神戸大学）、豊田裕章（京都大学）、西山良平（京都大学）、二村盛寧（京都産業大学）、美川圭（立命館大学）、若林邦彦（同志社大学）（五十音順、敬称略）

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と環境

1) 位置

調査対象地は京都市東山区の南部にある元一橋小学校敷地内である。元一橋小学校の敷地は、東を大谷中・高等学校の西側道路（大和大路通）、西を本町通に挟まれ、南は泉涌寺通までである。調査区は敷地の東側に位置し、南北約85m、東西約50mの規模で設定した。

2) 地形

調査地の属する東山区一帯の地形は、東辺に東山連峰、西辺に扇状地、両者の間に丘陵、段丘が占めている。標高は東が高く西が低く、各々の地形は南北に帯状に細長い構成となっている。

また、地質構成では、東山連峰はチャートおよび泥岩を主とする中世層からなる。中央部の丘陵・段丘面は、大阪層群すなわち前期更新世（洪積世）の砂泥互層および礫質堆積物の分布域である。西部の扇状地面は、後期更新世から完新世（沖積世）の堆積層から成る。

調査地東側の東山連峰は、標高200～250mで、数本の谷筋によって將軍塚山（216.2m）、清水山（242.5m）、阿弥陀ヶ峰（196.4m）、泉山（192.0m）の山体に区切られる。谷筋の方向は、ほぼ南東から北西方向を指している。

調査地の自然地形も東山連峰の阿弥陀ヶ峰・泉山方向から鴨川に向けて南東から北西方向に緩やかに広がる扇状地形を呈し、調査地点はその先端に近い箇所に相当する。

また、往時においてはこの付近一帯の景観は「有高閣有平臺、有緑地有碧山、尤足仁人者楽哉」とあり、風光明媚な地であったとされている。（『重方記』詠暦2年（1161）4月13日条）

3) 交通路

調査地周辺の交通路は以下の通りである。

南北路としては、調査地西側を南北に現在の本町通が通り、南は伏見・宇治から大和に通じる。古来よりこの道路は「法性寺大路」「法性寺路」と呼ばれていた。

また、東西路としては、この近辺から東へ山科・近江・東国に通じる久々目路や滑石越の街道が機能していた。久々目路（渋谷越）は、六条坊門末より、小松谷付近を通り、清閑寺と阿弥陀ヶ峰の谷あいを通して山科から近江方面に到る街道である。滑石越は醍醐路とも呼ばれ、今熊野から瓦坂、北谷、滑り石を経て山科・醍醐から近江・東国への街道である。泉涌寺通は「観音寺大路」とも呼ばれ、東山の今熊野観音寺に通じる道である。

これらの道路は古来より存在していたとされており、この一帯は交通の要衝として捉えられる。

4) 歴史的環境

平安時代になると、調査地一帯は鳥部野と呼ばれ、西の化野に対して平安京東辺の葬送地とされていた。

平安時代中期には調査地の北東に隣接して、池田瓦窯が営まれた。現在の新瓦町、本瓦町、東・

表1 最勝光院関連略年表

時代	天皇	上皇	法住寺殿関連事項	最勝光院	関連事項
平安前期					承和元年(834)に造瓦長上工を置く『太政官符』を下す、元慶3年(879)大極殿再建。この頃、池田瓦窯(右の瓦屋)操業か？
平安中期			永延2年(988)3.26藤原為光が法住寺を供養〔扶桑略記〕。 長元5年(1032)12.8法住寺が焼亡〔小右記〕。		延長3年(925)藤原忠平が法性寺を造営。平安中期に西光寺創建、貞元2年(977)に六波羅密寺と改称〔六波羅密寺縁起〕。
平安時代後期前葉	1086 堀河 1107 鳥羽 1123	1086 白河			承暦元年(1077)法勝寺造営。 応徳3年(1086)鳥羽殿新造、白河上皇院政を開始。 康和3年(1101)平盛基が珍寺西の土地を借受る〔百合文書〕。 康和4年(1102)尊勝寺造営。 天永元年(1110)平正盛が六波羅に私堂を造立、後に拡張する〔江都督納言願文集〕。
	崇徳 1141 近衛 1155 後白河 1158 二条	1129 鳥羽 1158 後白河	保元元年(1156)1.7後白河上皇が藤原道憲(信西)の法住寺堂へ行幸〔山槐記〕。 保元3年(1158)10.23信西の妻(後白河乳母)が法住寺に清浄光院を供養〔兵範記〕。		大治4年(1129)白河上皇死去、鳥羽上皇院政開始。 長承元年(1132)平忠盛に内昇殿を許す。 久寿元年(1154)鳥羽金剛心院造営。 保元元年(1156)保元の乱起こる。 保元2年(1157)信西によって大内裏が修造される。 保元3年(1158)後白河上皇が院政を開始。 平治元年(1159)平治の乱起こる。
平安時代後期中葉	1165 六条 1169 高倉		応保元年(1161)4.13後白河上皇が新造東山御所(南殿)へ移徙、皇后宮同車〔重方記・山槐記・兵範記〕。同年8.2西御所に渡御、同年8.3七条上御所(北殿)に渡御〔山槐記〕。 長寛2年(1164)12.17平清盛造進の蓮華王院千体観音堂(三十三間堂)を供養〔百練抄・愚昧記〕。 仁安年間に南殿を改築・拡張し、仁安2年(1167)1.19後白河上皇が渡御、平滋子寝殿に御す〔兵範記・重方記〕。同年5.1七条殿(北殿)新馬場にて競馬あり〔山槐記〕。 嘉応元年(1169)6.17後白河上皇儀法堂で出家〔兵範記・玉葉〕。		永暦元年(1160)10.16熊野御体を新造社檀(今熊野)、日吉御体を東山新宮(今日吉)に移す〔百〕。 平氏の六波羅邸は、清盛の頃拡張され廿余町に及び、建物が三千二百余宇あった〔平家物語〕。 仁安2年(1167)平清盛が大政大臣となる。 仁安3年(1168)3.9平滋子の立后宣言をする。 嘉應元年(1169)4.12平滋子が女院号を得て、建春門院と称す。
平安時代後期後葉				承安元年(1171)11.1後白河法皇と建春門院は、法住寺殿近辺に阿弥陀堂の如き物の建造を企画し、平等院を歴覧〔玉葉〕。 承安2年(1172)2.3建春門院新御堂上棟〔玉葉〕。 承安3年(1173)6.6法皇新御堂に渡御、6.28鐘楼上棟〔吉記〕。10.5女院新御堂御所に移徙、10.16最勝光院と命名、10.21新御堂供養、12.24小御堂(御持仏堂)供養〔玉葉〕。	
			安元2年(1176)3.4後白河法皇が東山御所で五十宝算の賀を行う〔玉葉〕。同年7.8建春門院死去、亡骸を蓮華王院東に新造の法華三昧堂に埋葬〔玉〕。 治承元年(1177)12.17蓮華王院内の五重塔を供養〔玉葉・愚昧記・帝〕。	承安4年(1174)2.6後白河法皇と建春門院・高倉天皇が、法住寺殿から舟で最勝光院へ渡御〔吉記〕。 承安5年(1175)4.25最勝光院近辺焼亡、同年7.11法皇が建春門院新御所(最勝光院南町)に在りに渡御〔玉葉〕。 安元2年(1176)6.8最勝光院前の池に小童落ち入り死亡〔吉記〕。 治承2年(1178)12.2最勝光院内に塔心柱を建立〔百練抄〕。	治承元年(1177)鹿ヶ谷の密議起こる。 治承3年(1179)11.16平清盛が院政を停止し、鳥羽殿に後白河法皇を幽閉〔〕。
	1180 安德		寿永2年(1183)11.16法住寺殿の所々に湫を掘り、釘抜を構える〔玉葉〕。同年11.19木曾義仲が院御所(南殿)を襲撃・放火〔吉記・玉葉・百練抄・平家物語〕。	養和元年(1181)2.2後白河法皇が最勝光院南御所(建春門院御所)に渡御〔玉葉〕。 寿永2年(1183)7.8後白河法皇が新熊野社から舟で最勝光院へ臨幸〔吉記〕。	治承4年(1180)福原へ遷都し、後遷都する。 治承5年(1181)閏2.4平清盛が平盛国邸で死去。 寿永2年(1183)7.25平氏が六波羅邸に火を放つ〔玉葉〕。
鎌倉時代前半	1198 土御門 1210 順徳	1198 後鳥羽	建久2年(1191)2.21源頼朝、諸国に造営を課して、法住寺殿を再建〔吾妻鏡〕。 承元3年(1209)8.3法住寺殿の舎屋を少々壊し、三条西殿(三条烏丸殿)へ移築〔都禪記〕。	元暦2年(1185)7.12地震により北釣殿・二階廊・進物所屋など傾倒する〔吉記〕。 建久2年(1191)12.20後白河法皇が最勝光院南萱御所に渡御〔玉葉・都玉記〕。	文治元年(1185)平氏滅ぶ。頼朝諸国に守護地頭設置。 建久元年(1190)11.7六波羅新造亭(池殿跡)に頼朝入る〔玉〕。 建久3年(1192)後白河法皇死去、源頼朝が鎌倉幕府開く。 建久9年(1198)後鳥羽上皇院政開始。
鎌倉時代後半	1221 仲恭 ・1221 後堀河		建長元年(1249)3.23御堂(三十三間堂)・塔・不動堂が焼失〔帝王編年記〕。 文永3年(1266)4.29三十三間堂を供養(再建)〔帝王編年記〕。	嘉禄2年(1226)6.4窃盗の所為のため堂舎焼亡〔百練抄・明月記〕。 安貞元年(1227)3.3最勝光院を上棟(再建)〔百練抄〕。 正安3年(1301)2.17高辻富小路で火事、余炎で最勝光院が類焼〔帝王編年記〕。	正治2年(1200)水無瀬殿造営。 承久3年(1221)承久の乱。同年6.16六波羅館に時房・泰時が入る(六波羅探題府設置)〔吾妻鏡〕。 嘉禄2年(1226)8.3六波羅四方に堀池を掘る〔明月記〕。 安貞元年(1227)後鳥羽上皇が死去。 元弘3年(1333)鎌倉幕府滅ぶ。

南瓦町などの地名もそれを踏襲しているものと思われる。また、法住寺殿の前身とも言うべき法住寺は、藤原為光によって永延二年（988）に建立されたが位置は不明である。（『日本紀略』）平安時代後期になると、院の近臣である藤原通憲（信西）の館なども建てられていたという。

平安時代末期に至ると、後白河上皇の御所（南殿）が造営された。法住寺殿は南殿や北殿を始め多くの新造御所や蓮華王院、最勝光院などの御堂も建てられた広大な御所であった。その範囲は、北は七条坊門小路末、南は八条大路末付近、西は鴨川、東は東山麓までに及ぶと推定される。特に、南殿は平治の乱で敗死した院の近臣、藤原通憲（信西）の館の跡に応保元年（1161）に造営したもので、その南側には広大な法住寺池が存在し、西岸に最勝光院があった。

この最勝光院は、後白河上皇の女御、建春門院（平滋子）の御願による。承安二年（1172）春に上棟があり、翌年十月に上皇および建春門院の移徒がなされた。同年高倉天皇の行幸を仰ぎ盛大な供養も行われた。宇治の平等院鳳凰堂を模したとされる中心の阿弥陀堂は園池に面した荘厳な建物であったという。その他、最勝光院の中には、阿弥陀堂の南隣に小御堂と称した持仏堂があった。また、安元元年（1175）新御所と称する全く別な御所が造営された。対岸には新熊野神社が造営された。安元二年（1176）建春門院は崩御するが、その後も後白河法皇により使用されたという。その後、元暦二年（1185）年の地震で釣殿、廊等が転倒。さらに、嘉禄二年（1226）6月6日には放火で灰燼に帰した。（『明月記』）その後再建されたと推定されるが、正安三年（1301）に焼亡の記事があり、その後は再建されていない。（『帝王編年記』）

一方、法住寺殿では、平清盛の死去（1181）後、寿永二年（1183）11月19日、木曾義仲により法住寺殿（南殿）が襲撃（法住寺合戦）され焼失した。その後、源頼朝により建久二年（1191）法住寺殿は再建される。（『吾妻鏡』）その翌年には蓮華王院東に後白河法皇の墓堂である法華堂が造営される。その後、承元三年（1209）三条西殿（三条烏丸殿）新造に際して、法住寺殿の堂舎を一部移築している。（『都禅記』）また、建長元年（1249）3月23日には蓮華王院の御堂・塔・不動堂などが焼亡している。（『百練抄』）さらに、御堂（三十三間堂）は文永三年（1266）に再建されるなどの記述がある。（『一代要記』）

調査地付近では、上述の最勝光院焼亡以降は廃れたとみえ、近世には広大な園池も「・・・後世埋テ田トナス故ニ、池田ト号ス。・・・」という地名に関わる記述が示すように耕作地化していたようである。（『山州名跡志』）

（2）周辺の調査（図3、表2）

1）既往の調査

周辺地での既往調査は、概ね法住寺殿寺域関連地域の調査事例を対象とした。対象範囲は、北側では調査No.14で平安時代後期の井戸などを検出していることなどから、左女牛小路付近までとした。南側は調査No.8で最勝光院西側築地と思われる遺構を検出しているため、園池の南端付近まで寺域が広がると想定し、針小路末付近までを法住寺殿寺域とみなした。西側は調査No.8で最勝光院関係の遺構・遺物を検出・出土していることから、現在の本町通付近までの調査事例を掲載した。

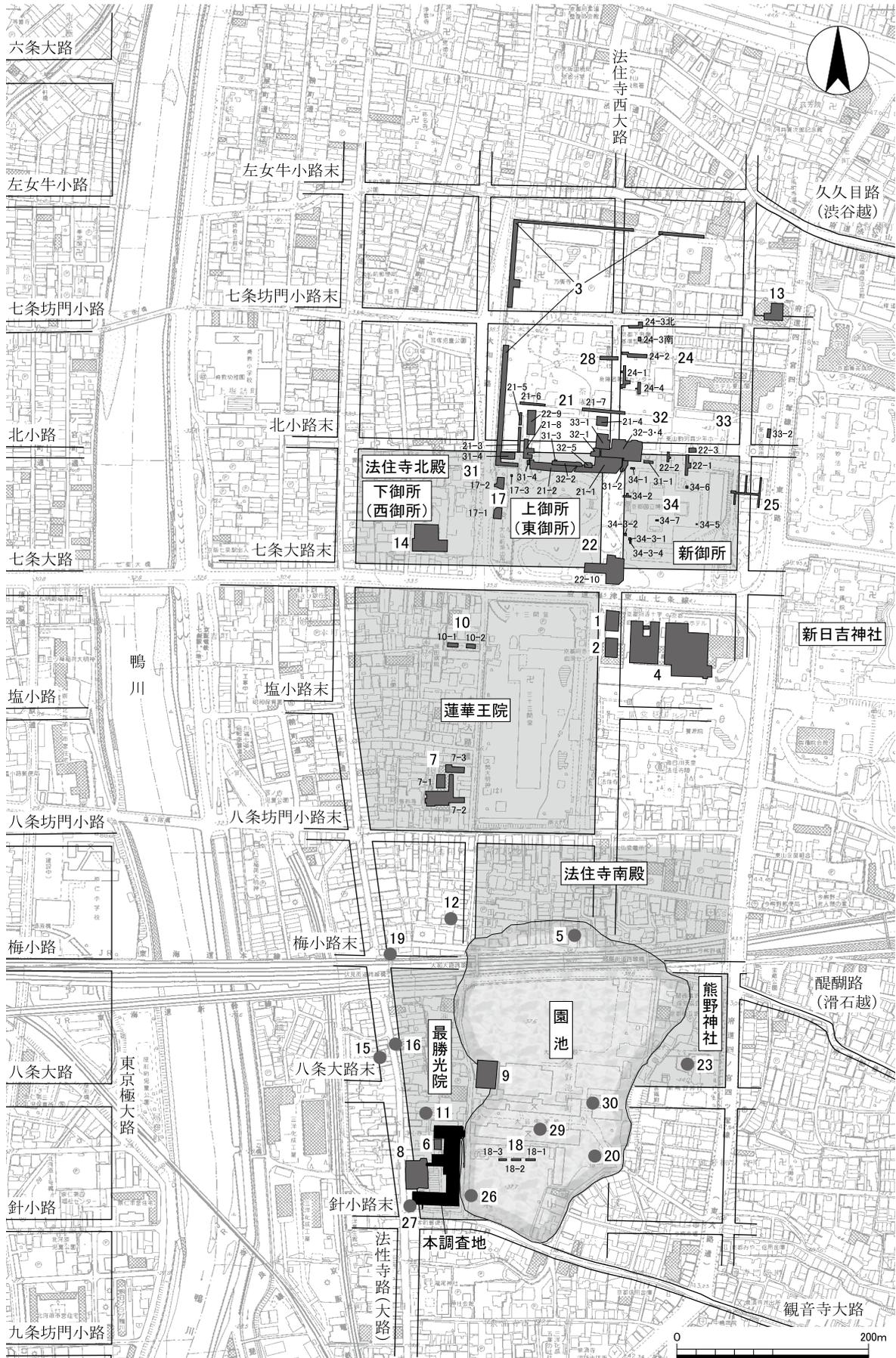


图3 周辺調査位置図 (1 : 6,000)

表2 周辺既往調査一覧表

No.	調査期間	方法	推定地	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
1	1965.11.05～12.16	発掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻町644(赤十字血液センター)	調査区南半部で平安時代後期の包含層を検出し、上面は東側に向かってわずかに高くなる。上層では江戸時代の園池跡・建物跡等を検出した。	平安時代後期の瓦類が、包含層から出土した。	1
2	1976.12.01～1977.01.31	発掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻町(赤十字血液センター)	平安時代後期の遺構は未検出である。全域で室町時代の包含層を検出した。上面で室町時代～江戸時代の建物・柵・石敷・土坑・溝等を検出した。	平安時代後期の瓦類が包含層などから出土した。中世～江戸時代の土師器・陶器等も出土した。	2
3	1978.03.22～03.31,1982,1983,1984	発掘	法住寺北殿(方広寺)	東山区茶屋町527(京都国立博物館)	平安時代後期の遺構は未検出である。桃山時代の方広寺西面石垣・築地を検出した。	桃山時代の土器類・石仏などが大量に出土した。	3
4	1978.07.20～11.20	発掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻町644の2(パークホテル)	調査区中央部で平安時代後期の南北溝(1-P溝:幅2m・22m検出)を検出した。中央南端で鎌倉時代の方形溝(W8溝:幅0.85m・一辺7.9m)甲冑を埋納した方形土坑(W10土坑:一辺3.2m・深0.5m)を検出した。方形溝の内側は仏堂、土坑は墓と推定された。調査区北部で中世の井戸7基を検出した。	平安時代後期～鎌倉時代の瓦が井戸から大量に出土した。中世の土器類が井戸を中心として少量出土した。	4
5	1980.01.12	立会	法住寺南殿	東山区上池田町34	地表下1.2m以下は地山	なし	5
6	1982.10.16～11.15	発掘	最勝光院	東山区本町通10丁目下池田町527(一橋小学校給食室)	全域で平安時代後期の建物基壇(規模不明)を検出、上面に轍跡がある。基壇下層で掘立柱建物(SB1:東西2間・南北3間以上)を検出した。	平安時代後期の土器類が、基壇下層の包含層を中心に出土した。	6
7	1983.04.21～06.24	発掘	蓮華王院	東山区大仏南建仁寺上ル七間町575(ネオコーポ東山)	調査地東端部で平安時代後期の南北街路(SF5、西側溝SD4:幅1.4m・深0.3m)を検出した。同時期の南北棟建物を調査地北部で1棟(SB3:東西幅11.7m・西側に付属施設有り)、中央部で1棟(SB2:東西9.1m・南北12.2m)、西端部で1棟(SB1:東向き向拝幅10.7m・出0.9m)を検出した。いずれも上面が削平されるが、石組み雨落溝が廻る。建物はいずれも焼失する。全域で中世以降の遺構を検出した。	平安時代後期の瓦類が側溝・後世包含層から、土器類が建物雨落溝から少量出土した。	7
8	1983.06.01～09.03	発掘	最勝光院	東山区本町通10丁目下池田町527(一橋小学校体育館)	調査区西側で平安時代後期の南北溝(SD2:幅1.6m・深0.5m)を検出し、溝の西側は路面、東側は一段高まり、南北築地と推定された。築地推定地の下では石積み地業を検出した。鎌倉時代の溝・井戸などを調査地北東部で検出した。	平安時代後期の瓦類、瓔珞などが井戸から出土した。	8
9	1983.07.19～11.03	発掘	最勝光院池田瓦窯	東山区今熊野池田町(大谷中・高等学校)	調査区北側で平安時代後期の園池南側汀線を検出した。調査区南部で同時期の東西方向水路(幅4.5m・深1.5m・5ヶ所板列あり)を検出した。下層で平安時代中期の窯跡を検出した。	平安時代後期の瓦類が瓦溜・園池等から大量に出土、水路・園池から土器類が出土した。	9
10	1987.09.17～09.22	試掘	蓮華王院	東山区北斗町546-2(大和病院)	調査地東部で平安時代後期の南北街路(幅不明、西側溝:幅0.7m・深0.2m)を検出した。街路は5次調査の続きと推定される。	平安時代後期の瓦類・土器類が、側溝から少量出土した。	10
11	1988.04.04～	立会	最勝光院	東山区本町通10丁目162	掘削深-85cm以下不明	土師器小片	11
12	1988.04.25	立会	法住寺南殿	東山区上池田町538	地表下1.4m以下は池状堆積土	なし	12
13	1990.03.05～04.20	発掘	北東部	東山区妙法院前側町424-1	調査区南東部で平安時代後期の井戸(SE5:1辺2m・深さ6m以上)1基を検出した。室町時代～江戸時代の包含層等を全域で検出した。	平安時代後期の瓦類・土器類が、井戸から出土した。	13
14	1990.06.02～08.23	発掘	法住寺北殿	東山区大和大路正下面下ル大和大路2丁目543(駐車場)	調査区南東部で平安時代後期の井戸(SE211:1.8×2)を1基、全域で柱穴・土坑を少数検出したが残存状況は悪い。調査区中央部で鎌倉時代の南北棟西門(SB157:3×2間)と南北両側に取り付く塀(SA150)を検出した。これらの西側と東側には同時期の溝(SD8・140)がある。全域で中世以降の土坑等を検出した。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸から少量出土した。鎌倉～室町時代の土器が各遺構から大量に出土した。	14
15	1991.08.20	立会	法住寺跡	東山区本町10丁目141	地表下173cmで路面層	なし	15
16	1992.06.17	立会	法住寺跡	東山区本町11目地先	地表下18cmで路面層	土師器小片、窯体片	16
17	1994.02.24～04.29	発掘	法住寺北殿	東山区茶屋町527(京都国立博物館西門)	調査区北端で平安時代後期の井戸を、全域で柱穴・土坑等を少数検出した。全域で鎌倉～室町時代の溝・土坑・柱穴を検出した。全域で桃山～江戸時代の柵・柱穴・築地・土坑等を検出した。	平安時代後期の瓦類・土器類が井戸等から少量出土した。鎌倉時代の土器が土壇から大量に出土した。	17
18	1996.11.11～11.16	試掘	法住寺南殿	東山区三十三間堂廻町(赤十字血液センター)	調査地東側で弥生時代～古墳時代の大型土坑を検出。西側で平安時代後期～鎌倉時代の掘込地業を検出。西端で鎌倉時代～室町時代の柱穴。		18
19	1996.08.20～09.24	立会	法住寺南殿	東山区本町通り～東大路通り	地表下1.5m以下、池内堆積土	土師器皿、瓦片	19
20	1996.11.11	立会	法住寺南殿	東山区今熊野池田町12	地表下2.0m以下、谷筋埋土	土師器、須恵器、陶器	19

No.	調査期間	方法	推定地	所在地	検出遺構	出土遺物	文献
21	1998.06.01～ 1999.03.31	発掘	法住寺 北殿 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 新館周辺)	南側の調査区(2・1区)では、桃山時代の方広寺大仏殿南門(3×2間)とそれに取り付く東側回廊(複廊)を検出した。門西側では回廊南側で石垣(高さ2m)、南西部で梵鐘製造遺構を検出した。北側の調査区(4・7区)では、平安時代後期の南北溝2条(溝149-溝26・溝299:幅0.6～0.8・深0.3)と間に石敷遺構を検出し、両溝間は街路と推定。全域で鎌倉～室町時代の溝・柱穴・土坑・井戸・石敷遺構等を検出した。西側の調査区(8区)では、平安時代前期の埋納遺構・土坑61、鎌倉～室町時代の南北道路と側溝・池状遺構等を検出した。	平安時代後期の瓦類・土器類が4・7区溝等から少量出土した。鎌倉～室町時代の土器・瓦類が溝・井戸・包含層等から出土した。桃山時代の瓦類・土器類・鑄造関係遺物が1・2区から大量に出土した。	20
22	1999.07.01～ 2000.03.21	発掘	法住寺 北殿 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 新館周辺・南門)	南側の調査区(10区)では、平安時代前期の土坑(326)・後期の東西溝1条(276:幅0.5～0.6m・深0.15m)を検出した。全域で鎌倉時代の東西溝(281)・南北溝(273・252)・井戸(250)・土坑・柱穴等を、室町時代の堀状遺構・溝・土坑・柱穴等を検出した。桃山～江戸時代の南北道路と両側溝を2時期検出した。北側の調査区(9区)では、鎌倉時代の南北溝、鎌倉～室町時代の建物・溝・柱穴・土坑等を検出した。	平安時代後期の瓦類・土器類は、溝・土坑から少量出土し、大半は後世遺構に混入する。鎌倉時代の土器類は、10区井戸・9区溝から出土した。室町～江戸時代の土器・瓦類は、遺構・整地層等から出土した。	21
23	1999.09.09～ 09.10	立会	新熊野神社	東山区今熊野柳ノ森町15-1～4.42	時期不明の柱穴2基、土坑	土師器小片	22
24	2000.07.03～ 08.23	試掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町531 (大仏殿緑地公園)	平安時代後期の遺構は未検出。全域で桃山時代の方広寺大仏殿基壇を検出。大仏殿は西面南北棟(9間×5間廂付)で、中央に8角形須弥壇がある。	桃山時代の瓦類が、全域から少量出土した。	23
25	2000.07.03～ 08.23	発掘	東部	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 東部)	全域で平安時代～鎌倉時代の柱穴・土坑等を少数検出した。全域で室町時代の遺物包含層・溝・土坑・柱穴を検出した。全域で江戸時代の井戸・土坑・柱穴等を検出した。	平安時代～鎌倉時代の土器類が少量出土した。鎌倉～江戸時代の土器・瓦類が少量出土した。	24
26	2000.01.25～ 02.07	立会	最勝光院	東山区本町10丁目 東入る	地表下0.86cmで江戸時代の包含層、1.56cmで地山		25
27	2001.04.02～ 04.26	立会	観音寺大路	東山区本町通り十丁目 東入る下池田町527	地表下0.48mで平安時代と思われる柱穴・落ち込みなど	土師器小片	26
28	2002.07.22～ 08.09	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町(豊 国神社)	桃山時代の方広寺大仏殿基壇西辺を検出した。	桃山時代の瓦類が、全域から少量出土した。	27
29	2006.07.07～ 07.11	立会	大池	東山区今熊野池田 町12	地表下0.8～0.9mで地山		28
30	2007.06.20～ 06.25	立会	大池	東山区今熊野池田 町12	地表下0.5mで地山		29
31	2008.02.12～ 03.25	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 新館周辺)	室町時代の井戸を検出。桃山時代～江戸時代初めの方広寺南回廊基壇、礎石根固め跡、南雨落ち溝、石畳及び裏込め地業、東西柱穴列、地業盛土を検出。	室町時代の土師器、輸入陶器、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土。桃山時代～江戸時代初頭の大形巴文軒丸瓦、大仏瓦、桐文軒平瓦、羽口、石仏が出土した。	30
32	2008.12.08～ 2009.03.31	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 新館周辺)	室町時代の井戸、土坑を検出。桃山時代～江戸時代初めの南門礎石根石群、南門基壇北端地業、南回廊基礎根石群、南石畳裏込地業、水切溝、盛土整地層を検出。	室町時代の土師器、輸入陶器、瓦質土器、焼締陶器、木製品、砥石、瓦等が出土。桃山時代の土師器、施釉陶器、瓦質土器、瓦、鑄型、炉壁、銅銭等が出土した。	31
33	2009.09.07～ 11.13	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 新館・東側)	平安時代後期の門、路面、道路側溝を検出。鎌倉時代～室町時代の門、柱列、路面、溝、埋納遺構、土坑、掘を検出。桃山時代の石敷路面、整地層、土坑を検出。	平安時代の土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦等が出土した。鎌倉時代～室町時代中期の土師器、須恵質土器、輸入陶磁器、瓦質土器、焼締陶器、木製品、砥石、瓦などが出土。室町時代後期～桃山時代の土師器、輸入陶磁器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、鉄製品等が出土。江戸時代後期～明治時代の染付、近世陶磁器、瓦などが出土した。	31
34	2010.08.16～ 09.10	発掘	北部 (方広寺)	東山区茶屋町527 (京都国立博物館 旧館)	幕末～明治時代初頭?の整地層を検出。近代の旧本館、基礎、整地層。	幕末～明治時代初頭の土師器、陶磁器、染付、棧瓦等が出土した。	32
35	2012.01.11～ 07.30	発掘	最勝光院	東山区本町通10丁目 下池田町257(元 一橋小学校)	古墳時代初期の堅穴住居、溝、土坑を検出。奈良時代の掘立柱建物を検出。平安時代中期の土取り穴、後期の建物地業、土坑、柱穴、路面、道路側溝、濠を検出。鎌倉時代前期の井戸を検出。室町時代の路面、道路側溝、柱穴、土坑を検出。近世以降の柱列、井戸、土坑、溝などを検出。	弥生時代後期と古墳時代初期の土器類が出土。奈良時代の土器類が出土。平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入磁器、瓦、金属製品、木製品等が出土。鎌倉時代～室町時代の土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、瓦類、金属製品等が出土。近世以降の土師器、近世陶磁器等が出土。	本報告

東側は現在の東大路に沿って東側が東山山麓に向けて斜面を形成しており、この通り付近に沿った範囲までの調査事例とした。各々の調査の概要は、表1の周辺既往調査一覧表に依ることとし、以下では、今回の調査に直接隣接する調査No.6・8・9・18の成果を記述する。

2) 最勝光院近辺の調査

調査No.6は、今回調査地の北西隣接地での調査である。ここでは平安時代後期の建物基壇と造成時の轍跡、その下層で2間×3間以上の掘立柱建物が検出されている。最下層からは弥生時代後期から古墳時代前期に至る遺物包含層を認めた。

調査No.8は、今回調査地の西側中央部である。平安時代の築地および西側溝と法性寺大路路面の一部が検出され、最勝光院に使われたと思われる瓔珞や瓦が出土した井戸などが検出されている。また、調査地南端では西で7°北に振れる東西方向の濠状遺構が検出されている。

調査No.9は、調査地北東の大谷中・高校学校内で行われた。調査地北側では平安時代後期の園池西側汀線を検出した。また、調査区南部では同時期の東西方向水路（幅約4.5m、深約0.5m）を検出し、5箇所板列があった。下層では平安時代中期の瓦窯（池田瓦窯）を検出した。

調査No.18は、調査地東部の一橋小学校内の試掘調査である。園池が想定されていたが、平安時代後期から鎌倉時代の掘込地業や下層で弥生時代から古墳時代の大型土坑などが検出されている。

参考文献

杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1985年

上村和直「法住寺殿の成立と展開」『研究紀要』第9号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年

表2 周辺既往調査一覧表 文献

- 1 『埋蔵文化財発掘調査概報1965-1967』京都府教育委員会 1967年
- 2 吉村正親『法住寺殿跡 血液センター発掘調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1976年
- 3 『史跡方広寺石壇修復工事報告』京都国立博物館 1987年
- 4 寺島孝一ほか『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯 古代学協会 1984年
- 5 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 6 久世康博・吉川義彦「法住寺殿跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 7 久世康博・上村和直「法住寺殿跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 8 平尾政幸・梅川光隆・辻 純一「法住寺殿跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 9 杉山信三ほか『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984年
- 10 久世康博「法住寺殿跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 京都市文化観光局 1988年
- 11 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年

- 12 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 13 高橋 潔「六波羅政庁跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 14 上村和直・西大條哲「六波羅政庁跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 15 『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 16 『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 17 鈴木廣司・山本雅和「六波羅政庁跡」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 18 小森俊寛「法住寺殿跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 19 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 20 近藤知子・田中利津子・大立目一「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 21 近藤知子・田中利津子・大立目一「六波羅政庁跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 22 『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 23 近藤知子・田中利津子「方広寺大仏殿跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 24 田中利津子「六波羅政庁跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 25 『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 26 『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
- 27 田中利津子「方広寺大仏殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2003年
- 28 『京都市内遺跡立会調査概報 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 29 『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 30 網 伸也・山本雅和・田中利津子『京都国立博物館構内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 31 網 伸也ほか『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009－8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 32 高橋 潔『法住寺殿・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010－10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図4・5、図版17～22)

調査地の基本層序は、場所によって異なるが、大半の部分は地表面下0.4～1 mまでが旧校舎解体後の埋戻し層(第1層)である。以下に、暗褐色系の砂泥や灰黄褐色系の砂泥を主体とする平安時代後期後半(最勝光院期)の整地層が広範囲に広がる。この整地層は北部で厚く堆積し、南部ではやや薄くなる傾向がみられた。地山層は黄褐色系の砂泥層や泥砂層が広い範囲で堆積するが、シルト層や粘土層が部分的に分布している。

断面1 (1区Y = -20,906.50・Y = -20,908.50ライン合成) X = -112,688付近の断面を示す。第1層は近現代盛土層および攪乱である。第2～9層は石積み地業55形成層である。第4・5・7・8層は拳大の河原石が密に入る層である。第2・3・6・9層は灰褐色から黒褐色の砂泥層である。河原石層と砂泥層を交互に積み重ねて叩き締める。第10層は厚さ約0.05 m前後の黒褐色砂泥層で、炭・焼土を含む。層上面には鉄分を多く含み、極めて堅い面となる。第11～14層はにぶい黄褐色砂泥を主体とする整地層である。第14層までは平安時代後期に行われた最勝光院造営時の地業である。第15・16層は最勝光院より古い整地層である。この上面で掘立柱建物を構成する柱穴を検出した。第17層以下は灰褐色シルトや明黄褐色粘土の地山層となる。

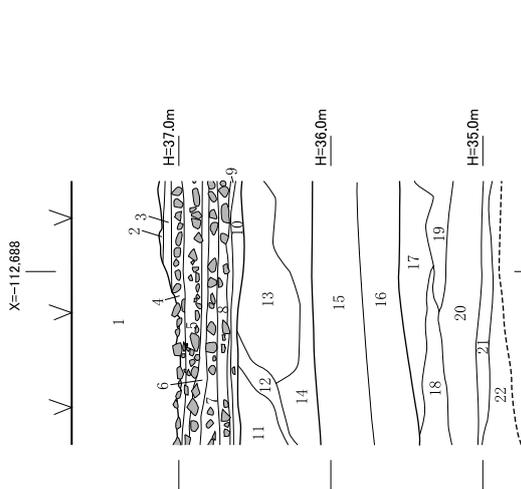
断面2 (1区Y = -20,920.50ライン) X = -112,680付近の断面を示す。この地点では、旧校舎基礎撤去時の攪乱により最勝光院の整地層が消失している。ここには土取穴366がある。平安時代中期に行われた池田瓦窯の粘土採掘土坑とみられる。第2～6層は土取穴366に先行する土取穴の埋土とみられる。灰黄褐色から暗灰黄色の砂泥層や砂礫層である。第7～10層は、にぶい黄褐色から暗灰黄色の砂泥層や泥砂層の地山層である。

断面3 (1区X = -112,689.50ライン) Y = -20,932付近の断面を示す。第2～6層は最勝光院の整地層である。第3層は厚さ0.1 m前後の暗褐色砂泥層で、層上面には鉄分を多く含み、非常に堅い面となる。断面1の第10層と同一であるが、この地点の整地面は他の部分より0.5 m程高くなっている。第4～6層は暗褐色や灰黄褐色砂泥を主体とする層で、南側から北側に向けて整地が行われている。第7・8層は、最勝光院より古い整地層である。灰黄褐色砂泥に礫や炭化物を少量含む。第9～11層は黄褐色から暗オリーブ色の砂を主体とする地山層である。

断面4 (1区西壁) X = -109,700付近の断面を示す。第1層は現代盛土層および攪乱で旧校舎基礎の跡が残る。第2～10層は最勝光院の整地層である。厚さ0.08～0.2 mの黄灰褐色を主体とするシルト層が7層あり、第5層下部には0.05～0.15 cm大の礫が多く入れられている。第9層は厚さ0.01～0.03 mで、上面には鉄分を多く含み、極めて堅い層である。第11層は最勝光院より古い整地層と見られる。この面で掘立柱建物を検出した。土坑402は古墳時代初期の遺構である。第13層は褐色シルトの地山層である。

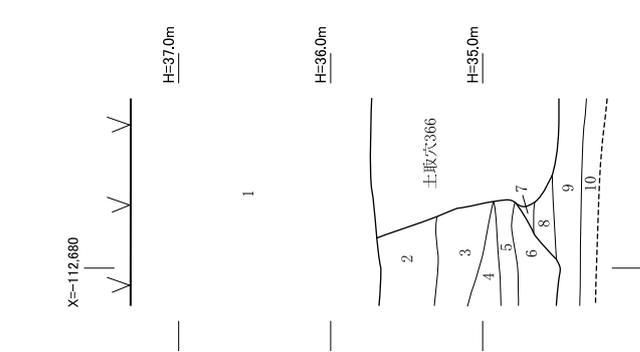
断面5 (1区西壁・合成) X = -112,732付近の断面を示す。この地点では、第1層の現代盛土

断面1 (Y=-20,906.50 ~ -20,908.50 ライン合成)



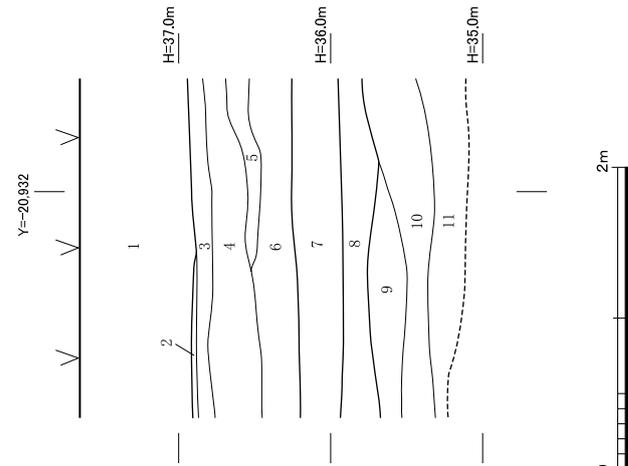
- 1 盛土・近現代擾乱
- 2 10YR6/4 褐色砂泥
- 3 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 (堅く締まる)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (堅く締まる)、礫径15cm以下少量混
- 5 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (堅く締まる)、礫径10cm以下少量混
- 6 2.5Y5/2 灰黄褐色砂泥 (堅く締まる)、礫径3cm以下少量混
- 7 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (堅く締まる)、礫径10cm以下少量混
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (堅く締まる)、礫径10cm以下少量混
- 9 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (堅く締まる)、礫径3cm以下少量混
- 10 10YR4/3 1 黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 11 10YR6/4 1 黄褐色砂泥 (堅く締まる)、灰・焼土混、礫径3cm以下少量混
- 12 10YR7/6 明黄褐色砂泥 (堅く締まる)、10YR3/2 黒褐色砂泥・ブロック点在、礫径2cm以下少量混
- 13 10YR5/3 1 黄褐色砂泥、灰・焼土混、礫径5cm以下少量混
- 14 10YR6/3 1 黄褐色砂泥 (堅く締まる)、灰・焼土混、礫径5cm以下少量混
- 15 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土器片少量混、礫径15cm以下少量混
- 16 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、灰・焼土混、礫径3cm以下少量混
- 17 7.5YR6/2 灰褐色シルト、礫径5cm以下少量混
- 18 10YR7/6 明黄褐色粘土
- 19 10YR6/3 1 黄褐色粘土
- 20 5YR4/1 褐色粘土
- 21 5Y7/2 灰白色粘土
- 22 5Y6/3 オリーブ黄色泥砂 (粘質)

断面2 (Y=-20,920.50 ライン)



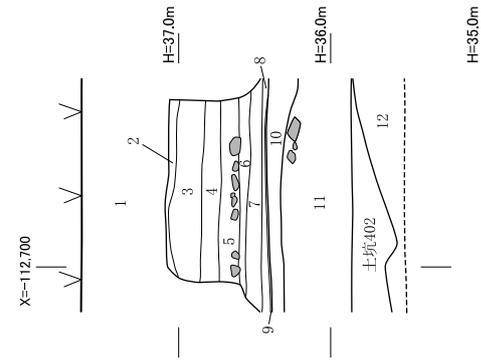
- 1 盛土・近現代擾乱
- 2 未掘土取穴埋土
- 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、礫径10cm以下少量混
- 4 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (細砂以下)
- 5 10YR6/2 暗灰黄色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 6 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 7 10YR5/4 1 黄褐色砂泥 (微砂以下)
- 8 10YR3/1 黒褐色粘土
- 9 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 (部分的に微砂混)、礫径1cm以下少量混
- 10 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥、礫径1cm以下少量混

断面3 (X=-112,689.50 ライン)



- 1 盛土・近現代擾乱
- 2 10YR4/4 褐色砂、礫径0.5~10cm 少量混
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥、7.5YR3/4 暗褐色砂泥少量混、礫径0.5~4cm
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥、2.5YR6/2 灰黄色粘土・ブロック・10YR3/4 暗褐色粘土・ブロック混、礫径0.5~8cm 少量混、炭混
- 5 7.5YR4/2 灰褐色砂泥、2.5Y7/3 浅黄色粘土・ブロック少量混、礫径0.5~8cm 少量混
- 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、10YR6/3 1 黄褐色粘土・ブロック少量混、炭混、礫径0.5~6cm 少量混
- 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、礫径0.5~4cm 少量混、炭混
- 8 7.5YR2/3 極暗褐色 ~ 3.2 黒褐色砂泥、礫径1~10cm 少量混
- 9 2.5Y5/3 黄褐色細砂、礫径1~5cm 少量混
- 10 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂、礫径1~15cm 少量混
- 11 5Y4/3 オリーブ色細砂、礫径1~20cm 少量混

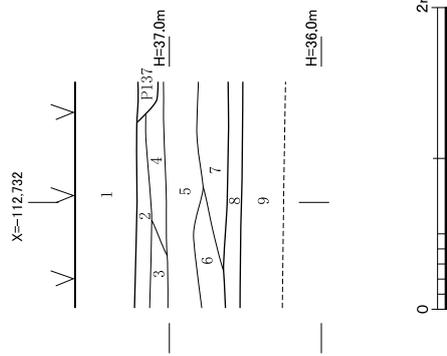
断面4 (調査区西壁)



- 1 盛土・近現代擾乱
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘土、礫径5cm以下少量混、炭混
- 3 10YR6/2 ~ 6/3 灰黄褐色 ~ 1 黄褐色シルト、10YR7/3 1 黄褐色シルト・ブロック混、礫径2cm以下少量混
- 4 10YR6/2 灰黄褐色シルト、10YR7/3 1 黄褐色シルト・ブロック混、礫径2cm以下少量混
- 5 2.5Y7/3 ~ 7/4 浅黄色シルト、10YR7/3 1 黄褐色シルト・ブロック混、礫径13cm以下少量混
- 6 2.5Y7/3 ~ 7/4 浅黄色シルト、10YR7/3 1 黄褐色シルト・ブロック混、礫径2cm以下少量混
- 7 10YR7/3 1 黄褐色シルト、2.5Y7/3 ~ 7/4 浅黄色シルト・中量混、礫径13cm以下少量混
- 8 10YR6/2 ~ 6/3 1 黄褐色シルト、礫径2cm以下少量混、灰・焼土混
- 9 鉄帯
- 10 10YR6/3 ~ 5/3 1 黄褐色砂泥、礫径5cm以下少量混
- 11 10YR4/3 1 黄褐色砂泥、礫径2~8cm 少量混
- 12 7.5YR4/3 褐色シルト、礫径18cm以下少量混

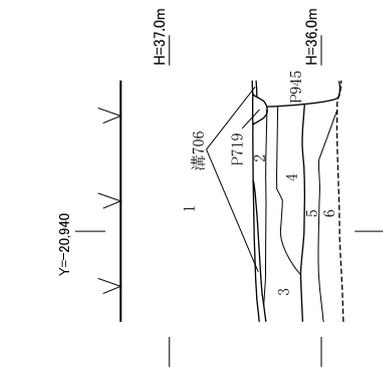
図4 基本層序1 (1 : 50)

断面5 (Y=20,920.50ライン)



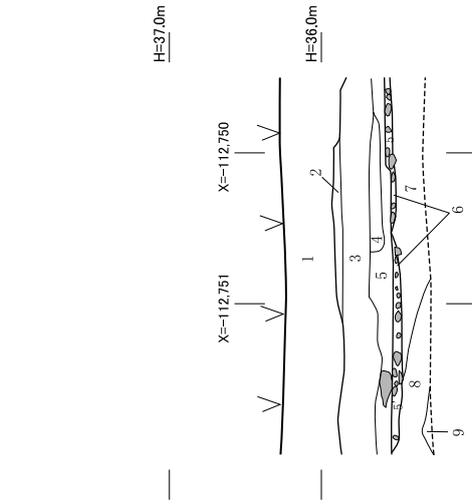
- 1 盛土・近現代擾乱
[最勝光院整地層]
- 2 10YR5/6黄褐色砂泥(粗砂主)
- 3 10YR5/4褐灰色粗砂、礫径4cm以下中量混
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥+10YR5/6黄褐色砂泥
- 6 10YR5/2黄褐色砂泥+10YR6/3にぶい黄褐色砂泥、10YR5/2灰黄褐色泥土ブロック混、礫径4cm以下少量混
- 7 10YR4/1褐灰色粗砂、礫径6cm以下中量混
[最勝光院以前整地層]
- 8 10YR4/2灰黄褐色粗砂
[地山]
- 9 2.5Y6/3にぶい黄色砂泥~泥砂(細砂以下、上部泥分主、下部微砂主)

断面6 (X=112,752ライン)



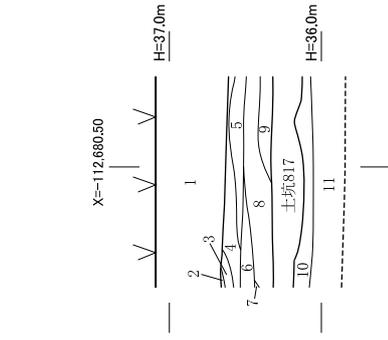
- 1 盛土・近現代擾乱
[最勝光院整地層]
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径4cm以下少量混
- 3 7.5YR2/2~10YR3/1黒褐色砂泥、礫径1cm以下少量混、褐鉄鉱少量混
- 4 10YR2/1黒褐色砂泥、小礫少量混、褐鉄鉱少量混
[地山]
- 5 10YR2/2黒褐色+2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 6 10YR3/4暗褐色砂礫

断面7 (調査区西壁)



- 1 盛土・近現代擾乱
[路面821]
- 2 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫
[路面900A]
- 3 7.5YR~10YR4/4褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色粗砂混、10YR3/4暗褐色砂泥、砂礫中量混
- 4 10YR3/2黒褐色泥砂、砂礫混
- 5 10YR4/2灰黄褐色泥土
[路面900B]
- 6 10YR3/2黒褐色泥土、10YR4/3にぶい黄褐色粗砂混、砂礫多量混
[地山]
- 7 2.5Y5/4黄褐色泥土
- 8 2.5Y暗灰色泥砂、砂礫多量混
- 9 2.5Y5/4黄褐色泥土

断面8 (Y=20,924ライン)



- 1 盛土・近現代擾乱
[最勝光院整地層]
- 2 10YR5/6黄褐色砂泥
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥、灰混
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥、炭多量混
- 5 10YR3/3暗褐色砂泥、土器片多量混
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径6cm以下少量混、炭混
- 7 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径2cm以下ごく少量混
- 8 10YR2/2黒褐色砂泥、2.5Y5/2暗炭黄色粘土ブロック混、礫径1cm以下ごく少量混、炭少量混
- 9 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR7/3にぶい黄褐色粘土ブロック混、礫径1cm以下ごく少量混
[地山]
- 10 2.5Y6/3にぶい黄色粘土
- 11 2.5Y6/2灰黄色粘土

図5 基本層序2 (1:50)

層が0.4mの厚さで、盛土層下の遺構面の遺存状態は良好である。第2～7層は黄褐色から褐灰色の砂や砂泥を主体とする最勝光院の整地層である。第2層上面の検出高は調査区内で最も高い。第5層上面では平坦面をなしており、整地作業の1つの単位とみられる。第8層は最勝光院より古い整地層である。第9層はにぶい黄褐色の砂泥や泥砂の地山層である。

断面6（2区北壁・合成） Y=-20,940付近の断面を示す。第1層の攪乱・現代盛土層が0.9mの厚さまで達し、遺構面は深く削平されている。第2～4層は灰黄褐色から黒褐色砂泥の最勝光院の整地層である。第2層上面の検出高は調査区内で最も低い。第3層上面で整地の作業単位とみられる平坦面が確認できる。第5層以下は黒褐色とオリーブ褐色が混じる砂泥の地山層となる。

断面7（2区西壁） X=-112,750付近の断面を示す。この地点は本町通（伏見街道）に面した調査区の南西部に当たり、最も現地表面の低い場所である。第2層は路面821である。室町時代の

表3 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
古墳時代 (第3-2面)	竪穴住居314*・321*・330*・339・340・346・ 347*・412*・559 土坑240*・324*・345・349・395*・396*・434*・ 471・487*・533・538・539・542・546・550・ 557・558・564・565・566・858*・863*・871* 溝335・403・545・572 ピット322・337・338・368・369・370*・371・ 372・381・382・408*・452・470・475*・478・ 479*・480・503・505・555*・556・570	落込み981・982*・1012
奈良時代 (第3-1面)	掘立柱建物263・268・318・325 土坑239・240・292* 溝332 ピット286・307・309・311	土坑923
平安時代前期 ～後期前半 (第2面)	土坑81*・195・357・365～367・373・374・ 435A・435B・436・448・449・455・487 濠150* 溝180・181・184・185・193・199 柱列176	土坑692・816・817・822*・839*・840・844・ 846*・854・855*・858・863*・864・871・879・ 908・923* ピット291*・787*・799*・815*・1022* 路面900B*・900C* 溝706*・833* 柱列778 整地層
平安時代後期後半 最勝光院 (第1-3面)	地業55*・56・60*・62・166* 土坑161・171*・173*・192・227* 溝154 ピット200・232・233・234・364 整地層	土坑618・669*・682*・715・852・877・902 路面900A* 溝759*・764・771*・880・905・906・907 ピット647・665・666・671・672・708・736・ 766・799*・829・842・859・922
鎌倉時代 ・室町時代 (第1-2面)	土坑54*・95・122・124・165・405*	井戸767* 土坑678・695・701・858* 路面821 溝630・685 ピット624・636・659・663・753・763・800
江戸時代以降 (第1-1面)	土坑33・40・42・44・45・58・63・69・71・ 74*・75・77・78・88*・94*・104*・105*・111・ 112・113・114・115*・116・118・119・129・ 134・135・136・137・138・145・146*・151・ 155・156・157・158・159・160・169*・172・ 178・197 ピット579 柱列7・127 窠19*	井戸623・667・674*・679*・687*・703* 土坑608・617*・621・678・680・681・688・ 692・704*・705*・717・727・761・867・ 873・874・875 溝606・628・868・870 ピット601*・609・610・615*・620・626・ 627・629・648・650・676*・745・746・752・ 754・755・872 柱列754・782・832

(* 印は遺物掲載遺構)

路面敷きとみられる。第3～5層は路面900Aである。第3層は厚さ約0.2m内に6層の灰褐色から黄褐色の泥砂および砂が互層状に重なる。第4層は路面補修の跡とみられる。第5層の窪んだ部分に礫を多く含んだ黒褐色の泥砂が堆積する。第6層は路面900Bである。10cm以下の礫を敷き詰めて堅い路面を形成する。出土遺物から平安時代の路面とみられる。第7層は黄褐色泥土の地山層である。なお、この地点では最下層の路面900Cはあらわれていない。

断面8（2区南壁・合成） Y=-20,924付近の断面を示す。第2～9層は最勝光院の整地層である。黒褐色砂泥や暗褐色砂泥を主体としている。第6・8層上面で平坦面をなしているのが確認できる。第10層以下はにぶい黄色粘土の地山層となる。

（2）検出遺構の概要

今回の調査で検出した遺構の時期は、古墳時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代に分かれる。平安時代後期の遺構が大半を占め、古墳時代の遺構が次に多く、他の時代の遺構は少ない。

調査区は残土置き場を確保するため北側と南側の2区に分割して調査を実施した。遺構は調査区内の全域に分散するが、既存校舎の基礎を解体した際の攪乱坑が大規模かつ多数に及んでいたため、遺構の残存状況は悪かった。

調査では、平安時代後期後半（最勝光院期）以降の遺構面、平安時代前期から後期の遺構面、古墳時代から奈良時代の遺構面の計3面の調査を行った。

第1面はさらに3面に細分した。第1-1面は、江戸時代の遺構面である。江戸時代の井戸が調査区に広く分布している。江戸時代の建物跡・溝・土坑などは2区西部に集中している。第1-2面は、鎌倉時代から室町時代の遺構面である。この時代の遺構も2区西部に集中している。室町時代の路面・側溝・土坑など、鎌倉時代の井戸などがある。第1-3面は、平安時代後期後半（最勝光院期）の遺構面である。この時代の遺構は調査区に広く分布している。建物地業・整地層・路面・側溝・土坑・柱穴・溝・土器溜り・土器埋納土坑などがある。

第2面では、平安時代後期前半の柱穴・濠・土器溜りなどがある。1区北部では、平安時代中期の土取穴群がある。2区西部では、平安時代前期から中期の路面・側溝・土取穴などがある。

第3面はさらに2面に細分した。第3-1面は、1区の中央西部で奈良時代の掘立柱建物5棟・土坑・溝などを検出した。第3-2面では、古墳時代初期の竪穴住居10棟・土坑・土器溜り・溝などを検出した。

以下、各遺構面に分けて主要な遺構を報告する。

（3）1区の検出遺構

1）第3-2面の検出遺構（図版1～3）

調査区中央の西部で古墳時代初期の竪穴住居跡を検出した。建物は、狭い範囲内で密集し、重複したものも少なくない。検出した建物の重複関係と出土遺物から、A～Eの5期に分けて遺構を分

類した。これらの遺構は、庄内式併行期から布留式併行期に該当する。

土坑546 1区西部で検出した土坑である。東側は攪乱を受ける。平面形は楕円形で、検出面での規模は、東西2.1m以上、南北約3.2m、深さ約0.1mある。壁はなだらかに傾斜し、底部は凹凸がある。底面の標高は36.2mである。埋土は黒褐色砂泥である。E期。

溝403 (図版27、図6) 1区北西部で検出した東西溝である。東側は調査区外に延長し、西側は攪乱を受ける。検出面での規模は、幅約2.2m、現存長約0.8m、深さ約1.0mある。壁は両側とも斜方向に傾斜し、断面はV字形を呈する。底面の標高は35.2mである。方向は東で北へやや振れる。埋土は黒褐色砂泥である。A～E期の間、存続するとみられる。

竪穴住居412 1区西部で検出した竪穴住居である。南側・北側・東側は攪乱を受ける。平面形は不明で、西辺の壁溝を検出した。検出面での規模は、南北約1.6m、深さ約0.04mある。壁溝は西辺で検出し、幅約0.1m、深さ約0.04mある。支柱穴は不明である。主軸方向は北で西に約32°振れる。埋土は黒褐色砂泥である。遺物の時期は庄内式併行期に属する。D期。

竪穴住居559 (図版23、図7) 1区西部で検出した竪穴住居である。北側は調査区外へ広がる。中央部は攪乱を受ける。平面形はほぼ方形を呈し、検出面での規模は、南北約4.6m、東西約7.1m、深さ約0.05mある。壁溝は3辺で検出し、幅0.1～0.2m、深さ約0.08mある。南辺の西寄りに貯蔵穴がある。平面形は長方形で、長辺1.3m以上、短辺約0.7m、深さ約0.2m、底部の一部が凹む。埋土は、褐色砂泥層で堅く締まる。支柱穴は2箇所検出し、柱間は3.1mある。柱穴の平面形は円形

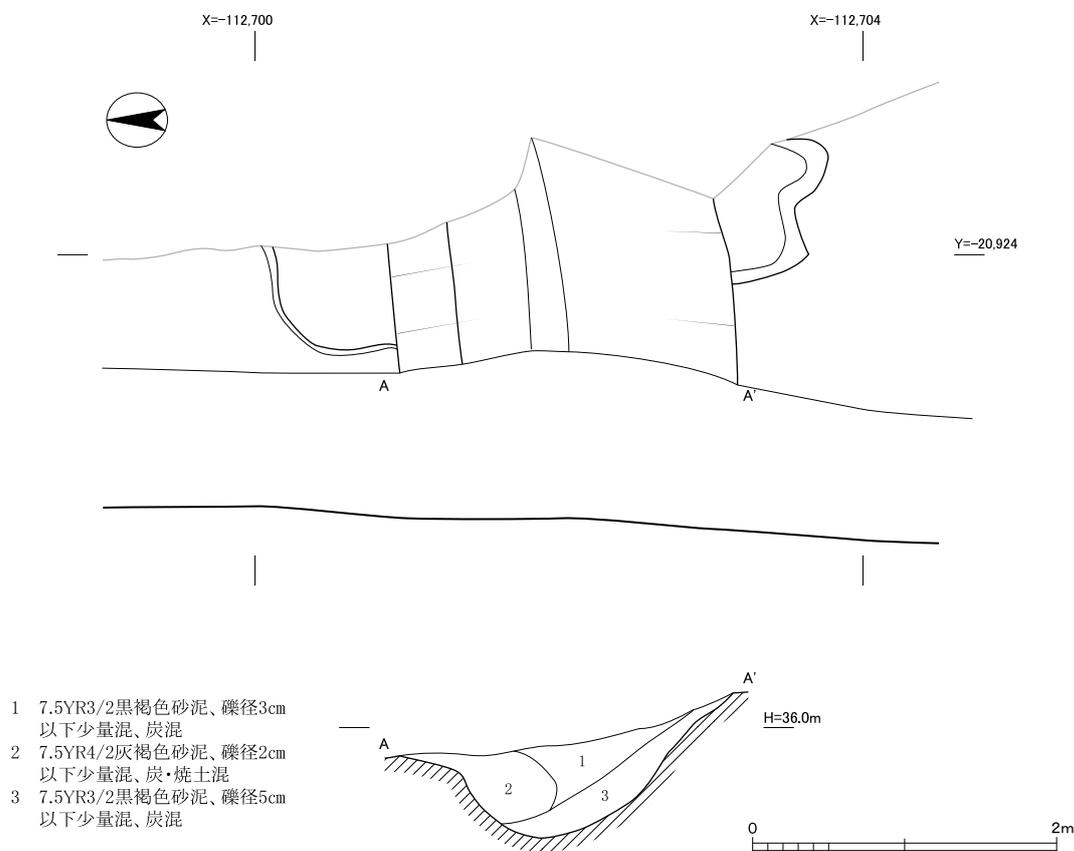
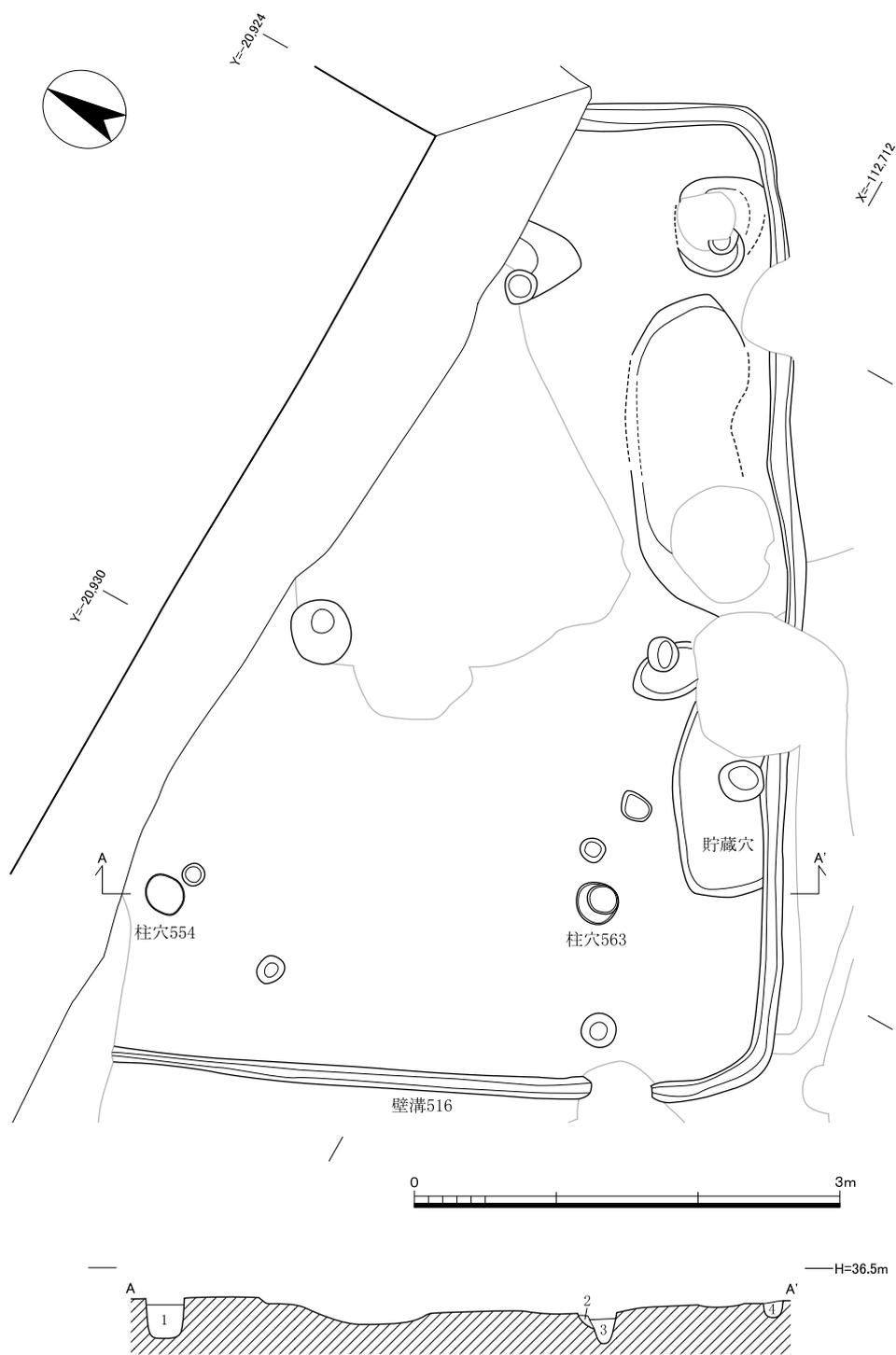


図6 溝403実測図 (1:50)



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混[柱穴554]
- 2 10YR2/2~3/2黒褐色砂泥(細砂以下、微砂・シルト主)、炭少量混[柱穴563柱当]
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂、10YR2/2黒褐色砂泥ブロック少量混、礫径1cm以下少量混[柱穴563掘形]
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥[壁溝516]

図7 竪穴住居559実測図(1:50)

で、検出面での規模は、径約0.3m、深さ約0.25mある。主軸方向は北で西に約29°振れる。埋土は黒褐色砂泥である。D期。

竪穴住居314(図版28、図8) 1区西部で検出した竪穴住居である。南側・東側は攪乱を受け、北西隅部を検出したにとどまる。平面形は方形を呈すると考えられ、検出面での規模は、南北約3.5m、東西約1.5m、深さ約0.05mある。壁溝は2辺で検出し、幅0.1~0.15m、深さ約0.05mある。床面上で焼土が溜まり広がっている部分を検出した。主柱穴は不明である。主軸方向は北で西に約37°振れる。埋土は黒褐色砂泥である。C期。

竪穴住居321(巻頭図版4、図版24・25、図9) 1区西部で検出した竪穴住居である。東側は建物346と攪乱によって削平される。平面形はほぼ長方形を呈し、検出面での規模は、南北約4.2m、東西約2.8m、深さ約0.05mある。壁溝は北側・西側・南側の西半分を検出し、幅約0.1m、深さ約0.05mある。南側床面上で土器類と炭を散在した状況で検出した。南東隅で貯蔵穴512を検出した。平面形が楕円形で、長径約1.1m、短径約1.0m、深さ約0.3mある。底部で径約0.1mのピットを4箇所検出した。埋土は黒褐色砂泥で、底部で完形の土器を検出した。北東隅で炉452を検出した。平面形が楕円形で、長径約0.85m、短径約0.65m、深さ約0.15mある。埋土は黒色砂泥で、にぶい黄橙色シルトブロックが含まれる。北西部では土坑528を検出した。平面形は楕円形で、長

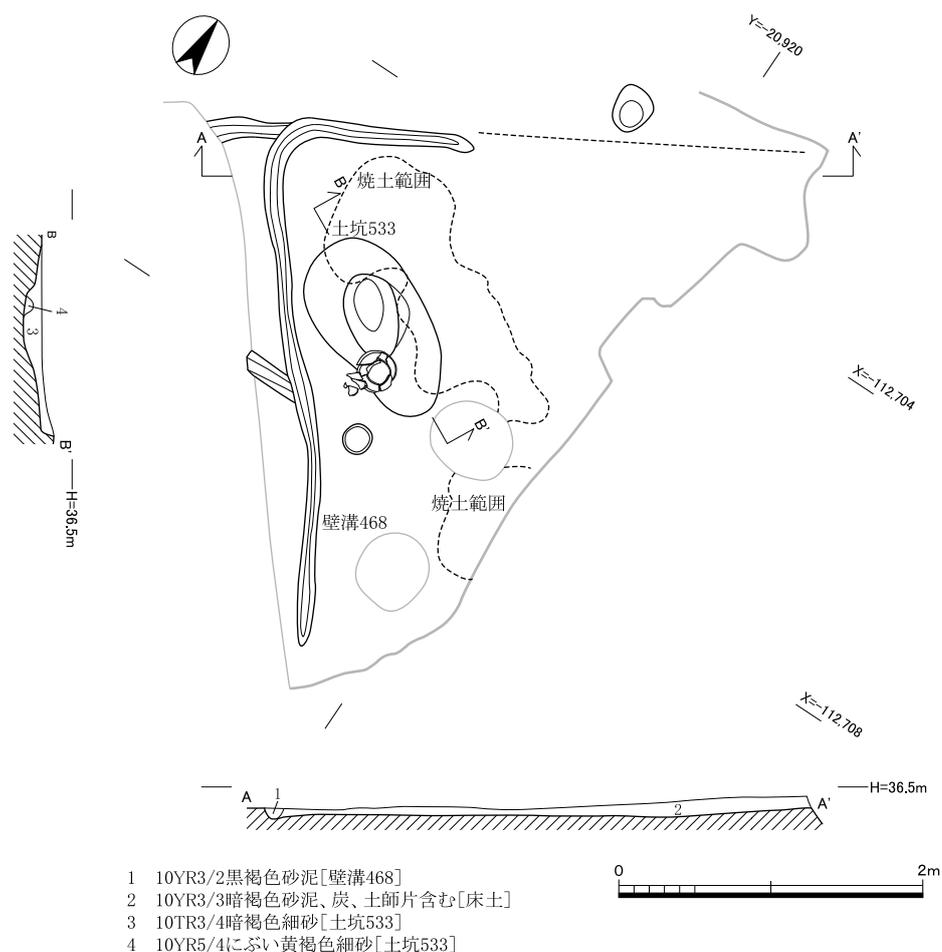
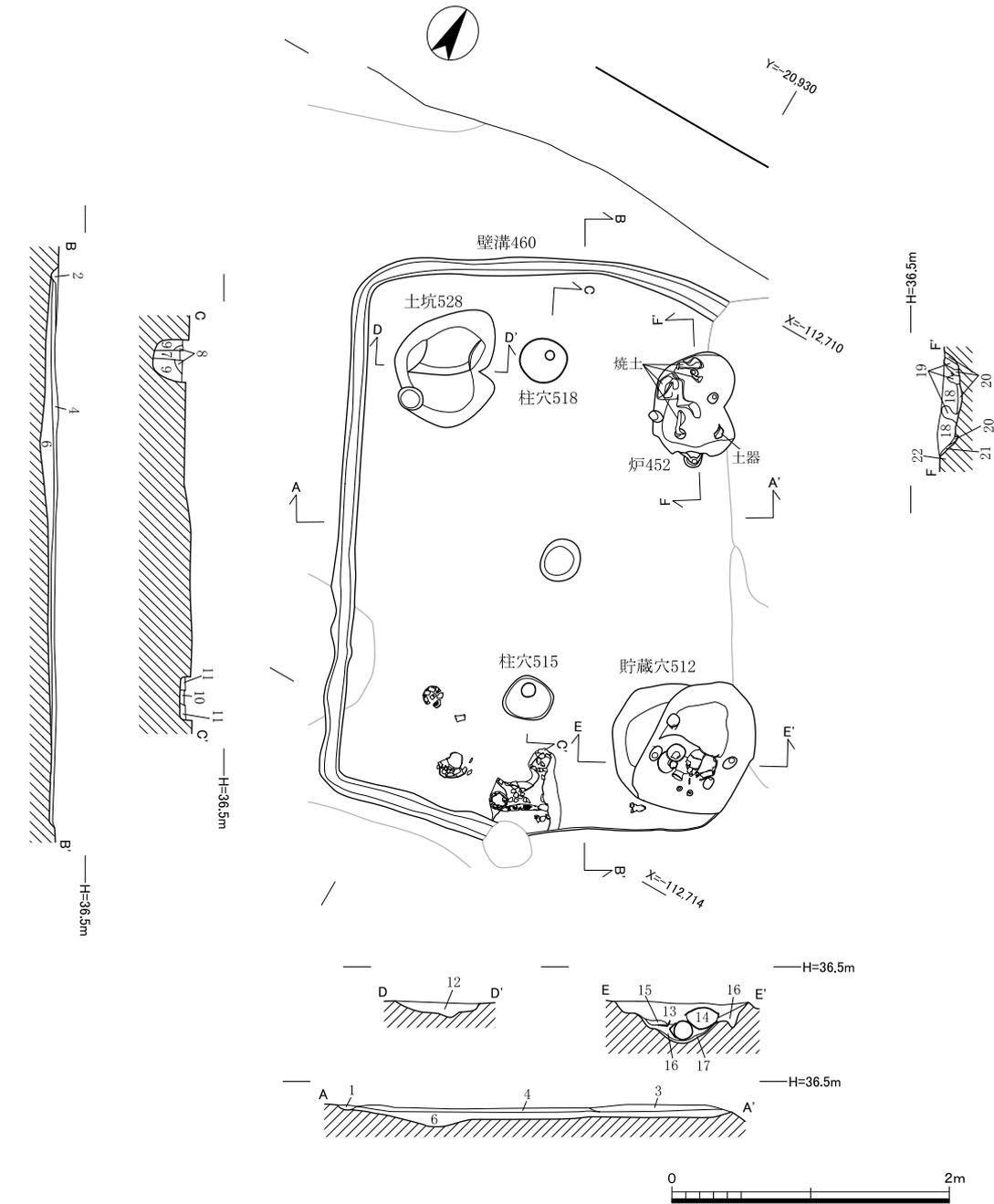


図8 竪穴住居314実測図(1:50)



- | | |
|------------------------------|--|
| 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥[壁溝468] | [貯藏穴512] |
| 2 7.5YR2/2黒褐色砂泥(やや粘質)[壁溝468] | 13 10YR2/3黒褐色砂泥、土器・炭多量混、焼土混、礫径3cm以下少量混 |
| 4 10YR2/2黒褐色砂泥 炭・焼土混[床土] | 14 7.5YR2/2黒褐色砂泥、炭多量混 |
| 5 7.5YR3/3暗褐色砂泥[床土] | 15 5Y4/2灰オリーブ砂泥(砂ブロック混)、10YR4/2砂泥ブロック少量混 |
| 6 7.5YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土混[床土] | 16 10YR3/2黒褐色砂泥、土器・炭多量混、焼土混、礫径3cm以下ごく少量混 |
| 7 10YR3/4暗褐色砂泥[柱穴518柱当] | 17 5Y5/2灰オリーブシルト、10YR3/2黒褐色砂泥少量混 |
| 8 10YR2/3黒褐色砂泥[柱穴518掘形] | [炉452] |
| 9 2.5Y5/4黄褐色泥砂[柱穴518掘形] | 18 10YR2/1黒色砂泥 |
| 10 10YR3/4暗褐色砂泥[柱穴515柱当] | 19 10YR7/2にぶい黄橙色砂泥 |
| 11 2.5Y5/4黄褐色泥砂[柱穴515掘形] | 20 10YR2/1黒色粘質泥土[炭] |
| 12 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥[土坑528] | 21 10YR1.7/1黒色シルト |
| | 22 5YR4/6赤褐色砂泥[焼土] |

図9 竪穴住居321実測図(1:50)

径約0.8m、短径約0.7m、深さ約0.3mある。埋土は黒色砂泥である。主柱穴は2箇所検出し、柱間は約2.5mある。柱穴の平面形は円形で、検出面での規模は、径約0.3m、深さ約0.6mある。主軸方向は北で西に約27°振れる。全面で貼床を確認した。暗褐色砂泥で、厚さ0.02mある。埋土は黒褐色砂泥である。

平面形の形態や主柱穴が2箇所という構造から、工房用建物の可能性も考えられる。遺物の時期は庄内式併行期に属する。C期。

竪穴住居 330 (図版26、図10) 1区西部で検出した竪穴住居である。西側・北側は調査区外へ広がる。南東隅部を検出した。平面形はほぼ方形を呈し、検出面での規模は、南北約4.0m、東西約4.8m、深さ約0.2mである。壁溝は2辺で検出し、幅約0.15m、深さ約0.05mである。南辺の西寄りに貯蔵穴378がある。平面形は不定形で、長軸約1.15m、短軸約0.7m、深さ0.23mある。肩口に段を有し、底部は2段落ちとなる。主柱穴は1箇所(柱穴425)検出し、平面形は円形と推定で

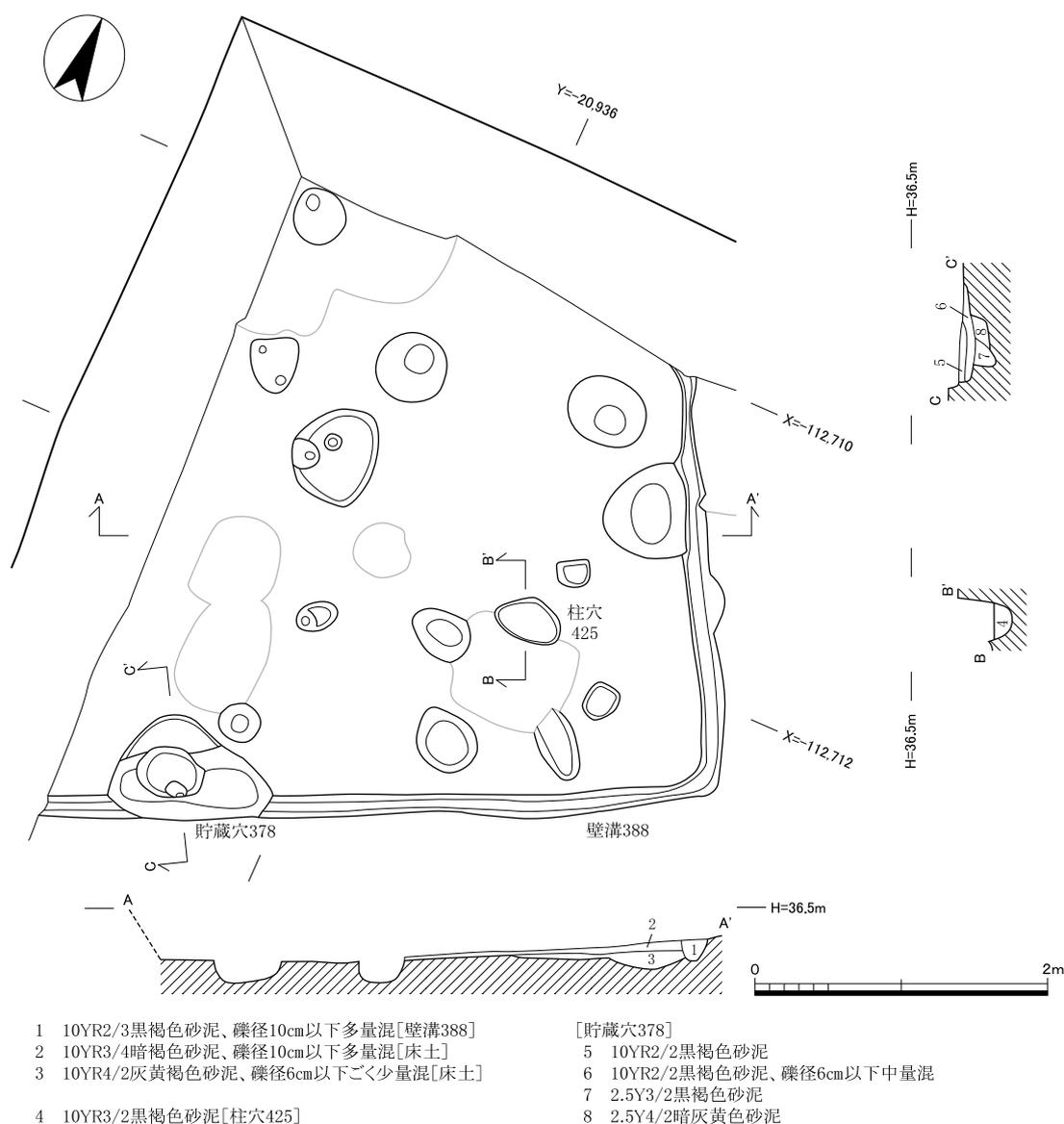
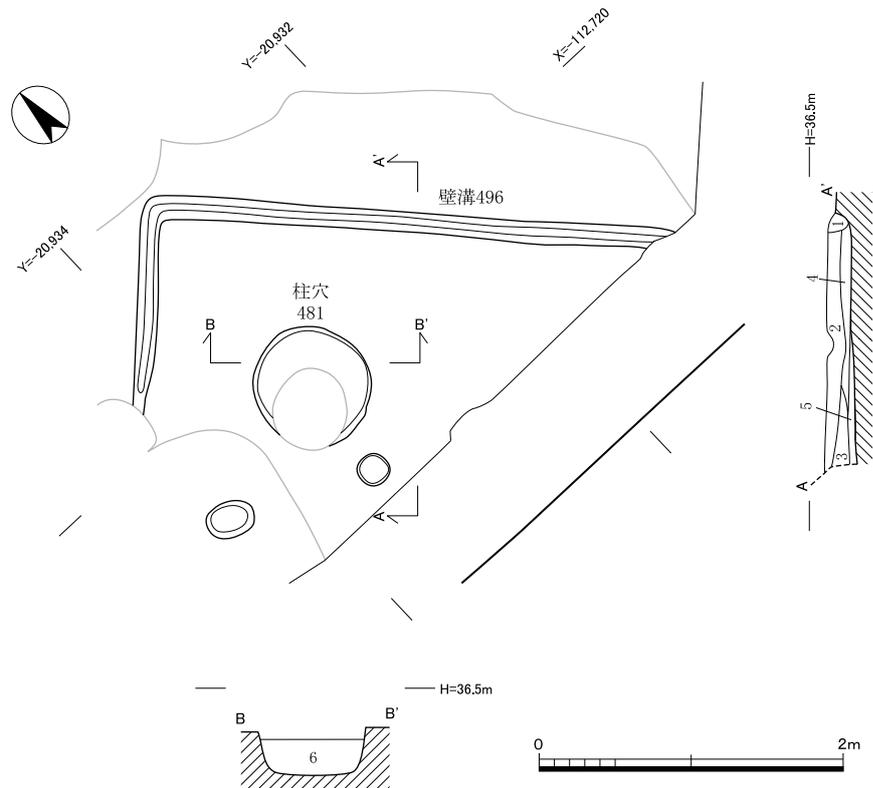


図10 竪穴住居330実測図(1:50)

きる。検出面での規模は、径0.47 m以上、深さ0.37 mある。主軸方向は北で西に約23° 振れる。床面東側で貼床を確認した。厚さ0.05 mで、灰黄褐色砂泥である。埋土は黒褐色砂泥である。遺物の時期は庄内式併行期に属する。B期。

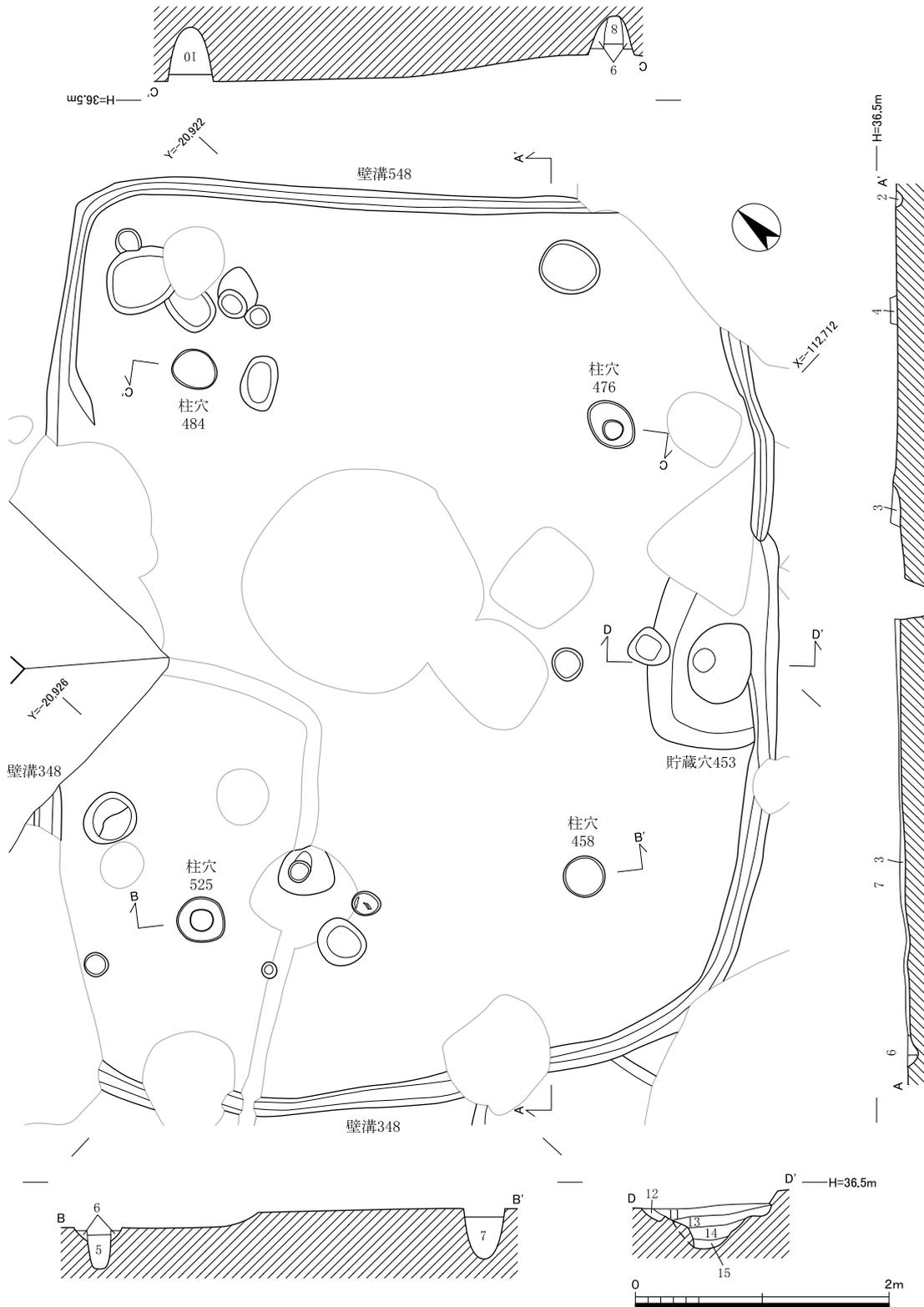
竪穴住居 339 (図版26、図11) 1区西部で検出した竪穴住居である。南側は調査区外へ広がる。西側は建物340によって削平を受け、北隅を検出した。平面形は方形を呈し、検出面での規模は、南北約3.4 m、東西約1.4 m、深さ約0.1 mある。壁溝は2辺で検出し、幅0.15～0.25 m、深さ約0.05 mある。支柱穴は1箇所(柱穴481) 検出し、平面形は円形と推定できる。検出面での規模は、径0.68 m、深さ0.32 mある。主軸方向は北で西に約42° 振れる。全面で貼床を検出した。にぶい黄褐色砂泥で、厚さ0.05 mある。埋土は黒褐色砂泥である。B期。

竪穴住居 347 (巻頭図版4、図版25・26、図12) 1区西部で検出した竪穴住居である。北側中央は調査区外へ広がる。北東隅・南西隅は攪乱を受ける。西側上部は建物346によって削平を受ける。平面形は隅丸長方形を呈する。検出面での規模は、南北約5.8 m、東西約7.4 m、深さ約0.1 mある。壁溝は4辺で検出し、幅約0.15 m、深さ約0.1 mである。南辺の中央に貯蔵穴453がある。平面形は不定形で、長軸1.3 m以上、短軸約0.9 m、深さ約0.35 mある。埋土は黒褐色砂泥である。支柱穴は4箇所(柱穴458・476・484・525) 検出し、柱間は南北約3.7 m、東西約4.8 mである。柱穴



- | | |
|--|--|
| <p>1 10YR4/2灰黄褐色砂泥[壁溝496]
 2 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥径3cm以下小ブロックごく少量混、礫径6cm以下中量混[床土]
 3 10YR3/2～2/3黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥径3cm以下小ブロックごく少量混[床土]</p> | <p>4 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、10YR3/2黒褐色砂泥少～中量混、礫径3cm以下中量混[床土]
 5 10YR4/4褐色泥砂(～砂泥)、10YR3/1～3/2黒褐色砂泥(細砂以下)、礫径3cm以下ごく少量混[床土]
 6 10YR3/4暗褐色砂泥[柱穴481]</p> |
|--|--|

図11 竪穴住居 339 実測図 (1 : 50)



- | | |
|--------------------------|--|
| 1 10YR3/3暗褐色砂泥[壁溝348] | 9 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR5/2灰黄褐色砂泥混[柱穴476掘形] |
| 2 10YR3/4暗褐色砂泥[壁溝548] | 10 10YR3/3暗褐色砂泥[柱穴484] |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・焼土混[床土] | [貯藏穴453] |
| 4 10YR4/4褐色砂泥[床土] | 11 7.5YR2/3極暗褐色砂泥、礫径3cm以下ごく少量混、炭混 |
| 5 10YR3/3暗褐色砂泥[柱穴525柱当] | 12 10YR2/3黒褐色砂泥、炭混 |
| 6 10YR3/4暗褐色砂泥[柱穴525掘形] | 13 7.5YR2/2黒褐色砂泥(やや粘質)、炭ごく少量混 |
| 7 10YR3/2黒褐色砂泥、炭混[柱穴458] | 14 10YR2/3黒褐色シルト、礫径5cm以下ごく少量混 |
| 8 10YR2/3黒褐色砂泥[柱穴476柱当] | 15 10YR2/3黒褐色砂泥(やや粘質)、礫径1cm以下ごく少量混、炭混 |

図12 竪穴住居347実測図 (1 : 50)

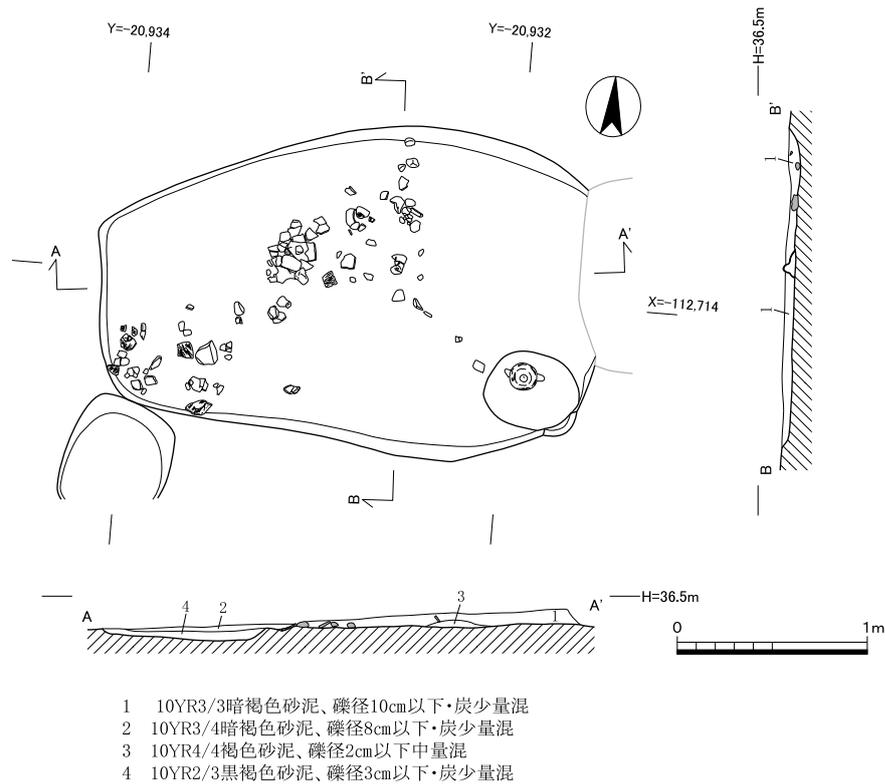


図13 土坑324実測図（1：40）

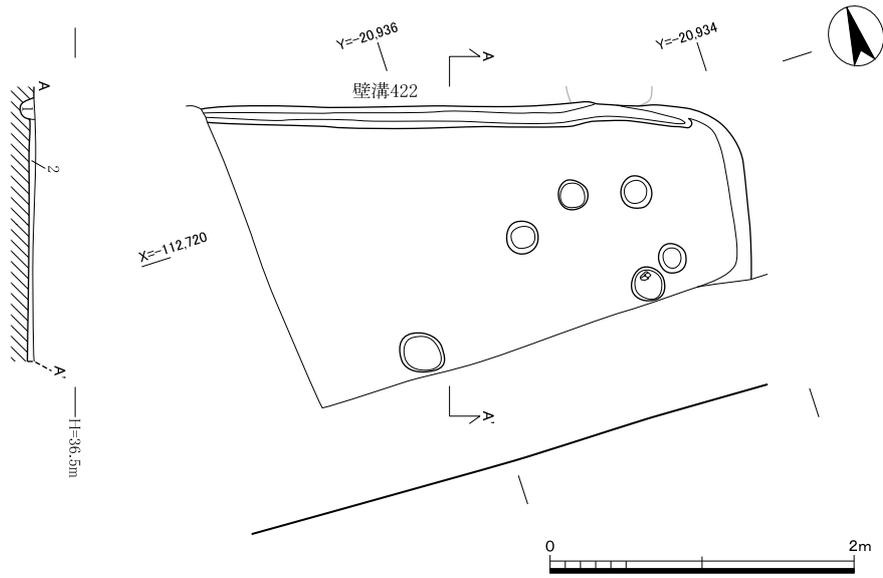
の平面形は円形ないし楕円形を呈する。検出面での規模は、径0.35～3.45m、深さ約0.4mある。主軸方向は北で西に約39°振れる。床面西側と南側で貼床を確認した。黒褐色砂泥で、厚さ0.05mある。埋土は不明である。遺物の時期は庄内式併行期に属する。B期。

土坑434 1区西部で検出した土坑である。上部は土坑324に削平される。平面形は楕円形で、検出面での規模は、長径約0.5m、短径約0.4m、深さ約0.2mある。壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦で、標高は36.2mである。底部中央に径約0.05mの石を置き、その上に土師器鉢（48）を伏せて据える。埋土は黒色粘質シルトである。遺物の時期は庄内式併行期に属する。B期。

土坑324（図版28、図13） 1区西部で検出した土坑である。東側は攪乱を受け、西側は上部が削平される。平面形はいびつな楕円形で、検出面での規模は、東西約3.6m、南北約1.8m、深さ約0.1mある。壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦で、標高は36.2mである。埋土は暗褐色砂泥である。遺物の時期は庄内式併行期に属する。A期。

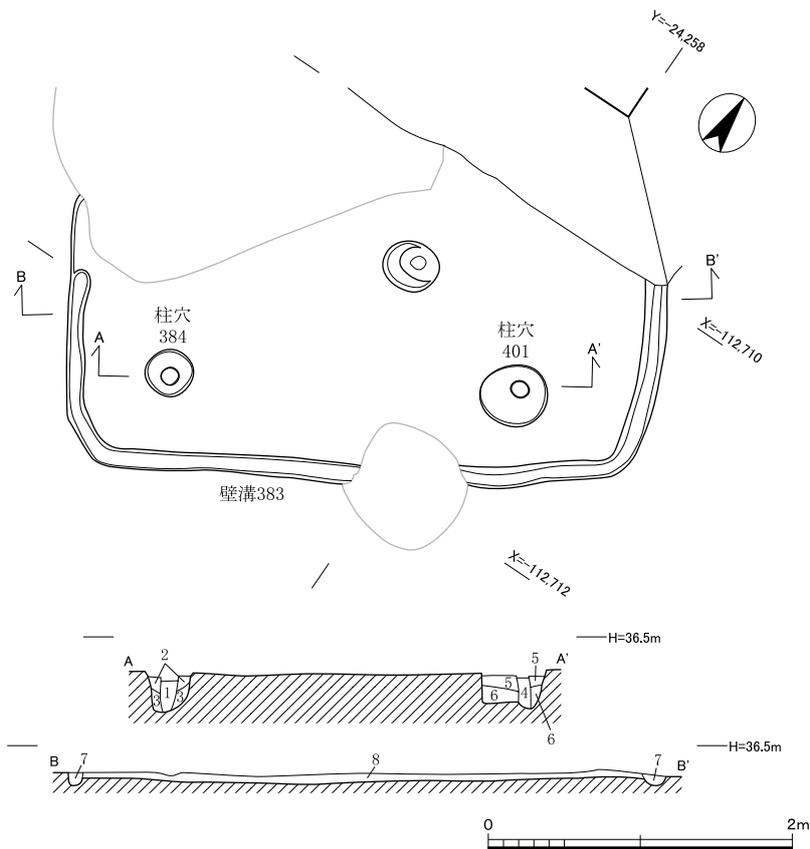
竪穴住居340（図版27、図14） 1区西部で検出した竪穴住居である。西側・南側は調査区外へ広がり、北東隅部を検出した。平面形は方形を呈し、検出面での規模は、南北1.2m以上、東西3.6m以上、深さ約0.05mある。壁溝は北辺で検出し、幅約0.15m、深さ約0.05mである。主柱穴は不明である。主軸方向は北で東に約18°振れる。埋土は黒褐色砂泥が主体である。A期。

竪穴住居346（図版27、図15） 1区西部で検出した竪穴住居である。北側は調査区外へ広がり、南半を検出した。北西部は攪乱を受ける。平面形は隅丸方形を呈し、検出面での規模は、東西約4.0m、南北約1.6m、深さ約0.05mある。壁溝は3辺で検出し、幅0.1～0.3m、深さ0.05～0.10mあ



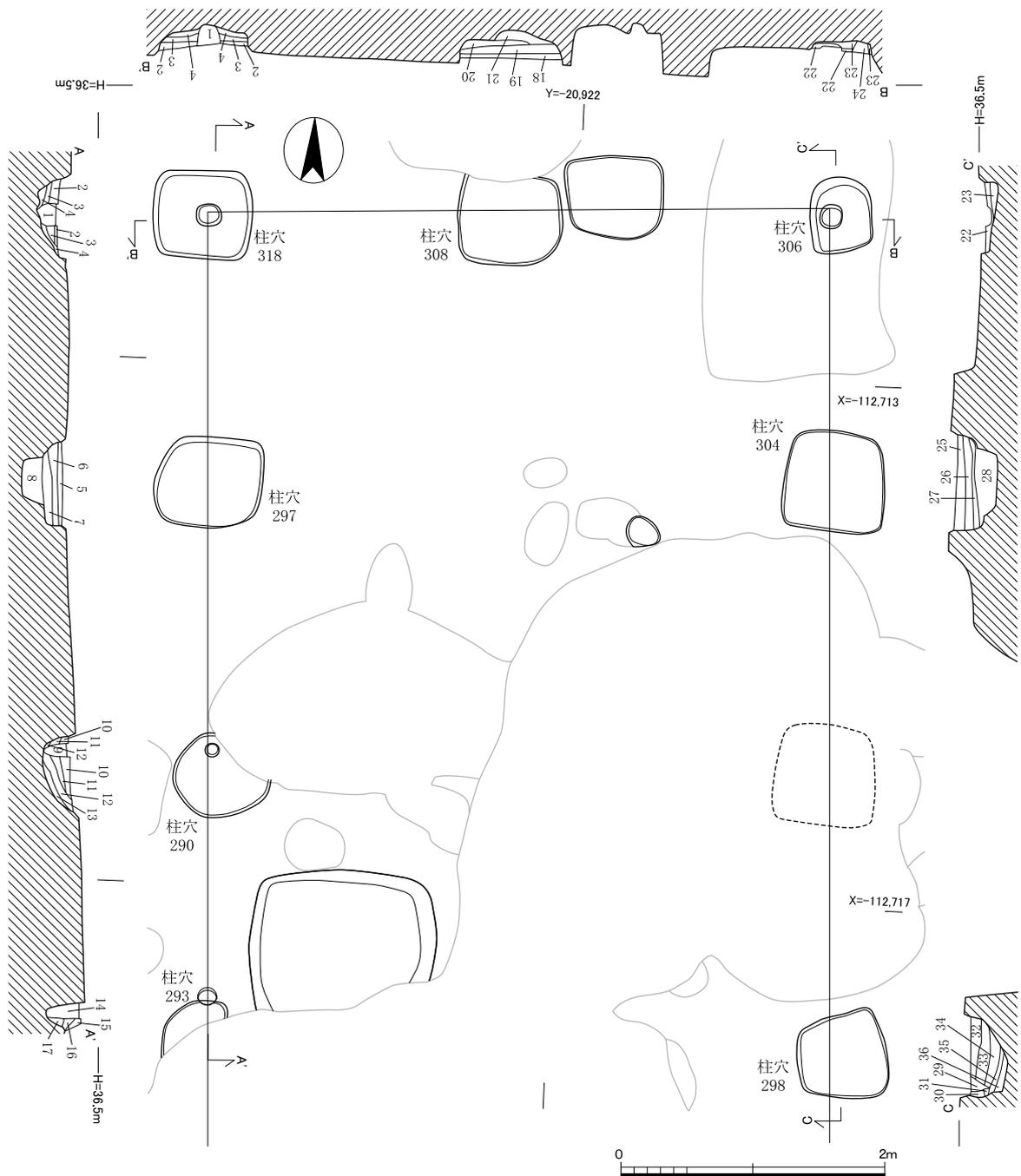
- 1 10YR2/1黒褐色砂泥[壁溝422]
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥、10YR3/3暗褐色砂泥ブロックごく少量混[床土]

図14 竪穴住居340実測図 (1 : 50)



- 1 10YR3/2黒褐色シルト、焼土混[柱穴384柱当]
- 2 10YR3/3暗褐色細砂、炭少量混[柱穴384掘形]
- 3 10YR2/3黒褐色シルト(やや粘質)、小礫・炭少量混[柱穴384掘形]
- 4 10YR3/2暗褐色シルト(やや粘質)、10YR5/3こぶい黄褐色シルトブロック混、炭・焼土少量混[柱穴401柱当]
- 5 10YR2/3黒褐色細砂、小礫・炭・焼土少量混[柱穴401掘形]
- 6 10YR2/3灰黄褐色シルト(やや粘質)、小礫・炭少量混、焼土少量混[柱穴401掘形]
- 7 10YR3/1黒褐色粘質シルト～細砂、2.5Y6/4こぶい黄色シルトブロック少量混、炭少量混[壁溝383]
- 8 10YR3/3暗褐色細砂、炭少量混[貼床]

図15 竪穴住居346実測図 (1 : 50)



[柱穴318]

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥
- 3 10YR2/2~3黒褐色砂泥
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥
- 5 10YR2/2黒褐色砂泥

[柱穴297]

- 6 10YR3/2黒褐色砂泥
- 7 10YR2/2黒褐色砂泥
- 8 10YR4/2灰黄褐色砂礫

[柱穴290]

- 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 10 10YR3/2黒褐色砂泥
- 11 10YR2/2黒褐色砂泥
- 12 10YR3/2黒褐色砂泥
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径2cm少量混

[柱穴293]

- 14 10YR3/3暗褐色砂泥
- 15 10YR3/2黒褐色砂泥
- 16 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥
- 17 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥

[柱穴308]

- 18 10YR3/2黒褐色砂泥
- 19 10YR2/2黒褐色砂泥
- 20 10YR3/3暗褐色砂泥
- 21 10YR3/2黒褐色砂泥

[柱穴306]

- 22 10YR2/2黒褐色砂泥
- 23 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 24 10YR3/2黒褐色砂泥

[柱穴304]

- 25 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径3cmごく少量混
- 26 10YR3/2黒褐色砂泥
- 27 10YR2/2黒褐色砂泥
- 28 10YR3/2黒褐色砂泥

[柱穴298]

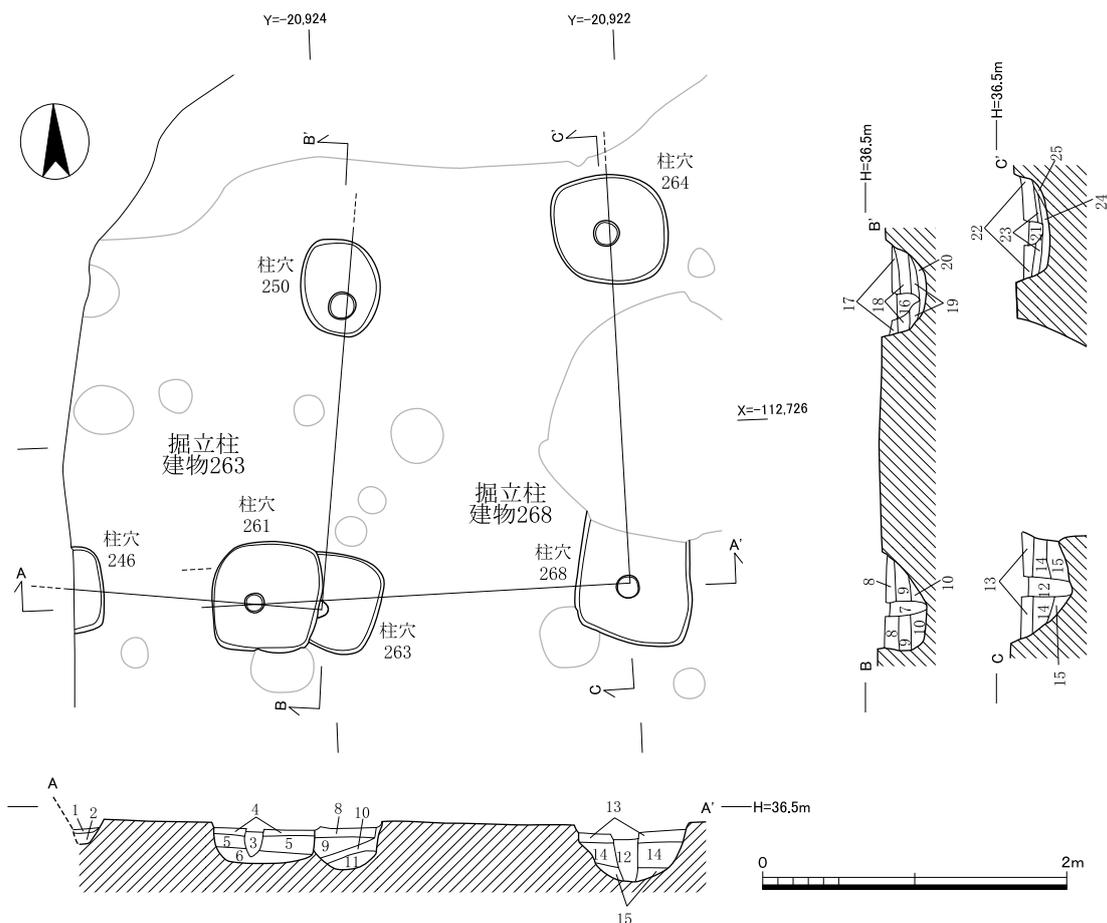
- 29 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 30 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥
- 31 10YR3/3暗褐色砂泥
- 32 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 33 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 34 10YR4/2灰黄褐色砂泥、土師片混
- 35 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 36 10YR4/2灰黄褐色砂泥

図16 掘立柱建物318実測図 (1 : 50)

る。主柱穴は2箇所（柱穴384・401）検出し、柱間は約2.25mある。柱穴の平面形は、円形を呈する。検出面での規模は、径約0.35m、深さ0.07mある。主軸方向は北で西に約31°振れる。埋土は黒褐色シルトである。A期。

竪穴住居399 1区西部で検出した竪穴住居である。北側は調査区外へ広がり、南西部を検出した。平面形は方形を呈すると考えられ、検出面での規模は、南北1.2m以上、東西3.6m、深さ約0.15mある。壁溝は2辺で検出し、幅約0.15m、深さ約0.05mある。主柱穴は不明である。主軸方向は北で西に約22°振れる。埋土は黒褐色砂泥である。A期。

溝335（図版28） 1区西部で検出した東西方向の溝で、西端は南に曲がる。東側と中間部は攪



- | | |
|-------------------------------------|--------------------------------|
| [柱穴246] | 13 10YR4/2灰褐色砂泥、礫径1cm以下・炭少量混 |
| 1 10YR3/1黒褐色砂泥 | 14 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径2cm以下・炭少量混 |
| 2 10YR4/4褐色砂泥、10YR4/2灰黄褐色砂泥混 | 15 10YR2/3黒褐色砂泥、炭少量混 |
| [柱穴261] | [柱穴250] |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 | 16 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径0.5cm以下・炭少量混 |
| 4 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥、礫径2cm以下少量混 | 17 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混 |
| 5 10YR4/2こぶい灰黄褐色砂泥、礫径5cm以下・炭少量混 | 18 10YR2/3黒褐色砂泥、礫径3cm以下少量混 |
| 6 10YR4/6褐色砂泥、炭少量混 | 19 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径5cm以下少量混 |
| [柱穴263] | 20 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径5cm以下礫多量混 |
| 7 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混 | [柱穴264] |
| 8 10YR3/1黒褐色砂泥、10YR5/4こぶい黄褐色砂泥ブロック混 | 21 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混 |
| 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径1cm以下少量混 | 22 10YR2/3黒褐色砂泥、礫径5cm以下少量混 |
| 10 10YR4/3こぶい黄褐色砂泥、10YR4/2灰黄褐色砂泥 | 23 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径2cm以下少量混 |
| 11 10YR4/4褐色砂泥、炭少量混 | 24 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径2cm以下中量混 |
| [柱穴268] | 25 10YR5/4こぶい黄褐色砂泥 |
| 12 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混 | |

図17 掘立柱建物263・268実測図（1：50）

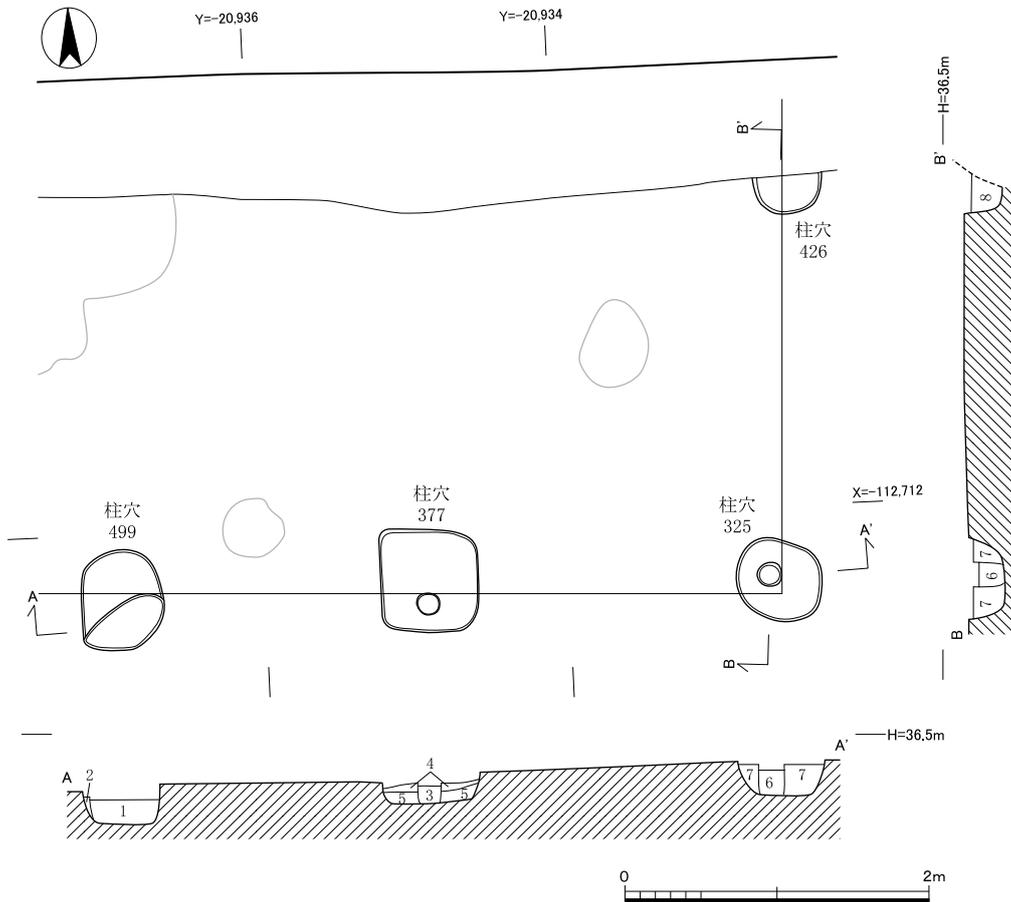
乱を受ける。検出面での規模は、幅0.4～1.0mで、長さ約6.0m確認した。深さは0.09～0.19mで、壁は両側ともなだらかに傾斜し、断面形はU字形を呈する。底面の標高は36.5mである。埋土は黒褐色砂泥である。A期。

2) 第3-1面の検出遺構 (図版4)

調査区中央の西部でまとまって奈良時代の遺構を検出した。遺構には掘立柱建物・土坑・溝・ピットなどがある。出土した遺物はI期中段階¹⁾に属する。

掘立柱建物318 (図版29、図16) 1区中央部西側で検出した南北棟掘立柱建物である。東西2間×南北3間分を検出した。南側と中央部は攪乱を受け、南延長部は不明である。柱間は、桁行約2.1m・2.5m、梁行約2.35m等間である。柱穴掘形の平面形は、隅丸方形である。検出面での規模は、一辺約0.7m、深さ約0.3mある。柱径は約0.1mある。主軸方向は北で西に約2°振れる。柱穴の埋土は黒褐色砂泥である。

掘立柱建物268 (図版30、図17) 1区西部西側で検出した掘立柱建物である。北側は攪乱を受



[柱穴499]

- 1 10YR3/1黒褐色砂泥
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥

[柱穴377]

- 3 10YR3/1黒褐色砂泥
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径5cm以下ごく少量混
- 5 10YR2/3黒褐色砂泥、礫径5cm以下ごく少量混

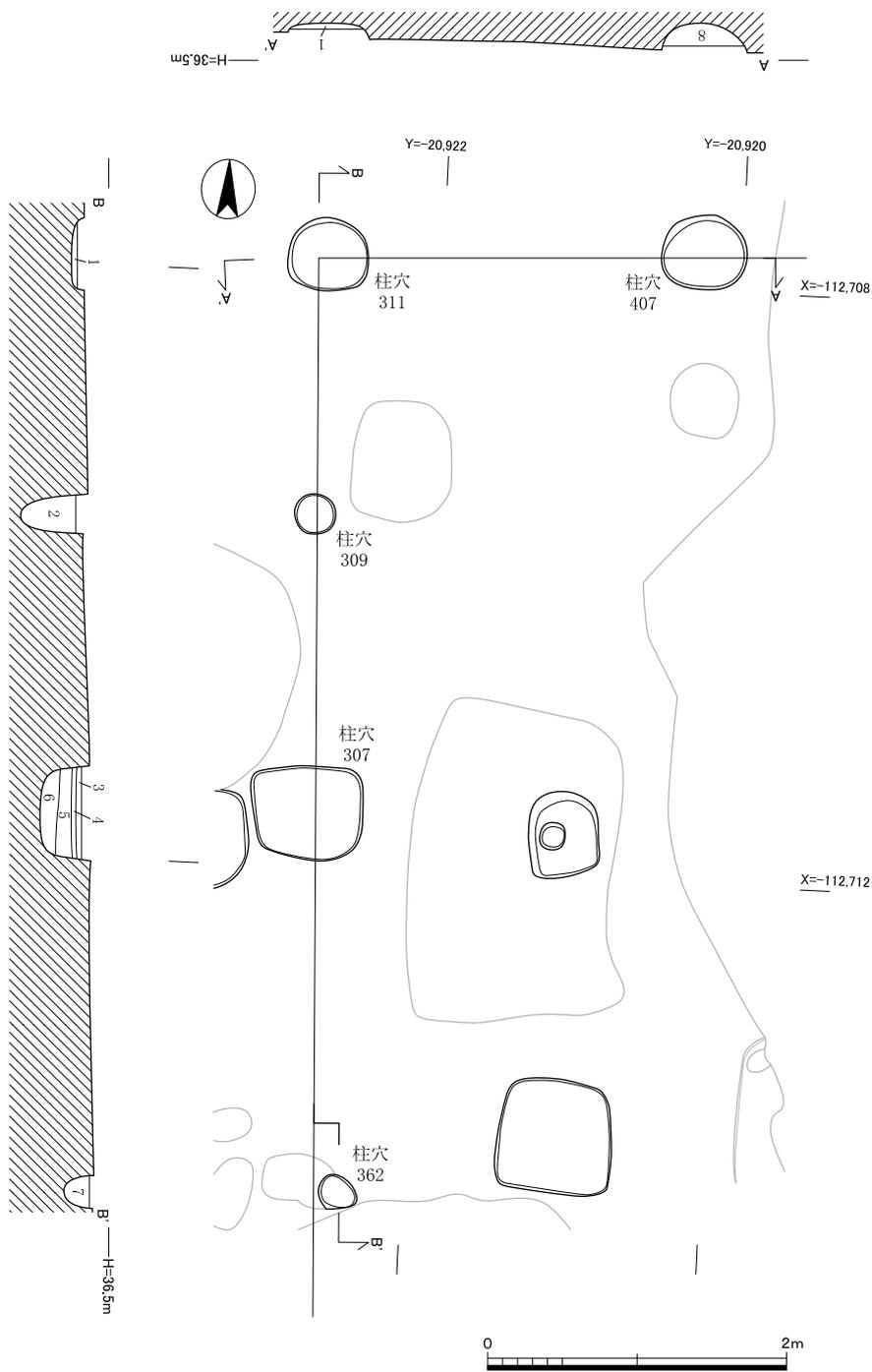
[柱穴325]

- 6 10YR3/3暗褐色砂泥、炭少量混
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂泥

[柱穴426]

- 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥

図18 掘立柱建物325実測図 (1:50)



- | | |
|-------------------|---------------------|
| [柱穴311] | 5 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混 |
| 1 10YR3/3暗褐色砂泥 | 6 10YR3/3暗褐色砂泥 |
| [柱穴309] | [柱穴362] |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 7 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| [柱穴307] | [柱穴407] |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 | 8 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | |

図19 掘立柱建物311実測図 (1 : 50)

け、西側は調査区外へ広がる。南北1間×東西1間分を検出したにとどまる。柱間は、東西約2.4m、南北約2.3mである。柱穴掘形の平面形は、隅丸方形である。検出面での規模は、一辺約0.75m、深さ0.2～0.4mある。柱径は約0.15mある。主軸方向は座標北に一致する。柱穴の埋土は暗褐色砂泥である。

掘立柱建物263（図版30、図17） 1区中央部西側で検出した掘立柱建物で、北側・西側は調査区外へ広がる。南北1間以上×東西2間以上の建物の南東隅を検出した。柱間は、東西1.2m以上、南北約2.1mある。柱穴掘形は隅丸方形ないし楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸約0.6m、深さ約0.2mある。柱径は約0.15mある。主軸方向は北で東に約8°振れる。柱穴の埋土は黒褐色砂泥である。柱穴の切り合いから建物268より古い。

掘立柱建物325（図18） 1区西部北西隅で検出した掘立柱建物で、北側・西側は調査区外へ広がる。南北1間以上×東西2間以上の建物の南東隅を検出した。柱間は、東西約2.4m、南北約2.3mである。柱穴掘形の平面形は、隅丸方形ないし楕円形を呈する。検出面での規模は、長軸約0.6m、深さ0.2～0.4mある。柱径は約0.15mある。主軸方向は北で東に約3°振れる。柱穴の埋土は灰黄褐色砂泥である。

掘立柱建物311（図19） 1区中央部西側で検出した掘立柱建物で、南側・東側は攪乱を受ける。南北3間以上×東西1間以上の建物の北西隅を検出した。柱間は、東西約2.3m、南北1.8～2.4mある。柱穴掘形の平面形は、隅丸方形ないし楕円形を呈する。検出面での規模は、径0.3～0.7m、深さ0.2～0.4mある。柱径は約0.15mある。主軸方向は北で西に約2°振れる。柱穴の埋土は暗褐色砂泥および黒褐色砂泥である。

土坑292 2区中央部西側で検出した土坑である。南側は攪乱を受ける。平面形は長方形で、検出面での規模は、東西約1.4m、南北推定約1.2m、深さ約0.4mある。壁はほぼ垂直で、底部は平坦である。底面の標高は36.2mである。埋土は黒褐色砂泥である。遺物の時期はI期中段階に属する。

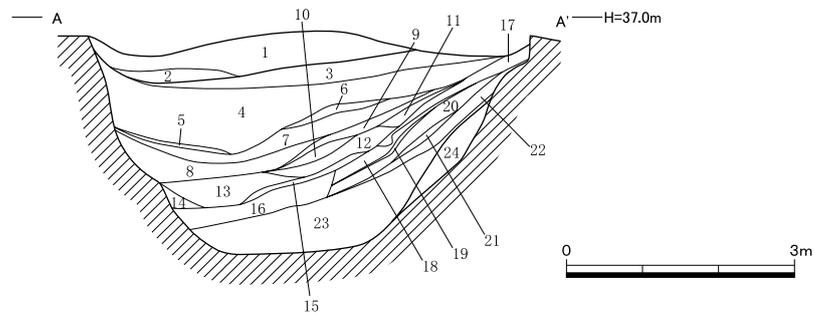
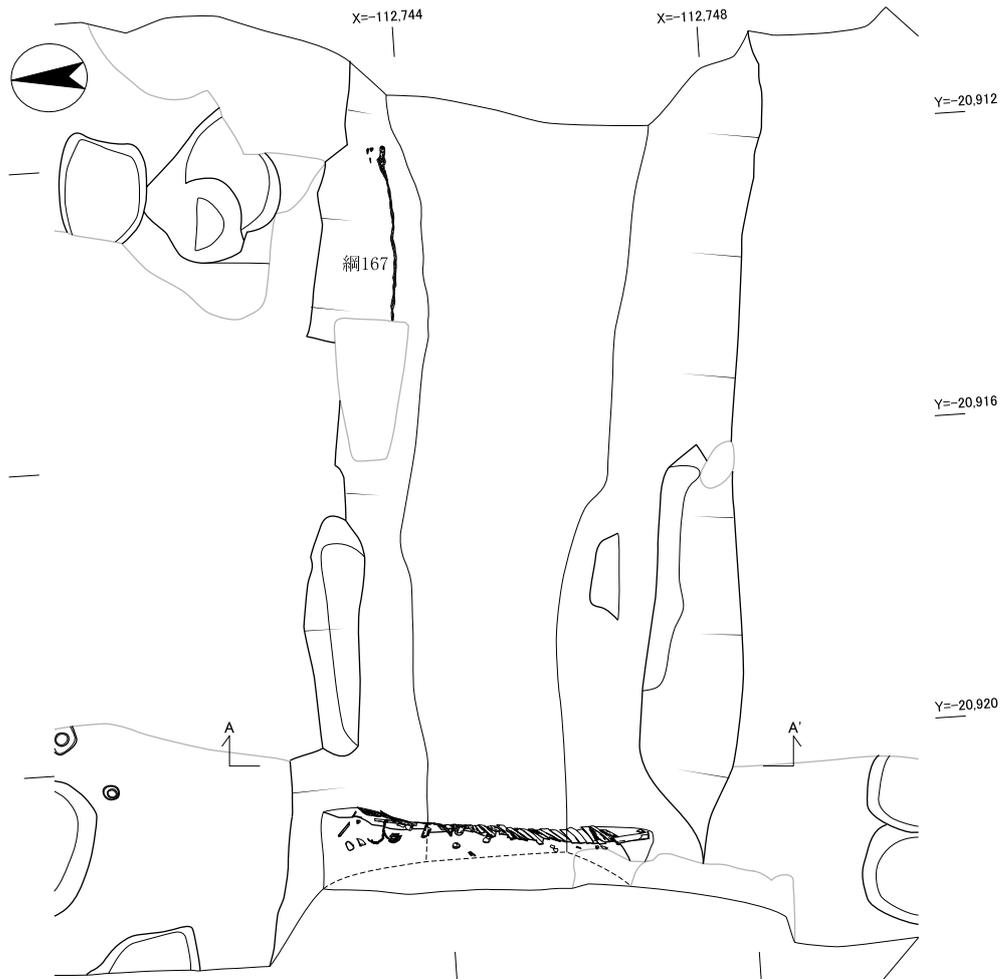
3) 第2面の検出遺構（図版5～7・31）

平安時代前期から後期の遺構を検出した。土坑・土取穴・溝・ピット・濠・掘立柱列などがある。

土取穴群（図版35、写真9） 1区北部で検出した土坑群である。東西方向に列をなし、北・中・南の3列を検出した。中列と南列は並行する。北側列は、土坑455・449・365・366・367・357からなり、間隔は0～2mある。中列は土坑448・487・435A・435Bからなり、間隔は0～1mある。南列は、土坑374・373・436からなり、間隔は0～0.5mある。土坑の平面形は、楕円形・隅丸方形・不定形を呈しており、規模に



写真9 土坑435B壁面



- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR2/3暗褐色砂泥、礫径3~30cm少量混</p> <p>2 10YR4/4褐色砂泥、礫径3cm以下ごく少量混</p> <p>3 10YR4/2灰黄褐色砂礫(粗砂主)、礫径10cm以下</p> <p>4 10YR4/1褐灰色砂泥~泥土(シルト主、微砂混)</p> <p>5 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫(粗砂主)、礫径8cm以下</p> <p>6 10YR4/1褐灰色砂(粗砂主)、礫径5cmごく少量混</p> <p>7 7.5YR4/1灰色砂泥~泥土(微砂少量混)</p> <p>8 2.5Y3/1黒褐色砂泥、2.5Y5/2暗灰黄色泥土(シルト主)ブロック少量混</p> <p>9 2.5Y5/2暗灰黄色砂(細砂主)、礫径4cm以下中量混</p> <p>10 2.5Y3/1黒褐色砂泥、2.5Y4/1黄灰色泥土(シルト主)ブロック中量混</p> <p>11 2.5Y4/2暗灰黄色砂(細砂主、9より細かい)、礫径0.5cm以下ごく少量混</p> <p>12 5Y3/2オリーブ黒色細砂、2.5Y3/1黒褐色泥土・2.5Y4/2暗灰黄色泥土(粘土主)ブロック中量混</p> | <p>13 2.5Y3/1黒褐色砂泥、2.5Y5/2暗灰黄色泥土(シルト主)ブロック少量混</p> <p>14 2.5Y3/2黒褐色砂~砂礫、礫径4cm以下</p> <p>15 2.5Y4/1黄灰色砂礫、礫径10cm以下(3cm以下主)</p> <p>16 10YR4/2灰黄褐色砂礫(粗砂主)、礫径6cm以下(3cm以下主)</p> <p>17 2.5Y3/1黒褐色泥土、2.5Y5/2暗灰黄色泥土ブロック中量混、礫径5cm以下少量混</p> <p>18 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y5/3黄褐色泥土ブロックごく少量混</p> <p>19 10YR4/2灰黄褐色砂礫(粗砂主)、礫径3cm以下</p> <p>20 2.5Y3/1黒褐色泥土、礫径5cm以下少量混</p> <p>21 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫(粗砂主)、礫径4cm以下</p> <p>22 2.5Y4/1黄灰色砂(細砂主)</p> <p>23 2.5Y4/1黄灰色砂礫(粗砂主)、礫径10cm以下(3~4cm主)</p> <p>24 2.5Y4/1黄灰色泥土、2.5Y5/1黄灰色砂礫、2.5Y5/4黄灰色泥土(粘土主)ブロック等が相互混入</p> |
|---|---|

図20 濠150実測図 (1 : 100)

もややばらつきがある。土坑374・435Bは、楕円形を呈し、規模は長径約3.2m、短径約2.5mである。深さは当時の地表面から1m程度と推定できる。底面はやや凹凸があり、壁面はオーバーハングしながら立ち上がり、壁面に幅0.2m程度の鋸の痕跡がある。底面の標高は多少差はあるが34.3m前後あり、地山の粘土層の下面と相当する。埋土は黒褐色砂泥を中心とした土層である。粘土を採掘した土取穴と考えられる。遺物の時期はIV期に属する。

濠150（図版32・33、図20～22） 1区南東部で検出した東西方向に延長する濠である。西側・東側は調査区外に広がる。中央部・東部は上部が攪乱を受ける。検出面での規模は、全長約12.0m、幅は約5.9mである。深さは西で約2.75m、東で約2.56mある。壁は両側ともに傾斜が強く、底面

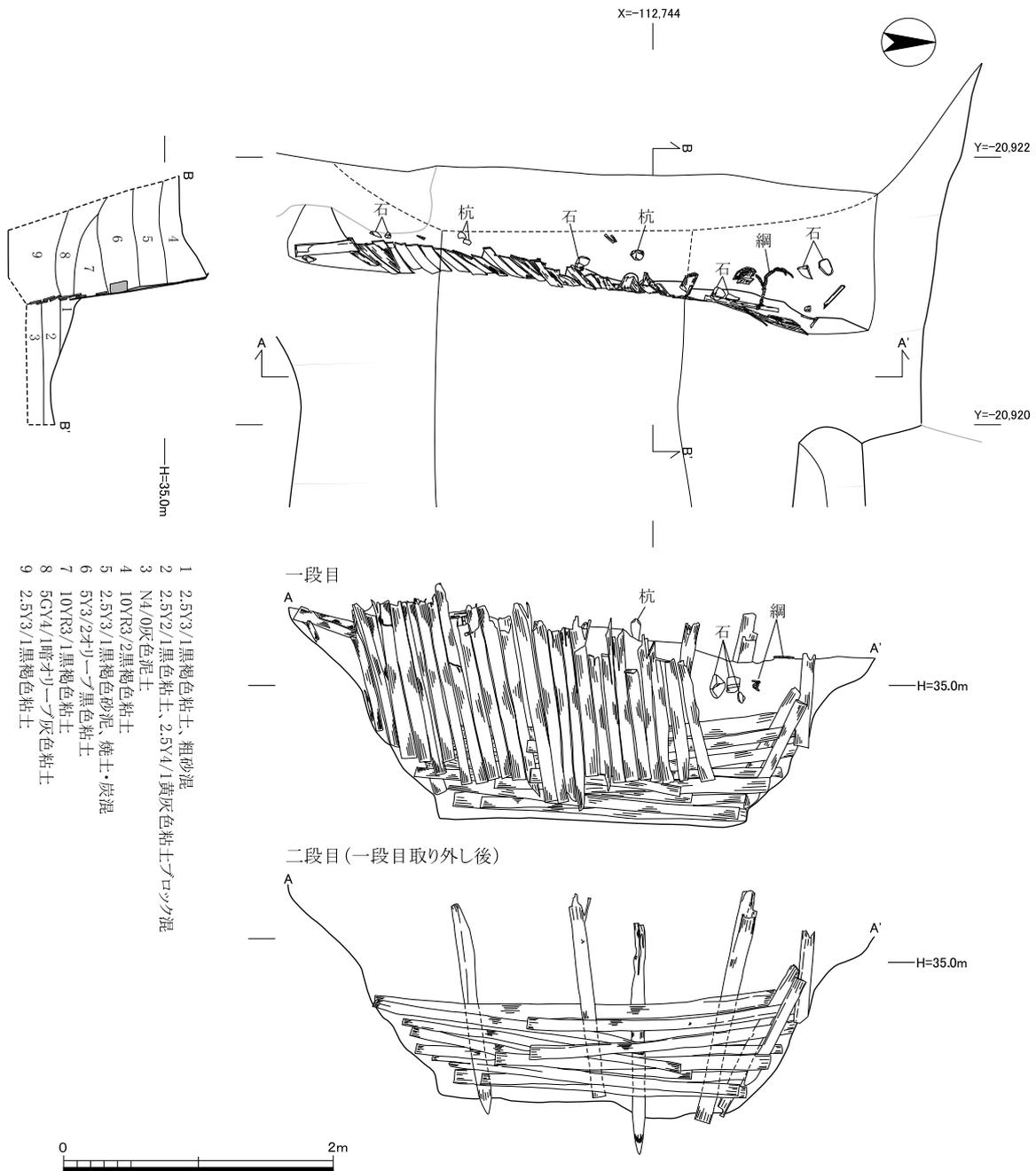


図21 濠150内板列実測図（1：50）

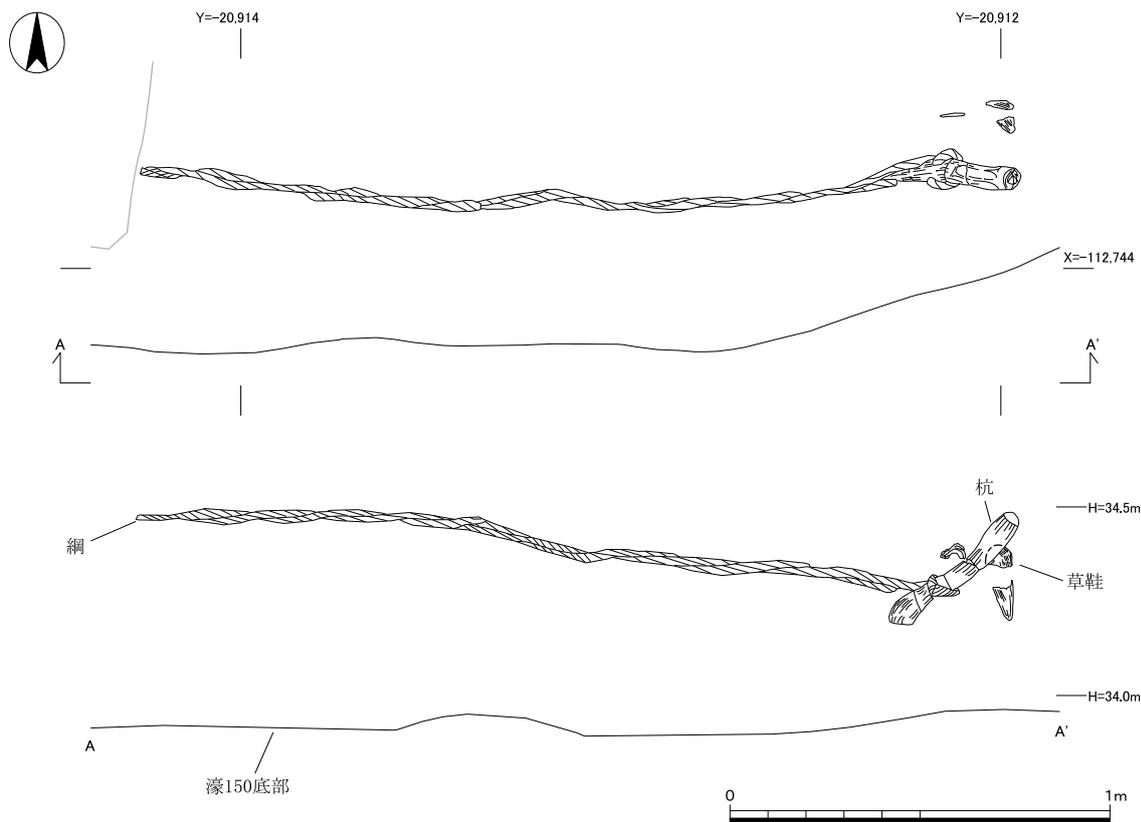


図22 濠150内綱167実測図（1：20）

はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。南壁の斜面の凹んだ箇所には、黄灰色粘土をブロックにして厚さ0.2m程度貼り付け、堅く締めて斜面を平滑にする。底面の標高は、西端33.8m、東端33.94mで、西側にやや傾斜する。方向は西で約7°北へ振れる。

濠の東部では、濠に直交する状態で南北方向の木組み遺構を検出した。木組み遺構は、底部から約1.0m上に厚さ0.25m・幅0.10m・長さ約3.6mの横棧を据え、その前後に幅約0.2mの縦材を1.0～1.5mの間隔で据える。縦材5本の内2本は下端が尖り底面に打ち込まれていたが、他は下端が平坦で底面上にとどまる。縦材に対して横方向に幅約0.2mの板材を密に約1.0mまで積み上げる。その後、横棧に対して縦方向に幅約0.2mの板材を密に立てかける。縦板の下端は底面から0.2～0.5m上に位置し、ある程度埋まった段階で設置したことがわかる。縦板は、中央がやや西へ湾曲する。縦板列と縦材の上部は、全て腐食し、上部が露出していた状況が想定できる。木組みの西側で綱の一部を検出していることから、板材などは綱で固定されていた可能性がある。

濠埋土は、木組みを境にして西側と東側で異なる。東側は、黄灰色砂礫が底部に堆積し、黒褐色泥土と黄灰色砂礫が互層で堆積する。西側は黒褐色粘質土と灰褐色シルトが主体である。木組み東側の土層は、南側から北側に下がり、南側から埋められたと推定できる。底部付近には砂や砂礫の堆積は認められず、空濠で短期間で埋め戻されたと推定できる。

また、濠東部の底面から約0.4mの位置で丸杭を検出した。杭は濠北斜面に打ち込まれ、綱が巻き付けられていた（綱167）。綱の端は、西側に約2.0m広がる。埋土出土遺物の時期は、V期新段

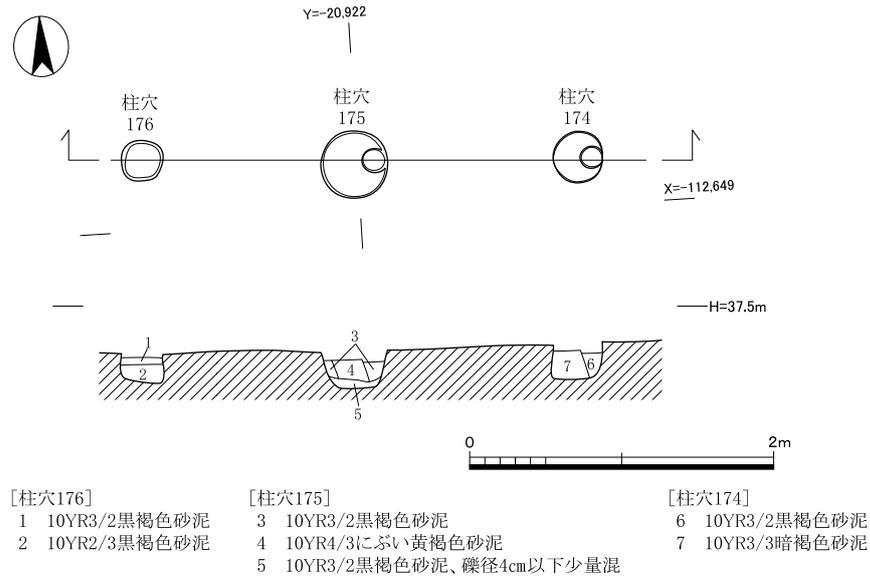


図23 掘立柱列176実測図（1：50）

階に属する。

掘立柱列176（図23） 1区北部で検出した掘立柱列で、東側は攪乱を受ける。東西方向に並ぶ3基の柱穴からなる。東西2間以上を検出した。西側は調査区外に広がる可能性がある。柱間は、西から約1.4m・1.5mある。柱穴掘形の平面形は、円形から楕円形を呈する。検出面での規模は、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.3mある。主軸方向は西で北に約4°振れる。柱穴の埋土は暗褐色砂泥～黒褐色砂泥である。西側の調査No.6で検出した掘立柱建物とは別の遺構である。

溝180・181・184・185・199・193 1区中央部西側で検出した溝である。溝は2条1単位で平行し、東西方向の199と184、193と185が連続、東端で南北方向の180と181がある。溝の間隔は1.0～1.5mである。西側は調査区外へ広がる。検出面での規模は、幅0.2～0.4m、深さ約0.05mある。断面形は浅い皿状を呈する。方位は北で東に約7°振れる。埋土は暗褐色砂泥から黒褐色砂泥である。遺物の時期はV期新段階に属する。

方位は、西側の調査No.6で検出した掘立柱建物とほぼ一致する。

4) 第1－3面の検出遺構（図版8～10・43）

平安時代後期後半の最勝光院に関連する遺構を検出した。個別の遺構には地業・土坑・埋納土坑・溝・ピットなどがある。最勝光院造営時の整地層は、ほぼ調査区の全域に広がっている。

土坑171 1区北部で検出した土坑で、北側と南側は攪乱を受ける。検出面での掘形は、東西約5.9mの不定形を呈し、南北は約5.0m確認した。深さ約0.2mで、壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦である。埋土は暗褐色砂泥である。平安時代後期の土師器皿が多量に出土した。遺物の時期はV期新段階～VI期古段階である。

土坑173 1区北部で検出した土坑で、北側は攪乱を受ける。検出面での掘形は、東西約5.5mの不定形である。南北は約3.7m確認した。深さ0.15mで、壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦である。埋土は灰黄褐色砂泥である。平安時代後期の土師器皿が多量に出土した。遺物の時期はV期

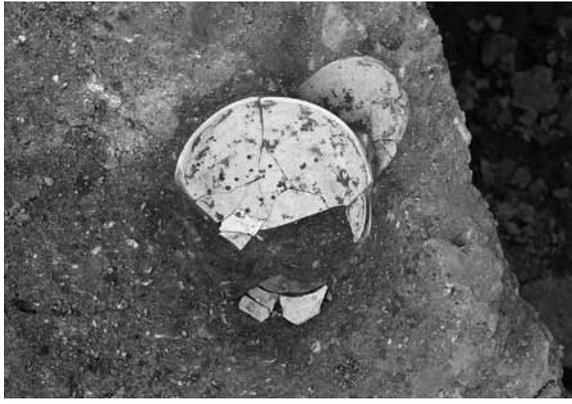


写真10 埋納土坑227

新段階～Ⅵ期古段階である。

土坑195 1区南部で検出した土坑で、西側・東側は攪乱を受ける。検出面での掘形は、南北約4.25mで、東西は約2.4m確認した。深さ約0.13mで、壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦である。埋土は褐灰色砂泥である。遺物の時期はⅤ期新段階～Ⅵ期古段階である。

埋納土坑227 (写真10) 1区北東部で検出した小規模な土坑である。径約0.2m、深さ約0.1m

ある。土師器皿が3枚以上重ねられて埋納されていた。埋土は灰黄褐色砂泥である。遺物の時期はⅤ期新段階である。

地業55 (巻頭図版1～3、図版37～39・41、図24・25) 1区北東部で検出した地業である。東側は調査区外へ広がる。南側の広がりを確認するために長さ32mの拡張区を設定したが、拡張区の南側も攪乱を受ける。上面は全体に削平を受ける。

検出面での規模は、東西約4.7m分確認した。南北は、北端部は確認しており、拡張区も含め約24.5m確認したが、南端については、南側攪乱の南側では当該地業が見られないので、南北は33.2m以内と推定できる。高さは0.15～0.7m程度確認した。地業上面では、礎石および礎石据付跡は確認できていない。

地業は、平坦面に径0.05～0.1mの河原石を敷き、その上面を厚さ約0.1mの灰黄褐砂泥層で覆った後に丁寧に突き固め、これを交互に何層にもわたって行う。最も残存状況のよい場所で6回の積み上げが認められ、整地層は堅く締まった状態となっている。地業の周縁では、内部の積み上げと同時に径0.05～0.1mのやや大きい河原石を積み上げる。石積みは長軸を周縁に直交して据える小口積みとして、壁面を形成する。壁面は傾斜して立ち、面を揃える。地業の北辺と西辺は確認したが、南辺は攪乱を受けているために未確認である。地業内では、北辺から南へ約7.8mの位置で北側向き石積み壁面を検出した。この石積みも地業周縁と同様であり、作業単位の境と考えられる。地業底面の標高は、北端が36.65m、遺存する南端が37.00mである。上面の標高は37.6mである。西辺の方向は座標北に一致する。埋土中の遺物の時期は、Ⅴ期新～Ⅵ期古段階に属する。

地業56 1区北西部で検出した地業である。南側は攪乱を受け、上部も削平を受ける。検出面での規模は、南北約2.0m、東西約4.0m確認した。地山上に径約0.1mの礫を粗く敷く。礫面上面の標高は37.15mである。遺物の時期はⅤ期新～Ⅵ期古段階に属する。

地業60 (図版41、図26) 1区中央部東側で検出した地業である。東側は調査区外へ広がる。西側は攪乱を受け、北側・南側および上部も削平を受ける。検出面での規模は、南北約1.3m、東西約2.8m確認した。高さは底面から約0.4m残存する。底面に径1.0～1.5mの河原石を東西方向に積み上げ南辺とする。石積みは長軸を南辺に直交して据える小口積みで、2段ないし3段残存する。石列の南側は、褐色砂泥層で整地され、径約0.1mの河原石が含まれる。底面の標高は36.6m、積



图24 地業55北部実測図 (1 : 50)

- 1 10YR6/1褐色砂泥
- 2 2.5Y6/2灰黄色砂泥(堅く締まる)
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径15cm以下多量混
- 4 2.5Y5/3黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下多量混
- 5 2.5Y5/2灰黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径3cm以下中量混
- 6 10YR5/2灰黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下多量混
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下中量混
- 8 2.5Y3/2黒褐色砂泥(堅く締まる)、礫径3cm以下中量混、炭・焼土混
- 9 10YR6/2灰黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下多量混
- 10 2.5Y6/2灰黄色砂泥(堅く締まる)
- 11 2.5Y5/3黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下多量混
- 12 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下多量混
- 13 2.5Y6/4にぶい黄色砂泥(堅く締まる)、礫径3cm以下多量混
- 14 10YR5/2灰黄褐色砂泥(堅く締まる)、礫径3cm以下多量混
- 15 10YR4/4褐色砂泥、礫径10cm以下多量混
- 16 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(堅く締まる)、礫径10cm以下多量混
- 17 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、礫径3cm以下多量混
- 18 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径15cm以下多量混
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径3cm以下多量混、この層の上面に幅3cmほどの堅い酸化面がある
- 20 10YR3/3暗褐色砂泥(堅く締まる)
- 21 10YR4/1褐色～4/2灰黄褐色砂泥、礫径4cm以下少量混、焼土混
- 22 7.5YR4/3褐色砂泥、礫径2cm以下少量混、焼土混
- 23 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径10cm以下少量混
- 24 10YR3/2黒褐色砂泥～泥土、礫径10以下中量混、炭混
- 25 10YR4/1褐色～3/1黒褐色砂泥、礫径4cm以下多量混
- 26 10YR5/2灰黄褐色泥砂、10YR5/3黄褐色細砂ブロック混、礫径7cm以下中量混
- 27 10YR4/3褐色泥砂～砂泥、礫径5cm以下多量混(径0.5cm以下主体)
- 28 10YR4/3褐色泥砂～砂泥、10YR5/2灰黄褐色泥砂～砂泥など混、礫径10cm以下中量混
- 29 10YR4/3褐色泥砂～砂泥、礫径3cm以下少量混
- 30 7.5YR4/2灰褐色砂泥、礫径1cm以下少量混、炭混
- 31 7.5YR3/3暗褐色砂泥、礫径2cm以下少量混
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径0.5cm以下少量混
- 33 10YR3/4暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色泥砂混、礫径0.5cm以下少量混
- 34 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径1cm以下少量混
- 35 7.5YR4/2灰褐色砂泥、礫径2cm以下中量混
- 36 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径0.5cm以下少量混
- 37 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(36に比べ砂多い)、礫径1cm以下少量混
- 38 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色泥砂など混、礫径2cm以下少量混
- 39 10YR3/2黒褐色～灰黄褐色砂泥、礫径2cm以下少量混
- 40 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、10YR4/2灰黄褐色泥砂中量混、礫径1cm以下少量混
- 41 10YR4/2～4/3灰黄褐色～にぶい黄褐色泥砂～砂泥、10YR5/6黄褐色砂泥少量混、礫径3cm以下少量混
- 42 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、2.5Y6/4にぶい黄色粘土ブロック混、礫径1cm以下少量混
- 43 10YR4/2灰黄褐色砂泥、2.5Y5/2暗灰黄色粘土ブロック混、礫径0.5cm以下少量混
- 44 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径0.5cm以下少量混
- 45 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径0.5cm以下少量混
- 46 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径1cm以下少量混

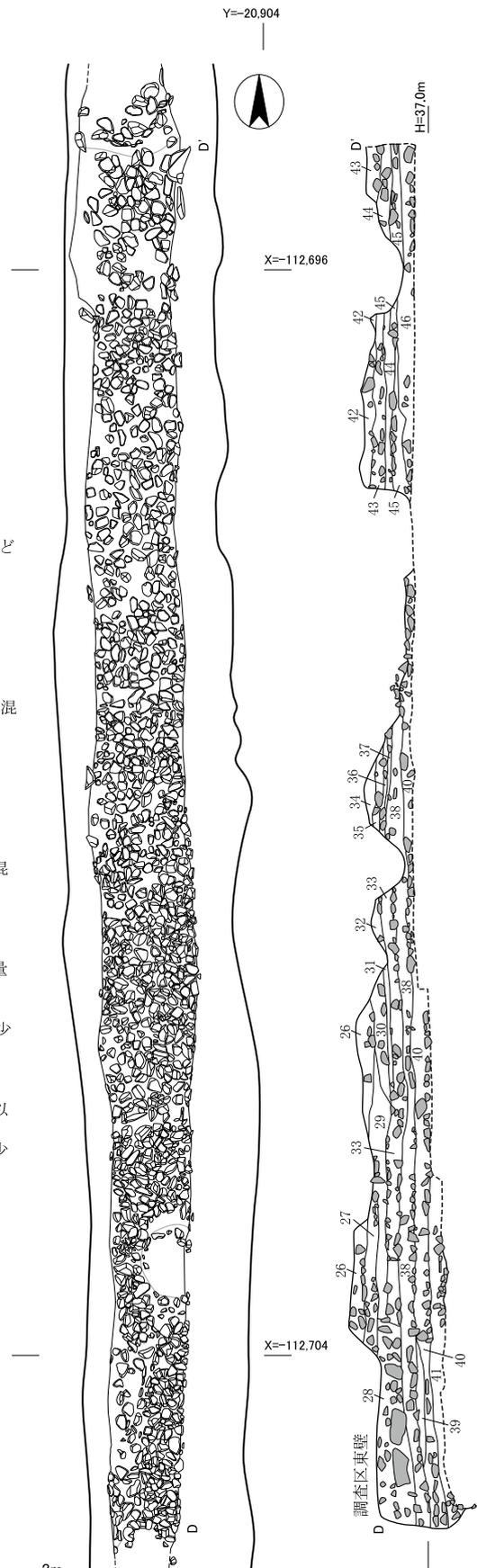
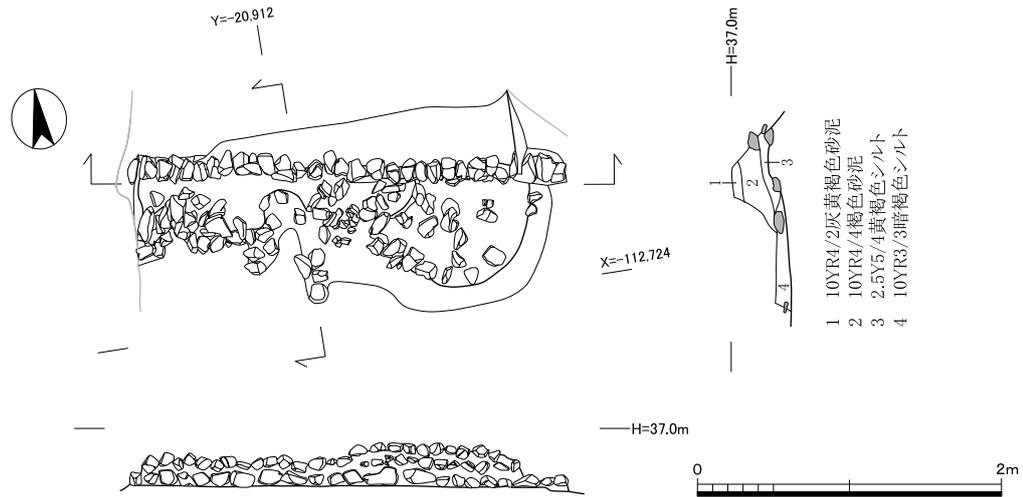
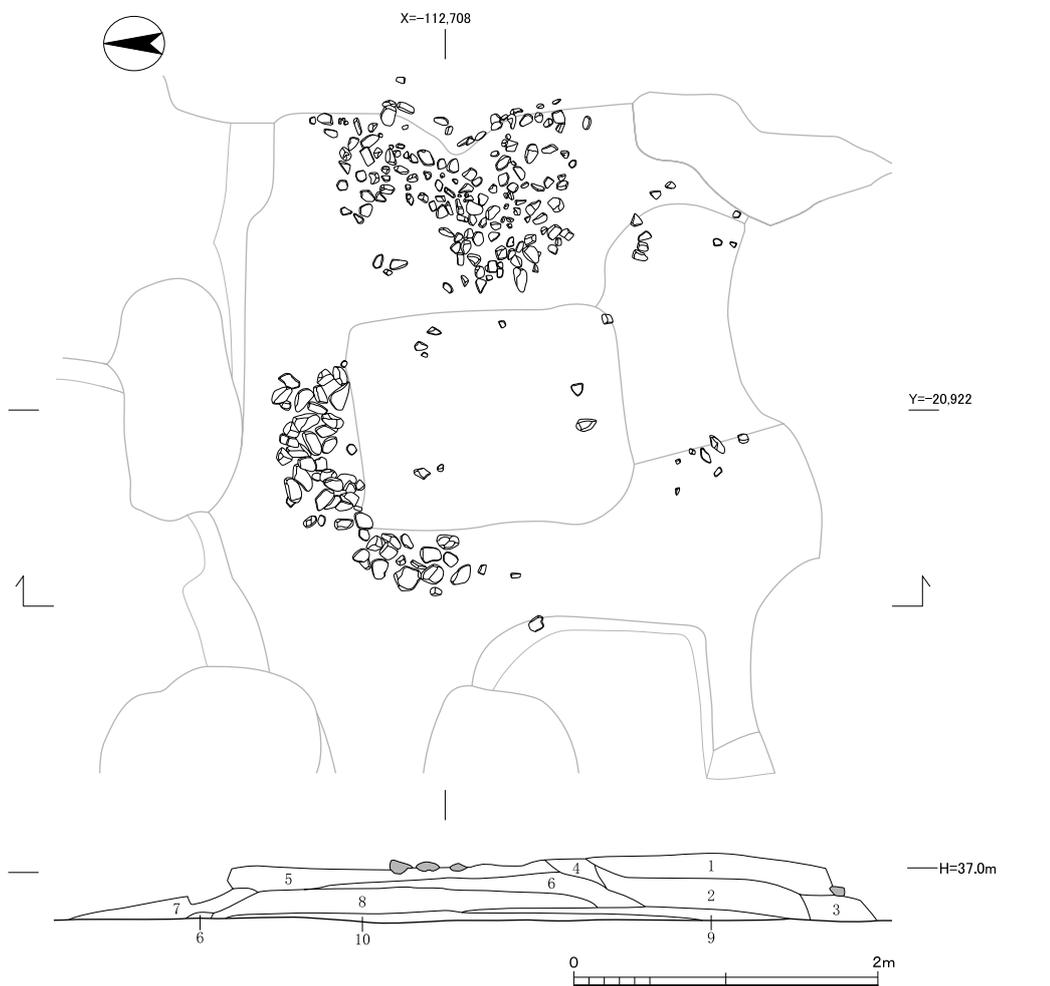


図25 地業55南部実測図(1:50)



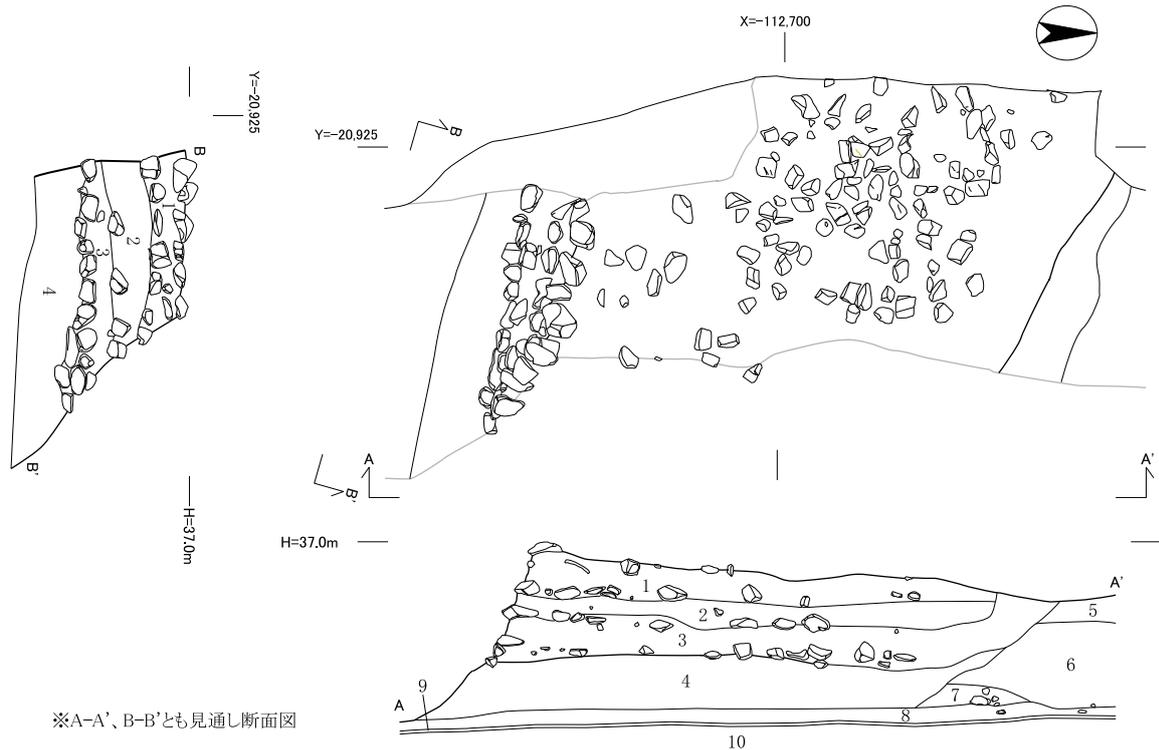
- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 2 10YR4/4褐色砂泥
- 3 2.5Y5/4黄褐色シルト
- 4 10YR3/3暗褐色シルト

図26 地業60実測図 (1 : 50)



- 1 10YR7/4にぶい黄橙色砂泥、10YR7/6明黄褐色粘土7%以下・10YR4/3にぶい黄褐色粘土3%以下・礫径0.3~1cm中量・礫径2.0~7.0cm少量斑状混
- 2 10YR7/4にぶい黄橙色砂泥、10YR7/6明黄褐色粘土10%以下・2.5Y6/3にぶい黄色粘土10%以下・10YR6/4にぶい黄橙色砂泥25%以下・礫径0.3~1cm中量・礫径1.0~7.0cm少量斑状混
- 3 10YR5/3黄褐色粘土、10YR3/3暗褐色粘土7%以下・10YR6/8明黄褐色粘土5%以下混
- 4 10YR6/4にぶい黄褐色粘土、10YR5/3にぶい黄褐色粘土40%斑状混
- 5 10YR4/2灰黄褐色粘土、10YR5/4にぶい黄褐色粘土15%以下斑状混・土師片混
- 6 7.5YR3/3暗褐色粘土、7.5YR2/2黒褐色粘土50%斑状混
- 7 10YR6/4にぶい黄褐色粘土、10YR5/3にぶい黄褐色粘土40%斑状混
- 8 7.5YR3/2黒褐色粘土、10YR5/3にぶい黄褐色粘土7%以下斑状混・土師片少量・炭混
- 9 10YR4/2灰黄褐色粘土、土師片混
- 10 10YR5/2灰黄褐色粘土

図27 地業62実測図 (1 : 50)



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR6/4にぶい黄褐色砂泥中量混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂泥混
- 3 10YR4/2～5/2灰黄褐色砂泥、10YR6/4～6/6にぶい黄褐色～明黄褐色砂泥混
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥・10YR4/2灰黄褐色砂泥混
- 5 10YR4/4褐色砂泥
- 6 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、10YR6/3にぶい黄褐色砂泥混
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径6.0cm以下混
- 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 9 7.5YR4/6褐色砂泥、鉄分多く含む堅く締まった面
- 10 10YR3/3暗褐色砂泥、土師片・炭混

図28 地業166実測図（1：50）

み上げ礫の上面の標高は36.9mである。方位は西で10°北へ振れる。遺物の時期はV期新～VI期古段階に属する。

地業62（図27） 1区中央西部で検出した地業である。南側・東側は攪乱を受け、上部も削平を受ける。検出面での規模は、南北約1.9m、東西約1.2m確認した。地山上面に厚さ約0.3mの黒褐色粘土層を主体とする整地層があり、その上面に径約0.1mの河原石を粗く敷く。河原石上面の標高は37.1mである。遺物の時期はV期新段階～VI期古段階に属する。

地業166（図版41、図28） 1区西部で検出した地業である。西側は調査区外へ広がる。南側・北側・東側は攪乱され、内部も攪乱を受け部分的にしか残存していない。検出面での規模は、東西約1.0m、南北約10.0m確認した。高さは底面から0.9～1.1mある。第3層の底面に径約0.05mの河原石を部分的に敷く。その上に灰黄褐色砂泥を主体とした層を約0.1mの厚さで突き固め、その上に灰黄褐色・浅黄色シルトの層を約0.1mの厚さで突き固める。整地層の南北中央では径0.05～0.1mの河原石を積み上げて面状にする。地業単位と考えられ、地業55と同様な工法が施工されたと考えられる。積み上げ河原石の上面の標高は36.9m、礫面上面の標高は36.7mである。上部で礎石ないし礎石据付跡は検出できなかった。整地層から出土した遺物の時期はV期新～VI期古段階に

属する。

整地層 (図版37・40) 1区のはほぼ全域で検出した最勝光院造営時の盛土および整地土である。調査区の北東部では平安時代中期の土取穴があったことから、約2.0mの高さで嵩上げしており、北側が厚く、南側は薄くなる傾向がある。整地に際しては、一定の区画を設定した上で粘質土や砂など様々な土質の土砂を用いて盛土を行う。断面観察では、層内に平坦面がみられることから、段階的に盛土および整地を行ったとみられる。遺物の時期はV期新～VI期古段階に属する。

5) 第1-2面の検出遺構 (図版11~13・43)

鎌倉時代から室町時代の遺構は少数であった。土坑・ピットなどがある。

土坑54 (図版44) 1区北部で検出した土坑で、西側は攪乱を受ける。掘形は、径約0.5mの円形とみられる。深さ約0.1mで、底部には底径41.4cmの大型の瓦器盤を据え付ける。埋土は黒褐色砂泥である。遺物の時期は14世紀代とみられる。

6) 第1-1面の検出遺構 (図版14~16・43)

江戸時代以降に属する遺構は、調査区の全域で検出した。井戸・土坑・柱列・ピット・窯などがある。

柱列7 (図29) 1区北部で検出した東西方向の柱列である。5基の柱穴からなる。西側は調査区外へ広がる可能性がある。柱穴の径は0.4~0.5m、深さ0.3~0.4mある。柱間は2.1~2.2mある。東西方向の建物の北辺もしくは、東西方向の塀とみられる。

柱列127 (図30) 1区北部で検出した東西方向の柱列である。東側は攪乱を受け、3基分の柱穴を検出した。柱穴の径は0.3~0.4m、深さ約0.1mある。柱間は1.9m・2.0mある。東西方向の建

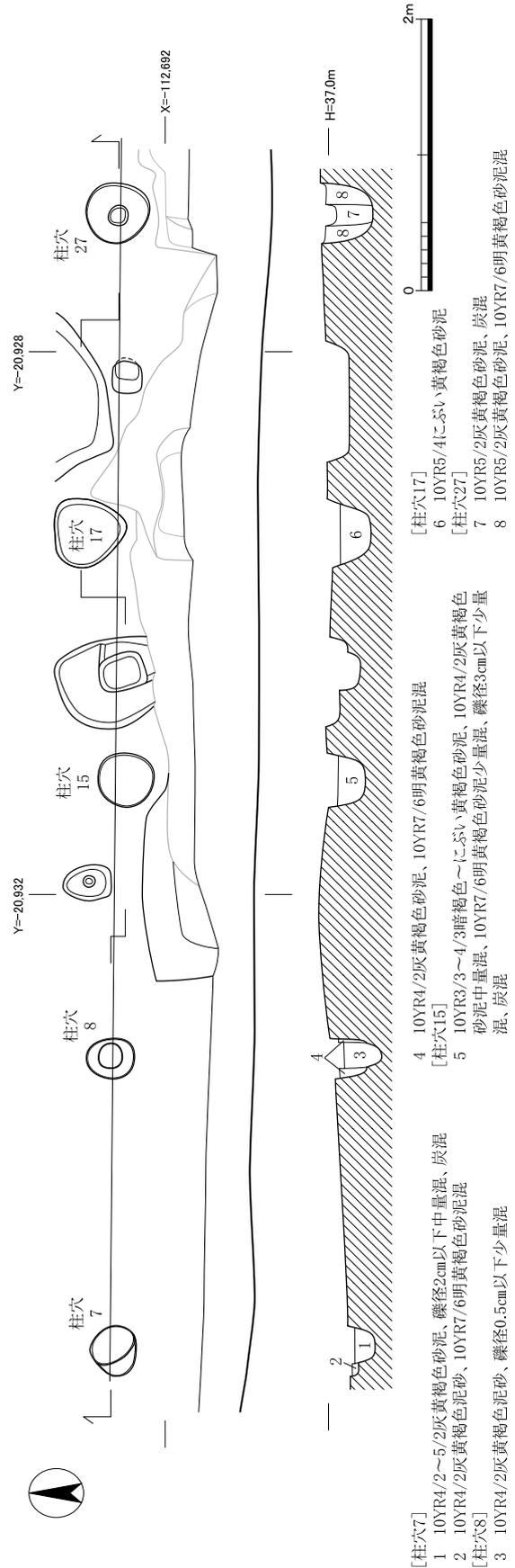


図29 柱列7実測図 (1:50)

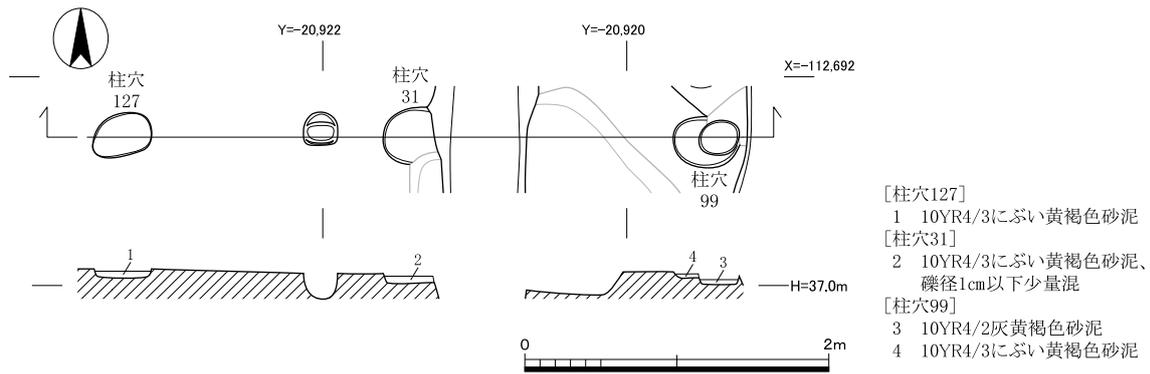


図30 柱列127実測図（1：50）

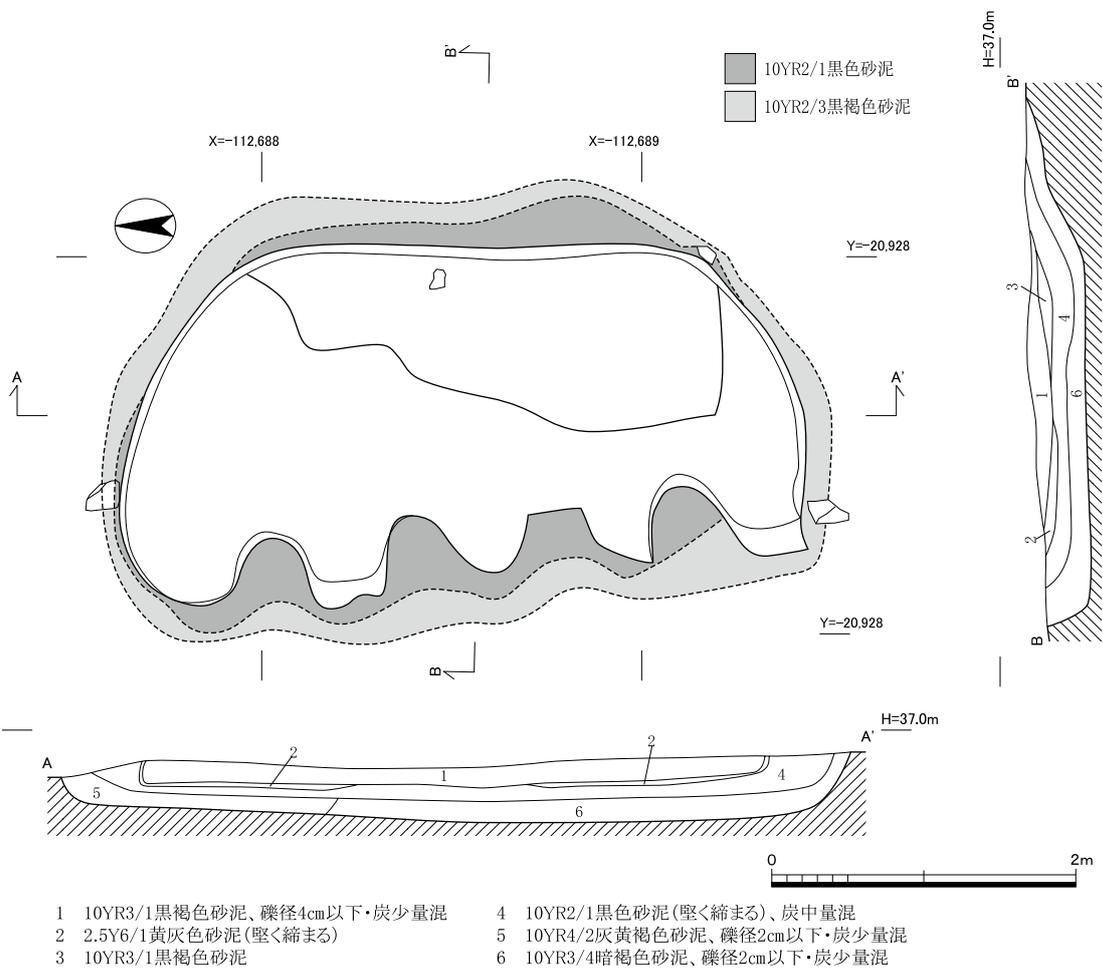


図31 窯19実測図（1：50）

物の北辺もしくは、東西方向の塀とみられる。

窯19(図31) 1区北部で検出した窯である。上部は削平され、底部のみが完存している。平面形は、西側に半円状の張出し部が5箇所あり、東側は緩やかな楕円状を呈する。検出面での規模は、東西約1.2m、南北約2.0m、深さ約0.2mある。底部は平坦である。全体が高熱で焼けており、黄灰色を呈する固い部分も見られる。埋土は黒褐色砂泥で炭片を多く含む。遺物の時期はXIV期とみられる。

(4) 2区の検出遺構

1) 第3-2面の検出遺構 (図版3)

古墳時代の遺構は調査区中央部で検出した。落込み状遺構がある。

落込み981 2区中央部で検出した平面形が不定形の落込み状遺構である。北側と南側は攪乱を受ける。検出面での規模は、東西6.4m、南北4.2mある。底面には凹凸があり、深さ0.1～0.2mある。埋土は黒褐色砂泥である。古墳時代初期の遺物が出土した。

落込み982 2区中央部で検出した平面形が不定形の落込み状遺構である。攪乱が著しく北辺と西辺の一部のみを検出した。検出面での規模は、東西2.9m、南北7.3mある。底面には凹凸があり、深さ0.1～0.4mある。埋土は黒褐色砂泥である。古墳時代初期の遺物が出土した。

2) 第2面の検出遺構 (図版7・34)

調査区東端を除くほぼ全域で、平安時代前期から後期前半の遺構を検出した。遺構には、路面・側溝・溝・土坑・ピットなどがある。

路面900C (図版34、図32) 2区西端で検出した南北方向を示す礫敷き硬化面である。地山の直上に径約0.1mの礫を一面にやや粗く敷き固める。北側・南側は調査区外へ延び、西側は調査区外に広がる。中央部は井戸767および攪乱によって削平を受ける。検出した範囲は、南北約13.3m、東西約3.5mである。礫敷き上面の標高は北側35.85m、南側35.80mで、若干南側に下がる。遺物の時期はI期に属する。

土取穴群 (図版35) 2区中央部で検出した土坑群である。北側で土坑846・844・863・854・822・871の北群を検出した。間隔は不定で、接したものも見られる。北群の約1.0m南側で、土坑692・839A・839B・839Cの中群を検出した。中群は東西に連続する。中群の約2.0m南側で、土坑858・879・864・816・840・817・866の南群を検出した。間隔は不定で、連続したものも見られる。

土坑の平面形は、楕円形・不定形を呈し、大きさにもばらつきがある。周囲に攪乱が少なく残存状況が良い土坑692・858は楕円形を呈し、規模は長径約2.5m、短径約2.0mである。深さは当時の地表面から1.0m程度と推定できる。底面はやや凹凸があり、壁面はオーバーハングしながら立ち上がり、壁面に鋤の痕跡が見られる。形態などは1区北側の土坑群と同様であるが、やや小型である。底面の標高は多少高低差はあるが、35.5m前後で、地山の粘土層の下面と対応する。粘土を採掘した土取穴と考えられる。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色砂泥を主体とした土層である。遺物の時期はII期中段階に属する。

土坑908 2区西部で検出した土坑である。西側は土坑911により攪乱を受ける。検出面での規模は、幅0.6～0.8m、長さ約2.0m、深さ約0.3mある。壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦である。底面の標高は35.64mである。埋土は黒褐色砂泥である。遺物の時期はV期中段階に属する。

溝706 2区中央部北辺で検出した東西方向を示す溝である。東側・西側および、中間も部分的に攪乱を受ける。検出面での規模は、幅0.2～0.5m、長さ約28.0m、深さ約0.1mある。壁はなだら



图32 路面900C平面图 (1 : 60)

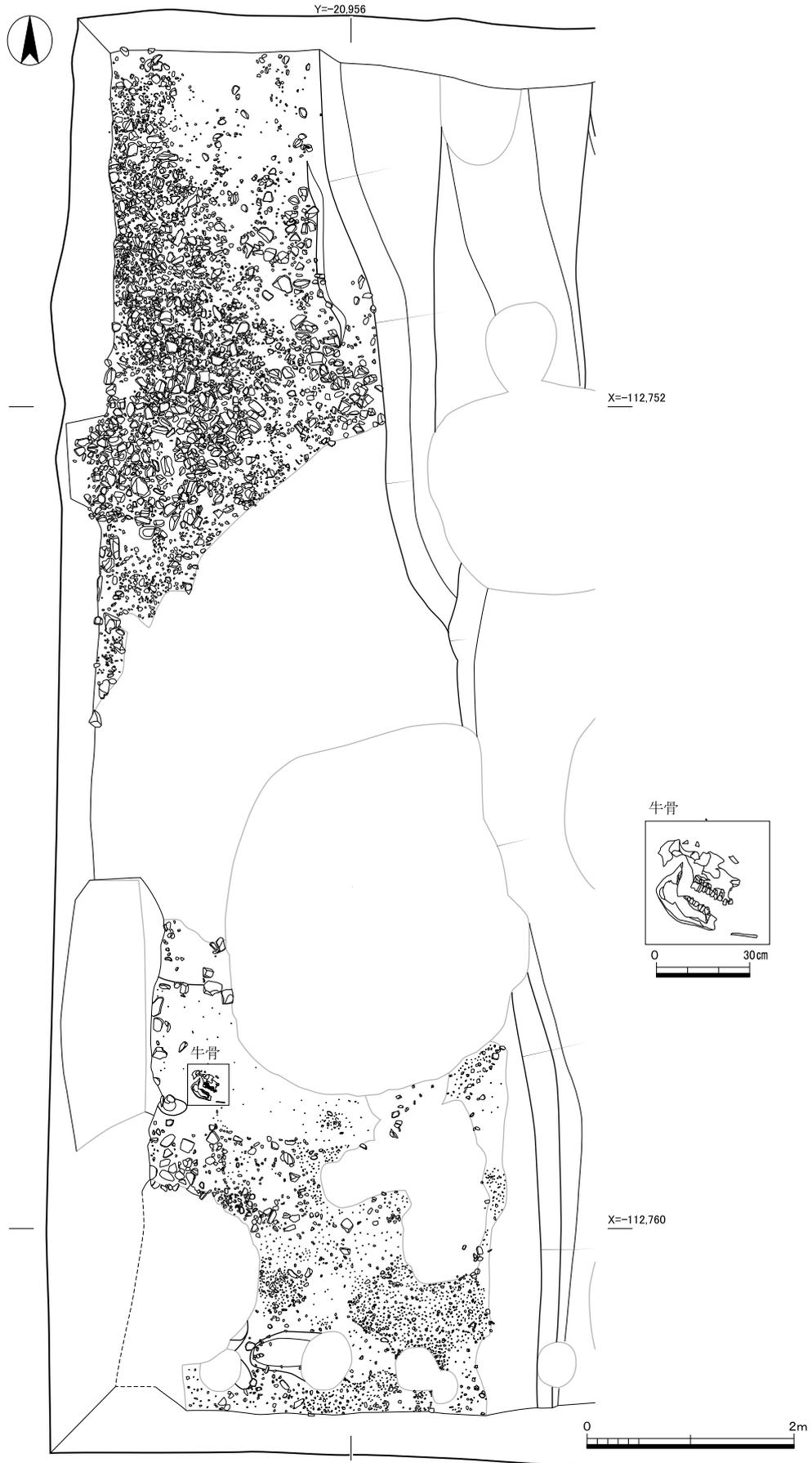
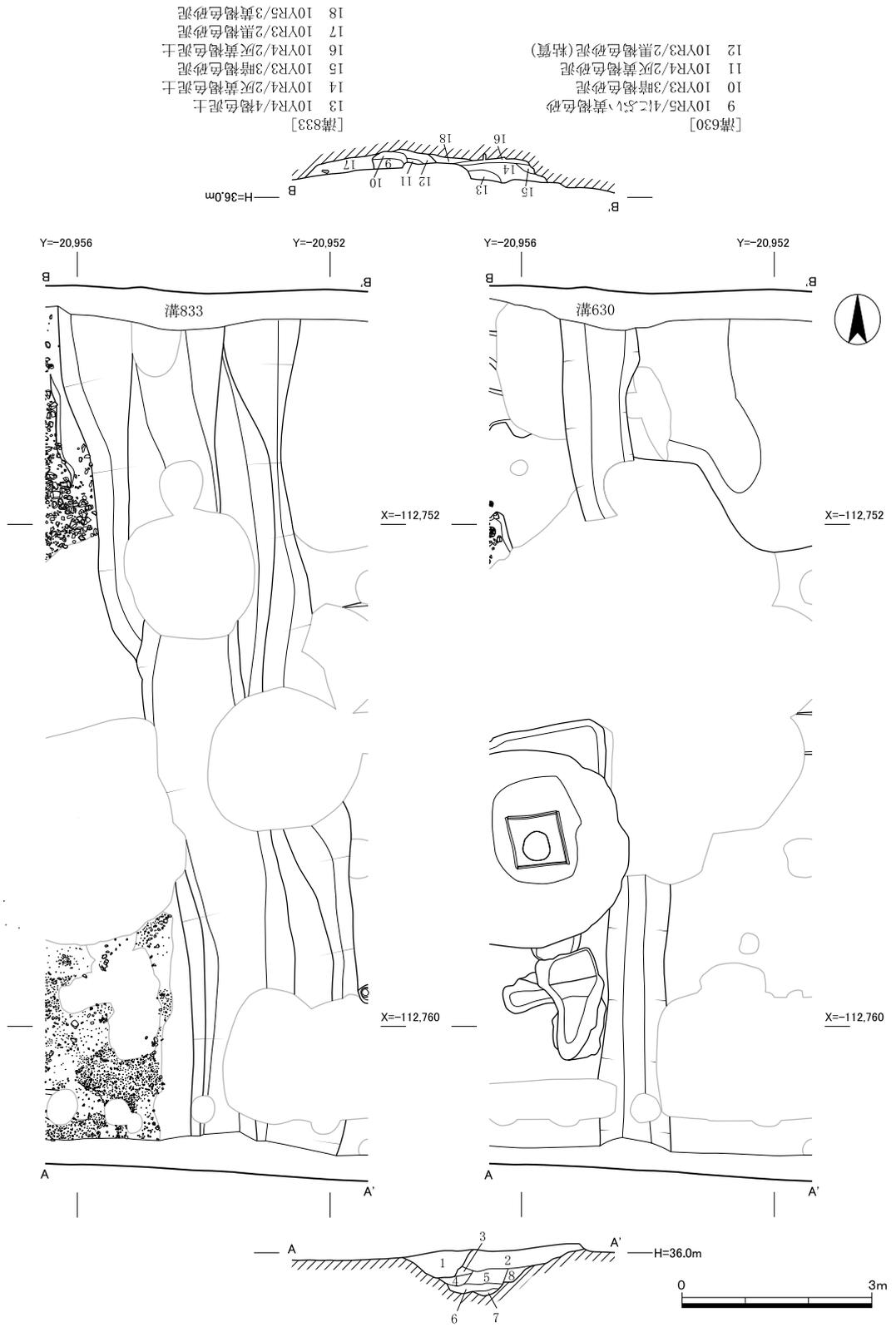
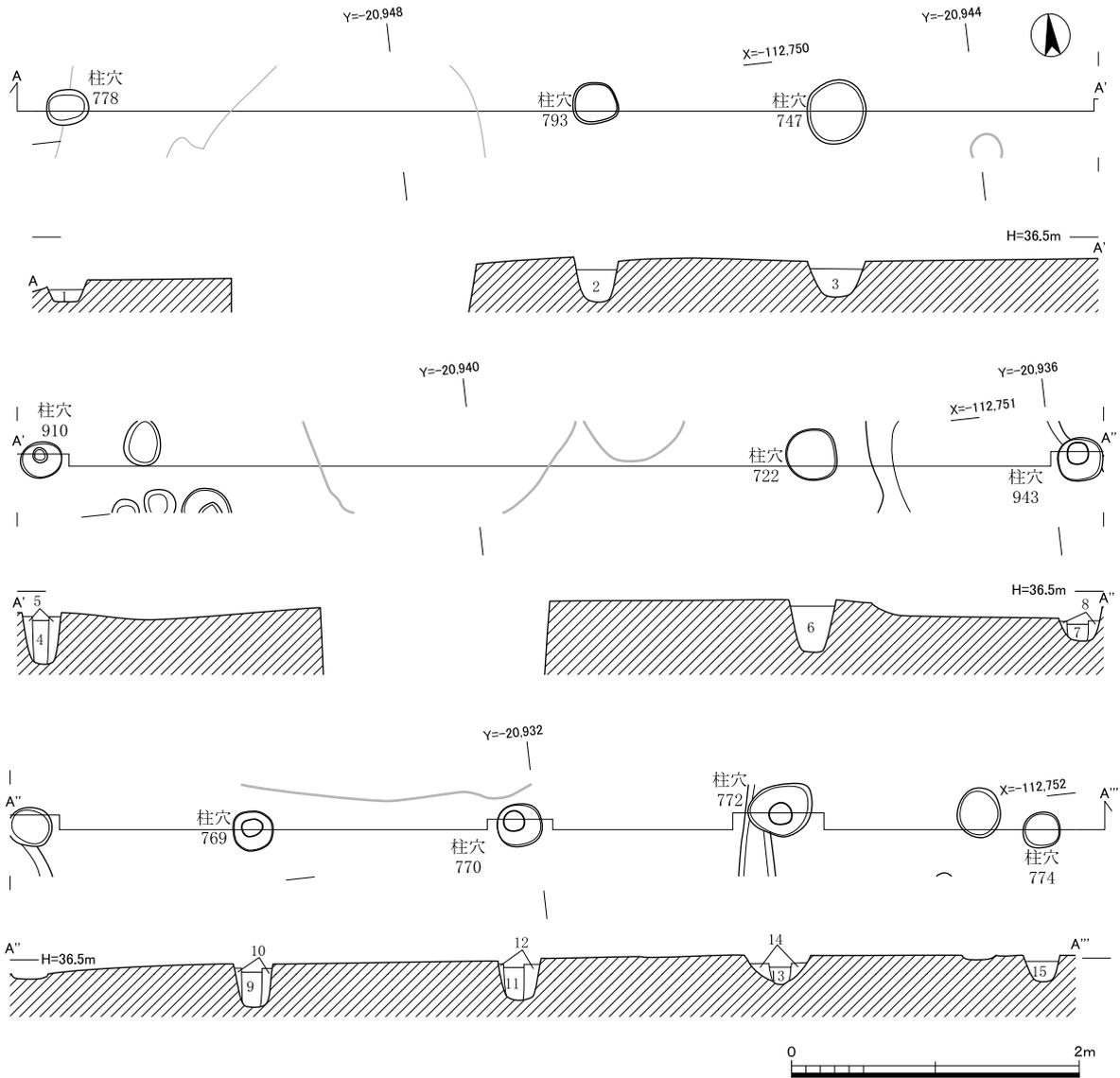


图33 路面900B平面图 (1 : 60)



- | | |
|--|-------------------------------------|
| [溝630] | 4 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(堅く締まる) |
| 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径10cm以下中量混 | 5 10YR6/2~6/4にぶい黄褐色粘土、焼土混 |
| [溝833] | 6 10YR4/2灰黄褐色粘土、礫径0.5cm以下ごく少量混、炭混 |
| 2 10YR3/3暗褐色砂泥(堅く締まる)、礫径4cm以下少量混、炭・焼土混 | 7 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径6cm以下少量混 |
| 3 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥、礫径2cm以下ごく少量混、炭混 | 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥(粘質)、礫径2cm以下ごく少量混、炭混 |

図34 溝833・630実測図(1:100)



- | | | |
|-------------------|---------------------------------|--------------------------------|
| [柱穴778] | [柱穴722] | [柱穴770] |
| 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | 6 10YR3/2黒褐色砂泥 | 11 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR3/2黒褐色砂泥混 |
| [柱穴793] | [柱穴943] | 12 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 7 10YR3/1黒褐色砂泥 | [柱穴772] |
| [柱穴747] | 8 10YR3/2黒褐色砂泥 | 13 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 3 10YR3/2黒褐色砂泥 | [柱穴769] | 14 10YR3/3暗褐色砂泥 |
| [柱穴910] | 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、10YR3/2黒褐色砂泥混 | [柱穴774] |
| 4 7.5YR3/1黒褐色砂泥 | 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 5 7.5YR3/2黒褐色砂泥 | | |

図35 柱列778実測図 (1 : 50)

かに傾斜し、底部は平坦で、断面形はU字形を呈する。底面の標高は東側で36.4m、西側で36.03mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。遺物の時期はV期中段階に属する。

柱列778(図35) 2区西部で検出した東西方向の柱列である。東側は攪乱を受ける。10基の柱穴からなり、約22m分を検出した。柱穴の径は0.4~0.5m、深さ0.1~0.3mある。柱間は1.7~1.9mある。東側では、溝706の北約1.0mに位置し、溝と平行することから、区画に関連する東西方向の塀と考えられる。

路面900B(図版42、図33) 2区西端で検出した南北方向を示す礫敷き硬化面で、路面900Cの

上に位置する。厚さ約0.15mの褐灰色砂泥の堆積があり、上面に径約0.05mの礫を一面に敷き固める。遺物の時期はV期新段階に属する。南部の路面上には、牛骨が散在していた。

溝833 (図34) 2区西部で検出した南北溝である。北側・南側は調査区外へ広がる。上部は溝630により攪乱を受ける。検出面での規模は、幅2.55～3.80m、深さ0.46～0.80mある。壁面はなだらかに傾斜し、底面はやや凹凸があり、断面形は逆台形を呈する。底面の標高は北端が35.25m、南端が36.30mあり、やや南に下がる。方位は北で約6°西へ振れる。埋土は黒褐色粘質土と灰黄褐色粘質土を主体とする層が堆積する。溝内の堆積状況から造り替えの痕跡がみられることから、路面900B、さらに後述する路面900Aに伴う東側溝とみられる。遺物の時期はV期新～VI期古段階に属する。

整地層 (図版40) 2区のほぼ全域で検出した最勝光院に先行する盛土および整地土である。東側が厚く、西側で薄くなる傾向がある。整地に際しては、一定の区画を設定した上で粘質土や砂など様々な質の土砂を用いて盛土を行う。断面観察では、層内に平坦面がみられることから、段階的に盛土および整地を行ったとみられる。遺物の時期はV期新段階に属する。

3) 第1～3面の検出遺構 (図版10・36)

平安時代後期後半の最勝光院に関連する遺構を検出した。個別の遺構には路面・側溝・溝・土坑・ピットなどがある。最勝光院造営時の整地層は、ほぼ調査区の全域に広がっている。

路面900A 2区西端で検出した南北方向を示す礫敷き硬化面である。北側・南側は調査区外へ延び、西側は調査区外に広がる。中央部は井戸767および攪乱によって削平を受ける。検出した範囲は、路面900B面と同一である。上面の礫は粗く敷く。厚さ約0.2m内に灰褐色から黄褐色の泥砂および粗砂が6層互層状に重なる。窪んだ部分に礫を多く含んだ黒褐色の泥砂が堆積する箇所を数箇所検出した。路面補修の跡と考えられる。礫敷き上面の標高は北側35.85m、南側35.80mで、若干南側に下がる。遺物の時期はVI期古段階に属する。

溝880 (図版42) 2区拡張区で検出した東西方向を示す溝である。西側・東側は調査区外へ延びる。検出面での規模は、幅約0.45m、深さ約0.48mある。壁はなだらかに傾斜し、底部は平坦で、断面形はU字形を呈する。底面の標高は36.52mである。方位はほぼ真東西方向である。埋土は灰黄褐色砂泥である。遺物の時期はVI期古段階に属する。

溝905 2区中央部で検出した東西方向を示す溝である。東側・西側・間も大きく攪乱を受け、3箇所検出したにとどまる。検出面での規模は、幅0.6～0.8m、長さ約6.5m、深さ約0.24mある。壁は垂直、底面は平坦で、断面形はコ字形を呈する。底面の標高は東側で35.9m、西側で35.9mである。方向は西で約3°北へ振れる。埋土は黒褐色砂泥である。遺物の時期はVI期古段階に属する。

4) 第1～2面の検出遺構 (図版13・36)

鎌倉時代から室町時代の遺構は、おもに調査区西部で検出した。鎌倉時代の井戸、室町時代の路面・側溝などがある。

井戸767 (図版44) 2区西部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。東側上面は溝630によ

り攪乱を受ける。検出面での掘形は、南北約3.1m、東西約2.9mの楕円形で、深さ約3.0mある。井戸枠は土圧により四方から内側に著しく倒れ込んでいるが、内法一辺約0.8mで、残存高は下端から2.03mである。横棧は幅0.1m・厚さ0.03m・長さ0.76～0.85mで、2段残存していた。1段目は井戸底に据え、約0.5m上に2段目がある。横棧の上下には支柱はない。縦板は幅約0.1mで、各面7～8枚用い、重ね目の外側に板材を重ねる箇所もある。底部中央に水溜めとして径0.43m・深さ0.22mの円形曲物を据える。枠内埋土は灰色泥土で、掘形埋土はオリブ黒色粘質土である。枠内埋土出土遺物の時期はVI期古段階に属する。

溝630(図34) 2区西部で検出した南北方向を示す溝である。北側・南側は調査区外へ広がる。検出面での規模は、幅約1.2m、深さ0.45～0.55mある。壁は強く傾斜し、底部は平坦で、断面形はU字形を呈する。底面の標高は北端が35.25m、南端が36.6mで、やや南側へ下がる。方位は北で約2°西に振れる。埋土はにぶい黄褐色砂泥が主体の土層である。西側の路面821の東側溝とみられる。遺物の時期はX期に属する。

路面821 2区西端で検出した南北方向を示す礫敷き硬化面である。北側・南側は調査区外へ延び、西側は調査区外に広がる。礫敷き上面の標高は、北で35.83m、南で35.90mである。溝630が東側溝であると考えられる。礫敷き上面で出土した遺物はIX期古段階に属する。

5) 第1-1面の検出遺構 (図版16・36)

江戸時代以降に属する遺構は、調査区の西部に集中している。検出した遺構には柱列・土坑・井戸・溝・ピットなどがある。遺物の時期はXIV期とみられる。

柱列754(図36) 2区西側で検出した東西方向の柱列である。西側・東側ともに攪乱を受け、7基分の柱穴を検出した。柱穴の径は0.3～0.5m、深さ0.2～0.4mある。柱穴間の距離は1.6～1.8mある。柱穴の底部には根石が据え付けられる。柱穴の間隔にばらつきがあるので造り替えがあった

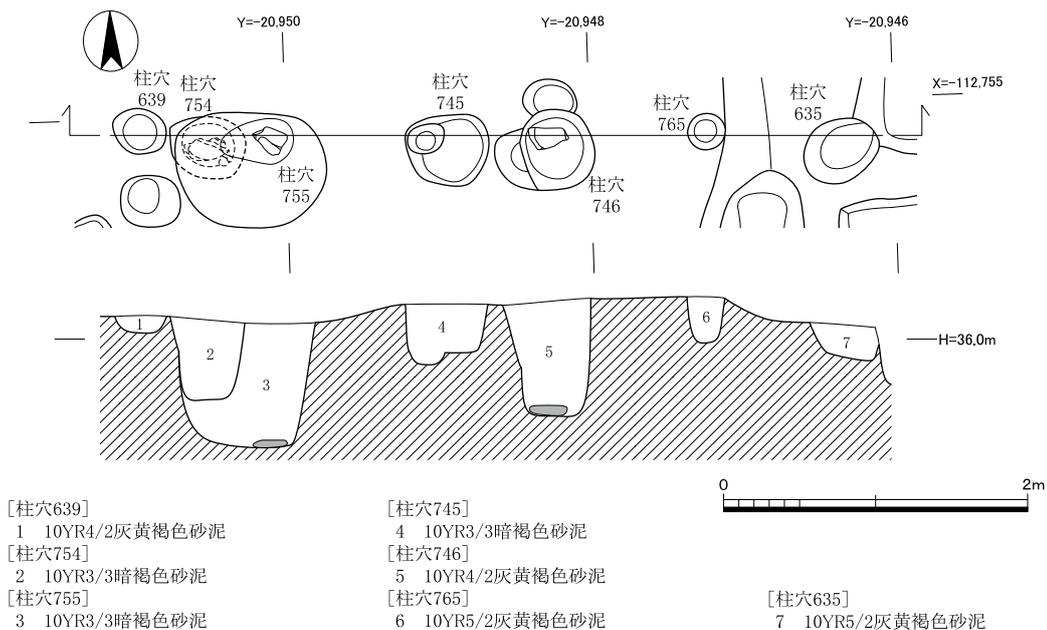


図36 柱列754実測図 (1:50)

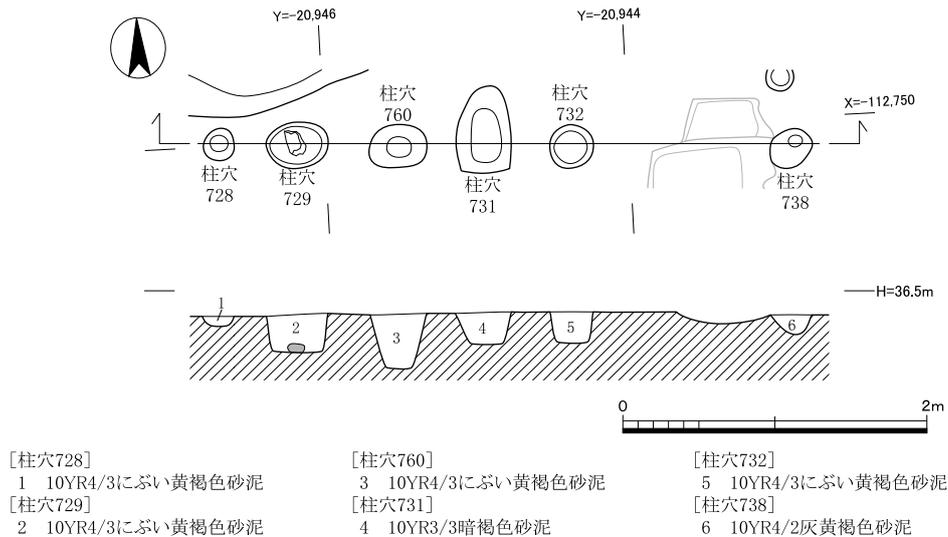


図37 柱列782実測図 (1 : 50)

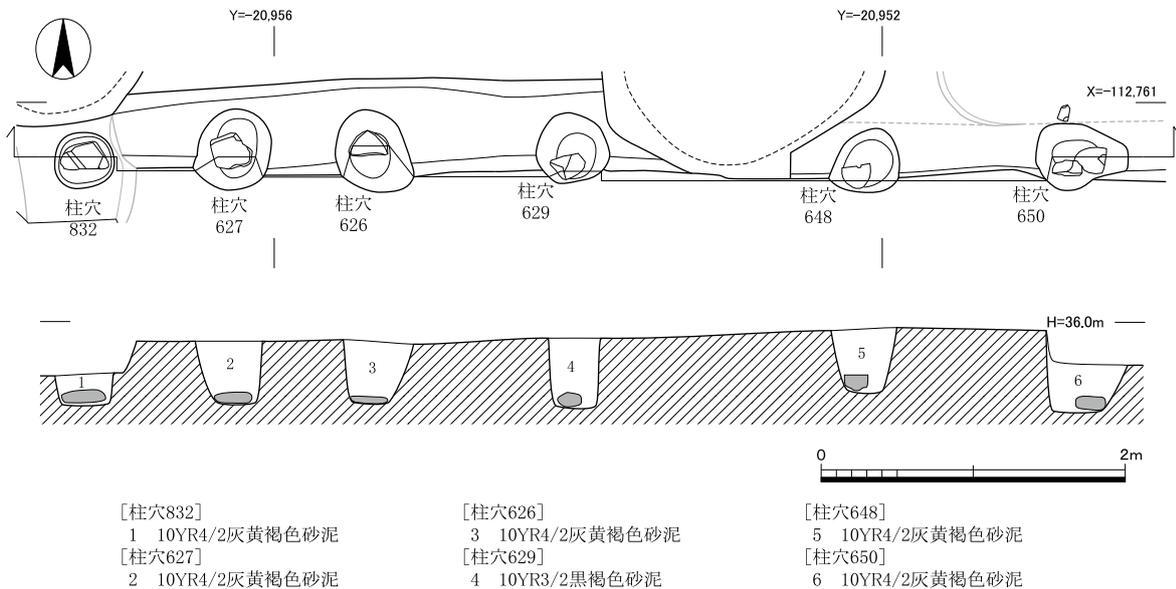


図38 柱列832実測図 (1 : 50)

とみられる。東西方向の塀とみられる。

柱列782 (図37) 2区西側で検出した東西方向の柱列である。西側・東側ともに攪乱を受け、6基分の柱穴を検出した。柱穴の径は0.2~0.4m、深さ0.1~0.4mある。西から2番目の柱穴底部には根石が据え付けられる。柱穴間の距離は0.5~0.7mある。柱穴の間隔にばらつきがあるので造り替えがあったとみられる。東西方向の塀とみられる。

柱列832 (図38) 2区西端で検出した東西方向の柱列である。西側は調査区外に延び、6基分の柱穴を検出した。柱穴の径は0.5~0.7m、深さ0.4~0.6mある。柱穴間の距離は1.1~1.9mある。すべての柱穴の底部には根石が据え付けられる。西から5番目には石臼片が使用される。東西方向の建物の北辺もしくは東西方向の塀とみられる。

井戸679 2区中央部で検出した井戸である。掘形の平面形は円形を呈し、径約2.2mある。掘

形埋土は灰黄褐色砂泥である。出土遺物には土師器・土師質土器・施釉陶器・染付磁器・磁器などがある。土瓶体部(285)に「會員 □川新太郎」と記銘されている。

井戸687 (写真11) 2区中部で検出した石組の井戸である。検出面での掘形は、径約2.1mの円形で、深さ約3.6mある。井筒は河原石を小口積みして構築する。内法約1.2mある。井筒内の埋土は暗褐色砂泥から泥土で、掘形埋土は褐色砂



写真11 井戸687

泥である。出土遺物には土師器・土師質土器・瓦質土製品・施釉陶器・染付磁器・磁器などがある。土瓶蓋(277)に「一橋同窓会」、土瓶体部(279)には「京都市一橋校」と記銘されている。

井戸703 2区中央部で検出した井戸である。検出面での掘形は、円形を呈し、径約1.7mある。井筒は漆喰造りで径約1.0mの円筒形である。掘形埋土は灰黄褐色砂泥である。出土遺物には土師器・施釉陶器・染付磁器・磁器などがある。

土坑704 2区東部で検出した土坑である。検出面での掘形は、一辺約1.4mの方形で、深さ約1.3mある。底部には瓦器鉢が据え付けられていた。埋土は褐灰色砂泥である。便所の可能性がある。出土遺物には土師器・瓦質土製品・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・磁器がある。

土坑617 2区西部で検出した土坑である。検出面での掘形は、円形を呈し、径1.6m、深さ約0.7mある。底部は平坦である。掘形埋土は灰黄褐色砂泥である。出土遺物には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器がある。

土坑681 2区西部で検出した土坑である。検出面での掘形は、円形を呈し、径約2.7m、深さ約1.1mある。底部は平坦である。掘形埋土は灰黄褐色砂泥である。出土遺物には土師器・瓦器・焼締陶器がある。

註

- 1) 各遺構および出土遺物の時期判定は、京都I期～XIV期編年案に準拠した。小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

1区・2区併せて遺物は遺物整理用コンテナに219箱出土した。出土遺物には、土器類・瓦類・銭貨・金属製品・木製品・石製品・ガラス製品などの種類がある。出土遺物の約7割強は土器類が占め、次いで木製品が1割強、瓦類は1割弱と少なかった。その他の種類の遺物はさらに少ない。

調査では、第1面～第3面のそれぞれの遺構から遺物が出土したが、遺構相互の重複が激しいため、新しい時期の遺構埋土・遺物包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。

以下では、時代の古いものから順に、遺物の概要を述べる。個々の遺物の詳細については、遺物一覧表（観察表1～26）に掲載した。

(2) 土器類

1) 古墳時代

古墳時代の遺物は、竪穴住居・溝・土坑・ピット・遺物包含層から多数出土した。

竪穴住居314（図版45、図39、観察表1）1はいわゆる二重口縁壺の口縁部で体部は欠損する。

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
古墳時代	土師器		土師器62点		
奈良時代	土師器、須恵器、瓦		土師器1点、瓦1点		
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、 緑釉陶器、白色土器、黒色 土器、瓦器、山茶椀、輸入 陶磁器、瓦類、金属製品、 木製品、石製品、獣骨		土師器131点、須恵器18点、灰 釉陶器4点、緑釉陶器3点、白 色土器1点、黒色土器7点、瓦 器12点、山茶椀1点、輸入陶磁 器19点、瓦23点、金属製品1点、 木製品11点、石製品1点		
鎌倉時代 ・室町時代	土師器、須恵器、瓦器、輸 入陶磁器、瓦類、金属製品、 木製品、石製品		土師器4点、焼締陶器1点、瓦 器3点、輸入陶磁器1点、瓦3 点		
江戸時代以降	土師器、軟質施釉陶器、瓦 器、土師質土器、輸入陶磁 器、国産磁器、国産陶器、 土製品、瓦類、銭貨、金属 製品、木製品、石製品、ガ ラス製品		土師器18点、軟質施釉陶器1点、 焼締陶器1点、瓦器2点、土師 質土器7点、土製品1点、輸入 磁器1点、国産磁器11点、国産 陶器15点、銭貨9点、金属製品 6点、木製品19点、石製品13点、 ガラス製品3点		
合 計		239箱	403点 (34箱)	1箱	204箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より20箱多くなっている。

器壁は厚く、口径26.4cmの大型壺である。外反させた口縁部に粘土を足して二重口縁とする。胎土は砂粒や小石を多く含む。色調は浅黄橙色を呈する。2は甕の底部である。外面はオサエ、内面は不定方向のハケメ調整を施す。底部は中央がやや窪む。色調はにぶい黄褐色を呈する。

豎穴住居321（図版45、図40、観察表1）

3～5は壺である。3は細頸壺の口縁部で体部は欠損する。口頸部は直線的に斜め上方

に延び、端部は丸くおさめる。端部はナデで調整した後、口縁部内外面ともタテ方向のヘラミガキを施す。色調はにぶい赤褐色を呈する。4は細頸壺である。口頸部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。体部は中位に最大径を持ち、外面はヨコ方向のヘラミガキののち下半部はタテ方向のヘラミガキ、上半部はタテ方向のヘラミガキをまばらに施す。口頸部はタテ方向のヘラミガキで仕上げる。口頸部の内面下半部もタテ方向のヘラミガキを施す。色調は橙色を呈する。完形である。5は丸い体部の壺で肩部から上を欠損する。上半部はヨコ方向の粗いハケメを施し、下半部はタテ方向のヘラミガキを施す。内面上半はヨコ方向のハケメを施す。粘土の接合痕跡が明瞭に残る。色調は黒褐色を呈する。6は受口状口縁の甕である。口縁部は二段に折れ、外側に面をも

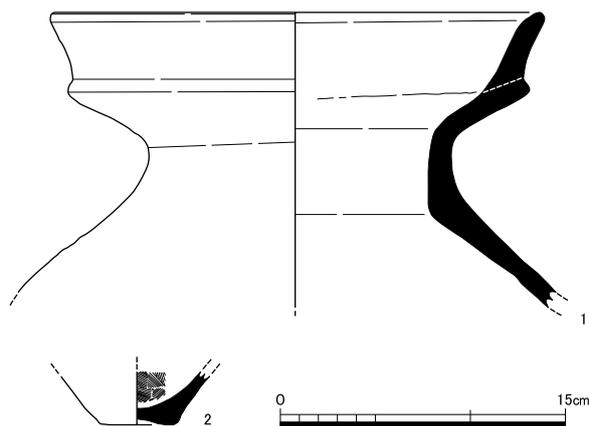


図39 豎穴住居314出土土器実測図（1：4）

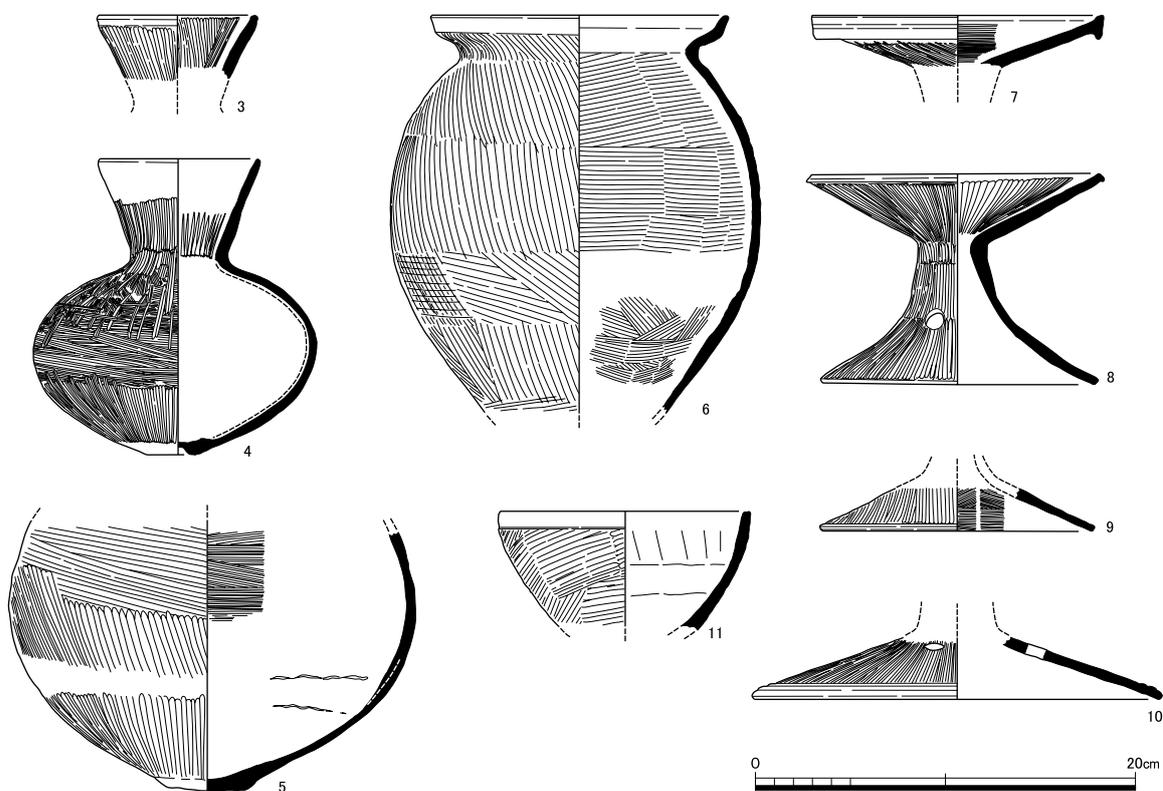


図40 豎穴住居321出土土器実測図（1：4）

つ。口縁部の内外面はヨコ方向のナデで仕上げる。体部外面は粗いタテ方向のハケメで調整し、下半は不定方向のハケメを施す。体部内面はヨコ方向のハケメで調整を施す。体部の中位には粘土の接合痕跡が明瞭に残る。色調は灰褐色を呈する。近江型甕の口縁部を持つ在地の土器とみられる。7・8は器台である。7は受部で脚部分を欠損する。口縁端部を上下に拡張し、外面に2条の凹線を巡らせる。受部外面はヨコ方向のナデののちタテ方向のヘラミガキを施す。受部上面はヨコ方向のヘラミガキを施す。色調は灰白色を呈する。8は直線的に開く受部をもつ。受部が脚部から緩やかに開く。透孔は3方に開ける。受部内外面と脚部外面は丁寧な放射状のヘラミガキを施す、脚部内面はオサエののちヨコ方向のナデを施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。完形である。9・10は高杯の裾部で脚部と杯部を欠損する。9は外面をタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向の密なハケメで調整する。端部はヨコ方向のナデで仕上げる。色調は橙色を呈する。10の裾部は直線的に広がる。裾部の先端に三条の凹線を巡らせ、端部は丸くおさめる。裾部の上端部には円形透かしを3方に開ける。外面はタテ方向のヘラミガキを施す。内面は剥離が著しく調整は不明である。端部はヨコ方向のナデで仕上げる。円形透かしは3方にあるとみられる。外面にはわずかに赤色顔料の痕跡が認められる。内面に黒斑がみられる。色調はにぶい黄橙色を呈する。11は鉢である。底部を欠損する。ハの字状の鉢とみられる。外面はナナメ方向のタタキを施す。内面上半部はタテ方向のケズリ痕が残る。口縁部はヨコ方向のナデで仕上げる。体部には粘土接合痕跡が明瞭に残る。色調は灰褐色を呈する。4・6・8は竪穴住居内の貯蔵穴512から出土した。

竪穴住居 347 (図41、観察表1) 12・13は甕の底部である。12の外面はナナメ方向のタタキを施す。内面はナデ調整を施す。底部は平坦である。色調はにぶい橙色を呈する。13の外面はタテ方向のヘラミガキ調整を施す。内面は密なハケメ調整を施す。色調は褐色を呈する。14は壺もしくは甕の底部である。外面はタテ方向のハケメ調整を施す。内面は不定方向の密なハケメ調整を施す。底部は平坦である。色調は褐色を呈する。

竪穴住居 330 (図41、観察表1) 15は器台の脚部で裾部と杯部を欠損する。脚部は下外方に直線的に開く。外面は不定方向のミガキ調整を施す。内面はオサエの痕跡を残す。透孔は3方に開ける。色調は橙色を呈する。

竪穴住居 412 (図41、観察表1) 16は壺の口縁部で頸部以下を欠損する。口縁端部を斜め下方

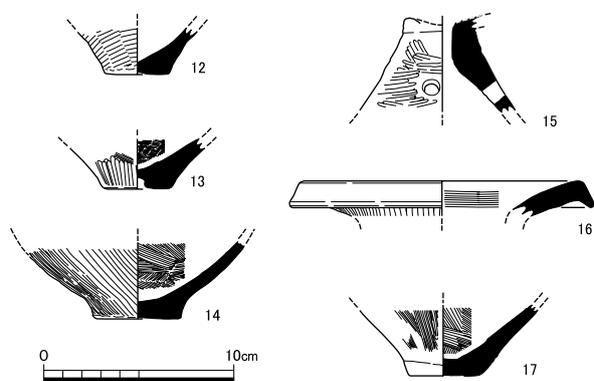


図41 竪穴住居 347・330・412出土土器実測図 (1:4)

に延ばして平坦面とする。口縁部内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。口縁部外面はヨコ方向のナデを施す。口縁部下方はタテ方向のハケメ調整を施す。色調はにぶい黄褐色を呈する。17は甕の底部である。外面はタテ方向のハケメを施す。内面は不定方向のハケメ調整を施す。底部は平坦である。色調はにぶい黄褐色を呈する。ともに竪穴住居内の土坑539から出土した。

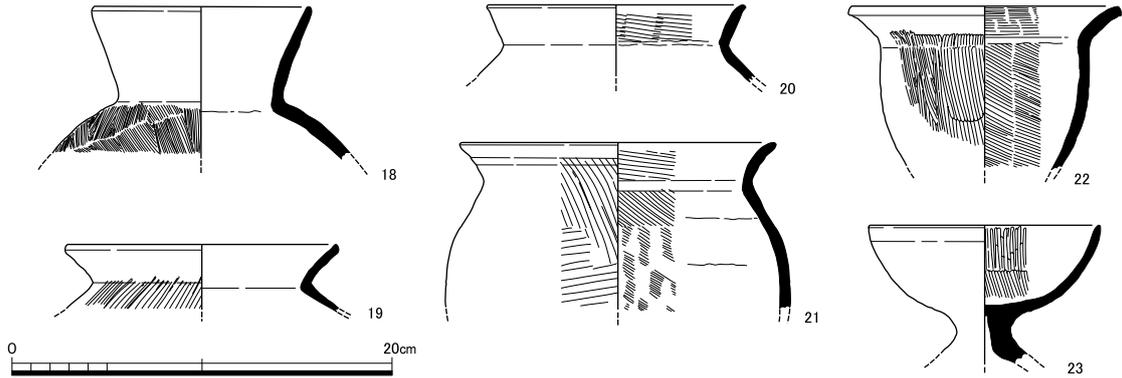


図42 土坑324出土土器実測図（1：4）

土坑324（図版45、図42、観察表2）18は直口壺の肩部から口頸部で体部の過半を欠損する。口頸部は直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。体部外面はヨコ方向のナデののちタテ方向のハケメ調整を施す。内面はオサエのみである。口縁部内外面ともタテ方向のハケメ調整ののちヨコ方向のナデで仕上げる。頸部には粘土接合痕跡が明瞭に残る。色調はにぶい橙色を呈する。19～22は甕である。19・20は甕の口縁部で体部を欠損する。19はくの字に外反する口縁をもつ。外面体部はナナメ方向のタタキを施す。体部内面はヘラケズリで薄く仕上げる。庄内式甕で河内からの搬入品である。20～22の口縁部は緩やかに外反する。21の体部外面はタテ方向のタタキののちヨコ方向のハケメ調整を行うが、頸部付近にはタタキメが残る。内面には当て具の痕跡が残る。体部は粘土接合痕跡が明瞭に残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。在地産の甕とみられる。22の口縁部外面はヨコ方向のナデで仕上げ、内面はヨコ方向のハケメ調整を施す。尖り底とみられ、体部外面はタテ方向のハケメ調整を施す。色調はにぶい褐色を呈する。23は高杯である。杯部は椀形を呈する。杯部内面はタテ方向のヘラミガキを施す。外面の調整は不明である。色調はにぶい橙色を呈する。

第2面掘下げ（図版46、図43、観察表3）24は壺である。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、体部最大径は上方にある。口縁部は斜め上方に延び、端部は丸くおさめる。口縁部外面にはヨコ方向にナデを施すが、ほかの部分は磨滅が著しく、調整は不明である。色調はにぶい黄橙色を呈する。完形である。25は壺の底部である。内外面ともに磨滅が著しいため調整は不明である。色調は灰白色を呈する。26は甕の肩部から口頸部で体部の過半を欠損する。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。体部外面はタテ方向のハケメ調整を行う。内面の調整は器壁剥離により不明である。色調は灰白色を呈する。27は器台の受部で脚部以下を欠損する。口縁端部を下に延ばして平坦面とし、四条の凹線を巡らせる。内

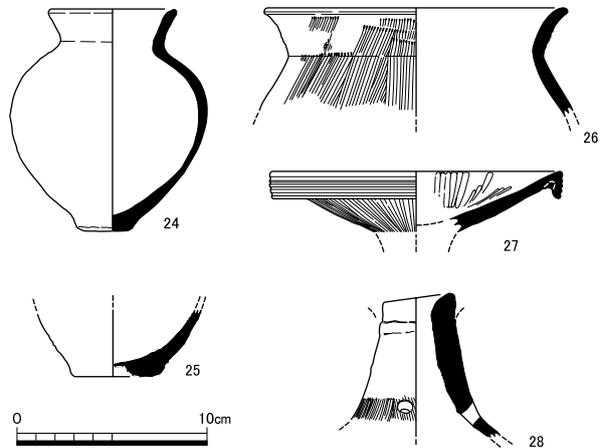


図43 第2面掘下げ出土土器実測図（1：4）

面はタテ方向のヘラミガキを施す。外面にもタテ方向のヘラミガキを施す。色調はにぶい橙色を呈する。28は高杯の脚部で裾端部と杯部を欠損する。裾部は緩やかに外反して開く。円形の透孔は3方とみられる。裾部外面はタテ方向のヘラミガキ調整を施す。色調は灰白色を呈する。

第3面掘下げ（図版46、図44、観察表3） 29～32は壺の頸部から口縁部で体部を欠損する。29・30の口縁部から頸部は外傾する。29は口縁部内外面ともヨコ方向のナデで仕上げる。色調は浅黄橙色を呈する。30は口縁部内外面ともタテ方向のハケメ調整ののちヨコ方向のヘラミガキで仕上げる。頸部には粘土接合痕跡が明瞭に残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。31は口縁端部を垂下させ平坦面とし、2条の凹線を巡らせる。色調は浅黄橙色を呈する。32は装飾をもつ壺である。口縁端部を垂下させ平坦面とし、中段には2条の凹線を巡らせ、円形浮文を貼り付け、上端には刺突文を施す。口縁部上面には櫛描きによる波状文を巡らせる。色調は橙色を呈する。33は壺の底部である。外面はタテ方向のヘラミガキを施す。内面の調整は磨滅が著しく不明である。底部はわずかに窪む。色調はにぶい黄橙色を呈する。34・35は甕の頸部から口縁部で体部を欠損する。34は受口状口縁の甕である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。頸部はナナメ方向のハケメ調整を施す。口縁部外面上部から内面にかけてはヨコ方向のナデで仕上げる。色調は橙色を呈する。近江の影響を受けた在地の甕である。35はくの字状口縁の甕である。体部外面はヨコ方向の細いタタキメを施す。色調はにぶい橙色を呈する。庄内式甕を模した在地の甕である。36は甕の底部である。体部外面はナナメ方向のタタキメが残る。底部付近はタテ方向のハケメ調整を施す。内面の調整は不明である。底部は中央が窪む。色調はにぶい褐色を呈する。37は台付き甕の脚部と見られる。裾部はハの字状に広がる。内外面ともにタテ方向のヘラミガキを施す。色調はにぶ

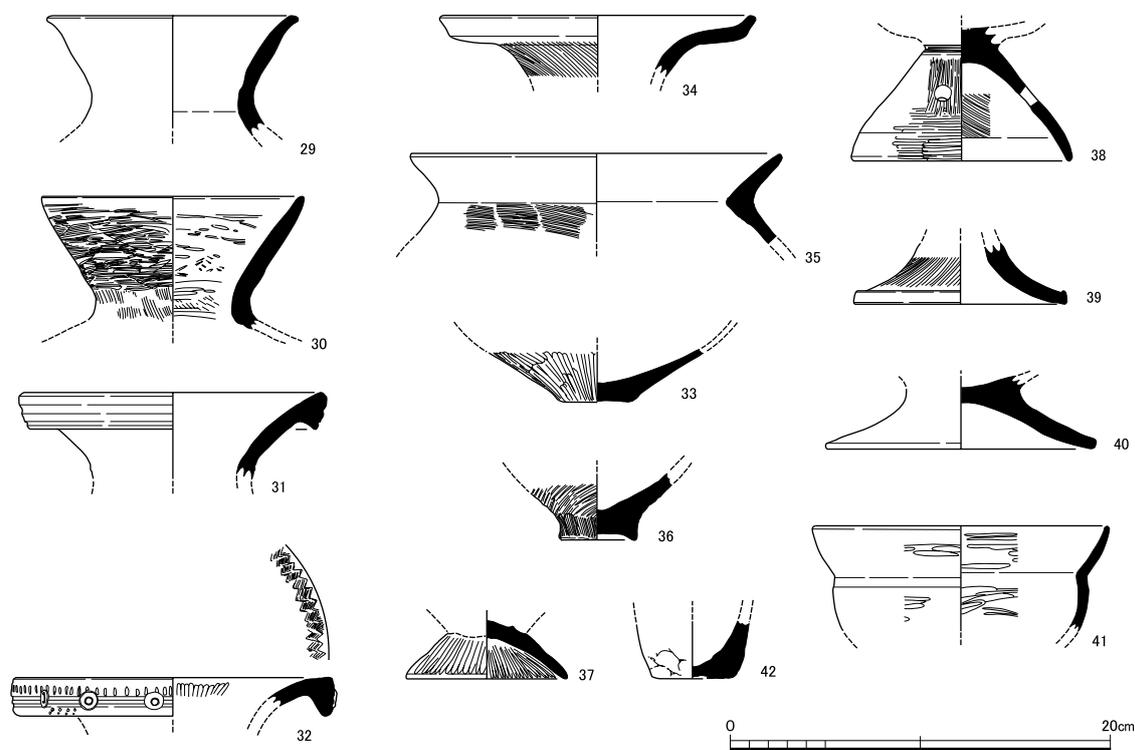


図44 第3面掘下げ出土土器実測図（1：4）

い橙色を呈する。38・39は高杯の脚部で杯部を欠損する。38の外面にはタテ方向のヘラミガキを施す。脚部内面は不定方向のハケメを施す。内面裾部はヨコナデを施す。透孔は3方に開ける。色調は浅黄橙色を呈する。39の裾部外面はナナメ方向のハケメ調整を施す。裾端部から内面はハケメ調整ののちヨコ方向のナデで仕上げる。色調は灰白色を呈する。40は高杯もしくは器台の脚部とみられる。裾部はハの字状に広がる。外面上部はヨコナデが確認できる。内面はオサエ痕が残る。他の部分は表面剥離が著しく、調整は不明である。色調は橙色を呈する。41は内湾する口縁部をもつ小型の鉢である。口縁部外面と体部外面はヨコ方向のヘラミガキがわずかに認められる。内面はヨコ方向のヘラミガキを施す。色調はにぶい橙色を呈する。42は手捏ね成形の粗製の鉢の底部である。平底でコップ状を呈する。外面はオサエ、体部内面はヨコ方向のナデ、底部はオサエの痕跡が残る。色調は橙色を呈する。

その他の遺構（図版46、図45、観察表4） 43は装飾性に富んだ壺である。頸部から口縁部のみ残存し、体部を欠損する。口縁端部は上下に拡張し、外面の上端に櫛描き波状文を巡らせ、下半にはナナメ方向の列点文を入れ、5個一単位の円形浮文を貼り付ける。口縁下半はタテ方向のヘラミガキ。頸部はタテ方向のヘラミガキののちヨコ方向のヘラミガキで仕上げる。口縁内面は、上端に櫛描き波状文を2段に巡らせる。下部はタテ方向のヘラミガキ。頸部はヨコ方向のヘラミガキで仕上げる。色調は明赤褐色を呈する。土坑487出土。44～48は受口状口縁を呈する在地の甕である。44の口縁部は外反したのちに上方に立ち上がる。口縁部外面と内面はヨコ方向のナデで仕上げる。口縁部外面はナナメ方向の列点文で装飾される。色調は灰白色を呈する。近江型甕に属する。土坑871出土。45は口縁部がやや内傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部外面上部と内面はヨコ方向のナデで仕上げる。体部外面はタテ方向のハケメ調整を施す。外面に煤が多く付着する。色調は浅黄橙色を呈する。近江型甕に属する。土坑858出土。46は口縁部がやや内傾して立ち上がる。口縁部外面と内面はヨコ方向のナデで仕上げる。体部外面はタテ方向のハケメ調整を施す。内面はタテ方向のヘラケズリ痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈する。近江型甕に属する。ピット555出土。47の口縁部はやや内傾して立ち上がる。口縁部外面と内面はヨコ方向のナデで仕上げる。体部外面はタテ方向のハケメ調整を施す。色調は黄灰色を呈する。近江型甕に属する。堅穴住居321炉452出土。48は浅い体部をもつ甕である。口縁部はヨコ方向のナデののち刺突文を巡らす。肩部にも刺突文を巡らす。体部上半はヨコ方向のヘラミガキを施す。下半部は磨滅が著しく調整不明。内面下半部はタテ方向のヘラケズリを施す。色調は橙色を呈する。近江型甕に属する。土坑434出土。49～51はくの字状口縁の甕で体部を欠損する。49・50は体部外面にナナメ方向のタタキメを施す。49の色調は灰黄褐色、50の色調は黒褐色を呈する。河内産の庄内式甕に属する。49はピット479、50はピット370から出土。51の口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。色調は浅黄橙色を呈する。庄内式から布留式へ移行する段階の甕とみられる。土坑395出土。52～54は口縁部が緩やかに外反する甕で体部の下半部を欠損する。52の口縁部はヨコ方向のナデにより外反する。口縁端部は上方につまみ上げる。色調は灰白色を呈する。頸部が締まるため壺の可能性もある。土坑858から出土した。53は体部外面をナナメ方向にタタキメを施す。体部内面はヨコ方

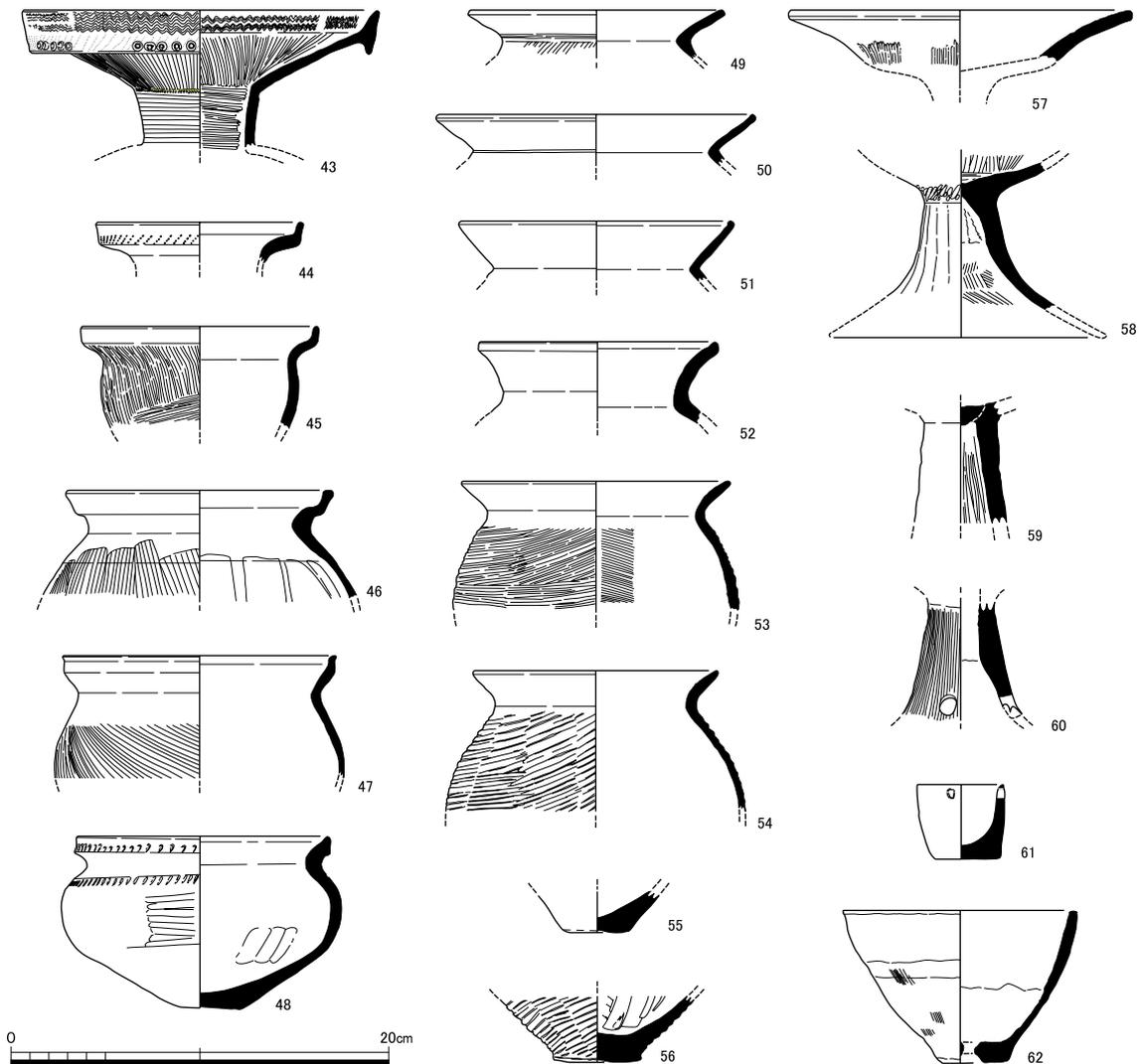


図45 その他の古墳時代遺構出土土器実測図（1：4）

向のハケメを施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。54の体部外面はナナメ方向のタタキで調整する。色調は灰白色を呈する。ともに畿内第V様式的な甕である。ともにピット408から出土。55・56は甕の底部である。56の外面はナナメ方向のタタキを施す。内面はヘラケズリ調整を施す。底部は平坦である。色調は褐灰色を呈する。落込み982出土。55の外面はオサエの痕跡を残す。底部は平坦である。色調は灰白色を呈する。土坑395出土。57・58は高杯である。57は杯部のみで脚部を欠損する。杯部は外反して開く。杯部外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はタテ方向のヘラミガキを施す。粘土繋ぎ目で杯底部と外れている。色調はにぶい橙色を呈する。土坑396出土。58は杯上半部と裾部を欠く。杯部は楕形になるとみられる。杯内面はタテ方向のヘラミガキ調整、内面底部はヨコ方向のヘラミガキを施す。外面は杯部脚部ともにタテ方向のヘラミガキを施す。脚部内面は不定方向のヘラミガキを施す。色調は橙色を呈する。土坑858から出土した。59・60は高杯の脚部で裾部と杯部を欠損する。59の外面は磨滅が著しく、調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈する。土坑240出土。60の外面はタテ方向のハケメ調整を施す。内面はオサエと粗いケズリで調整する。透孔は3方に開ける。色調は明赤褐色を呈する。土坑395出土。61は小型の鉢である。平坦な

底部から体部が垂直気味に上方に立ち上がる。口縁端部下に円形透かしがある。全面に調整オサエ痕が残る。色調は橙色を呈する。ピット475出土。62は甑である。ハの字状の鉢で、底部は焼成前に外側から穿孔する。外面ハケメののち不定方向のナデ調整、内面は不定方向のナデで仕上げる。体部には粘土接合痕跡が明瞭に残る。黒斑が見られる。色調は灰白色を呈する。落込み988出土。

2) 奈良時代・平安時代

奈良時代の遺物は掘立柱建物の柱穴や周辺の土坑292などから少量出土した。

平安時代の遺物は、土坑822・855・863・862・833・682、溝833、濠150、埋納土坑222、ピット291、地業・整地層などから出土した。整地層や地業からの出土土器類は、小片となったものが多い。土器類には土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器などがあり、褐釉陶器・青磁・白磁などの輸入陶磁器もある。

土坑292（図版46、図46、観察表5） 土師器・須恵器が出土している。I期中段階¹⁾に属する。

63は土師器碗Aである。口径13.5cm、深さ3.8cmと深い器形である。外面はナデで仕上げる。摂津からの搬入土器とみられる。

土坑822（図47、観察表5） 土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器が出土している。I期中～新段階に属する。

64は土師器杯Bである。やや丸みを帯びた平底に断面台形の高台を貼り付ける。体部は緩やかに外上方へ開く。体部の内外面ともに不定方向の細かいハケメ調整を施す。I期中段階に属する。65は黒色土器皿Bと考えられる。内側のみに炭素を吸着させたA類である。体部は緩やかに外上方へ開き、端部は外反する。口縁部はナデを施す。体部から口縁部にかけて外面はオサエ成形後に、丁寧なヘラミガキを施す。内面はヨコ方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。I期新段階に属する。66・67は須恵器である。66は壺Gの底部から体部下半片である。体部には数箇所の粘土紐積み上げの痕跡が残る。底部には糸切り痕が残る。断面は黄褐色を呈し、焼成は良好である。67は鉢の体部上半から口縁部である。器壁は薄く、内外面ともに丁寧なナデで仕上げる。口径22.0cm。胎土の色調は黄灰色を呈する。

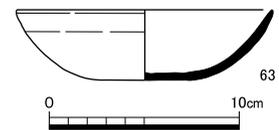


図46 土坑292出土土器実測図（1：4）

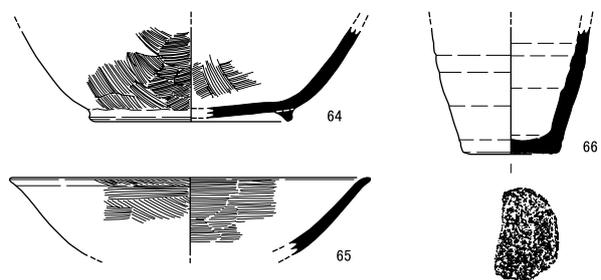


図47 土坑822出土土器実測図（1：4）

土坑855（図48、観察表5） 土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器が出土している。II期中段階に属するが、I期の古い様相の遺物も含まれている。

68は土師器杯Bである。体部外面にヘラケズリを施す。胎土の色調はにぶい橙色を呈する。小片のため、口径は不明である。69は須恵器杯である。端部のみで、高台は不明である。胎土の色調は灰白色を呈する。口径は不

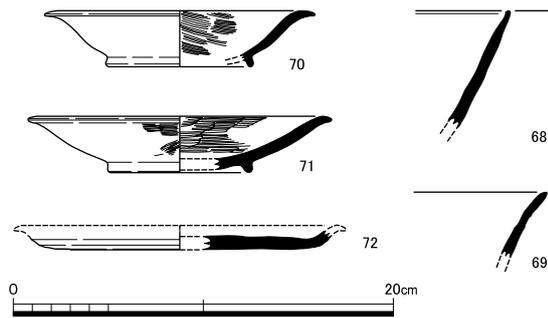


図48 土坑855出土土器実測図（1：4）

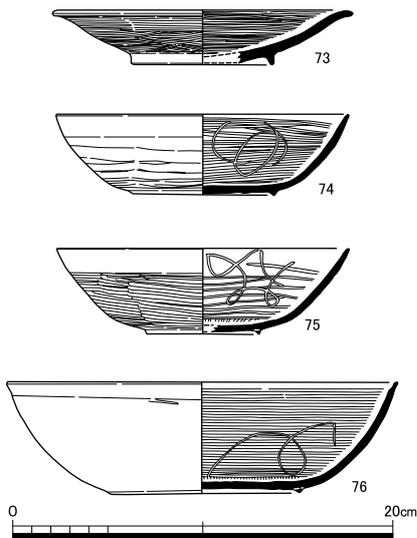


図49 土坑863出土土器実測図（1：4）

明である。70・71は黒色土器の皿Bである。ともに内側だけに炭素を吸着させたA類である。やや丸みを帯びた平底に断面台形の高台を貼り付ける。体部は緩やかに外上方へ開き、端部は外反する。口縁部はナデで仕上げる。底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、丁寧なヘラミガキを施す。内面は底部・体部ともにヨコ方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。70は口径14.2

cm、71は口径16.0cmある。72は緑釉陶器である。足部を欠損しているが、三足盤とみられる。内外面ともヘラミガキを施す。焼成は硬質である。胎土の色調は灰白色を呈する。

土坑863(図版47、図49、観察表5) 土師器・須恵器・黒色土器が出土している。Ⅱ期中段階に属する。

73～76は黒色土器である。すべて内側だけに炭素を吸着させたA類である。73は皿B、74～76は椀Bである。73はやや丸みを帯びた平底に高台を貼り付ける。体部は緩やかに外方へ開き、口縁端部は外反する。口縁部はナデで仕上げる。底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、丁寧なヘラミガキを施す。内面は底部・体部ともにヨコ方向

の丁寧なヘラミガキで仕上げる。高台内にヘラ描きあり。74・75は平底の底部に断面三角形の高台が付く。体部は緩やかに外上方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。底部から体部にかけて外面はオサエ成形後に、ナデを施す。口縁部はナデで仕上げる。底部内面は丁寧なヘラミガキを施す。体部はヨコ方向の丁寧なヘラミガキで仕上げる。なお、体部内面に暗文を施す。76は口径20.6cmと大型である。平底の底部に断面三角形の高台が付く。口縁端部内側に沈線が巡る。内外面ともにヘラミガキを密に施す。体部内面に暗文を施す。

ピット291(図50、観察表6) 土師器・須恵器が出土している。Ⅰ期～Ⅱ期に属する。

77・78は土師器である。77は甕の体部上半から口縁部付近である。口径23.8cmある。外面はタキで形成した後、粗いタテ方向のハケメとナデで調整する。78は高杯の杯口縁部である。口径

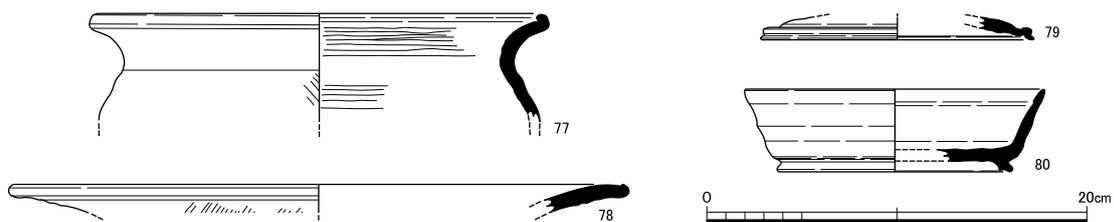


図50 ピット291出土土器実測図（1：4）

32.6cmある。口縁部外面はハケメを行うが、ヘラケズリ痕を残す。79・80は須恵器である。80は杯Bである。平坦な底部から体部が直線的に斜め上方に延びる。胎土の色調は灰白色から灰色を呈する。79は蓋である。口径は14.4cmある。胎土の色調は灰白色から灰色を呈する。

溝833（図版47、図51、観察表7） 土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・白磁などが出土している。V期新～VI期古段階に属する。

81～90は土師器である。82～90は皿Nである。小型皿と大型皿に区分できる。82～85は小型皿で、口径9.0～9.6cm、器高1.5～2.1cmある。86～90は大型皿で、口径12.6～14.9cm、器高2.3～3.5cmある。81は土師器皿Aである。

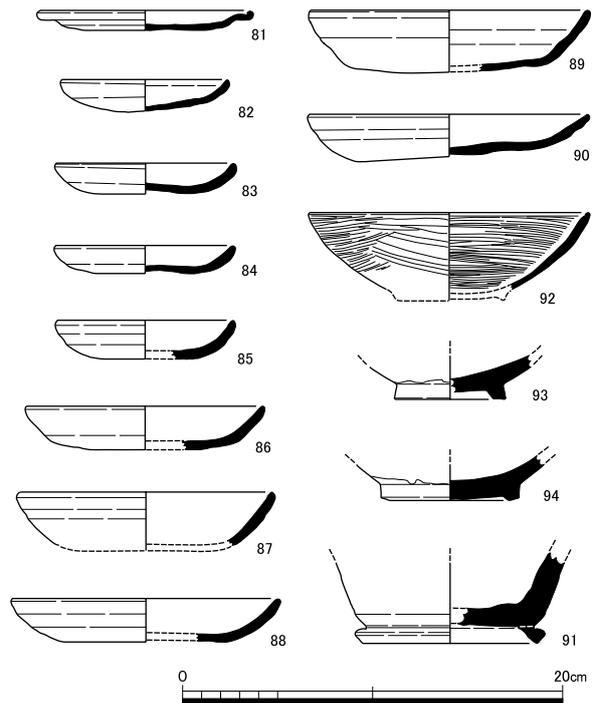


図51 溝833出土土器実測図（1：4）

口径11.4cmある。IV期の遺物である。91は須恵器の壺Lの底部である。焼成は硬質である。高台は貼り付ける。胎土の色調は黒色から灰色を呈する。I期の遺物である。92は瓦器椀である。口径14.8cmある。内外面にヘラミガキを施す。93・94は白磁椀の底部である。高台部は削り出しによる。93はやや古い様相を示す。大宰府編年Ⅱ類。94は大宰府編年Ⅳ類である。

路面900A（図52、観察表8） 土師器・須恵器・山茶椀・瓦器などが出土している。V期新～VI期古段階に属する。

95～98は土師器である。95は皿Acである。口径9.0cmある。96～98は皿Nである。口径9.0～9.6cm、器高1.5～1.7cmある。99は山茶椀皿である。底部は糸切り痕が残る。焼成は軟質である。東海地方の製品である。

路面900B（図版47、図52、観察表8） 土師器・須恵器・瓦器・白磁などが出土している。V期新～VI期古段階に属する

100～102は土師器皿Nである。小型皿と大型皿に区分できる。100・101は小型皿で、口径9.4

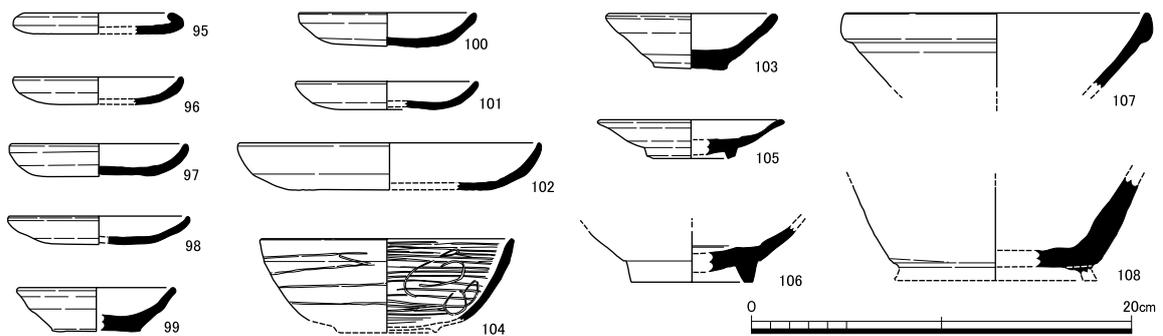


図52 路面900A・900B・900C出土土器実測図（1：4）

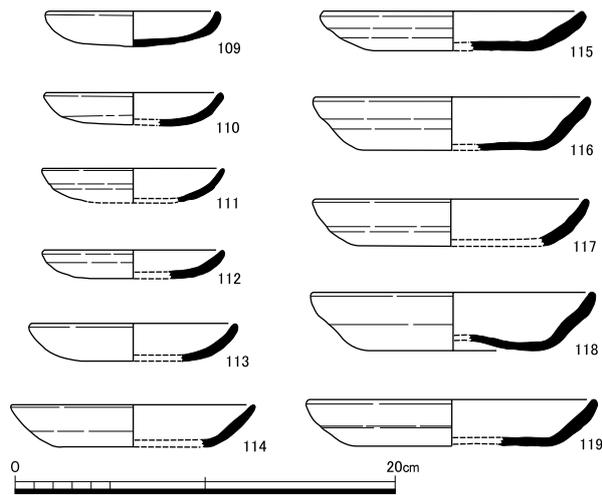


図53 土坑682出土土器実測図（1：4）

cm・9.6cm、器高1.5cm・2.0cmある。101の口縁部には煤が付着する。灯明皿に使用されたとみられる。102は大型皿で、口径16.0cm、器高2.5cmある。103は白色土器皿である。口径9.4cm、高さ3.1cm、底部径3.7cmある。底部外面には糸切り痕が残る。104は瓦器碗である。口径13.4cmある。内外面にヘラミガキを施し、内面には暗文を配する。105～107は白磁である。105は皿である。106・107は碗である。107は碗の上半部で、口縁部は玉縁状を呈する。大宰府編年Ⅳ類。106は底部である。

106・107は大宰府編年Ⅷ類。内面底部には蛇ノ目釉剥ぎが見られる。

路面900C（図52、観察表8） 土師器・須恵器などが出土している。Ⅰ期に属する。

108は須恵器壺Lの底部である。焼成は硬質である。高台は貼り付ける。胎土の色調は褐灰色から灰褐色を呈する。

土坑682（図版47、図53、観察表9） 土師器・須恵器・灰釉陶器・白磁などが出土している。Ⅴ期新～Ⅵ期古段階に属する。

109～119は土師器皿Nである。小型皿と大型皿に区分できる。109～113は小型皿で、口径9.5～11.0cm、器高1.6～1.9cmある。114～119は大型皿で、口径12.8～15.4cm、器高2.1～3.1cmある。114は口径が小さいが器形から大型皿とした。

濠150（図版47、図54、観察表10） 土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、青磁・白磁・褐釉陶器などの輸入陶磁器が出土している。Ⅴ期新段階に属する

120～126は土師器皿Nである。小型皿と大型皿に区分できる。120～123は小型皿で、口径8.8～9.6cm、器高1.3～1.9cmまでである。123の口縁内部には煤が多量に付着する。124・125は大型皿で、口径13.4cm・14.4cmある。底部を欠くが、器高3.0cm・3.1cmの深さとみられる。126は口縁部外面に2段のナデを施す。古い様相を残す皿で、Ⅴ期古～中段階。127は緑釉陶器碗の口縁部である。

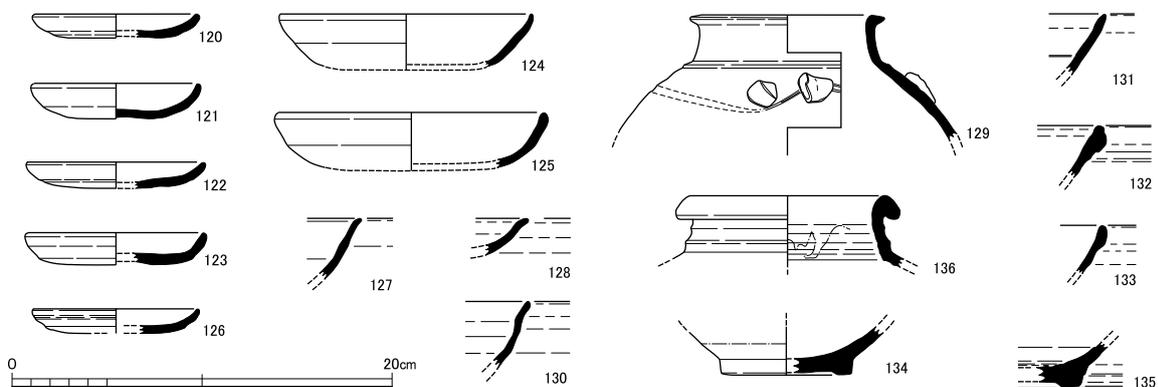


図54 濠150出土土器実測図（1：4）

焼成は軟質である。胎土の色調は灰白色を呈する。128は灰釉陶器皿の口縁部である。胎土の色調は灰白色を呈する。131～136は白磁である。131～133は碗の口縁部である。132・133は口縁端部が玉縁状を呈する。大宰府編年Ⅳ類。131は直線的な口縁部である。大宰府編年Ⅴ類。134・135

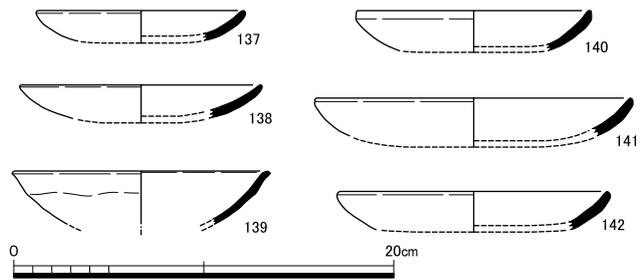


図55 地業55・60・166出土土器実測図（1：4）

は碗の底部である。高台部の削り出しは浅い。Ⅳ類。136は壺の頸部から口縁部である。口縁端部は玉縁状を呈する。口径は11.8cmある。129は褐釉陶器の四耳壺である。肩部の4箇所に耳が付く。口径は10.2cmと復元した。胎土の色調は褐灰色からにぶい黄橙色を呈する。産地は華南地方。130は青磁碗の口縁部である。

地業55(図55、観察表11) 土師器・須恵器などが出土している。Ⅴ期新～Ⅵ期古段階に属する。

137・138は土師器皿Nである。137は口径11.0cm、138は口径12.8cmある。139は瓦器碗である。内面にヘラミガキを施す。外面には指オサエの痕跡が残る。口径13.6cmある。

地業60(図55、観察表11) 土師器が出土している。Ⅴ期新～Ⅵ期古段階に属する。

140・141は土師器皿Nで、中型皿と大型皿がある。140は口径12.4cm、141は口径16.8cmある。

地業166(図55、観察表11) 土師器・須恵器が出土している。Ⅴ期新～Ⅵ期古段階に属する。

142は土師器皿Nである。口径14.4cmある。

土坑171(図版47、図56、観察表12) 土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁などが出土している。Ⅴ期新段階に属する。

143～166は土師器皿である。143～145は皿Acである。口径14.3cm前後ある。口縁端部は内側へ折り返し、丸くおさめる。146～166は皿Nである。小型皿と大型皿に区分できる。146～165は小型皿で、口径8.0～9.8cm、器高1.2～2.0cmある。口縁部が内湾気味のものも含まれる。166は大型皿で、口径14.8cm、器高2.6cmある。169は瓦器皿である。内面にはヘラミガキを施す。口径10.4cmある。167・168は須恵器である。167は杯Bの体部から口縁部の破片である。胎土の色調は灰色を呈する。168は東播系の鉢である。口径30.0cmある。内面は使用により磨滅している。胎土の色調は灰白色を呈する。170は瓦器の三足盤である。口径50.8cmある。内面は丁寧なヨコ方向のヘラミガキを施す。171は青磁の輪花碗である。口縁端部は外反する。内面には櫛描き文が施される。

土坑173(図版48、図57、観察表13) 土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁などが出土している。Ⅴ期新段階に属する。

172～203は土師器皿である。172～174は皿Acである。口径8.6～10.3cmある。口縁端部は内側へ折り返し、丸くおさめる。175～203は皿Nである。小型皿と大型皿に区分できる。175～195は小型皿で、口径8.0～9.8cm、器高1.4～1.8cmある。口縁部が内湾気味のものも含まれる。196～203は大型皿で、口径11.5～14.9cm、器高1.8～3.1cmある。204・205は瓦器碗である。204は器高が5.2cm、205は4.3cmある。内外面ともに粗いヘラミガキを施す。胎土の色調はともに暗灰色を呈する。

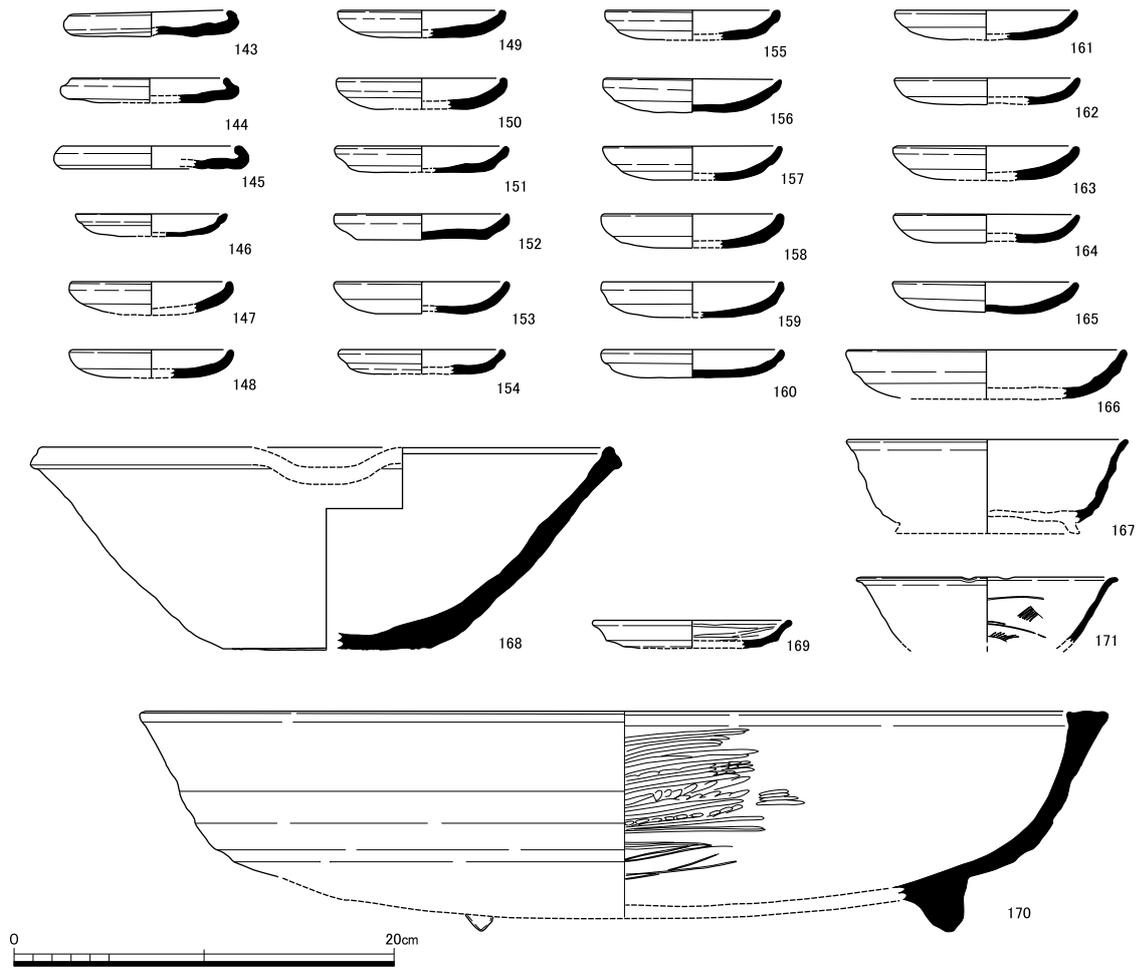


图56 土坑171出土土器实测图（1：4）

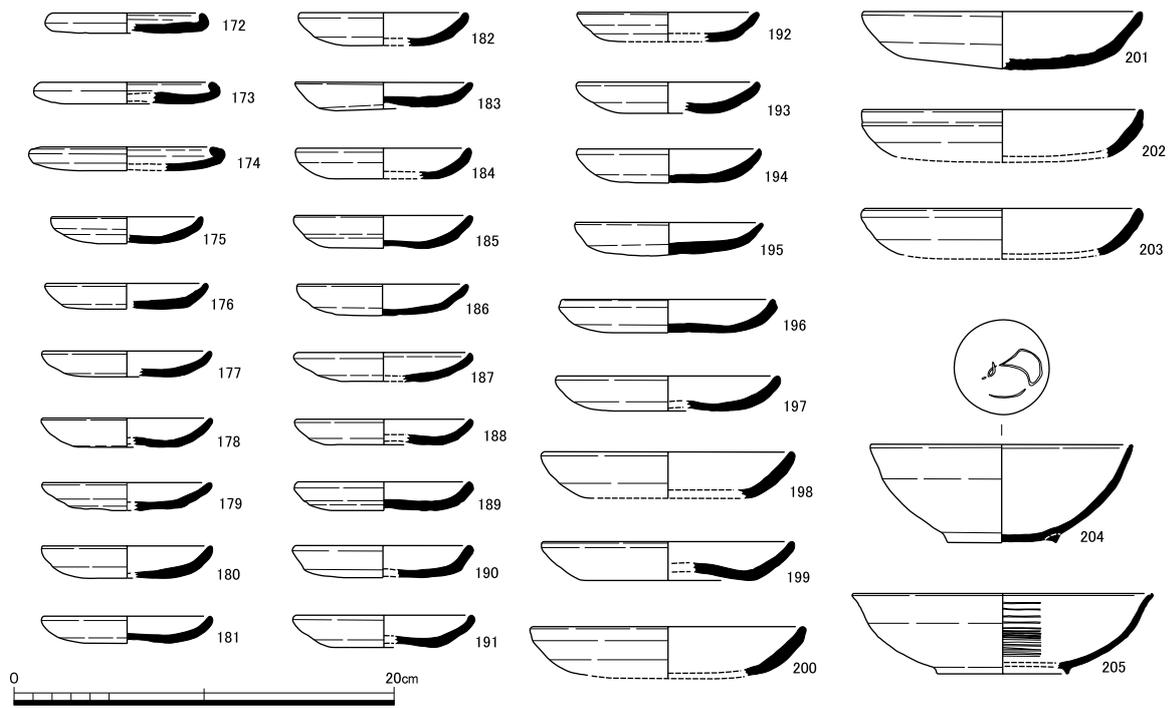


图57 土坑173出土土器实测图（1：4）

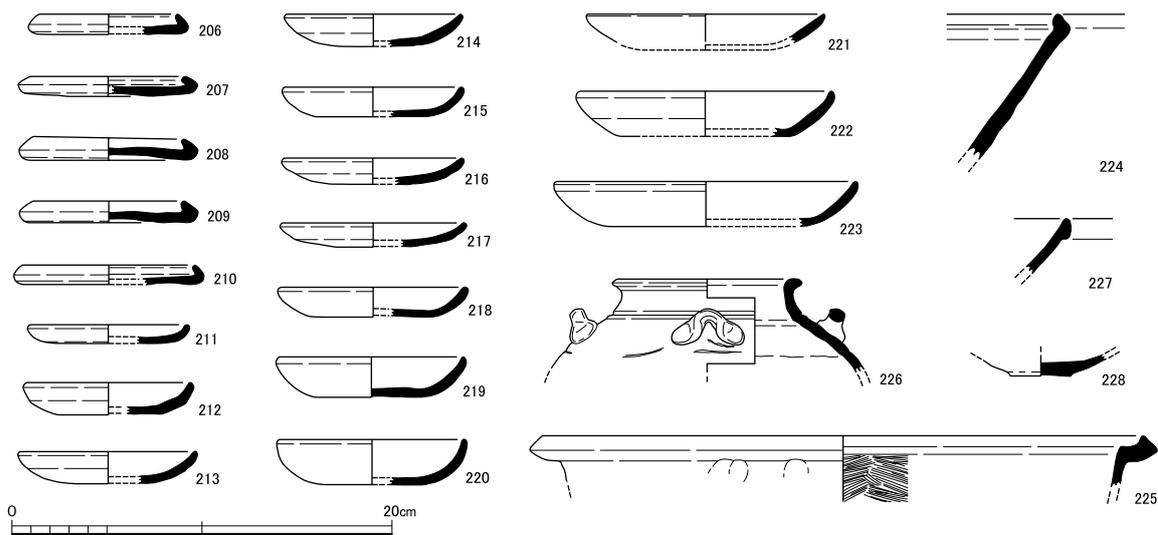


図58 第1面掘下げ出土土器実測図（1：4）

第1面掘下げ（図版48、図58、観察表14） 最勝光院の整地層である。土師器・須恵器・瓦器・輸入陶磁器などが出土している。V期新～VI期古段階に属する

206～223は土師器である。206～210は皿Acである。口径8.4～10.0cmある。211～223は皿Nである。小型皿と大型皿、深手皿に区分できる。211～218は小型皿で、口径8.6～10.0cm、器高1.0～2.3cmある。221～223は大型皿で、口径12.6～16.0cm、器高残存1.5～2.4cmある。219・220は深手皿である。口径10.0cm、器高2.2cm・2.4cmある。224は須恵器鉢の体部から口縁部の破片である。内外面ともナデを施す。小片のため口径は不明である。225は瓦器鍋の口縁部の破片である。口径33.0cmある。226は褐釉陶器の四耳壺である。肩部の4箇所に耳が付く。口径は9.0cmある。胎土の色調は灰オリーブ色を呈する。産地は華南地方。227は白磁碗の口縁部の破片である。口縁端部は玉縁状を呈する。小片のため口径は不明である。大宰府編年IV類。228は白磁皿の底部である。内面にはオリーブ黄色の釉が掛かる。底部外面は無釉である。底部径は3.2cmある。大宰府編年V類。

第2面掘下げ（図版48、図59、観察表15） 土師器・須恵器・陶器・瓦器・輸入陶磁器などが出土している。

230～232は瓦器である。230は皿である。内面にヘラミガキを施す。口径9.9cmある。231は碗である。内面にヘラミガキを施す。232は鉢の体部から口縁部の破片である。内外面ともナデを施す。小片のため口径は不明である。229は須恵器鉢である。平らな底部に断面形台形の高台を貼り付ける。体部は斜め上方に立ち上がる。口縁端部は短く内湾して立ち上がり、丸くおさめる。体部内外面はナデで仕上げる。焼成は硬質である。胎土の色調は灰白色を呈する。

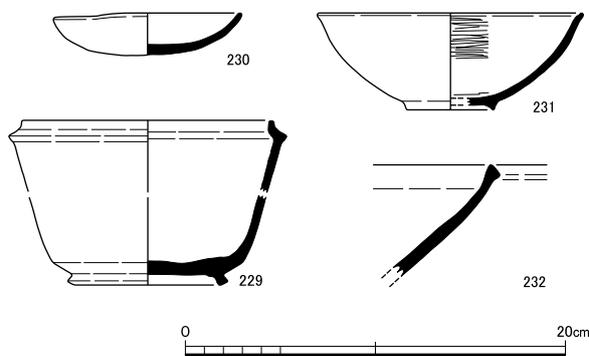


図59 第2面掘下げ出土土器実測図（1：4）

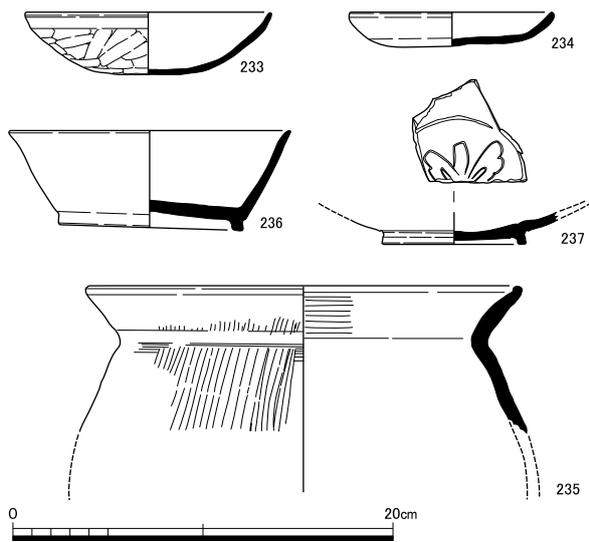


図60 第3面掘下げ出土土器実測図（1：4）

第3面掘下げ（図版48、図60、観察表15）

土師器・須恵器・陶器・瓦器・輸入陶磁器などが出土している。

233は土師器椀Aである。外面にヘラケズリを施す。口径13.0cm、器高3.4cmある。I期新段階に属する。234は土師器皿Nである。口径10.8cm、器高1.8cmある。口縁端部に煤が付着する。灯明皿に転用されたとみられる。V期新段階に属する。235は土師器の甕である。外面はタタキで成形したのち、粗いタテハケとナデで調整する。I期～II期。236は須恵器の杯Bである。体部は直線的に外上方に立ち上がる。I期。237は須恵器皿の底部である。底部内面には省略された陰刻の花文が施される。全体にヘラミガキが施されているが、釉は掛けられていない。焼成は硬質である。胎土の色調は灰色を呈する。小塩産。

その他の遺構（図版48、図61、観察表16） 土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器などが出土している。

238～244は平安時代前期に属する遺物である。238は土師器甕の上半から口縁部付近である。口

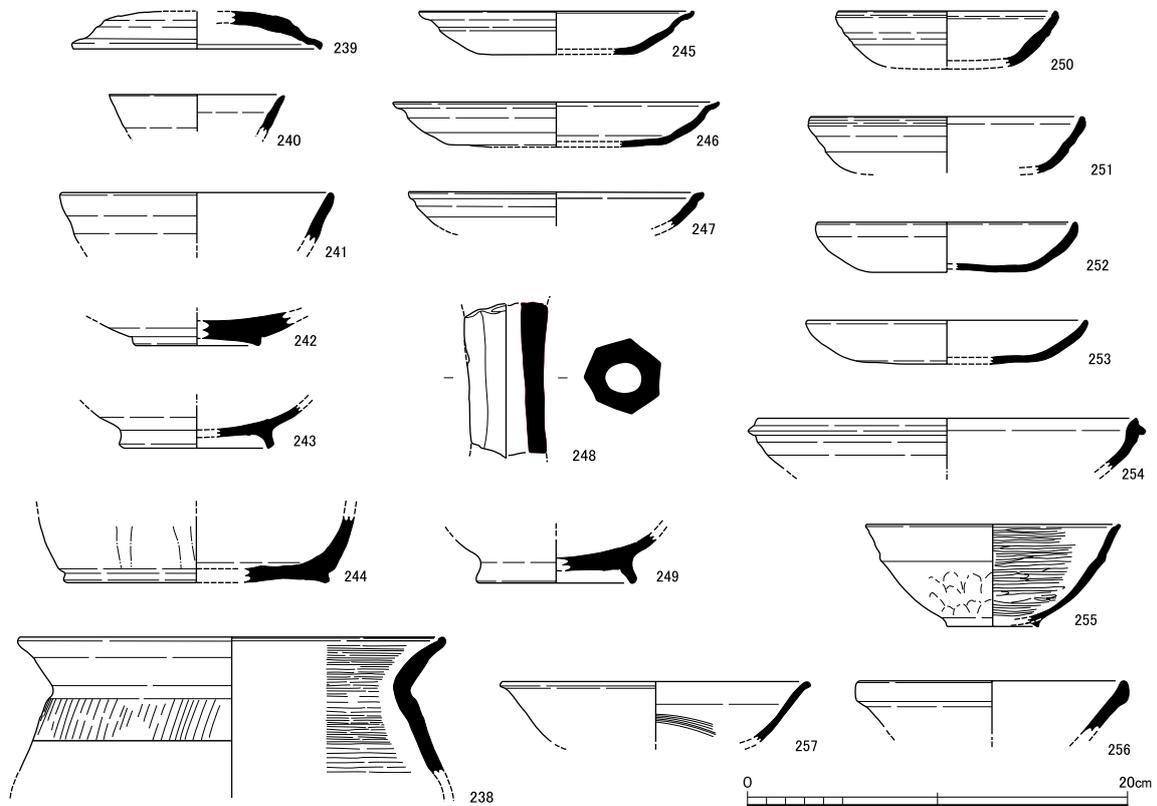


図61 その他の平安時代遺構出土土器実測図（1：4）

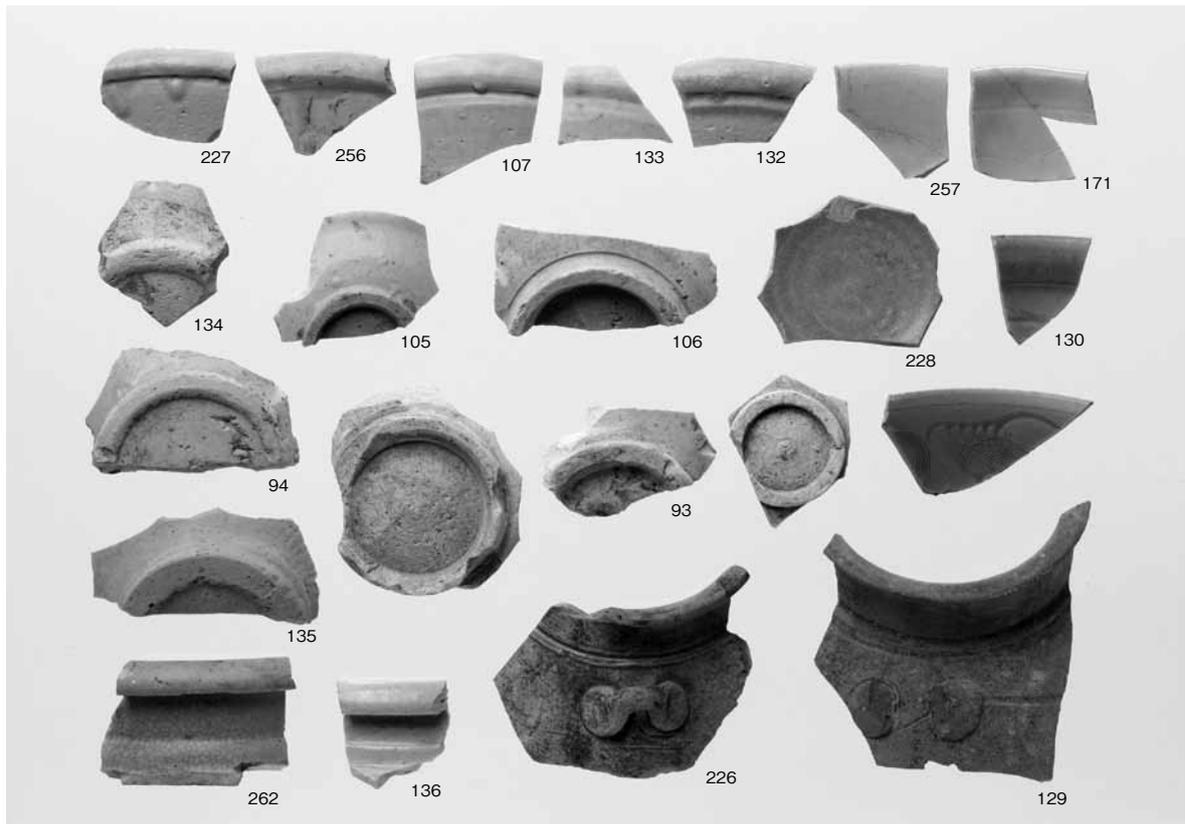


写真12 平安時代の輸入陶磁器

径22.7cmある。外面はタタキで成形した後、粗いタテハケとナデを施す。Ⅰ期～Ⅱ期。土坑366出土。239～241は須恵器である。239は蓋である。口径は13.2cmある。胎土の色調は灰白色から灰色を呈する。土坑846出土。240は杯の口縁部片である。体部は直線的に斜め上方に延びる。胎土の色調は褐色を呈する。土坑846出土。241は杯の口縁部片である。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともにヨコナデで仕上げる。焼成は硬質である。胎土の色調は灰白色を呈する。溝706出土。242は緑釉陶器皿の底部である。中央部がやや窪む削り出しの平高台。焼成は軟質である。底部内面と外面は回転ヘラケズリを施す。体部はタテ方向のヘラケズリを施す。溝759出土。243・244は灰釉陶器である。243は碗の底部である。高台は貼付けによる。内面底部に重ね焼きの痕跡が残る。胎土の色調は灰白色を呈する。9世紀後半。東海地方の製品である。溝706出土。244は壺の底部である。ヨコナデで仕上げる。外面には灰釉が垂下する。胎土の色調は灰白色を呈する。東海地方の製品である。ピット1022出土。

245～249は平安時代中期に属する遺物である。245～248は土師器である。245・246は土師器皿Aである。245は口径14.5cm、器高2.3cmある。Ⅲ期。土坑839出土。246は口径17.2cm、器高2.5cmある。Ⅲ期。ピット787出土。247は皿Nの口縁部である。口径15.6cmある。Ⅲ期。248は高杯の脚部である。外面はヘラケズリで七角形に面取りする。胎土の色調は浅黄橙色からにぶい橙色を呈する。ピット815出土。249は灰釉陶器碗の底部である。深い碗になるとみられる。高台径は8.0cmある。胎土の色調は灰白色を呈する。産地は美濃である。Ⅲ期。土坑923出土。

250～257は平安時代後期に属する遺物である。250～253は土師器皿Nである。250は口径11.8

cm、251は口径14.6cm、252は口径14.8cmある。253は口径13.8cmある。鉄分の付着が著しい。252・253は埋納土坑227出土。250・251はピット799出土。254は須恵器鉢の口縁部である。内外面ともナデを施す。口径は20.4cmある。土坑669出土。255は瓦器椀である。口径13.4cm、器高5.4cmある。内面にヘラミガキを施す。溝759出土。256は白磁椀の口縁部である。端部は玉縁状を呈する。大宰府編年Ⅳ類。土坑669出土。257は白磁椀である。口縁端部は外反する。内面に櫛描き文を施す。溝771出土。

3) 鎌倉時代・室町時代

井戸767 (図版48、図62、観察表17) 土師器・須恵器・瓦器・白磁が出土している。Ⅵ期古段階に属する。

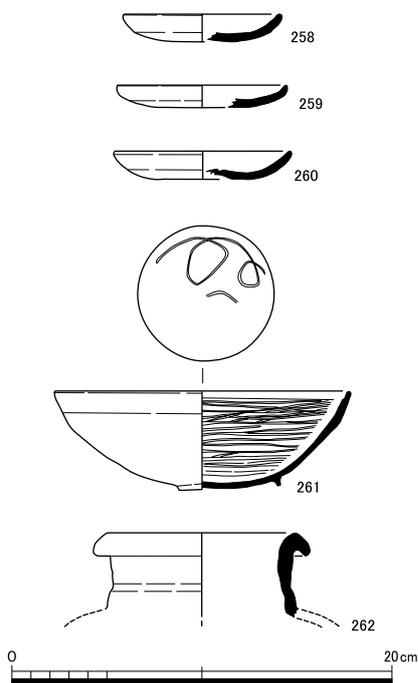


図62 井戸767出土土器実測図 (1 : 4)

258～260は土師器皿Nである。口径8.4～9.4cm、器高1.2～1.5cmある。261は瓦器椀である。口径15.6cm、器高は5.3cmある。体部内面にはヘラミガキを施す。底部内面には暗文を施す。262は白磁壺の頸部から口縁部片である。口縁端部を外下方に大きく曲げる。大宰府編年Ⅴ類。

溝630 (図63、観察表17) 土師器・須恵器・瓦器が出土している。

263は瓦器鍋である。口径は24.7cmある。口縁部から体部内面はヨコナデを施す。体部外面には指オサエの痕跡を残す。

土坑54 (図63、観察表17) 土師器・瓦器が出土している。

264は瓦器盤の底部の破片である。底径は41.4cmある。内面はヨコナデで仕上げる。外面には部分的にヘラミガキの痕跡が残る。14世紀。

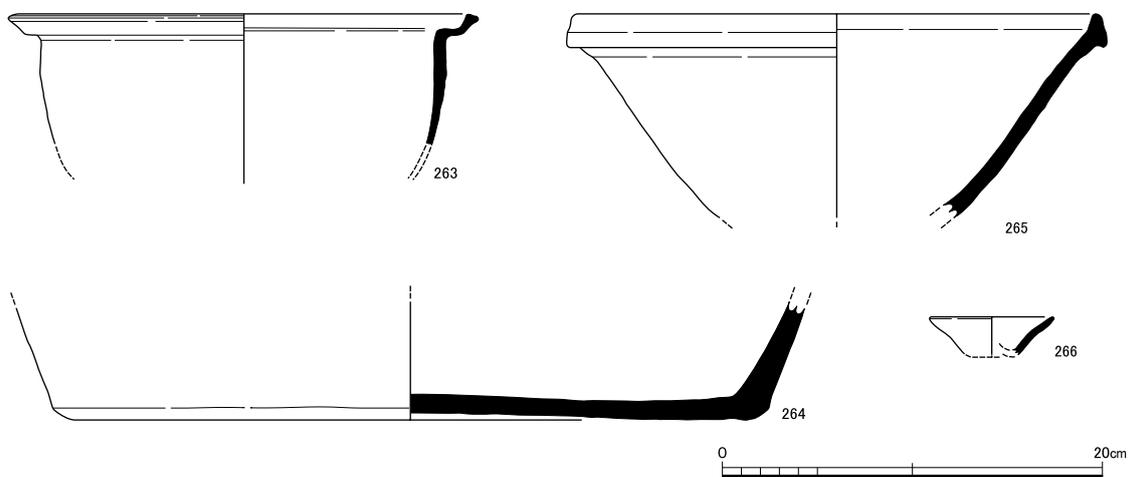


図63 溝630・土坑54・405・第1面検出中出土土器実測図 (1 : 4)

土坑405（図63、観察表17） 土師器・須恵器が出土している。

265は須恵器の鉢である。口径は28.4cmある。東播系である。14世紀。

第1面検出中（図版48、図63、観察表17） 土師器・須恵器・瓦器が出土している。

266は土師器皿Shである。口径6.6cmある。Ⅸ期新段階に属する。

4) 江戸時代以降

井戸687（図版49、図64、観察表18） 土師器・土師質土器・瓦質土製品・施釉陶器・染付磁器・磁器などが出土している。図化できる土師器皿はないがⅩⅣ期とみられる。

280は土師質土器である。いわゆる柚子型を呈するでんぼの蓋である。上面には柚子肌を表す細かい窪みが施されている。上面下面ともにキラが施される。胎土の色調はにぶい黄橙色を呈する。深草・伏見産である。275～279は施釉陶器である。276は小振りな筒型碗である。外面に金彩などで能の情景が上絵付けされる。高台内には「見山」と釉上に書かれる。胎土の色調は灰白色を呈する。京・信楽の製品とみられる。279は土瓶の体部である。白化粧を施した後、部分的に緑釉掛け

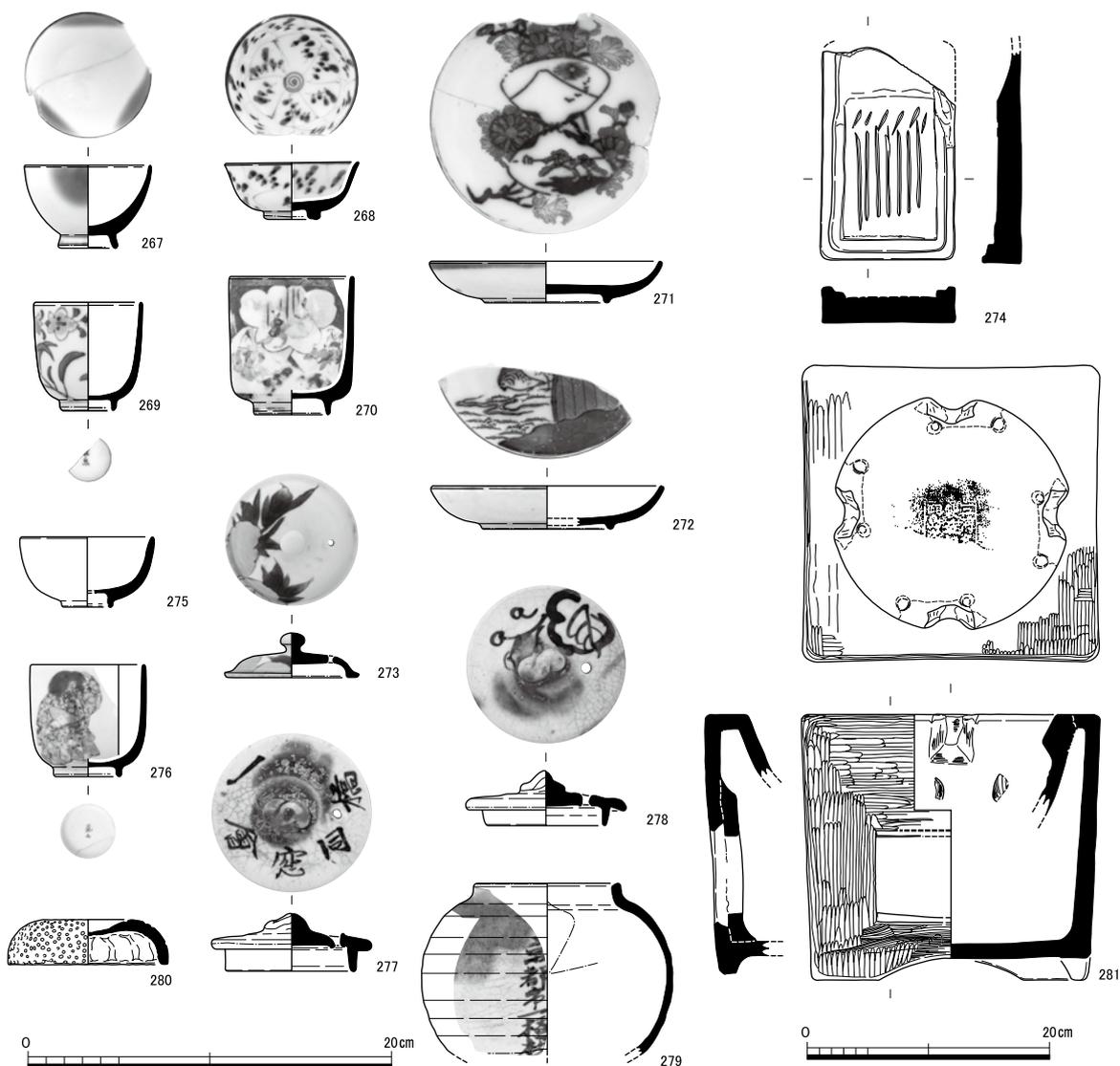


図64 井戸687出土土器実測図（1：4、281のみ1：6）

を施す。黒色で「京都市一橋校」と釉下に書かれる。内外面ともに透明な釉を掛けるが、体部上端の蓋が接する部分と外面底部は無釉である。胎土の色調は浅黄色を呈する。277・278は土瓶の蓋である。白化粧を施した後、摘みを含む中央部に緑釉掛けを施す。黒色で左回りに「一橋同窓会」と釉下に書かれる。上面のみに透明な釉を掛ける。胎土の色調は277が浅黄橙色、278は浅黄色を呈する。267～273は染付磁器である。269・270は椀である。269は小振りで薄作りの筒型椀である。外面には呉須で草花が描かれる。高台部には圈線を巡らせ、高台内には呉須で「龍東」と書かれる。京都産とみられる。270は筒型椀である。金彩を施す細密な絵が描かれる。京都産とみられる。267・268は杯である。267は呉須で半円状の文を3方に配する。高台には2条の圈線を施す。口縁部に鉄釉を施す。瀬戸美濃産。268は、浅めの体部から外反気味に口縁部が延びる。高台幅は広い。高台端部は無釉である。瀬戸美濃産。271・272は皿である。271は、呉須で菊花と二枚貝を描き、緑色の菊葉と松を転写する。口縁部には鉄釉を施す。高台底部は無釉である。272は鳥・川・草などを271と同様の手法で描く。ともに瀬戸美濃産。273は蓋である。丸い小振りの摘みを持つ。上面に呉須で草花文を描く。受け部と接する部分は無釉である。京都産とみられる。281は瓦質コンロである。「三河・・製造・・岡島次」と刻印される。胎土の色調はにぶい橙色を呈する。土器類ではないが274は磁器製の硯である。陸部にはタテ方向に7条の凹線を施す。陸部と裏面には釉を施さない。産地は京都か。

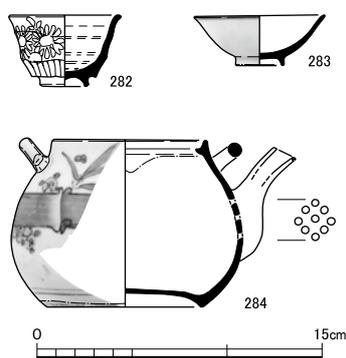


図65 井戸703出土土器実測図 (1:4)

井戸703(図版49、図65、観察表19) 土師器・施釉陶器・染付磁器・磁器などが出土している。図化できる土師器皿はないがXIV期とみられる。

282～284は磁器である。282は体部に花文の型押しを施す。花文の上絵付けを施した痕跡が残る。産地は京都か。283は染付の端反り小杯である。口縁部に呉須を施す。瀬戸美濃産。284は染付の急須である。体部に松竹梅の文様を施す。端部付近に取っ手を付ける。蓋が接する部分と外面底部は無釉である。産地は京都か。

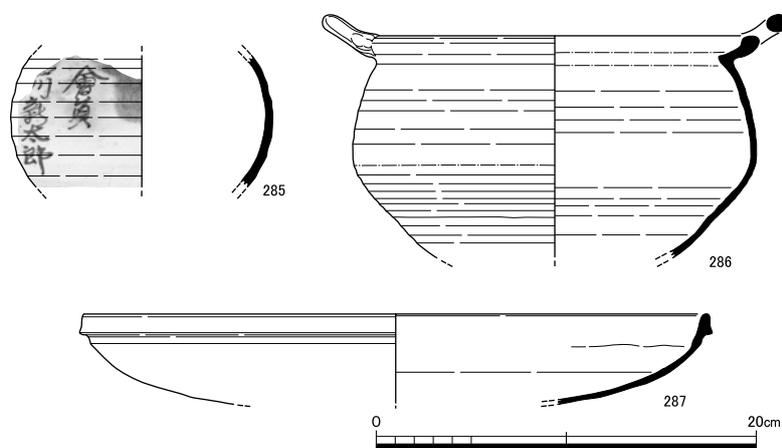


図66 井戸679出土土器実測図 (1:4)

井戸679(図66、観察表19) 土師器・土師質土器・施釉陶器・染付磁器・磁器などが出土している。図化できる土師器皿はないがXIV期とみられる。

285・286は施釉陶器である。285は土瓶の体部である。白化粧を施した後、部分的に緑釉掛けを施す。黒色で「會

員 川新太郎」と書き、内外面ともに透明な釉を掛ける。胎土の色調は浅黄色を呈する。286は鍋である。口縁部の2方に取っ手を付ける。内面全体と外面上半部に施釉する。蓋が接する部分は釉を剥いている。底部には煤が付着する。胎土の色調は灰白色を呈する。京・信楽系の製品とみられる。287は土師質土器の焙烙である。外面底部に煤が付着する。胎土の色調は浅黄橙色を呈する。深草・伏見産である。

土坑704（図版49、図67、観察表19）土師器・瓦質土製品・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・磁器などが出土している。XIV期とみられる。

288・289は小型の土師器皿Nrである。胎土の色調はにぶい黄橙色を呈する。290は瓦質鉢である。円形を呈する底部から体部が外反気味に立ち上がり、口縁部付近では平面形が方形に変化する。口縁端部は内外に延び、上面が平坦になる。口縁部付近は丁寧なナデ調整を施す。胎土の色調はにぶい橙色を呈する。本来は木箱に入れて使用される火鉢とみられるが、便槽として転用されていたとみられる。291は施釉陶器の燈明受皿である。受け部上端部と外面体部中位以下は無釉である。京・信楽産か。胎土の色調は灰褐色を呈する。292は焼締陶器播鉢である。堺もしくは明石の製品である。胎土の色調は赤褐色を呈する。

井戸674（図版49、図68、観察表19）土師器・土師質

井戸674（図版49、図68、観察表19）土師器・土師質

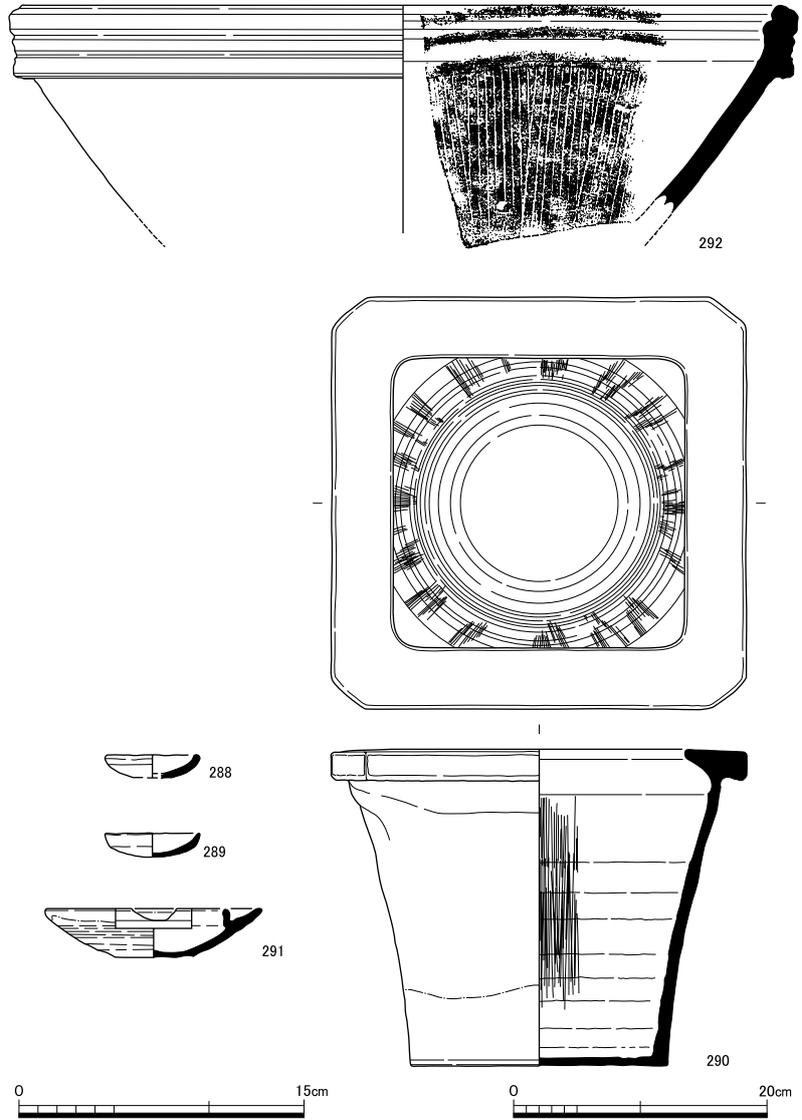


図67 土坑704出土土器実測図（1：4、290のみ1：6）

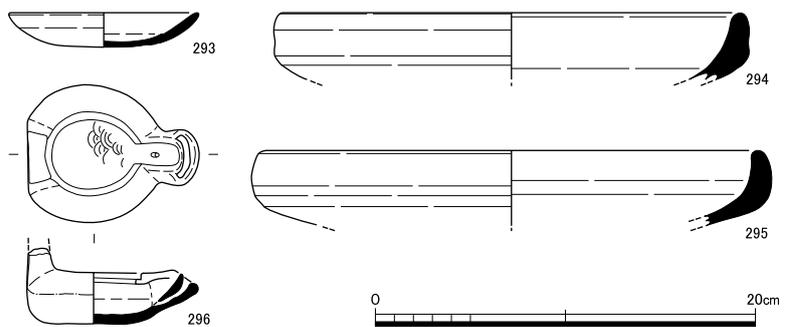


図68 井戸674出土土器実測図（1：4）

土器・施釉陶器・軟質施釉陶器・染付磁器などが出土している。XIII期古段階に属する

293は土師器皿Sである。胎土の色調はにぶい橙色を呈する。294・295は土師質土器の焙烙である。ともに外面底部に煤が付着する。胎土の色調は299がにぶい橙色、295は浅黄橙色を呈する。深草・伏見産である。296は軟質施釉陶器である。壁掛け式の灯火具で、上下の型合せで作られている。全面に薄い透明な釉が掛けられている。胎土の色調は浅黄橙色を呈する。

その他の遺構（図版49・50、図69、観察表20） 土師器・土師質土器・瓦質土製品・施釉陶器・染付磁器・磁器・輸入磁器などが出土している。

297～304は土師器皿である。297～300は土師器皿Nrである。298の胎土の色調は浅黄橙色を呈する。ピット615出土。299・300の口縁端部には煤が付着する。燈明皿に転用されたとみられる。299の胎土の色調は浅黄色を呈する。土坑705出土。300の胎土の色調はにぶい橙色を呈する。ピット676出土。297は径が小さく、器壁が厚い。内外面ともにキラが多く付着する。胎土の色調は灰白色を呈する。窯19出土。301～303は土師器皿Sである。303・304の胎土の色調はにぶい黄橙色を呈する。口径は1.8cm、10.8cmある。XI期新段階に属する。土坑617出土。302は全体が黒ずみ、口縁端部は煤が多量に付着する。燈明皿に転用されたとみられる。胎土の色調は浅黄橙色を呈する。XIII期に属する。土坑169出土。301は外面底部に煤が付着する。胎土の色調は浅黄橙色を呈する。土坑94出土。305・306は施釉陶器皿である。305は口縁部に煤が付着する。燈明皿として転用されたものか。胎土の色調は灰白色を呈する。瀬戸美濃系。土坑104出土。306は青緑釉の皿で内面底部は蛇ノ目釉剥ぎ、重ね焼き痕が残る。体部外面下半から高台部は露胎である。釉はムラに掛かる。胎土の色調は灰黄色を呈する。肥前系。土坑105出土。307～310は施釉陶器碗である。307

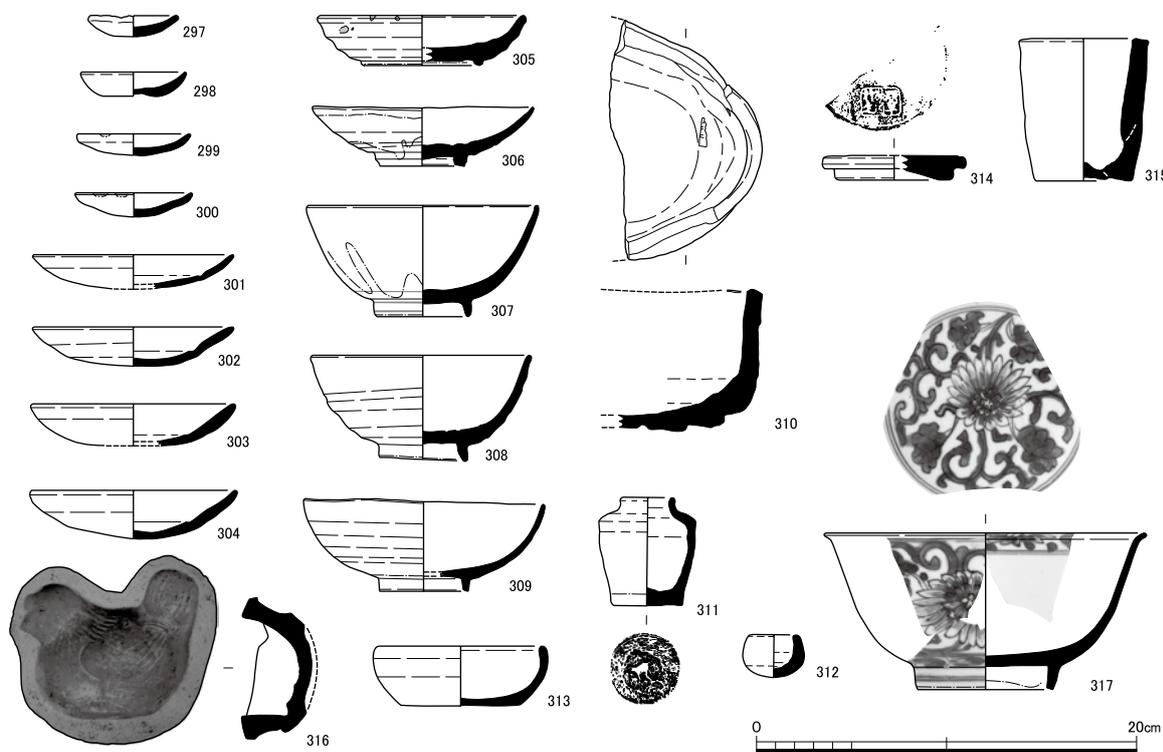


図69 その他の江戸時代遺構出土土器実測図（1：4）

は内面に呉須で草花文を描く。外面底部付近に1条、高台外面に2条の圈線を描く。高台端部は釉剥ぎ。胎土の色調はにぶい橙色を呈する。肥前系。土坑88出土。308は刷毛目椀で、内面底部に蛇ノ目釉剥ぎ、高台端部も釉剥。胎土の色調はにぶい橙色を呈する。肥前系。土坑74出土。309はいわゆる京焼風陶器である。内面底部に錆絵で省略化された山水楼閣文を描く平椀である。高台付近は無釉。胎土の色調は灰白色を呈する。肥前系。土坑74出土。310は沓茶椀である。高台は低く削り出す。口縁部は大きく歪ませている。胎土の色調は灰白色を呈する。伊賀の製品とみられる。土坑617出土。311は鉄釉の肩衝茶入である。底部に糸切り痕が残る。胎土の色調は灰黄色を呈する。瀬戸美濃系。ピット601出土。312～315は土師質土器である。312はいわゆるつぼつぼと呼ばれる手捏ねの小壺である。胎土の色調はにぶい黄橙色を呈する。伏見・深草産である。土坑115出土。313はでんぼである。ロクロ成形で灰白色の胎土をもつ小型の鉢である。底部外面に糸切り痕が残る。胎土の色調は淡黄色を呈する。土坑169出土。314は花塩壺の蓋である。「深草/砂川/権兵衛」の刻印が蓋の上面にある。胎土の色調は灰白色を呈する。京都産。土坑146出土。315は焼塩壺の身である。板作りで内面には細かい布目痕が残る。底部は外方から粘土を充填している。胎土の色調は橙色を呈する。316は鶏の人形型である。胎土にキラが多く付着する。胎土の色調は浅黄橙色を呈する。伏見産。土坑169出土。317は輸入の青花椀である。体部は内湾して開き、口縁端部は外反する。内外面ともに菊華と唐草文を配する。口径16.8cm、器高8.3cmと大振りの椀である。景徳鎮窯系。第1面検出中出土。

(3) 瓦類

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあり、丸瓦・平瓦が大半を占め、軒瓦は少ない。ここでは、平安時代後期、鎌倉時代・室町時代に大別して、主要な軒瓦を報告する。

1) 軒丸瓦 (図版51、図70、観察表21)

318は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。凸中房で、蓮子は1+4。蓮弁は細く、子葉なし。蓮弁外郭線が互いに接する。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下位は横ケズリ、裏面はナデを施す。胎土は砂粒を大量に含み灰色、やや軟質である。平城宮出土瓦(6133D b)と同範である。奈良時代。1区濠150上・中層出土。

319は単弁6弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は幅広く、子葉あり。間弁はバチ形である。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、瓦当面を折り曲げる1本作り成形と推定できる。瓦当部側面上位は横ナデを施す。胎土は細砂を含み褐灰色、軟質である。調査No.9(池田瓦窯NM02)と同範である。平安時代中期。山城産。2区第2面掘下げ出土。

320は単弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で、子葉なし。間弁は菱形である。外区の圈線は4箇所途切れ、端は湾曲する。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下位は横ナデ、裏面は横方向のナデを施す。胎土は微砂を含み灰白色、硬質である。調査No.9



図70 出土瓦拓影・実測図1 (1:4)

(池田瓦窯NM19)と同範である。平安時代後期。播磨産。1区土坑173出土。

321は単弁8弁蓮華文軒丸瓦である。凸中房で、蓮子は1+4である。蓮弁は三角形で子葉なし。外区は圏線が巡り、周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下位はナデ、裏面はオサエ後ナデを施す。胎土は細砂を含み灰白色、表面は暗灰色、やや軟質である。平安時代後期。山城産。1区重機掘削出土。

322は単弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は外郭線で表し、子葉あり。周縁は素文である。瓦当部成形は不明。瓦当部側面下位は横ナデ、裏面はナデを施す。

胎土は砂粒を多く含み灰色、軟質である。平安時代後期。山城産。2区第2面掘下げ出土。

323は巴文軒丸瓦である。左巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は界線と接しない。文様上部は盛り上がる。外区は小型珠文が密に巡り、周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部下位は横ナデ、裏面は縦ナデを施す。胎土は微砂を含み灰白色、表面は黒灰色で、やや軟質である。鎌倉時代。1区土坑111出土。

324は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は短く、周縁と接しない。文様上部は平坦である。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部下位は押さえ後ナデ、裏面押さえを施す。胎土は細砂を多量に含み灰白色、軟質である。平安時代後期。山城産。2点出土。いずれも2区路面900出土。

325は巴文軒丸瓦である。右巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は短く、周縁と接しない。文様上部は平坦である。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部下位は押さえ後ナデ、裏面押さえを施す。胎土は細砂を多量に含み灰白色、表面が黒灰色、やや軟質である。平安時代後期。山城産。2区路面900B出土。

2) 軒平瓦 (図版52・53、図71、観察表21)

326は唐草文軒平瓦である。中心に「大伴」銘を配し、唐草文は両側に反転する。主葉は連続して

緩やかに反転し、支葉は巻き込み、先端は丸くなる。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁は横ケズリ。平瓦凹面は布目、凸面はナデを施す。胎土は細砂を含み灰色である。やや硬質である。平安時代前期。山城産。2区溝833下層出土。

327は唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に展開する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は不明。胎土は細砂を含み灰色である。軟質である。平安時代前期。山城産。2区井戸767出土

328は唐草文軒平瓦である。中心飾りから唐草文は両側に反転する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉の先端が分かれる。外区に2重の圈線が巡り、外側の圈線上に珠文が粗く巡る。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は不明。瓦当部上縁・下縁は横ケズリを施す。顎部から平瓦凸面にかけてタテケズリを施す。胎土は砂粒を含み灰色、表面は黒灰色である。硬質である。調査No.9（池田瓦窯NH07、図版17-11）と同範である。平安時代中期。山城産。2区井戸767出土。

329はヘラ描き文軒平瓦である。瓦当面は平坦で、ヘラで横線を引く。瓦当部成形は不明である。曲線顎である。瓦当部上縁は横ケズリを施す。平瓦凹面は粗い布目、凸面は縦ナデ、側面は縦ケズリを施す。胎土は細砂を含み灰色、表面は黒灰色、硬質である。1区濠150上・中層出土。

330は花文軒平瓦である。上向きの花文を連続して4単位配し、間に上から花文を配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、半折曲技法である。瓦当部上縁は布目、顎部下面は横ケズリ、裏面は押さえ後横ナデを施す。胎土は砂粒を少量含み、浅黄橙色。やや軟質である。調査No.9（62図5）、六波羅蜜寺・法性寺出土瓦と同範である。平安時代後期。山城産。1区土坑165出土。

331は唐草文軒平瓦である。中心飾りは卵形で、唐草文は両側に反転する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は半折曲成形。瓦当部下縁は横ケズリ、顎部下面は横ケズリ後ナデ、裏面横ナデを施す。平瓦凹面布目、凸面ナデを施す。胎土は微砂を含み灰白色である。硬質である。仁和寺（木村図録²⁾812）と同範である。平安時代後期。山城産。2区井戸767出土。

332は唐草文軒平瓦である。唐草文は右から左方向へ偏行し、右端1単位は右に巻き込む。唐草は周縁に接し、主葉は大きく反転する。唐草は太く偏平である。周縁は素文である。瓦当部成形は、瓦当部上部に平瓦をあてる包み込み成形である。瓦当部側面側も補足粘土を付加する。瓦当部上縁はナデ、顎部裏面は横ナデを施す。平瓦凹面はナデ、凸面・側面は縦ナデを施す。胎土は精良で灰白色、硬質である。平安時代後期。播磨産。調査No.9（49）と同範である。1区土坑165出土。

333は唐草文軒平瓦である。中心飾りは半裁花文で、唐草文は両側に2回反転する。主葉は連続して緩やかに展開し、支葉は巻き込む。周縁は素文である。瓦当部成形は、瓦当部中位に平瓦をあてる包み込み成形である。瓦当部側面側も補足粘土を付加する。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面はナデ、凸面・側面は縦ナデを施す。胎土は細砂を含み黄灰白色、表面黒灰色、やや軟質である。瓦当面に離れ砂付着。平安時代後期。播磨産。調査No.4（53図30）と同文である。1区土坑165出土。

334は唐草文軒平瓦である。唐草文は両側に展開する。瓦当部成形は、瓦当部上端に平瓦をあて

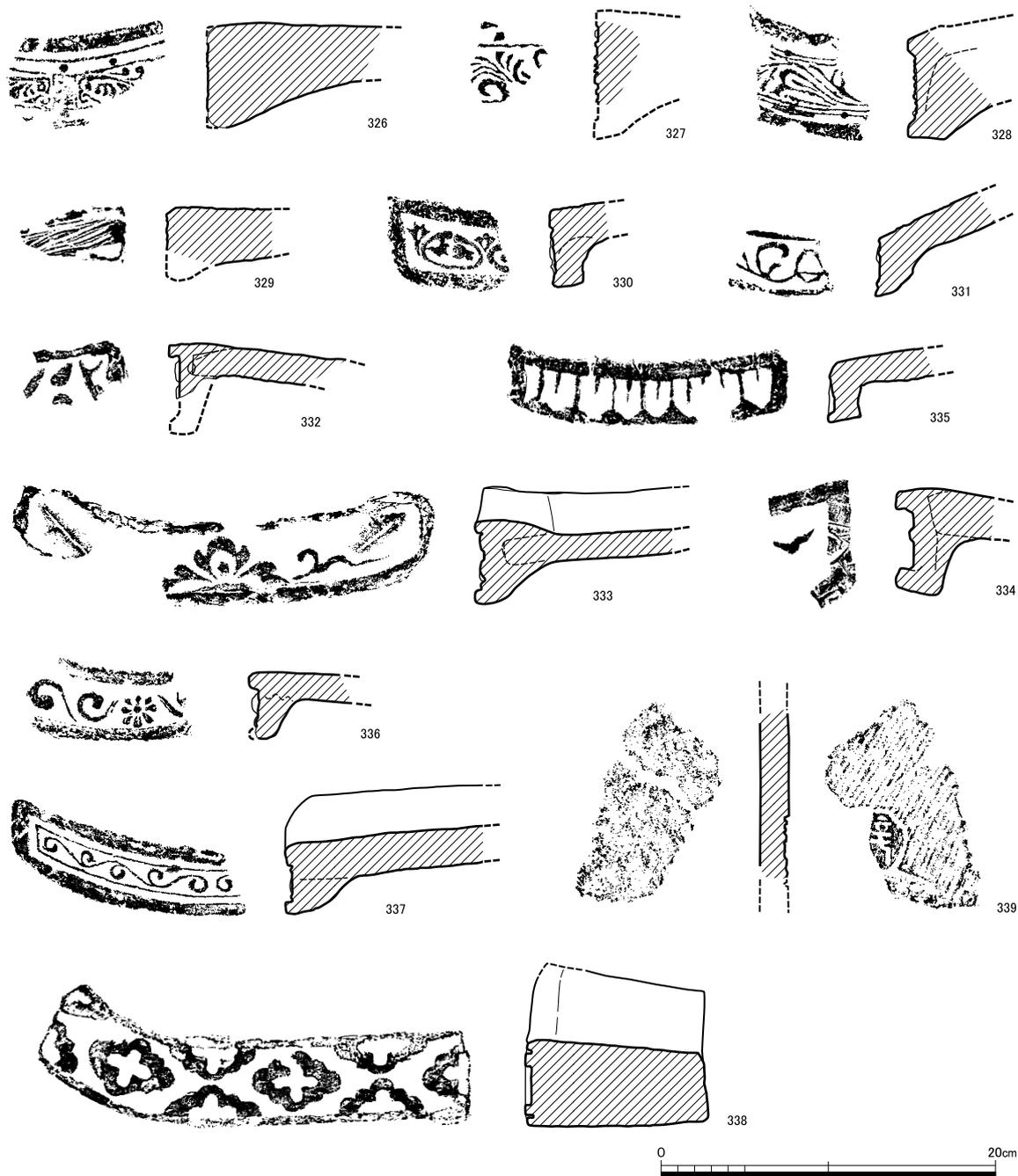


図71 出土瓦拓影・実測図2 (1:4)

る包み込み成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面・凸面・側面は縦ナデを施す。胎土は細砂を含み灰色、硬質である。平安時代後期。播磨産。1区重機掘削出土。

335は剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文を7.5個配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、完全折り曲げ成形である。瓦当部凹面から瓦当面に連続した布目が付く。瓦当顎部下面は横ケズリ後横ナデ、裏面は曲げじわが残り布で押さえる。平瓦凹面は布目、凸面は押さえ、側面はナデを施す。平瓦凸面にヘラ記号がある。胎土は砂粒を少量含み灰白色、表面は黒灰色である。やや硬質である。平安時代後期。山城産。1区土坑105出土。

336は唐草文軒平瓦である。中心飾りは花文で、唐草文は両側に反転する。唐草は各单位が離れ、大きく巻き込み、先端は丸くなる。周縁は素文である。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部を貼り付ける。瓦当部上縁はナデ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凸面はナデを施す。胎土は微砂を含み灰白色、表面は黒色である。やや硬質である。鎌倉時代から室町時代。産地不明。1区土坑209出土。

337は唐草文軒平瓦である。中心飾りはなく、唐草文は両側に4回反転する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。周縁は素文である。瓦当部成形は、平瓦凸面に顎部を貼る。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面・裏面は横ナデを施す。平瓦凹面は布目が残り、凸面は縦ナデ、側面は縦ケズリを施す。胎土は砂粒を多く含み灰白色、硬質である。鎌倉時代から室町時代。1区地業60出土。

3) その他の瓦 (図版53、図71、観察表21)

338は宝相華文飾り瓦である。宝相華文を2.5単位配し、間に半裁宝相華文を上下に配す。唐草は太く扁平である。周縁は上下のみ、素文である。瓦当面長方形で、左端部のみ湾曲する。直線顎である。瓦当部成形は不明である。瓦当部上縁はナデ、下縁は横ナデを施す。平瓦凹面は横ナデ、凸面は押さえ後ナデ、側面は縦ケズリ、狭端面は横ケズリを施す。瓦当面及び瓦当部上縁・下縁に黒色漆をハケで塗布する。胎土は砂粒を多く含み黄灰色、表面は暗灰色、やや硬質である。平安京右京六条一坊³⁾と同文で同形態である。成勝寺推定地出土瓦⁴⁾と同形態である。平安時代後期。1区濠150第2層出土。

339は文字瓦である。平瓦凹面に陰刻文字印を押捺する。八角形の界線で囲まれ文字は不明である。平瓦凸面縄タタキ、凹面糸切り痕跡あり。胎土は砂粒を多く含み黄灰白色、軟質である。

340は雁振瓦である。大型瓦で、幅約23.0cm、長さ37.7cmである。凹面は布目が残り粗い縦ナデ、凸面は縦ナデ、側面は縦ナデ、端面は横ナデを施す。狭端面・側面内側に部分的にケズリを施す。胎土は砂粒を含み灰色、硬質である。

(4) 銭貨 (図72、観察表22)

今回の調査で出土した銭貨は少量であった。江戸時代の寛永通寶が最も多く8点(342～349)であった。ほかには文久永寶(341)などがある。中国からの渡来銭や平安時代の皇朝十二銭などは出土しなかった。一つの遺構からまとまって出土したものはない。

これらの銭貨は、種類・各計測値・出土遺構を観察表22(出土銭貨一覧表)にまとめた。

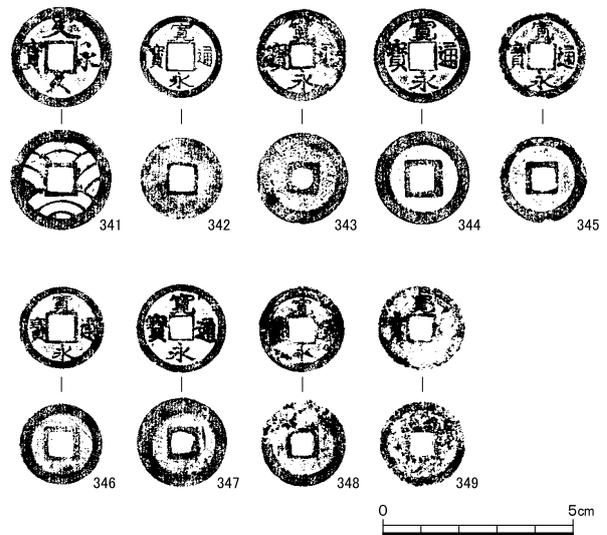


図72 出土銭貨拓影(1:2)

(5) 金属製品 (図73、写真13、観察表23)

金属製品には煙管・水滴・吊り金具・火箸・釘などが出土した。金属製品には、鉄製品・銅製品・真鍮製品がある。平安時代の遺構から釘が少量出土しているが腐食が著しく図示することができなかった。材質別では、真鍮製品が最も多い。なお、資料は金属の成分分析を経ていないので、肉眼観察によるものである。

煙管 350～353は煙管である。雁首と吸い口がある。350・351は雁首である。350は腐食が著しい。351は側面に継ぎ目が確認できる。352・353は吸い口である。352は羅字の接合部に刻印がある。吸い口内には羅字が残る。すべて真鍮製。350は第1面検出時、352は土坑209、351・353は土坑115から出土。

水滴 355は水滴である。長方形の小箱で、天井部はかまぼこ状に膨らむ。縦4.6cm、横2.1cm、高さ1.2cmある。表面の腐食が激しいが上面の一部には花文が彫られる。真鍮製。第1面検出時の出土。

吊り金具 354は吊り金具である。上下6.25cm。平たく延ばされた両面には菊花文と唐草文がそれぞれ彫られる。上端に径2.4mmの穴をあける。銅製。土坑146から出土。平安時代とみられる。



火箸 356は火箸である。断面円形の細い棒状の火箸である。上端には径1.1cmの球状の飾りを付ける。長さは18.4cm。真鍮製。井戸687出土。

(6) 木製品

木製品は整理箱に換算して30箱以上が出土した。平安時代の濠150内の板列に使用した木材、鎌倉時代の井戸枠の木材や曲物、江戸時代以降の櫛・下駄・木槌などの生活用品も見られる。漆椀も出土しているが、木質部の腐食が著しく図示することができなかった。

板列部材 (図74・75、観察表24) 357～367は板列に使用された部材である (図版33)。357～362は板状を呈する。長さ206.0～216.2cm、幅7.6～10.7cm、厚さ1.0～2.5cmある。側面と端面は成形されているが、割り裂いたとみられ、平坦面は未調整である。「山」と読める刻印が打たれる。363は断面円形の杭である。長さ173.0cm、径10.0cm。先端部を削ってとがらせる。364～367



写真13 出土金属製品

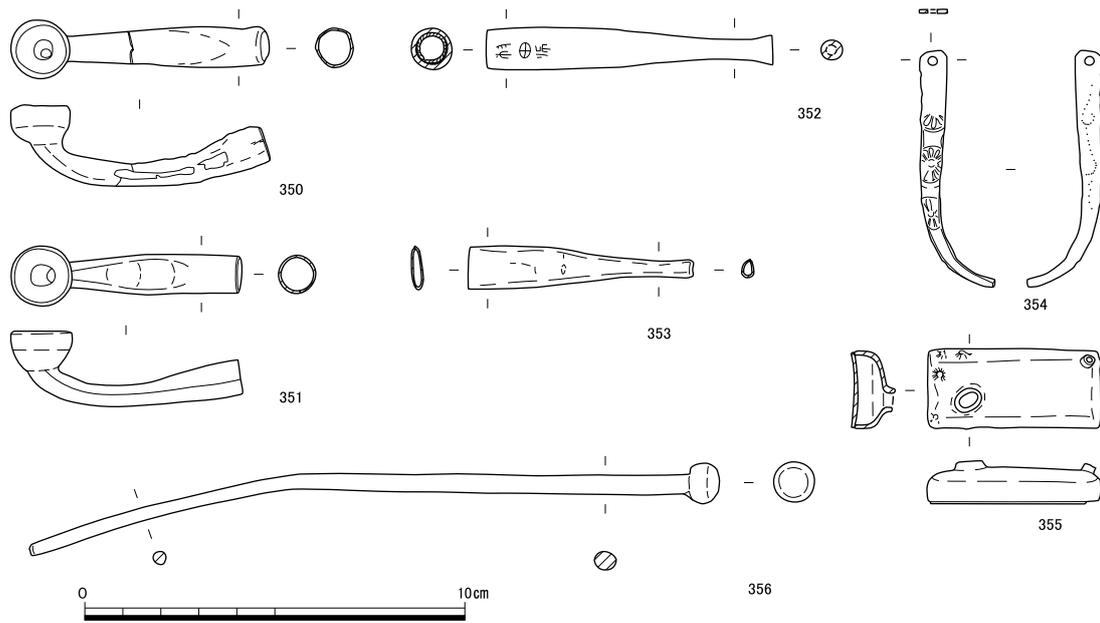


図73 出土金属製品実測図（1：2）

は角材を割り裂いたものである。367は長さ342.8cmの部材である。断面正方形の角材にノミを約40箇所打ち込んで割り裂いている。一辺約18.4cmの柱状の部材を転用したものとみられる。平安時代後期の濠150から出土した。

下駄（図版54、図76・77、観察表24） 368～377は下駄である。多数の下駄が出土した。大別すると連歯下駄（368～374）と、差歯下駄（375～377）がある。連歯下駄には373・374の削り下駄もある。平面形には楕円形と長方形のものがあり、子供用の小型のものも含まれる。368～370・374～376は井戸679、371・372・377は井戸687、373は井戸674の出土である。

盆（図版54、図77、観察表24） 378は盆もしくは皿である。直径23.9cmある。表と裏の表面には成形時についたノミ跡が残る。井戸687出土。

櫛（図版54、図77、観察表24） 379は横櫛である。表面には蒔絵の痕跡があるが、文様は不明である。土坑160出土。

木槌（図版54、図77、観察表24） 380は木槌の頭部である。柄穴には、木製と鉄製の楔が残されている。井戸679出土。

底板（図版54、図77、観察表24） 381は小型の桶の底板とみられる。直径6.1cmの丸い一枚板である。井戸703出土。

札（図版54、図77、観察表24） 382は木札である。長方形で上部に小穴が穿たれる。表裏両面ともに縦方向に「は四十六」と墨書される。縦9.6cm、横4.5cm、厚さ0.8cmある。井戸687出土。

部材（図版54、図77、観察表24） 385・386は部材とみられる。385は縦18.3cm、横3.0cmある。386は縦20.9cm、横5.1cmある。385は井戸679出土。386は井戸687出土。

用途不明品（図版54、図77、観察表24） 383・384は用途不明品である。383は断面円形の棒状を呈する。端部の一方は欠損しているが、他方は平坦に加工されている。残存長20.9cm、径1.8cm



图74 出土木製品実測図1 (1 : 10)

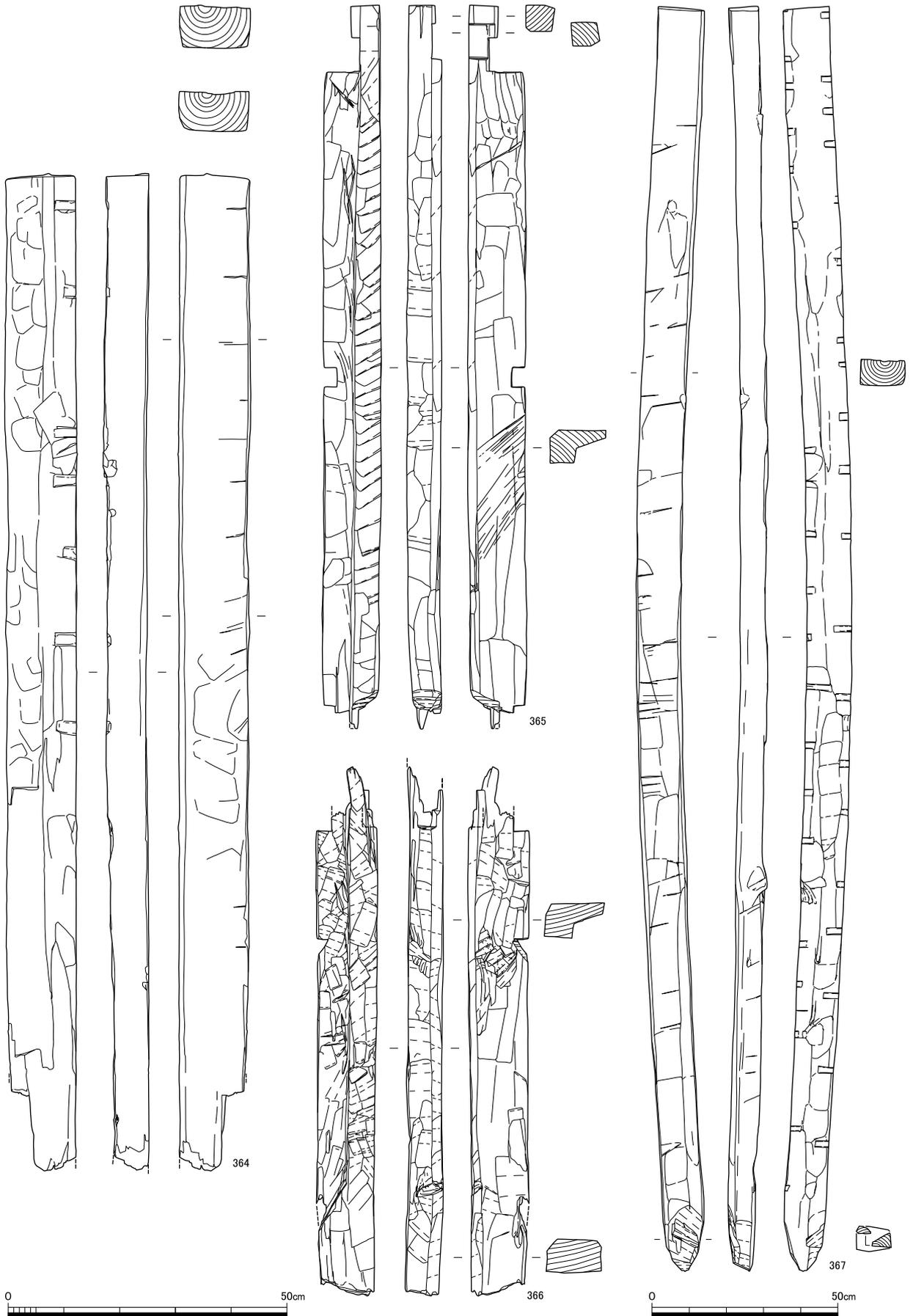
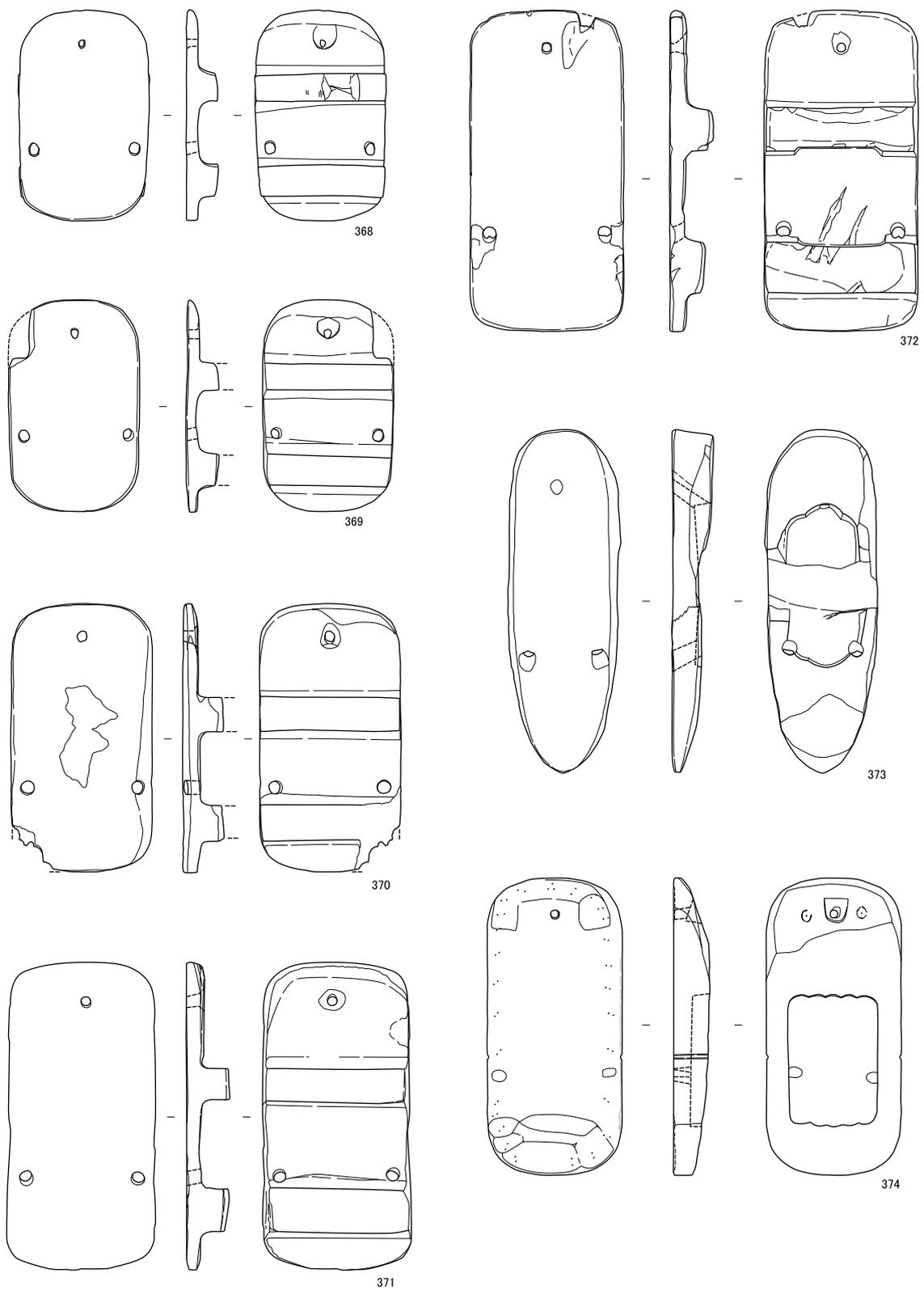


図75 出土木製品実測図2 (1:10、367のみ1:15)



0 20cm

图76 出土木製品実測図3 (1:4)

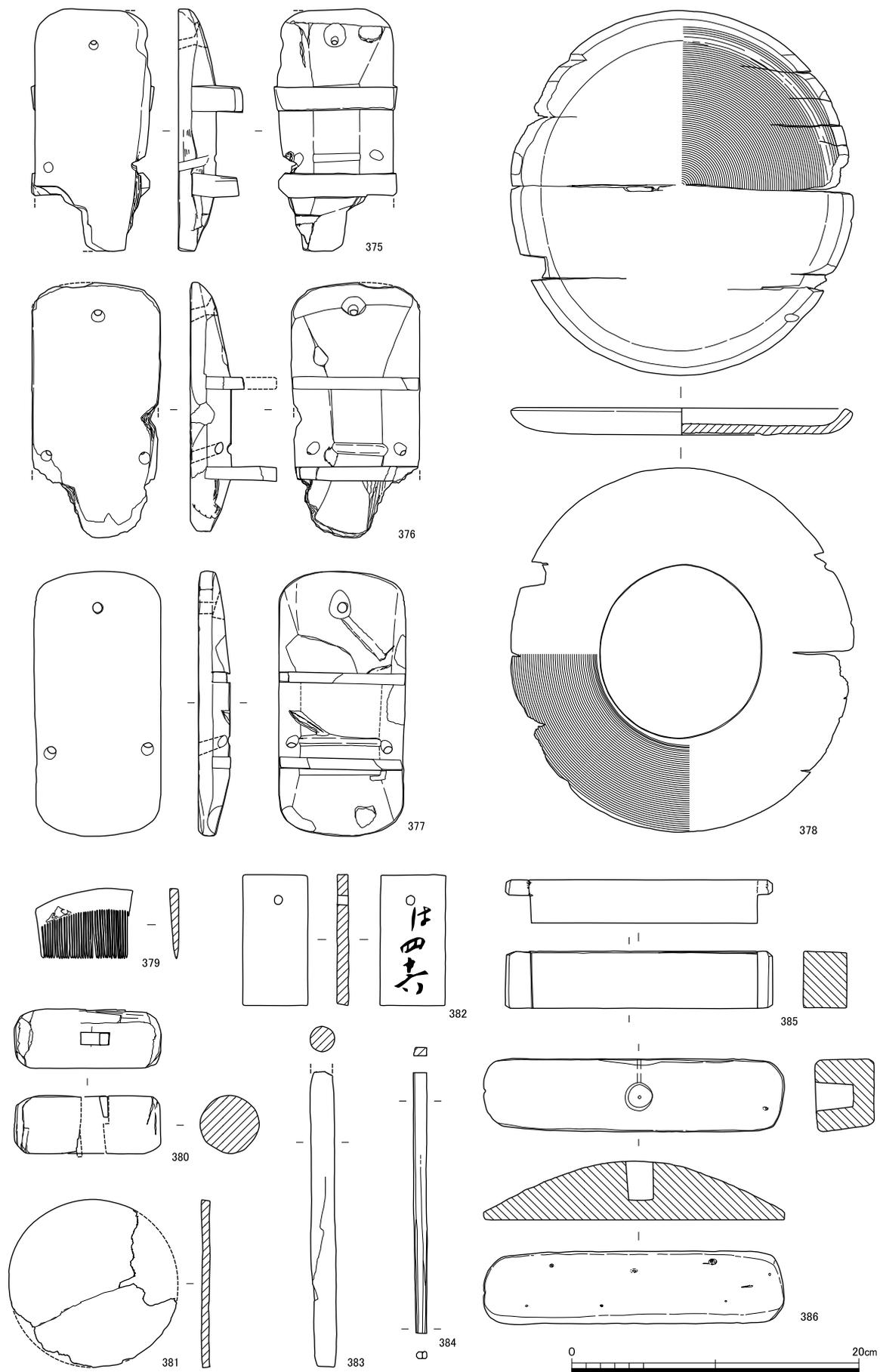


图77 出土木製品実測图4 (1:4)

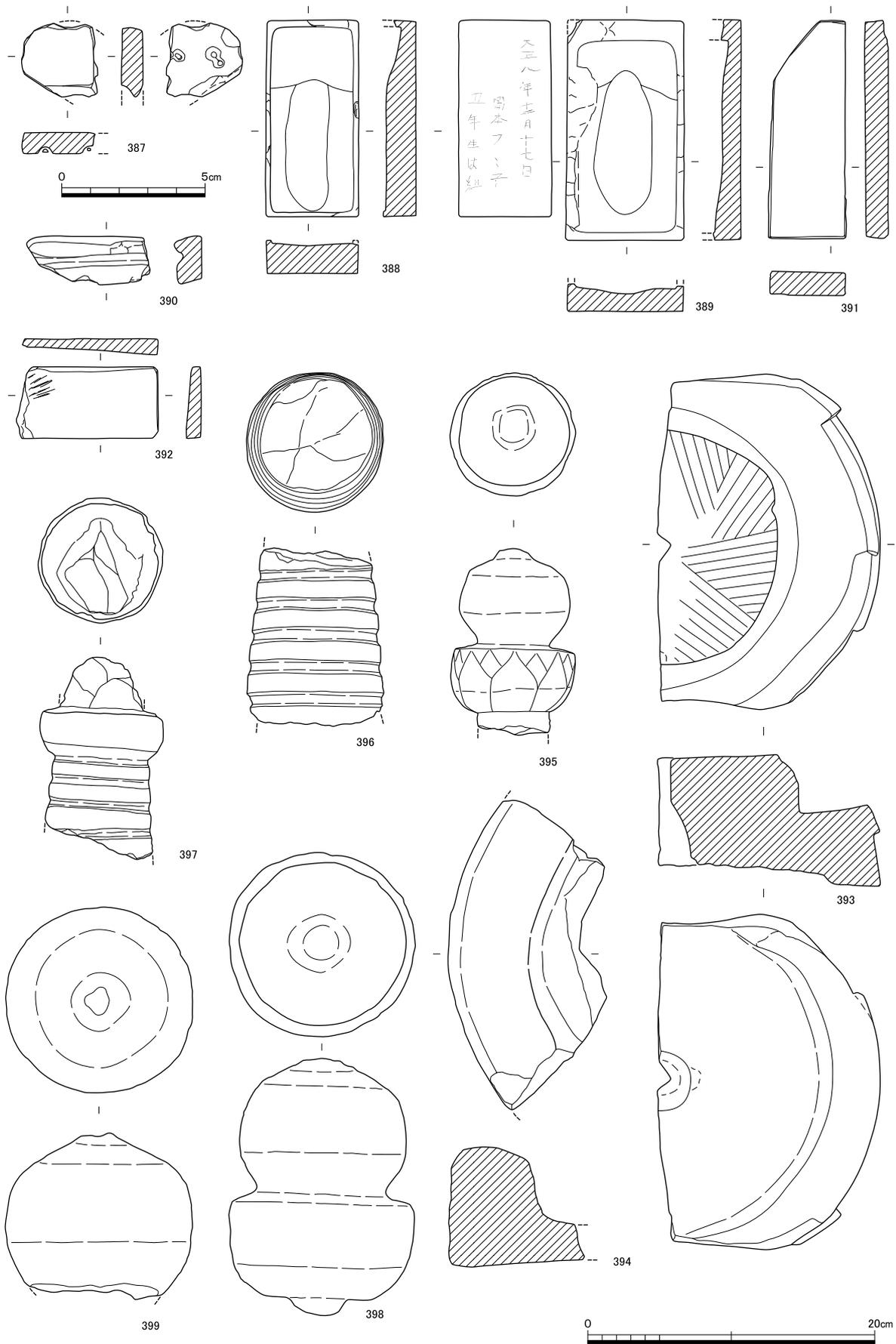


図78 出土石製品実測図1 (1:4、387のみ1:2)

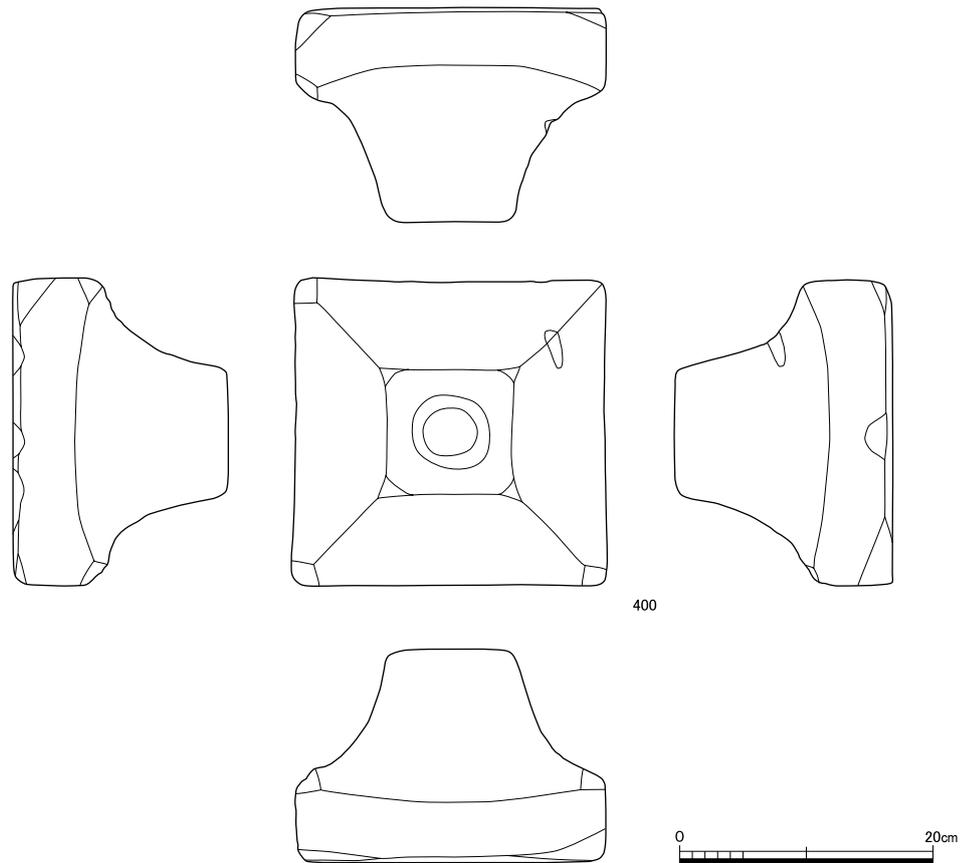


図79 出土石製品実測図2 (1:6)

ある。384は長さ18.3cmある。ともに井戸679から出土。

(7) 石製品

石製品には、石製銚帯・硯・砥石・石臼・石塔類がある。

石製銚帯 (図版55、図78、観察表25) 387は欠損部分が多いが、銚帯の丸柄とみられる。表面と側面の一部は平滑であるが、裏面は粗い調整である。裏面の潜り孔は縦方向と横方向に開けられる。黒色を呈する。平安時代の遺物である。溝833出土。

硯 (図版55、図78、観察表25) 388・389は硯である。大小のものがある。長方形の平面形を持つ。388の裏面には「大正十四年十二月十七日 岡本ス□子 五年生は組」の線刻がある。388は第1面検出時に出土。389は土坑146から出土した。ともに頁岩～粘板岩。

砥石 (図版55、図78、観察表25) 390～392は砥石である。破片は多く出土したが、全体の形を復元できるものはない。390は砥石表面の窪みから細い棒状のものを研いだと推測できる。390は土坑63、391は第1面検出中、392は土坑45から出土した。390は流紋岩。391・392は形質頁岩～形質粘板岩。

石臼 (図版55、図78、観察表25) 393・394は石臼である。393は茶臼の下臼で中央に心棒孔が貫通する。上面には鋸歯文状の目を刻み、周辺には皿状の受けが巡る。393は土坑648、394は井戸

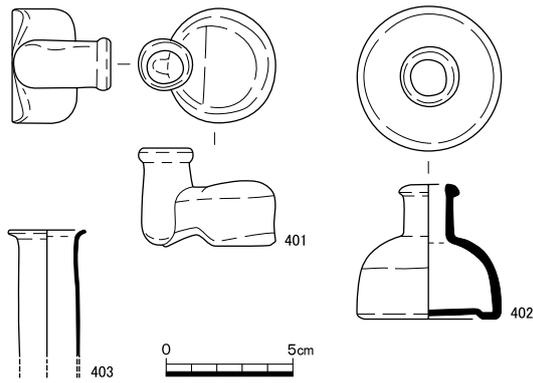


図80 出土ガラス製品実測図（1：3）



写真14 出土ガラス製品

107から出土した。

石塔類（図版55、図78・79、観察表25） 395～399は石塔類である。395～397は宝篋印塔である。395は宝珠と受花部である。受花は花卉が浮彫で表されている。396・397は相輪部である。398～400は五輪塔である。398は空輪と風輪である。一体的に成形されており、頂部に乗せられていたとみられる。399は空輪部分である。400は火輪部分である。上面は窪みを持ち、下面はやや湾曲する。4面に梵字が刻まれるが、風化が著しいため図化できない。395・397・398は現代盛土層、399は土坑680、396は土坑104から出土した。

（8）ガラス製品（図80、写真14、観察表26）

ガラス製品は少量出土した。インク瓶など学校で使用されたとみられる遺物である。

インク瓶 401・402はインク瓶である。401は内面に赤色染料が残る。内部にはコルク栓が遺存する。402は内面に黒色染料が残る。内部にはコルク栓が遺存する。肩部に左回りで「春秋用謄寫版インキ」と陽刻される。401は井戸703、402は井戸687から出土した。

筒状製品 403は器壁が薄く円筒形を呈する。試験管もしくはフラスコ頸部の可能性がある。井戸687から出土。

（9）動物遺体

動物遺体には、牛骨や歯がある。路面900Bから出土した。

（10）月輪小学校内出土の古墳時代の土器（図版56、図81、写真15、観察表27）

昭和55年に京都市東山区本町17丁目358番地に所在する京都市立月輪小学校内で発掘調査が実施された。この調査の成果はすでに「法性寺跡」として『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』で報告されている⁵⁾。紙面の制約により、出土遺物の実測図および写真が掲載できなかった。この法性寺跡は法住寺殿跡と隣接しており、今回と同時期の遺物が出土していることから、ここに当時出土した遺物の一部を報告する。

404・405は壺である。404は直口壺の口頸部で体部は欠損する。外面はタテ方向のヘラミガキを

施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。布留式併行期。落込み19から出土。405は大型の壺の口縁部分で体部は欠損する。いわゆる二重口縁壺である。口縁部は下半を作った後に上半を接合する。口縁部外面はヨコ方向のナデを施す。口縁部内面と体部外面はヨコ方向のヘラミガキを施す。器壁は厚い。胎土は砂粒や小石を多く含む。色調は橙色からにぶい橙色を呈する。

406～412は甕である。406は体部外面にタタキメが明瞭に残る。口縁部内面はナナメ方向のハケメで調整した後にヨコ方向のナデで仕上げる。体部中央に粘土の継目を確認できる。色調はにぶい橙色を呈する。茶灰色泥砂層出土。407は体部から口縁部がくの字状に外反し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面はナナメ方向の細いタタキを施す。体部内面上半はヨコないしナナメ方向のヘラケズリ、下半部はタテ方向のヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。外面底部から体部にかけて著しく煤が付着する。胎土の色調は黒褐色を呈する。河内から搬入された庄内式甕である。庄内式1～2期か。408は体部から口縁部がくの字状に外反する。体部外面はヨコ方向のタタキメを残す。口縁部内外面はヨコ方向のナデで仕上げる。体部内面はハケメを確認できる。色調はにぶい橙色を呈する。河内産の庄内式甕である。409は体部から口縁部がくの字状に外傾する。端部は丸くおさめる。体部外面は不定方向のハケメを施す。口縁部外面はナデを施す。口縁部内面はヨコ方向のハケメ、体部内面はヘラケズリを施す。色調はにぶい黄色から黄褐色を呈する。庄内式甕を模した在地産の甕とみられる。410は口縁部が僅かに内湾する。端部は内側に肥厚する。口縁部内外面はヨコ方向のナデで仕上げる。体部外面下方にはナナメ方向のハケメを施す。体部内面はヨコ方向からナナメ方向のヘラケズリ痕が残る。色調は橙色を呈する。布留式併行期の甕である。411は口縁部が外反気味に立ち上がる。体部外面は不定方向のハケメ調整を施す。口縁部外面はヨコ方向のナデで仕上げる。口縁部内面はヨコ方向のハケメ調整を施す。体部内面にはヘラケズリの痕跡が残る。色調はにぶい黄色を呈する。灰色泥砂層出土。布留式併行期の甕である。412は受口状の甕で肩部から口縁部で、体部下半は欠損する。口縁部がやや内傾して立ち上がり、端部は上方に面を持つ。体部外面と口縁部下半はナナメ方向のハケメを施す。口縁部外面上半と内面はヨコ方向のナデで仕上げる。口縁部外面と体部上方に刺突文を施す。頸部には直線文を巡らす。色調は浅黄橙色からにぶい黄橙色を呈する。近江型甕である。

413は高杯の杯部で脚部は欠損する。杯部は深い。外面はナナメ方向のハケメ調整を施す。内面はヨコ方向のハケメの後ナデで仕上げる。色調は浅黄色を呈する。褐色砂礫層出土。

414・415は器台である。414は裾部から脚部で受部は欠損する。裾部外面はタテ方向のハケメを施す。裾部内面はヨコ方向のハケメを施す。脚部上方に2箇所、下方に2箇所に円孔を穿つ。裾部の径16.0cmある。色調はにぶい橙色から明褐灰色を呈する。灰色砂泥層出土。415は小型器台の脚部から受け部で、裾部を欠損する。裾部を失うが脚柱から脚裾にかけて直線的に開く。浅い受部は緩やかに内湾し、端部は上方につまみ上げる。端部外面には一条の凹線が巡る。全体的に磨滅が著しいが、外面に部分的にヘラミガキの痕跡が残る。色調は橙色を呈する。褐色砂礫層出土。

416は甗である。ハの字状の鉢で、底部は焼成前に外側から穿孔する。内面はハケメ調整後に不定方向のナデで仕上げる。外面は調整不明。底部径2.5cmある。色調はにぶい黄橙色を呈する。褐

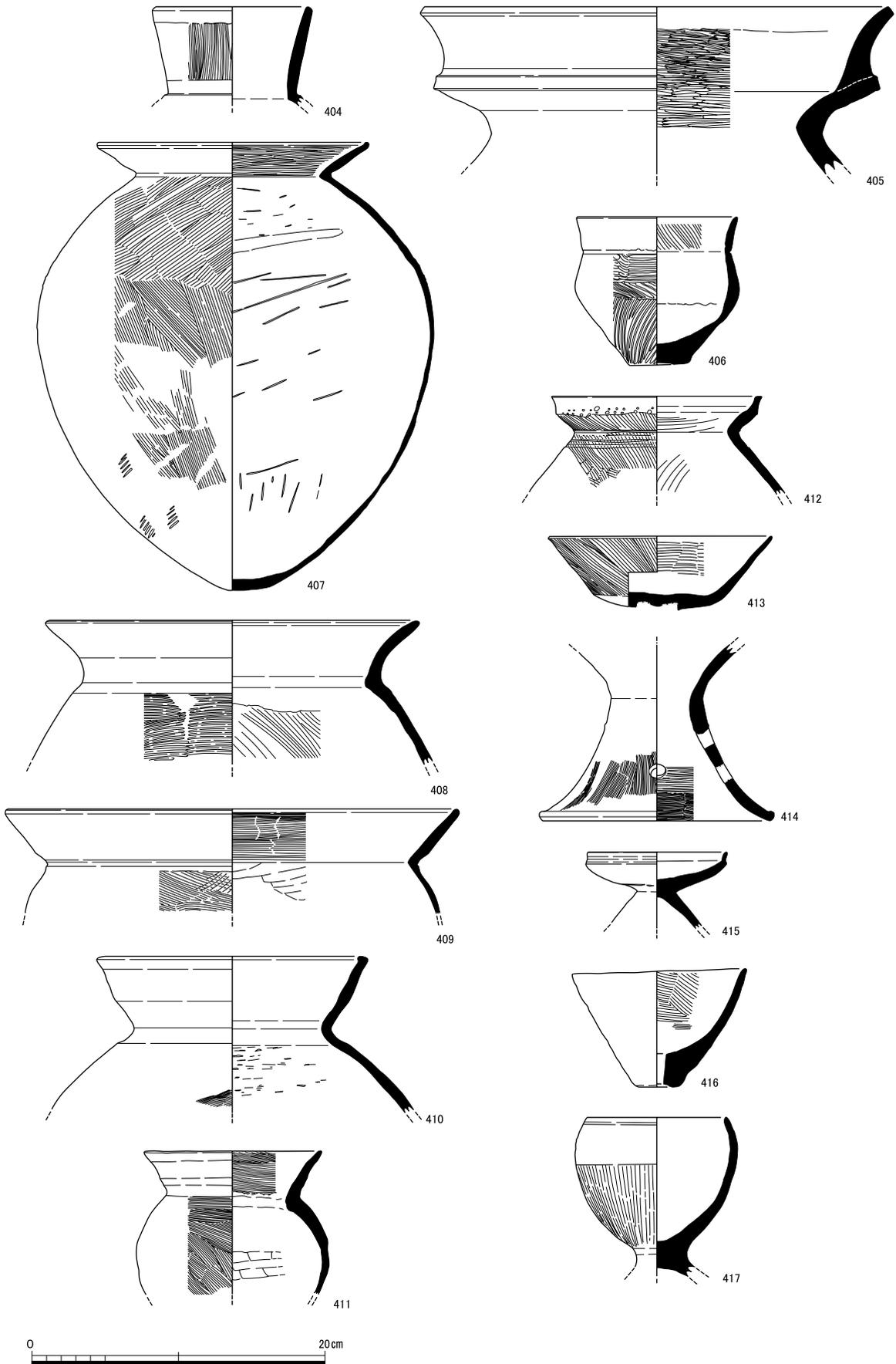


图81 月輪小学校内出土土器実測図（1：4）

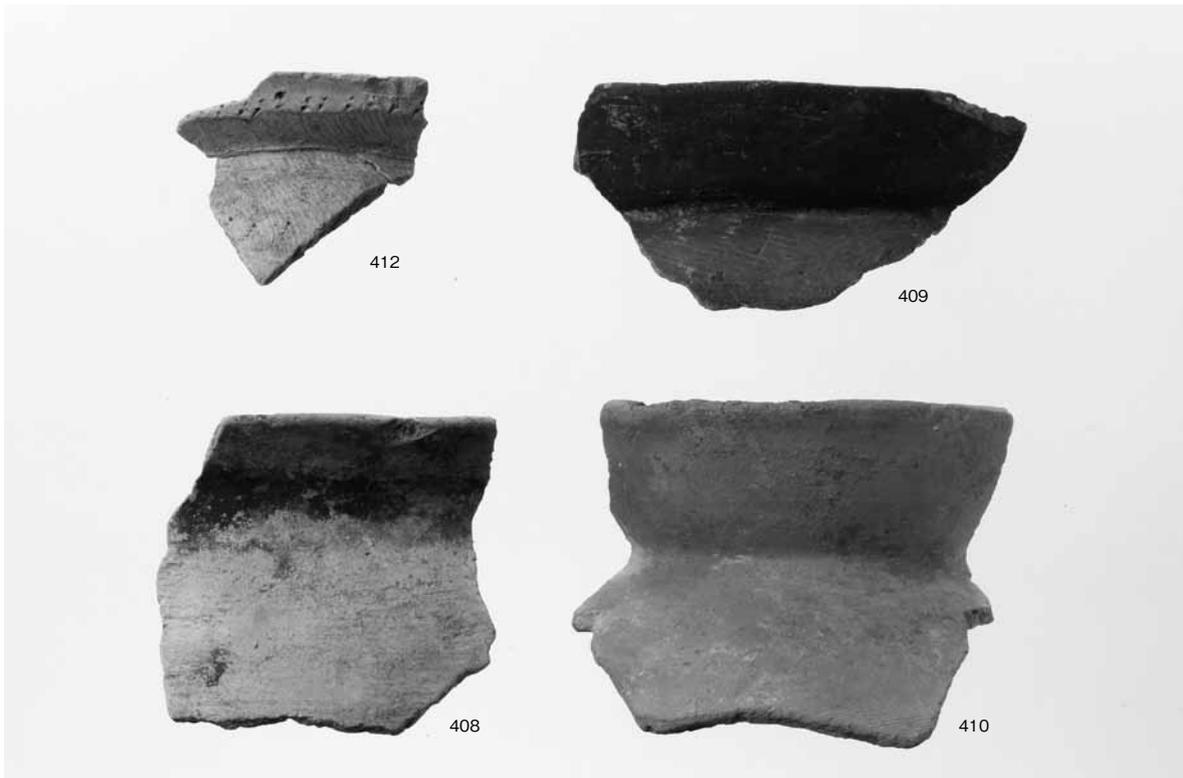


写真15 月輪小学校内出土土器

色砂礫層出土。

417は製塩土器の体部で脚部を欠損する。外面体部下方はタテ方向のハケメ調整を行う。口縁部付近はヨコ方向のナデを施す。内面下半から底部にはヘラケズリの痕跡が残る。色調は浅黄橙色を呈する。胴部最大径は11.1cmある。褐色砂礫層出土。

河内産の庄内式甕が確実に存在すること、布留式甕が含まれること、小型の製品が多いこと、高杯・器台などの供献用の製品が多いことなどが特徴である。

また、図示できなかったが、別の遺構からは飛鳥期から白鳳期に属する土師器高杯が出土している。

(11) 一橋小学校内2次調査出土瓦類（図82～84、観察表28）

一橋小学校内の2次調査（調査No.8）では、井戸1から平安時代後期の軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦がまとまって出土した。概報では詳細な報告がされていないので、以下に報告を行う。

軒丸瓦は14種・31点、不明4点である。軒平瓦は17種・32点である。鬼瓦は3点である。

1) 軒丸瓦（418～431）

418は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし。間弁は菱形である。外区の圏線は細く4箇所途切れ、端は湾曲する。外区は小型珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下位は横ケズリ後ナデ、裏面はオサエである。胎土は細砂含み灰色、表面黒灰色、やや軟質である。山城産。3点出土。

419は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は菱形である。いずれも断面台形状を呈する。外区の圏線は細く4箇所て途切れ、端は湾曲する。外区は小型珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部側面下位は横ナデ、裏面はナデである。胎土は微砂を含み灰白色、やや硬質である。瓦当面に離れ砂付着。播磨産。今回調査320と同範である。調査No.9（池田瓦窯NM19）と同範である。1点出土。

420は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は菱形である。外区の圏線はやや太く4箇所て途切れ、端は湾曲する。外区は珠文が密に巡る。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部裏面は押さえである。胎土は微砂を含み灰白色、表面暗灰色、硬質である。山城産。3点出土。

421は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は菱形である。いずれも断面台形状を呈する。外区の圏線は細く4箇所て途切れ、端は湾曲する。外区は珠文が密に巡る。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部裏面はナデである。胎土は細砂を含み灰色、硬質である。瓦当面に離れ砂付着。播磨産。1点出土。

422は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は棒状である。外区の圏線は細く4箇所て内側に凹む。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上端に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面下位は押さえ、裏面はナデである。胎土は微砂を多く含み灰色、軟質である。山城産。1点出土。

423は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、凸線で接する。間弁は玉状である。外区の圏線は4箇所て内側に凹む。外区は珠文が密に巡る。周縁は幅広く、素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上位は縦ナデ、下位はナデ、裏面はオサエ後ナデである。丸瓦凸面縄タタキ後縦ナデ、凹面布目、側面タテケズリである。胎土は砂粒含み灰色、表面は黒灰色、やや堅い。山城産。3点出土。

424は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は菱形である。外区の圏線は太く、4箇所て内側に凹む。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上端に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上位はナデ、下位は横ケズリ、裏面はオサエ後ナデである。胎土は微砂を少量含み灰白色、硬質である。播磨産。1点出土。

425は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は玉状である。外区の圏線は4箇所て内側に凹む。外区は珠文が密に巡る。周縁はやや広く、素文である。瓦当部成形は不明。瓦当部側面上位は縦ナデ、下位は押さえ、裏面は押さえ後ナデである。丸瓦凸面縄タタキ後縦ナデ、凹面布目、側面タテケズリである。胎土は砂粒を含み灰色、表面は黒灰色、やや硬質である。山城産。7点出土。

426は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁

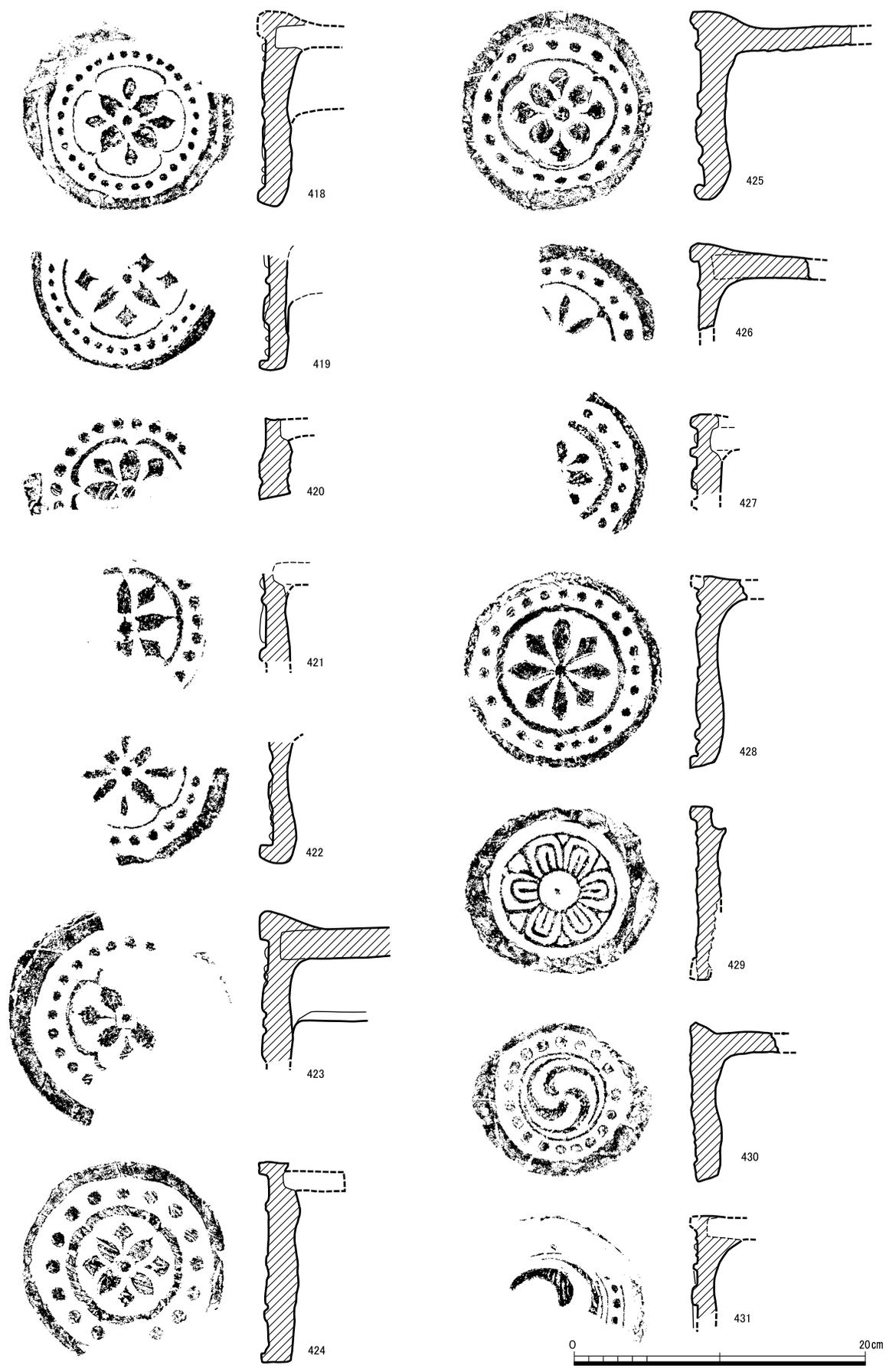


图82 一橋小学校内2次調査出土瓦類拓影・実測図1 (1:4)

は棒状である。外区の圏線は細く、4箇所内側に突起がある。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上部はナデ、裏面はナデである。丸瓦凸面縄タタキ、凹面布目、側面タテケズリである。胎土は砂粒を含み灰白色、表面は黒灰色、やや硬質である。山城産。1点出土。

427は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は玉状である。外区の圏線は太い。外区は珠文が粗く巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上部はナデ、裏面は横ナデである。胎土は微砂を含み灰色、硬質である。播磨産。1点出土。

428は素弁4弁蓮華文軒丸瓦である。蓮弁は紡錘形で子葉なし、間弁は菱形である。外区の圏線は太い。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は不明である。瓦当部側面横ナデ、裏面は押さえ後ナデである。胎土は細砂を含み灰色、硬質である。播磨産。1点出土。

429は単弁6蓮弁蓮華文軒丸瓦である。中心に蓮子1個を配する。中房・蓮弁・間弁は凸線で表し、子葉あり。周縁は幅広い素文である。瓦当部成形は、裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面上部はナデ、下位横ケズリ、裏面押さえである。胎土は細砂を含み暗灰色、表面は灰色、やや硬質である。山城産。6点出土。

430は巴文軒丸瓦である。左巻き3巴文を配する。頭部は離れ、尾部は短く圏線と接しない。文様上部はやや盛り上がる。外区は珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合する。瓦当部上位は縦ナデ、下位は横ナデ、裏面は押さえである。胎土は微砂を含み灰白色、表面は暗灰色、やや硬質である。山城産。1点出土。

431は巴文軒丸瓦である。右巻き巴文を配する。頭部は離れ、尾部は長く圏線と接しない。文様上部はやや平坦である。外区は小型珠文が密に巡る。周縁は素文である。瓦当部成形は、裏面上部に溝を付け、粘土を付加して接合する。瓦当部上下位は縦ナデ、裏面はナデである。胎土は砂粒を含み黄灰色、表面黒色、硬質である。1点出土。

2) 軒平瓦 (432～448)

432は花文軒平瓦である。下向きの花文を連続して4単位配し、間には下に花文、上に三角文を配する。文様は細く繊細である。周縁は素文である。段頸。瓦当部成形は不明である。瓦当部上縁はナデで布端のマツリが残る。頸部下面は横ケズリ、裏面はオサエ後ナデである。平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ナデである。胎土は砂粒を含み灰白色、表面黒灰色、硬質である。大和産。3点出土。

433は花文軒平瓦である。上向きの花文を連続して4単位配し、間には上に花文、下に三角文を配する。周縁は素文である。段頸。瓦当部成形は、完全折曲成形である。瓦当部上縁は横ケズリ、頸部下面は横ケズリ、裏面は押さえ後横ナデで、曲げじわが残存する。瓦当面に布目が残存する。平瓦凹面布目、凸面縦方向ナデ、側面縦ケズリである。平瓦凸面にヘラ記号「ハ」がある。胎土は砂粒を含み灰白色、表面暗灰色、やや軟質である。山城産。調査No.4 (62図5)、六波羅蜜寺・法性寺出土瓦と同範である。今回調査330と同範。7点出土。

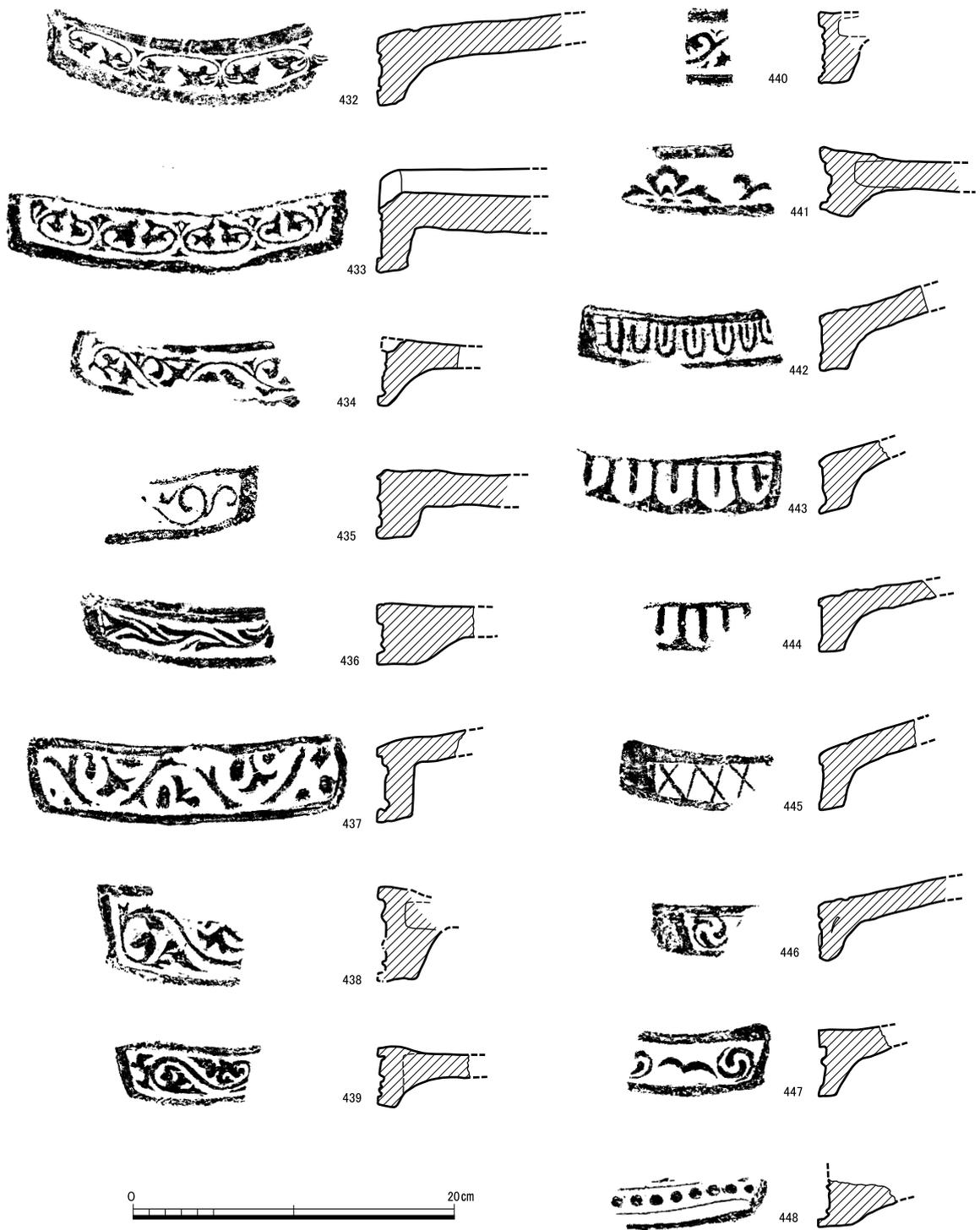


図83 一橋小学校内2次調査出土瓦類拓影・実測図2 (1:4)

434は唐草文軒平瓦である。唐草は右から左へ偏行する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。唐草は細い。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は不明である。瓦当部上縁は縦ナデ、顎部下面は横ナデ、裏面は横ナデである。胎土は細砂を含み灰白色、表面黒灰色、硬質である。2点出土。

435は唐草文軒平瓦である。唐草主葉は左から右へ連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。

周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は完全折り曲げ成形である。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面はナデ、裏面はオサエで、曲げじわが残存する。瓦当面に布目残存する。平瓦凹面は布目、凸面は縦ナデ、側面は縦ナデである。胎土は微砂を含み灰白色、やや硬質である。山城産。2点出土。

436は唐草文軒平瓦である。唐草主葉は右から左へ連続してゆるやかに反転し、支葉が延びる。唐草は太い。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は顎貼り付け成形である。瓦当部上縁は横ケズリ、顎部下面は横ケズリ、裏面は横ナデである。平瓦凹面は布目、凸面ナデ、側面はタテケズリである。胎土は砂粒含み黄灰色、硬質である。1点出土。

437は唐草文軒平瓦である。唐草は右から左へ偏行する。主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。唐草は太く偏平である。唐草は周縁に接し、上下で文様が切れる。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は、瓦当部上端に平瓦をあてる包み込み成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデである。平瓦凹面は布目後横ナデ、凸面は平行叩き後縦ナデ、側面は縦ナデである。胎土は砂粒含み灰色、硬質である。播磨産。2点出土。

438は唐草文軒平瓦である。唐草主葉は左から右へ連続して緩やかに展開し、支葉は巻き込む。周縁は素文である。段顎。瓦当部成形は、瓦当部上部に平瓦をあてる包み込み成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデである。胎土は砂粒含み灰白色、硬質である。播磨産。2点出土。

439は唐草文軒平瓦である。唐草は右から左へ偏行し、左端は左に巻き込む。主葉は緩やかに連続して反転し、支葉は巻き込む。唐草は平坦である。周縁は素文である。曲線顎。瓦当部成形は、瓦当部中位に平瓦を当てる包み込み成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデである。胎土は細砂を含み灰色、硬質である。播磨産。2点出土。

440は偏行唐草文軒平瓦である。唐草は右から左へ偏行する。主葉は緩やかに連続して反転し、支葉は巻き込む。周縁は素文である。瓦当部成形は、瓦当部上端に平瓦をあてる包み込み成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデである。胎土は細砂を含み灰白色、硬質である。播磨産。1点出土。

441は唐草文軒平瓦である。中心飾りは半裁花文で、唐草主葉は緩やかに反転し、支葉は巻き込む。周縁は素文である。瓦当部成形は、瓦当部中位に平瓦をあてる包み込み成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面・裏面は横ナデである。平瓦凹面は布目後ナデ、凸面平行叩き後ナデである。胎土は微砂を含み灰白色、硬質である。播磨産。調査No.4（53図30）と同文である。今回調査334と同範。1点出土。

442は剣頭文軒平瓦である。陽刻剣頭文を配する。剣頭文は単弁で子葉あり。周縁は素文である。瓦当部成形は半折曲成形である。瓦当部上縁はナデ、顎部下面は横ナデ、裏面はオサエである。平瓦凹面は布目、凸面はナデ、側面はタテケズリである。胎土は細砂含み灰白色、表面黒灰色、硬質である。山城産。1点出土。

443は剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文を配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、折り曲げ成形である。瓦当部上縁はナデ、顎部下面は横ナデ、裏面は押さえる。平瓦凹面は布目、凸面は押

さえである。胎土は細砂を少量含み灰白色、表面は黒灰色である。やや硬質である。山城産。2点出土。

444は剣頭文軒平瓦である。陰刻剣頭文を配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、折り曲げ成形である。瓦当部上縁はナデ、顎部下面横ナデ、裏面は押さえ後縦ナデである。平瓦凹面は布目、凸面は押さえ、側面は縦ナデである。胎土は砂粒を含み灰白色、軟質である。山城産。2点出土。

445は格子文軒平瓦である。細い格子文を配する。周縁は素文である。瓦当部成形は、半折り曲げ成形である。瓦当部上縁は横ナデ、顎部下面は横ケズリ、裏面は押さえである。平瓦凹面は布目、凸面は縦ナデ、側面はタテケズリである。胎土は砂粒を含み黄灰色である。硬質である。山城産。1点出土。

446は巴文軒平瓦である。左端に巴文を配するが、右側は不明。巴は右巻き三巴で、頭は接しない、尾は互いに接する。周縁は素文である。瓦当部成形は、半折り曲げ成形である。瓦当部上縁横

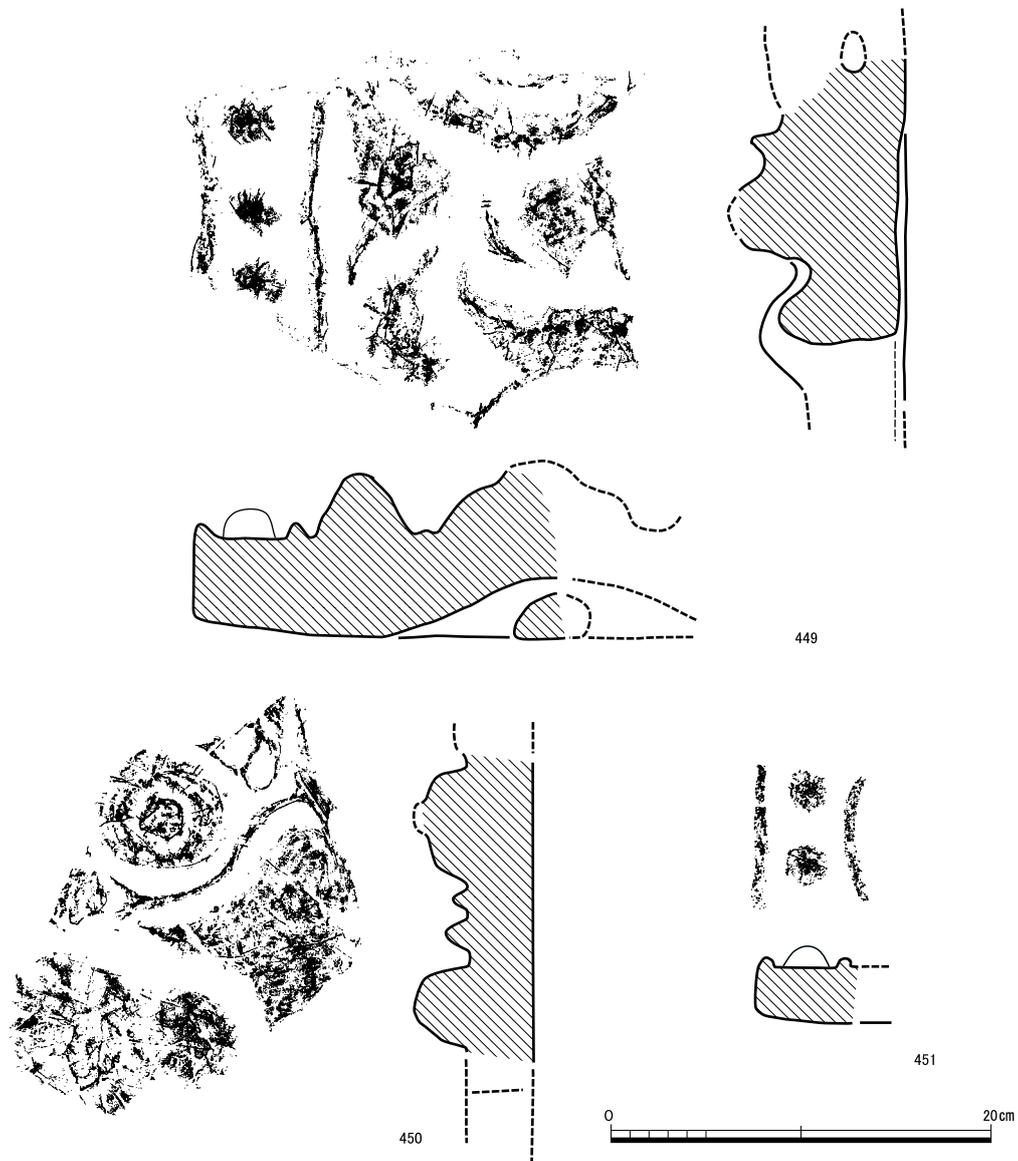


図84 一橋小学校内2次調査出土瓦類拓影・実測図3（1：4）

ナデ、顎部下面オサエ、裏面押さえ後ナデである。平瓦凹面は布目、凸面は縦ナデ、側面は縦ケズリである。胎土は砂粒を含み暗灰色、表面は灰色で、やや軟質である。山城産。1点出土。

447は雁巴文軒平瓦である。巴文と雁行形を交互に配する。巴は左巻き二つ巴で、頭も尾も接しない。周縁は素文である。瓦当部成形は折り曲げ成形である。瓦当顎部下面横ナデ、裏面横ナデである。平瓦凹面は布目、凸面はナデ、側面はタテケズリである。胎土は砂粒を含み灰色、表面黒灰色、硬質である。山城産。1点出土。

448は連珠文軒平瓦である。連珠を密に配する。上下に界線あり。周縁は素文である。瓦当部成形は、顎貼り付け成形である。瓦当顎部下面横ナデ、裏面縦ナデである。胎土は砂粒を含み灰色、表面黒灰色、硬質である。1点出土。

3) 鬼瓦 (449～451)

449は鬼面文鬼瓦である。鼻は大きく盛り上がり、横長である。頬も盛り上がる。上唇がやや盛り上がり歯・下顎なし。裏面は平坦で、中央に刳りあり。外区は、大型連珠が密に巡る。側面・内刳り内はナデ、裏面ナデである。胎土は砂粒を多く含み灰色、表面黒灰色、硬質である。1点出土。

450は鬼面文鬼瓦である。眼球は半球状で、瞳が盛り上がる。鼻は大きく盛り上がり、横長である。頬もやや盛り上がる。裏面は平坦である。全体成形は范型による。裏面ナデである。胎土は砂粒を含み灰白色、硬質である。1点出土。

451は鬼瓦である。外区は、大型連珠が巡る。全体成形は范型による。裏面は平坦である。側面はナデ、裏面ナデである。胎土は砂粒を多く含み灰白色、表面暗灰色、硬質である。1点出土。

註

- 1) 土器の名称と年代観については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年によった。
- 2) 『木村捷三郎収集瓦図録』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 『平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 4) 「成勝寺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5) 「法性寺跡」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年

5. まとめ

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代以降に分けられる。ここでは、これまでの周辺の調査成果も含め、今回の調査で検出した遺構の変遷を時代ごとにまとめておく。

1) 古墳時代 (図85・86)

今回の調査で検出した最も古い遺構は、古墳時代のものである。調査区中央部において古墳時代初期の竪穴住居10棟・溝2条・数基の土坑を検出した。竪穴住居は壁溝や支柱穴など竪穴住居を構成する施設がある程度揃い、竪穴住居と認識できるものを取り上げているが、平面形が方形を呈する窪みや、焼土の痕跡がみられるだけのものは除外しており、実際はもっと多く存在したと推定できる。

竪穴住居群は、中央部北側で検出した東西溝403より南側に集中し、中央部より北側では確認していないことから、かなり狭い範囲内に、短期間で竪穴住居が建て替えられていることがわかった。溝403から北側は、北方向に緩やかに低くなる地形となっている。また、溝の北側には土器廃棄土坑があるが、住居は確認されていないことから、溝403は住居域を区画する施設と考えられる。調査区内では竪穴住居が位置する中央部の標高が最も高くなっており、溝403南側の微高地上に集落が営まれていることがわかった。

竪穴住居などは、遺構の重複関係や出土した土器などからA～Eの5期を想定した。A期には竪穴住居340・346・399、B期には竪穴住居330・339・347、C期には竪穴住居314・321、D期には竪穴住居412・559、E期には土坑546がある。なお、竪穴321は支柱穴が2基で、内部に特殊な構造の炉が造られていることから、工房用建物であった可能性が指摘できる。これらの竪穴住居の方位は、340のみが北で東に18°振れるが、それ以外はいずれも北で西に22～42°振れる。住居などから出土した遺物は、庄内式併行期の土器が多くを占めるが、布留式併行期の土器もみられた。出土した土器には河内地方から搬入された甕や、近江地方の影響を受けた甕も多くみられる。今回検出した竪穴住居群は、この周辺では初めての事例となり、古墳時代初期の集落が明らかになった。

調査地の立地する鴨川左岸では、これまで弥生時代末期から古墳時代前期の遺構や遺物が数箇所確認されている。ここでは、調査地周辺から深草地域北部(十条通以北)までの範囲で、弥生時代中期から古墳時代前期までの集落についてみてみたい。

調査地の北側からみていくと、法住寺殿下層北部にあたる京都国立博物館の調査No.33で、弥生時代末期から古墳時代初期(庄内式併行期)の土器が出土している(図86-1)。西側の調査No.17では、古墳時代(詳細時期不明)の土坑を検出している(図86-2)。

東側に位置する南日吉町¹⁾では、古墳時代初期(庄内式併行期)の土器が採集されている(図86-3)。また、泉涌寺境内²⁾では、弥生時代後期から古墳時代前期の土師器が採集されており、ここでは高地性集落の可能性が言及されている(図86-4)。今回調査と同校内の調査No.6では、遺物包含層から弥生時代末期から古墳時代前期の土器が出土している(図86-5)。同じく校内の調査No.

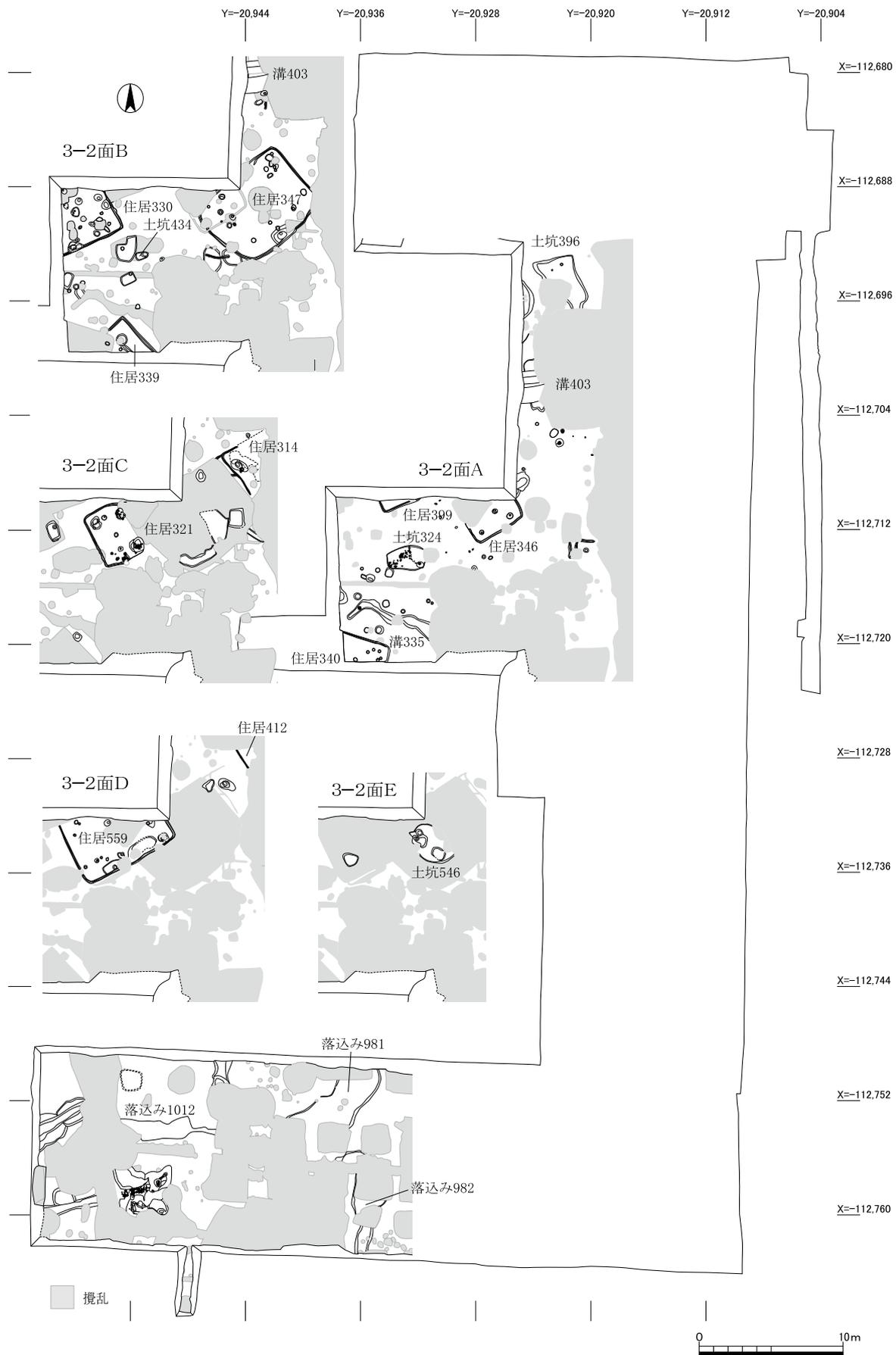


図85 古墳時代の遺構概要図 (1 : 400)

18においても、大型土坑より弥生時代から古墳時代の遺物が出土している（図86-6）。そして、今回調査では、竪穴住居10棟・溝・土坑・ピットを検出した。（図86-7）。

一方調査地の南側では、付章で出土遺物を報告する法性寺下層にあたる月輪小学校校内の調査³⁾で、弥生時代後期から古墳時代初期の遺物が、土坑・流路・落込みから多量に出土している。古墳時代初期の土器は庄内式併行期から布留式併行期に属する。土器断面には磨滅が少なく、接合復元できるものが多いことなどから、至近に住居など生活の場が存在するとみられる。出土した遺物の時期は、今回の法住寺殿下層とほぼ同時期である（図86-8）。さらに南側になるが、同じく法性寺下層にあたる福稲上高松町の調査⁴⁾では、時期は古くなるが、弥生時代中期から後期の方形周溝墓8基の検出があり（図86-9）、周辺の遺跡との関連性が注目される。

今回の調査地は、東山から派生した尾根が西側に延び、鴨川東岸の尾根の先端上に立地した古墳時代初期の集落跡であると考えられる。北方の京都国立博物館周辺や南方の法性寺下層に当たる地域も、同様に東側から張り出した尾根の先端付近に立地しているとみられる。今回検出した集落跡は、鴨川東岸において最も鴨川に近い距離にある集落となった。

2) 奈良時代（図87・88）

調査区中央部で掘立柱建物を5棟検出した。これらの建物は重複している部分があることや、建物の方向に違いがあることなどから建て替えがあったとみられ、複数の時期にわたると考えられる。

建物の規模は2間×3間以上の南北棟が1棟あり、ほかの建物は攪乱により規模は不明である。建物の方位は、真北方向の建物268、西へ2°振れる建物311・318と、東へ3～8°振れる建物325・263と3グループに分けられる。しかし、建物311と318は方位が同じであるが重複する部分もあり、建物の配置については不明な部分が多い。また、溝332は建物325の南辺と平行していることから、敷地内における小区画に関連する遺構の可能性はある。

南方の深草地域や北方の八坂地域などでは、以前からこの時期の遺構が知られているが、今回の調査で建物・土坑・溝などの遺構を検出した。当地で集落として確認できた初めての成果である。

ここでは調査地周辺の八坂地域から深草地域北部（十条通以北）までの範囲で、飛鳥・白鳳期か



図86 洛東地域南部の古墳時代遺構分布図
(1 : 40,000)



図87 奈良時代の遺構概要図（1：400）

ら奈良時代までの遺跡についてみてみたい。

北側では、法観寺旧境内の調査で、白鳳期の埴
仏が出土している(図88-1)。また、珍皇寺旧
境内北の調査では、飛鳥期の瓦がまとまって出
土している(図88-2)。1・2ともに寺院に関
わりをもつ遺跡と考えられる。

法住寺殿下層北部にあたる調査No.33で、飛鳥
期から奈良時代の土師器・須恵器が少量出土し
ている(図88-3)。集落の可能性については不
明である。

今回の調査では、狭い範囲内に掘立柱建物5
棟とピット・土坑・溝などを検出し、建物には
造り替えがあることも判明している。この地域
では初めての建物の発見となった(図88-4)。

一方南側では、法性寺下層にあたる月輪小学
校校内の調査で飛鳥期から白鳳期の遺物が、土
坑や落込み状遺構から出土している(図88-
5)。出土した土器断面には磨滅が少なく、至近
に住居など生活の場が存在すると推定される。

鴨川東岸部には、奈良から宇治・深草を通り、
当地近辺を通過し、八坂・岡崎・出雲路・北白川方面に至る奈良時代の古代道路があったとみら
れる。東山から派生した尾根の先端部上で検出した今回の遺構群は、この道路沿いに立地している
とみられ、今後の周辺での資料の増加が望まれる。

3) 平安時代前期(図89)

平安時代前期には遺構が増加する傾向があるが、後世の遺構によって削平されている部分が多
く、部分的にしか残存していない。

調査区の南西端部分で、路面900Cを検出した。礫敷き面から平安時代前期の遺物が出土するこ
とから、法性寺大路に先行する南北道路の可能性はある。他には、調査区南部中央付近で土坑822・
855・863など数基の土取穴を検出した。これらの土取穴には、規模・形状・配置に規格性が見ら
れないことから、後述する北部で検出した平安時代中期の瓦窯に関連する土取穴群とは性格を異
にするとみられる。

なお、これらの土坑から出土している土器類は、I期に属する遺物で、黒色土器の比率が極めて
高かった。また、後世の遺構からも緑釉陶器や灰釉陶器などが一定量出土しており、この時期の土
地利用の状況を推定できる資料となった。



図88 洛東地域南部の奈良時代遺構分布図
(1 : 40,000)

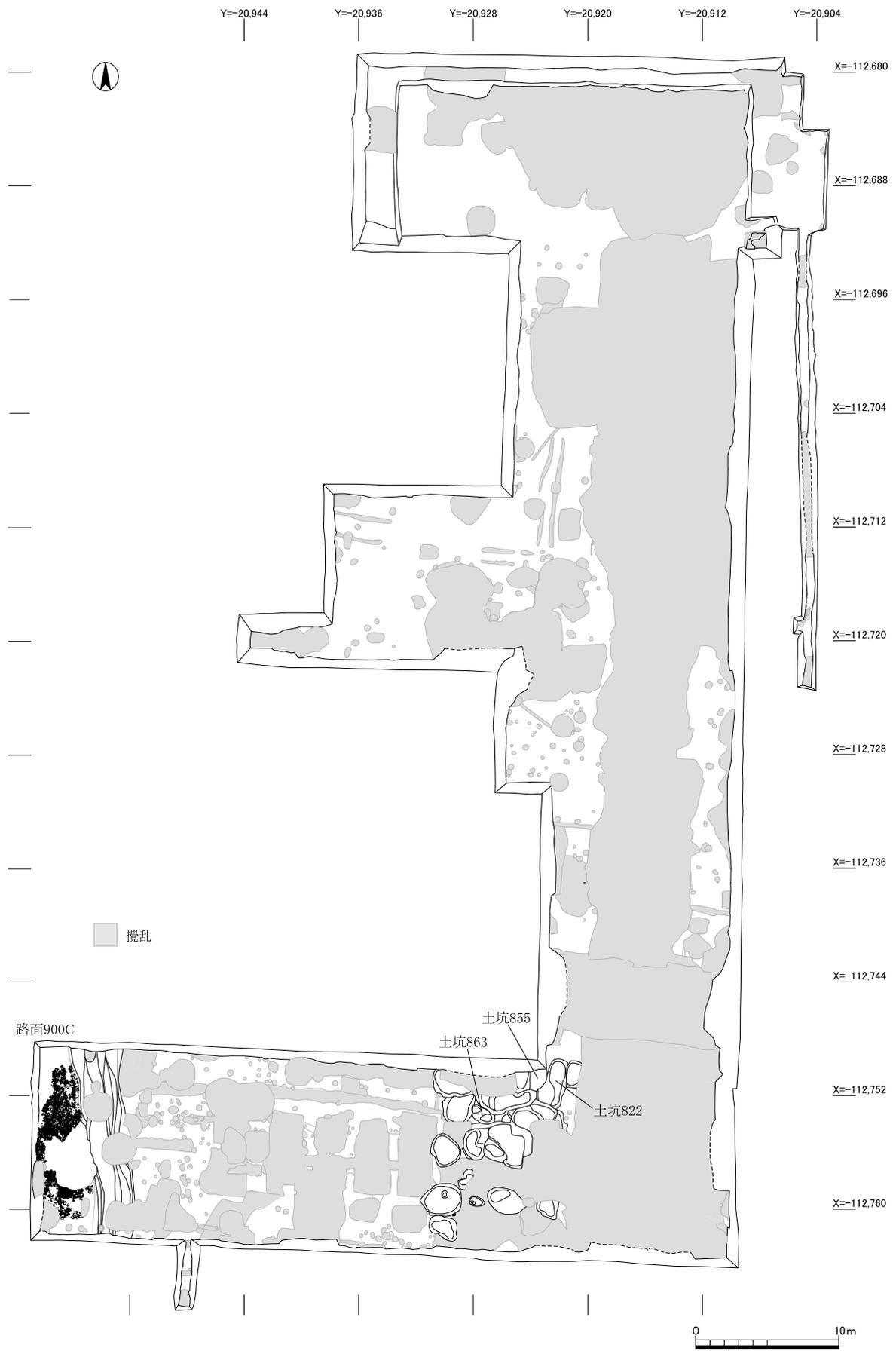


図89 平安時代前期の遺構概要図（1：400）



図90 平安時代中期の遺構概要図 (1 : 400)

4) 平安時代中期 (図90)

調査区の北東部で、土取穴群を検出した。これらの土坑の平面形は、概ね楕円形や隅丸方形を呈する。一部に不定形を呈する土坑もあるが、これらは粘土層が途切れる箇所で粘土採掘を中止したためと考えられる。各土坑の規模は、一辺3m前後と一定の大きさを呈しており、これらの土坑群は、4列ないし5列が東西方向に整然と並んでいることが確認できる。調査区北壁の土層観察からは、この土坑群はさらに北側の調査区外に拡がるのが想定できる。これらの土坑は、灰黄色から褐灰色の精良なシルトおよび粘土層を掘り窪めており、底部には凹凸があり、砂質土層や砂礫層が露出していた。土坑群の南端には粘土層は存在せず、砂礫の堆積層となっていることから、これらの土坑群は粘土を採掘した結果と考えられる。また、土坑内の埋戻し土にはラミナ層が見られないことや、遺物がごくわずかしか出土しないことなどから、ごく短期間の後に埋め戻されたとみられる。さらに埋土層の観察から平安時代後期の整地層によって覆われていることがわかる。

以上のように、土取穴群は粘土採掘坑と推定でき、このように多量の粘土が効率的に採取されるのは、土壁築造などの土木工事、土器や瓦の製作などが想定できる。検出地点の北側約60m地点には、平安時代中期に操業していた池田瓦窯が存在しており、また調査地内で池田瓦窯で生産された軒瓦が少なからず出土している。このことから、ここで採取された粘土が池田瓦屋に供給された可能性が高いと考えられる。

瓦屋の内部構成は、粘土採掘場・工房地区・瓦窯地区・製品置場および工人居住区に区分される⁷⁾。粘土採掘場と瓦工房地区とは近接する場合が通常であり、吹田市吉志部瓦窯では約20m、郡山市西田中瓦窯では近接し、木津町上人ヶ平瓦窯では約100mの距離である。今回の場合は、工房地区の場所は不明であるが、同様の条件を備えていたと推定できよう。

今回の粘土採掘土坑の規模は、一辺2～3mで、深さは約1m程度であり、吉志部瓦屋の一辺6～7mに比べるとやや小規模である。『延喜式』の木工寮掘埴条に「掘開埴土一人一日立方五尺。堅埴減一尺。一人一日取埴大二千斤。堅埴減一千斤。」とあり、これに比べると今回の採掘土坑の規模はやや大きいといえる。

5) 平安時代後期前半 (図91)

当該期の遺構は、最勝光院造営時の整地層の下位に分布する遺構群である。北部で数基の柱穴を検出しており、掘立柱建物の存在を想定できる。一橋小学校校内の調査No.6において掘立柱建物の北西隅部を検出しており、これと同一の建物には復元できないが、同時期に存在した建物の可能性が考えられる。

一方、1区南部で東西方向の濠150を検出した。校内の調査No.8で検出した堀3は、濠150の西側延長上にあたり、形態・方向・規模・埋土から、同一の遺構と考えられる。堀3と濠150の位置関係から、濠の方向は西で7°北へ振れることとなる。この方向は、調査地南側に位置する東西道路である観音寺大路と類似する。

濠150は、素掘りのままで護岸施設は見られないが、濠の内部には、濠の方向に直交して南北方向の木組みが造られる。木組みの下端は底部から離れ、濠がある程度埋まった時点で施工されたと



図91 平安時代後期前半の遺構概要図（1：400）

考えられる。木組みの上部の縦板は、横材に釘などで恒久的な造作は施されず、濠を埋める段階でこれらの施設を構築した簡易な施設の可能性が高い。埋土は、木組みを境にして異なり、木組み施工後に別々に埋められたと推定でき、堆積状況や遺物の量が少ない事から、短期間で埋められたと考えられる。また、埋土底部には微砂層などの明瞭な水流の痕跡はない。

濠の掘削時期は、明確ではないが、埋められた時期は、出土土器から、平安時代後期（12世紀後半頃）に属する。なお、濠150の上部は、平安時代後期後半の最勝光院造営時と考えられる整地土に覆われ、堀3では南北道路東築地に相当する部分に石積み地業を施し埋められる。このことから濠150は最勝光院造営前に掘削され、最勝光院造営の際には完全に埋め戻されたと考えられる。

調査地北側の大谷中・高校校内の調査No.9では、調査区南側で同様の東西方向を示す水路（以下、水路1とする）が検出された。水路1は法住寺池の汀線から南約20mに位置し、汀線と方向が並行することから池と関係があると考えられた。水路1内では、側壁と直交するような状態で縦板列が5列検出された。縦板列の構造は、打ち込んだ杭に棧を渡し、この横棧に対して縦板が密に立て掛けられている。縦板の下端は、水路底面まで達していないものが多く、底部に約0.1m程度泥土が埋まった段階でこれらの木組み縦板列が施工されたことがわかる。水路1の掘削時期は、遺構の性格から明確に確認できないが、埋められた時期は、出土した土器から、平安時代後期（12世紀後半頃）に属する遺構である。水路1は、池から鴨川への排水路で、流水の速さを調節する施設と推定された。

濠150と水路1とを比較すると、規模は濠150の方が水路1より一回り大きく、両者の断面形状は、いずれも逆台形を呈する。さらに内部に設置された木組み施設は、構造上各々若干異なっているものの、敷設過程や埋土の状況などに類似点が見られる。

濠150と水路1は、南北に約120m離れているが、ほぼ同方向で、両者共に法住寺池に接続すると推定できる。両遺構は何らかの関連があると考えられるが、いずれの遺構もその性格については不明な点が多い。

6) 平安時代後期後半（最勝光院期）（図92）

平安時代後期後半の段階では、調査区全域で整地層を検出した。この整地層は最勝光院建立のための大規模な造営事業と推定できる。東山から鴨川に至る傾斜地の低位側に位置する当地では、およそ2mの厚さにも及ぶ大規模な盛土により整地がなされ、平坦面を造成している。整地の際には、一定の区画を設定した上で粘質土や砂など様々な質の土砂を用い、盛土の高さも複数段階に分けて嵩上げたことがわかった。整地層では、建物の基礎地業と考えられる地業55・56・60・62・166などの遺構を5箇所検出した。

調査区の北側では地業55を検出した。規模を確定する目的で拡張区を設定したが攪乱によって南端を検出できなかったが、南北24.5m以上、33.2m未満という規模をもつことがわかった。東西幅は不明である。ただ東側には法住寺池が位置したと推定しているため、東辺はそれまでの間に位置することとなる。西辺は約8mにわたって検出しており、主軸方向は真北方向である。地業60は、地業55南辺から約17.3m南に位置する。主軸方向は西で10°北に振れる。南辺は確認したが



図92 平安時代後期後半（最勝光院期）の遺構概要図（1：400）

他の辺は未確認で、範囲は不明である。調査区中央部では地業56・62・166を検出したが、部分的であるため、範囲や上部の構造は不明である。調査区西部では、最勝光院の西築地基底、街路路面900A・東側溝833を検出した。校内の調査No.8で検出されている路面・東側溝と位置関係やその規模から連続する同一の遺構と考えられる。

さらに今回は調査区を一部南方向に拡張したことにより、最勝光院の南を画するとみられる東西方向溝880を検出した。溝880は現在の泉涌寺道の北側約1mに位置することから、最勝光院の南を限る観音寺大路が踏襲されていると考えられる。

検出した建物地業の位置からは、数棟の建物が近接した状況で位置したと想定できる。最勝光院の寺域は、北部は梅小路末付近、東辺は法住寺池西岸、南辺は溝880を検出したことから泉涌寺道(観音寺大路)、西辺は前回調査で西築地を検出していることから本町通(法性寺大路)と考えられる。大谷中・高等学校の調査No.9地点から瓦類が多量に出土していることから、調査No.9地点付近に中心建物である阿弥陀堂が法住寺池に東面して建てられている可能性が高い。今回検出した建物地業は、この南側に位置していることから、中心建物の南側に展開した建物群に相当するものと考えられる。

杉山信三氏によれば、⁸⁾最勝光院内では御堂(阿弥陀堂)を中心として、北側に北二階廊・北卯酉廊、南側に南二階廊・子午廊(小御堂)・南卯酉廊・中門・中門廊・南門などの建物群があったとされる。その他位置は不明であるが、透渡殿・透廊・西対・進物所屋などがあったことが文献資料から知られる。今回の建物地業は、御堂の南側に位置する前述した建物のいずれかに相当する可能性が高い。最勝光院の寺域南部は北部に比べて東西幅が狭くなり、約半町と推定されている。地業55と地業60の主軸の方向に違いがみられることなども考慮すると、建物の建て替えの可能性も考えられるが、これらの建物が各々近接した位置にあることは明白となった。

また、今回の調査では、この時期に該当する井戸は検出できなかった。最勝光院の推定寺域内では、今回を含めて約3,900㎡に及ぶ面積の発掘調査が実施されているが、井戸は調査No.8で検出された井戸1の1基のみである。今回の調査区内で確認された後世の削平や攪乱坑の深度は、井戸1底部の標高には達していないことから、この範囲内には他には井戸が存在していないと考えられる。井戸1の位置は、西築地から10m以内に位置しており、推定寺域の南西部にあたり、この付近に寺内の家政機関などの施設が想定できる。今後の最勝光院内の建物配置を考えていく上で重要な資料となろう。

今回検出した建物基礎地業は、石列または石積みで区画し、区画内に石敷きと盛土を行う工法である。このような地業は、これまで平安京内外の発掘調査において多数の類例が検出されている。平安京内では左京二条二坊高陽院・右京六条一坊六町など、平安京に近接する場所では御室法金剛院西御門・築山、白河殿内の尊勝寺観音堂・延勝寺御堂・歓喜光院・二条末北側築地など、鳥羽殿内の金剛心院釈迦堂・阿弥陀堂・西側築地・勝光明院経蔵・北殿・泉殿などで検出されている。⁹⁾このような地業は、平安時代後期から鎌倉時代に施工された基礎工事であり、同一の場所においても様々な工法が用いられたことが明らかになった。

7) 鎌倉時代 (図93)

鎌倉時代の遺構は、2区の西側で井戸や土坑などが少数みられるのみである。後世に行われた削平により遺構が消失している可能性があるが、遺構数および出土遺物量が少ないことから、この地域の土地利用は活発ではなかったようである。

主な遺構には、調査区の西端付近で検出した鎌倉時代初期にあたる方形縦板横棧組の井戸がある。この井戸の位置は、前代の平安時代後期には、最勝光院の西側道路面（法性寺大路）に相当する場所にあたる。鎌倉時代初期には最勝光院の敷地がさらに西側に拡張され、道路部が敷地内に取り込まれたとみられる。他の部分では未調査のため全容は不明であるが、この時期の土地区画変更の一端がうかがえる。

8) 室町時代 (図94)

室町時代に該当する遺構は少数である。しかし、2区西端付近で、南北方向の溝630とその西側に路面821を検出したことは重要である。

鎌倉時代に宅地に取り込まれていた空間が、再度南北方向の道路として利用されることとなった。また、この溝の方位は、ほぼ正方位の傾きを示しており、平安時代に施工された法住寺殿以後の土地区画が変更されたものとみられる。路面821の位置は、平安時代の路面900A～Cとほぼ重複しており、この辺りが鴨川東岸を南北に通る道路として古来から意識されていたものとみられる。

しかし、この時期の遺構も2区の西側にみられるのみである。後世の削平により遺構が消失している可能性があるが、この時期の遺構数および出土遺物量の減少から、前代の鎌倉時代と同様に土地利用は盛んでなかったとみられる。

9) 江戸時代以降 (図95)

江戸時代には遺構数が急増し、広い範囲に各種の遺構が点在している。

2区の西側では、本町通（伏見街道）に西面する町屋に関連する遺構を検出した。この付近では、小規模な柱穴が密集しており、中には柱穴底部に根石を据えるものも多く確認できた。これらの中から、柱穴の規模や位置関係から東西方向に並ぶ柱列を少なくとも3条検出した。これらの柱列からは、間口が5～6m、奥行きは20m以上の東西方向に長い、複数の宅地が復元できる。

井戸は調査区全体に点在し、17基を確認した。井戸掘形の径は2.0～2.5mの規模のものが最も多く、内部構造と比較すると堀形は狭い傾向を示し、効率的な井戸造りが行われていることがわかる。井戸内部の構造は、河原石を小口積みにした円形石組のものが多く、割石組みの井筒や円筒形の漆喰井筒もみられた。

他には、建物の奥に相当するとみられる場所では、瓦質鉢を便器として据え付けた便所や、耕作に関連するとみられる施設（水溜、肥溜）もみられた。

また、調査区の北側でも小規模な柱穴を多数検出しており、相互の位置関係から複数の東西方向の建物もしくは塀を復元することができる。

ほかには小型の窯も検出しており、小規模な窯業が行われていたこともわかった。



図93 鎌倉時代の遺構概要図（1：400）



図94 室町時代の遺構概要図（1：400）

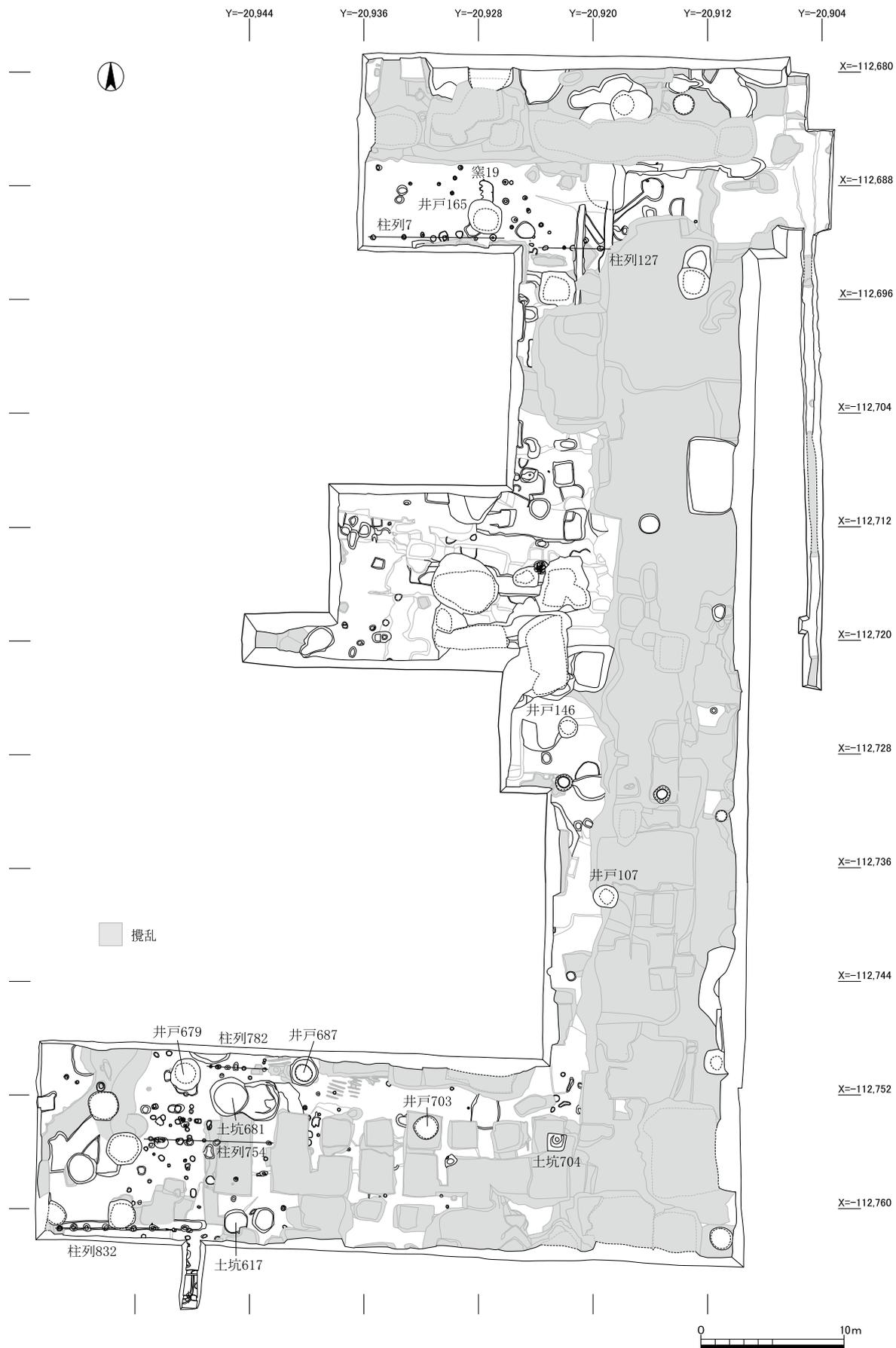


図95 江戸時代以降の遺構概要図（1：400）

明治2年に下京三一番組の番組小学校として「一橋校」が建設された。開校から幾度かの校舎建て替えがあったとみられ、2区の西側では部分的にレンガ造りの建物基礎が残っていた。調査ではこれらの校舎の基礎は攪乱として扱い、詳細な記録を取ることはしなかった。しかし、廃絶した井戸や土坑などからは、一橋校に関連する遺物が出土している。硯や土瓶には、所有者名や同窓会の記名がされるものもみられた。また、インク瓶・謄写版インキ・実験器具など、学校ならではの関連遺物も出土している。

註

- 1) 京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』1 1960年
- 2) 土生田純之「泉涌寺雲竜院内陵墓土塀改修箇所の調査」『書陵部紀要』第32号 1981年
- 3) 「法性寺跡」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 4) 布川豊治『法性寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 5) 内田好昭・柏田由香『史跡法観寺境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 6) 尾藤徳行「珍皇寺旧境内」『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 7) 上村和直「瓦屋の構造と機能－雲南省牛街瓦工場と古代日本の瓦屋跡－」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』V 帝塚山大学考古学研究所 2003年
- 8) 杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館 1981年
- 9) 鈴木久男「平安京右京六条一坊六町の仏堂とその宅地」『古代文化』第62巻第4号 財団法人古代学協会 2011年

観察表1 竪穴住居314・321・347・330・412出土土器一覧表 (図版45、図39～41)

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色 調	胎 土	備 考
1	土師器	壺	竪穴住居314	26.4			口縁100	外10YR8/3~8/4 断5YR8/3	粗 0.5~3mm砂粒	二重口縁
2	土師器	甕	竪穴住居314			4.2	底部100	10YR5/3	やや粗 0.5~4mm砂粒	
3	土師器	壺	竪穴住居321	8.4			口縁50	5YR4/4~4/6	0.5~2mm砂粒	
4	土師器	壺	竪穴住居321	8.7	15.8	2.6	100	5YR6/6~10YR7/3	0.5~2mm	土坑512
5	土師器	壺	竪穴住居321			4.0	70	外7.5YR5/6 内・断7.5YR3/1		体部径21.4
6	土師器	甕	竪穴住居321	15.9			70	外5YR 5/2~7/6 内7.5YR5/2~4/2	0.5~3mm	土坑512
7	土師器	器台	竪穴住居321	15.4			受部25	外7.5YR5/4 断7.5YR8/2~8/3	密 0.5~3mm砂粒	
8	土師器	器台	竪穴住居321	16.2	11.7	15.0	95	外10YR6/3~6/4 内10YR4/2~4/3	0.5~1mm	土坑512
9	土師器	高杯	竪穴住居321			14.4	裾部35	外5YR6/6 断7.5YR6/2~3/2	密	
10	土師器	高杯	竪穴住居321			21.6	裾部25	外7.5YR5/3~5/4 断10YR7/4	やや粗 0.5~5mm砂粒	
11	土師器	鉢	竪穴住居321	13.3			80	7.5YR6/2~3/3		
12	土師器	甕	竪穴住居347			3.5	底部100	外7.5YR4/3~3/3 内7.5YR6/4	密 0.5~5mm砂粒	
13	土師器	甕	竪穴住居347			3.6	底部100	外7.5YR4/4 内7.5YR2/1	密 0.5~2mm砂粒	
14	土師器	壺か	竪穴住居347			4.6	底部100	10YR8/3	密 0.5~2mm砂粒	
15	土師器	器台	竪穴住居330				体部70	7.5YR6/6	密 0.5~1mm砂粒	
16	土師器	壺	竪穴住居412	16.0			口縁10	10YR5/3~3/3	やや粗 0.5~2mm砂粒	土坑539
17	土師器	甕	竪穴住居412			3.8	底部70	10YR4/~3/1	やや粗 0.5~3mm砂粒	土坑539

観察表2 土坑324出土土器一覧表 (図版45、図42)

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色 調	胎 土	備 考
18	土師器	直口壺	土坑324	11.6			口縁90	7.5YR6/4~10YR6/4		
19	土師器	甕	土坑324	14.4			口縁20	10YR4/4	密 0.5~1mm砂粒	庄内式
20	土師器	甕	土坑324	14.4			口縁20	7.5YR4/3~5/3	やや粗 0.5~2mm砂粒	
21	土師器	甕	土坑324	16.6			口縁15	10YR7/4~5/4	密	
22	土師器	甕	土坑324	14.4			口縁10	7.5YR5/3~5/6	密	
23	土師器	高杯	土坑324	12.3			口縁20	7.5YR7/4	密	

観察表3 第2・3面掘下げ出土土器一覧表 (図版46、図43・44)

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色 調	胎 土	備 考
24	土師器	壺	第2面掘下げ	6.8	11.8	3.0	100	10YR7/4~6/4	0.5~6mm砂粒	庄内式
25	土師器	壺	第2面掘下げ			4.5	底部90	5YR8/2~7.5YR8/2	密 0.5~2mm砂粒	
26	土師器	甕	第2面掘下げ	16.0			口縁25	外5YR8/3~8/4 断10YR8/1	やや粗 0.5~4mm砂粒	
27	土師器	器台	第2面掘下げ	15.4			口縁35	7.5YR7/3~7/6	密 0.5~2mm砂粒	
28	土師器	高杯	第2面掘下げ				体部80	外5YR6/6 断7.5YR8/2	密	
29	土師器	壺	第3面掘下げ	13.2			口縁25	10YR8/4	密 0.1~5mm砂粒	
30	土師器	壺	第3面掘下げ	13.8			口縁20	10YR7/4	密 3mm砂粒	
31	土師器	壺	第3面掘下げ	16.2			口縁25	7.5YR8/4~8/6	密 0.5~2mm砂粒	
32	土師器	壺	第3面掘下げ	17.0			口縁20	5YR6/6	密	
33	土師器	壺	第3面掘下げ			3.9	底部100	外2.5YR6/6 断10YR7/3	密 0.5~2mm砂粒	
34	土師器	甕	第3面掘下げ	16.6			口縁20	外7.5YR7/6 内10YR3/1	密 0.5~1.5mm砂粒	
35	土師器	甕	第3面掘下げ	19.5			口縁20	7.5YR7/4~7/6	やや粗 0.5~2.5mm砂粒	
36	土師器	甕	第3面掘下げ			4.1	底部100	7.5YR5/3	0.5~3mm砂粒	

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色 調	胎 土	備 考
37	土師器	甕	第3面掘下げ			8.4	脚部30	7.5YR7/4	1mm砂粒	
38	土師器	高杯	第3面掘下げ			11.6	脚部45	10YR8/3	密	
39	土師器	高杯	第3面掘下げ			11.2	脚部10	10YR8/2	密 0.5~1mm砂粒	
40	土師器	高杯か	第3面掘下げ			14.2	脚部70	7.5YR6/6	0.5~4mm砂粒	
41	土師器	鉢	第3面掘下げ	15.6			10	7.5YR7/4	密 3mm砂粒	
42	土師器	鉢	第3面掘下げ			4.4	底部70	7.5YR6/6	密 0.5~4mm砂粒	

観察表4 その他の古墳時代遺構出土土器一覧表 (図版46、図45)

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色 調	胎 土	備 考
43	土師器	壺	土坑487	18.9			口縁70	2.5Y5/6	密 0.5~3mm砂粒	庄内式
44	土師器	甕	土坑871	11.0			口縁10	外5YR6/6 断10YR8/2	密 0.5~2mm砂粒	
45	土師器	甕	土坑858	12.6			口縁20	7.5YR8/4~7/4	密 0.5~3mm砂粒	
46	土師器	甕	ピット555	14.2			口縁30	10YR6/3~4/3	やや粗 0.5~4mm砂粒	
47	土師器	甕	炉452	14.5			口縁20	2.5Y6/1~4/1	粗 0.5~2mm砂粒	堅穴住居321
48	土師器	甕	土坑434	10.7	9.5	3.4	95	7.5YR7/6~7/8	0.5~4mm砂粒	
49	土師器	甕	ピット479	13.6			口縁10	10YR5/2~3/2	密 0.5~2mm砂粒	庄内式
50	土師器	甕	ピット370	17.0			口縁10	10YR3/2~4/4	密 0.5~2mm砂粒	庄内式
51	土師器	甕	土坑395	14.6			口縁20	7.5YR8/4~7/4	粗	庄内式~布留式
52	土師器	甕	土坑858	12.7			口縁60	10YR8/2	密 0.5~2mm砂粒	
53	土師器	甕	ピット408	14.2			口縁25	10YR7/3~8/2	やや粗 0.5~4mm砂粒	
54	土師器	甕	ピット408	13.0			口縁20	外7.5YR7/3 断10YR8/2	やや粗 0.5~4mm砂粒	
55	土師器	甕	土坑395			3.5	底部50	外7.5YR7/6 断7.5YR8/2	やや粗 0.5~4mm砂粒	
56	土師器	甕	落込み982			4.6	底部40	外7.5YR6/4内10YR4/1	やや粗 0.5~2mm砂粒	
57	土師器	高杯	土坑396	18.2			口縁20	7.5YR7/4~7/6	密 0.5~3mm砂粒	
58	土師器	高杯	土坑858				体部	外7.5YR7/4	密	
59	土師器	高杯	土坑240				体部	10YR8/3	4mm砂粒	
60	土師器	高杯	土坑395				体部	5YR5/6	やや粗 0.5~4mm砂粒	
61	土師器	鉢	ピット475	4.7	4.0	3.5	80	7.5YR7/6~6/6	密 0.5~3mm砂粒	
62	土師器	甗	土坑863	12.4	8.2		100	7.5YR8/1~8/3	0.5~2mm砂粒	

観察表5 土坑292・822・855・863出土土器一覧表 (図版46・47、図46~49)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備 考
63	土師器	椀A	土坑292	13.5	3.8		50	7.5YR8/3~7/3	
64	土師器	杯B	土坑822			10.6	底部	5YR8/4	
65	黒色土器	皿B	土坑822	19.0			20	10YR3/1	A類
66	須恵器	壺G	土坑822			5.0	50	外10BG4/1 内10BG6/1~5/1 断2.5YR5/3	
67	須恵器	鉢	土坑822	22.0			10	2.5Y6/1	
68	土師器	杯B	土坑855				10	7.5YR7/4	外面ケズリ
69	須恵器	杯	土坑855				10	N7/0~6/0	
70	黒色土器	皿B	土坑855	14.2	3.0		10	外2.5Y8/1 内10YR3/1	A類
71	黒色土器	皿B	土坑855	16.0	3.0		10	外10YR8/3~7/3 内2.5Y2/1	A類
72	緑釉陶器	盤	土坑855		12.0		10	釉10YR8/2~7/2断10Y7/1	
73	黒色土器	皿B	土坑863	15.8	2.9		10	外7.5YR8/2~8/3 内N2/0	
74	黒色土器	椀B	土坑863	15.4	4.3		95	外10YR5/3 内N5/0~4/0	A類
75	黒色土器	椀B	土坑863	15.4	4.6		45	外10YR5/3 内N3/0	A類
76	黒色土器	椀B	土坑863	20.6	6.0		95	外7.5YR7/4~6/4 内N3/0~2/0	A類

観察表6 ピット291出土土器一覧表 (図50)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
77	土師器	甕	ピット291	23.8			20	10YR8/3	
78	土師器	高杯	ピット291	32.6			口縁10	7.5YR8/4~7/4	
79	須恵器	蓋	ピット291	14.4			15	5Y7/1~6/1	
80	須恵器	杯B	ピット291	15.8	4.4		高台20	N7/0~6/0	

観察表7 溝833出土土器一覧表 (図版47、図51)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
81	土師器	皿A	溝833	11.4	1.1		20	7.5YR8/2~8/3	
82	土師器	皿N	溝833	9.0	1.7		90	7.5YR8/3	
83	土師器	皿N	溝833	9.6	1.6		65	7.5YR7/4	
84	土師器	皿N	溝833	9.6	1.5		45	7.5YR8/3~8/4	
85	土師器	皿N	溝833	9.6	2.1		40	7.5YR7/3	
86	土師器	皿N	溝833	12.6	2.3		10	2.5YR8/2~7/2	
87	土師器	皿N	溝833	13.6	2.8以上		10	7.5YR7/4	
88	土師器	皿N	溝833	14.2	2.3		40	10YR8/2~8/3	
89	土師器	皿N	溝833	14.8	3.5		90	10YR8/2	
90	土師器	皿N	溝833	14.9	2.7		90	2.5YR8/2~7/2	
91	須恵器	壺	溝833			高台径10	10	外5Y2/1 内5Y5/1~4/1	
92	瓦器	椀	溝833	14.8	4.0以上		20	外N4/0 断N8/0	
93	白磁	椀	溝833				10	釉5Y8/2 断5Y8/1	
94	白磁	椀	溝833			高台径7.4	10	釉7.5Y7/1~7/2 断5Y8/1	

観察表8 路面900A・900B・900C出土土器一覧表 (図版47、図52)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
95	土師器	皿Ac	路面900A	9.0	1.1		10	10YR7/3	
96	土師器	皿N	路面900A	9.0	1.5		30	10YR8/3	
97	土師器	皿N	路面900A	9.4	1.7		95	10YR8/3	
98	土師器	皿N	路面900A	9.6	1.5		30	5YR7/4	
99	山茶椀	皿	路面900A	8.4	2.4	4.7	30	10YR8/1	
100	土師器	皿N	路面900B	9.4	2.0		100	10YR8/1~7/1	
101	土師器	皿N	路面900B	9.6	1.5		10	7.5YR8/2	
102	土師器	皿N	路面900B	16.0	2.5		60	10YR8/3	
103	土師器	白色皿	路面900B	9.4	3.1	3.7	100	10YR8/2	
104	瓦器	椀	路面900B	13.4			10	N6/0	
105	白磁	皿	路面900B	9.9	2.1		35	釉10Y7/1 断N8/0~7/0	
106	白磁	椀	路面900B			高台径6.4	10	釉10Y7/1 断N8/0~7/0	
107	白磁	椀	路面900B	16.4			10	釉7.5Y 8/1~7/1 断2.5Y8/1	
108	須恵器	壺	路面900C				10	10YR4/1~7.5YR5/2	

観察表9 土坑682出土土器一覧表 (図版47、図53)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
109	土師器	皿N	土坑682	9.5	1.9		90	10YR8/2	
110	土師器	皿N	土坑682	9.5	1.9		60	10YR8/2	
111	土師器	皿N	土坑682	9.6	1.9		10	7.5YR8/3~7/3	
112	土師器	皿N	土坑682	9.6			20	10YR7/3	

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
113	土師器	皿N	土坑682	11.0			10	7.5YR7/3	
114	土師器	皿N	土坑682	12.8	2.3		10	10YR8/2	
115	土師器	皿N	土坑682	14.0	2.1		90	10YR8/2~8/3	
116	土師器	皿N	土坑682	14.6	2.9		20	2.5Y8/2~7/2	
117	土師器	皿N	土坑682	14.6	2.5		10	10YR8/2~7/2	
118	土師器	皿N	土坑682	15.0	3.1		10	10YR8/2	
119	土師器	皿N	土坑682	15.4	2.5		25	10YR8/3~7/3	

観察表10 濠150出土土器一覧表 (図版47、図54)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
120	土師器	皿N	濠150	8.8	1.3		10	7.5YR7/3	
121	土師器	皿N	濠150	9.0	1.9		55	10YR6/4	
122	土師器	皿N	濠150	9.4	1.4		10	10YR7/2~7/3	
123	土師器	皿N	濠150	9.6	1.7		40	2.5Y8/1	
124	土師器	皿N	濠150	13.4			10	10YR7/2~7/3	
125	土師器	皿N	濠150	14.4			10	10YR6/2	
126	土師器	皿N	濠150	8.8	1.3		30	外7.5YR7/6 内2.5YR5/6	
127	緑釉陶器	椀	濠150				10	釉5Y7/4~7/6 断5Y8/1	
128	灰釉陶器	皿	濠150				10	外・断5Y7/1 内10YR5/2	
129	褐釉陶器	四耳壺	濠150	10.2			口縁40	外7.5Y6/1~6/3 内10YR6/3~6/4 断10YR6/1~6/3	
130	青磁	椀	濠150				10	釉7.5Y5/3 断7.5Y7/1	
131	白磁	椀	濠150				10	釉10Y7/1 断N8/0	
132	白磁	椀	濠150				10	釉7.5Y7/1~7/2 断7.5Y8/1~7/1	
133	白磁	椀	濠150				10	釉7.5Y8/1 断N8/0	
134	白磁	椀	濠150				10	釉7.5Y7/1 断7.5Y8/1	
135	白磁	椀	濠150				10	釉2.5GY8/1~7/1 断N8/0	
136	白磁	壺	濠150	11.8			10	釉7.5Y7/1 断N8/0	

観察表11 地業55・60・166出土土器一覧表 (図55)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
137	土師器	皿N	地業55	11.0	残存1.6		10	10YR8/3	
138	土師器	皿N	地業55	12.8	残存1.8		10	10YR8/3	
139	瓦器	椀	地業55	13.6	残存2.8		10	2.5Y8/1	
140	土師器	皿N	地業60	12.4	残存2.1		20	10YR8/3	
141	土師器	皿N	地業60	16.8	残存2.0		10	10YR7/3	
142	土師器	皿N	地業166	14.4	残存2.0		10	10YR8/3~8/4	

観察表12 土坑171出土土器一覧表 (図版47、図56)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
143	土師器	皿Ac	土坑171	9.2	1.4		75	7.5YR7/4	
144	土師器	皿Ac	土坑171	9.4	1.3		25	10YR8/3	
145	土師器	皿Ac	土坑171	10.2	1.2		20	7.5YR8/4	
146	土師器	皿N	土坑171	8.0	1.2		25	7.5YR8/3	
147	土師器	皿N	土坑171	8.6			30	7.5YR7/4	
148	土師器	皿N	土坑171	8.6	1.5		25	10YR8/3	
149	土師器	皿N	土坑171	8.8	1.5		25	7.5YR7/3	

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
150	土師器	皿N	土坑171	9.0	1.7		25	2.5YR7/4	
151	土師器	皿N	土坑171	9.2	1.4		40	5YR7/4	
152	土師器	皿N	土坑171	9.2	1.4		30	7.5YR8/3	
153	土師器	皿N	土坑171	9.2	1.7		30	7.5YR8/4	
154	土師器	皿N	土坑171	9.2	1.3		25	7.5YR8/4	
155	土師器	皿N	土坑171	9.2	1.6		50	10YR8/3	
156	土師器	皿N	土坑171	9.4	2.0		100	外7.5YR5/6 内10YR8/4	
157	土師器	皿N	土坑171	9.5	1.8		50	7.5YR8/3	
158	土師器	皿N	土坑171	9.6	1.8		25	10YR8/3	
159	土師器	皿N	土坑171	9.6	1.9		25	10YR8/3	
160	土師器	皿N	土坑171	9.7	1.5		30	10YR8/2	
161	土師器	皿N	土坑171	9.7	1.6		25	7.5YR8/4	
162	土師器	皿N	土坑171	9.8	1.9		30	外5YR7/6 内10YR7/4	
163	土師器	皿N	土坑171	9.8	1.8		25	10YR8/2	
164	土師器	皿N	土坑171	9.8	1.5		25	7.5YR7/4	
165	土師器	皿N	土坑171	9.8	1.7		80	7.5YR8/3	
166	土師器	皿N	土坑171	14.8	2.6		20	7.5YR7/4	
167	須恵器	杯B	土坑171	14.8			15	外N4/0 内・断N5/0	
168	須恵器	鉢	土坑171	30.0	10.8	11.0	底部25	2.5Y7/1	
169	瓦器	皿	土坑171	10.4	1.5		20	外N5/0 断2.5Y7/2	
170	瓦器	火鉢	土坑171	50.8	11.7		30	外2.5Y4/1 断7.5YR7/4	
171	青磁	輪花椀	土坑171	13.6			口縁10	釉7.5Y8/2~7/2 断7.5Y8/1	

観察表13 土坑173出土土器一覽表 (図版48、図57)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
172	土師器	皿Ac	土坑173	8.6	1.1		20	7.5YR8/3	
173	土師器	皿Ac	土坑173	9.8	1.2		20	10YR8/2	
174	土師器	皿Ac	土坑173	10.3	1.3		20	7.5YR7/4	
175	土師器	皿N	土坑173	8.0	1.5		20	7.5YR8/3~7/3	
176	土師器	皿N	土坑173	8.6	1.4		20	7.5YR7/4~6/4	
177	土師器	皿N	土坑173	9.0	1.4		30	7.5YR8/3	
178	土師器	皿N	土坑173	9.0	1.6		30	7.5YR7/4	
179	土師器	皿N	土坑173	9.0	1.5		20	7.5YR7/4	
180	土師器	皿N	土坑173	9.0	1.7		30	7.5YR7/4	
181	土師器	皿N	土坑173	9.0	1.8		20	10YR8/3~7/3	
182	土師器	皿N	土坑173	9.0	1.8		20	10YR8/2	
183	土師器	皿N	土坑173	9.3	1.5		55	7.5YR7/4~7/6	
184	土師器	皿N	土坑173	9.3	1.7		20	7.5YR8/2	
185	土師器	皿N	土坑173	9.4	1.8		95	10YR8/2	
186	土師器	皿N	土坑173	9.4	1.7		95	10YR8/3~7/3	
187	土師器	皿N	土坑173	9.4	1.5		20	7.5YR7/4	
188	土師器	皿N	土坑173	9.4	1.4		20	10YR7/4	
189	土師器	皿N	土坑173	9.5	1.6		40	7.5YR8/4~7/4	
190	土師器	皿N	土坑173	9.5	1.7		35	10YR8/2~8/3	
191	土師器	皿N	土坑173	9.6	1.7		20	7.5YR7/4	
192	土師器	皿N	土坑173	9.6	1.6		20	7.5YR8/3	
193	土師器	皿N	土坑173	9.6	1.7		30	7.5YR8/3	

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
194	土師器	皿N	土坑173	9.7	1.8		40	10YR7/4~7.5YR7/4	
195	土師器	皿N	土坑173	9.8	1.8		75	7.5YR7/4	
196	土師器	皿N	土坑173	11.5	1.8		50	7.5YR7/6	
197	土師器	皿N	土坑173	11.8	1.9		45	7.5YR7/4	
198	土師器	皿N	土坑173	13.4	2.5		10	7.5YR7/4	
199	土師器	皿N	土坑173	13.4	2.1		20	10YR8/3~7/3	
200	土師器	皿N	土坑173	14.5			20	7.5YR7/4	
201	土師器	皿N	土坑173	14.8	3.1		95	5YR6/6	
202	土師器	皿N	土坑173	14.8			10	7.5YR7/6	
203	土師器	皿N	土坑173	14.9			10	7.5YR8/4	
204	瓦器	椀	土坑173	13.8	5.2		30	N3/0	
205	瓦器	椀	土坑173	15.8	4.3		20	N3/0	

観察表14 第1面掘下げ出土土器一覧表 (図版48、図58)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
206	土師器	皿Ac	第1面掘下げ	8.4	1.1		20	7.5YR7/4	
207	土師器	皿Ac	第1面掘下げ	9.4	1.1		40	7.5YR7/4	
208	土師器	皿Ac	第1面掘下げ	9.4	1.3		100	10YR7/2	
209	土師器	皿Ac	第1面掘下げ	9.4	1.2		50	7.5YR7/4	
210	土師器	皿Ac	第1面掘下げ	10.0	1.1		20	10YR7/3~7/4	
211	土師器	皿N	第1面掘下げ	8.6	1.0		30	10YR7/3~7/4	
212	土師器	皿N	第1面掘下げ	9.0	1.7		30	7.5YR7/4	
213	土師器	皿N	第1面掘下げ	9.4	1.7		20	10YR8/3	
214	土師器	皿N	第1面掘下げ	9.4	1.7		30	10YR8/3~8/4	
215	土師器	皿N	第1面掘下げ	9.6	1.6		50	7.5YR7/4	
216	土師器	皿N	第1面掘下げ	9.6	1.4		20	10YR8/3	
217	土師器	皿N	第1面掘下げ	9.8	2.3		30	7.5YR7/4~6/4	
218	土師器	皿N	第1面掘下げ	10.0	1.6		30	7.5YR7/4	
219	土師器	皿N	第1面掘下げ	10.0	2.2		50	10YR8/3	
220	土師器	皿N	第1面掘下げ	10.0	2.4		40	10YR8/3~8/4	
221	土師器	皿N	第1面掘下げ	12.6	残存1.5		10	10YR8/2	
222	土師器	皿N	第1面掘下げ	13.6	2.4		20	10YR7/3~6/3	
223	土師器	皿N	第1面掘下げ	16.0	2.4		20	5YR7/6	
224	須恵器	鉢	第1面掘下げ				10	N6/0~5/0	
225	瓦器	鍋	第1面掘下げ	33.0	残存2.7		10	5Y8/1	
226	褐釉陶器	四耳壺	第1面掘下げ	9.0			15	釉7.5Y6/2 断7.5Y7/1	
227	白磁	椀	第1面掘下げ				10	釉7.5Y7/1 断5Y8/1	
228	白磁	皿	第1面掘下げ			3.2	底部100	釉5Y6/3~6/4 断2.5Y7/2	

観察表15 第2・3面掘下げ出土土器一覧表 (図版48、図59・60)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
229	須恵器	鉢	第2面掘下げ	14.6	推定8.7	12.5	40	2.5Y7/1	
230	瓦器	皿	第2面掘下げ	9.9	2.2		90	5Y8/1	
231	瓦器	椀	第2面掘下げ	14	5.1		30	N8/0	
232	瓦器	鉢	第2面掘下げ				10	5Y8/1	
233	土師器	椀A	第3面掘下げ	13.0	3.4		40	7.5YR7/4	外面ケズリ
234	土師器	皿N	第3面掘下げ	10.8	1.8		100	10YR7/3	

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
235	土師器	甕	第3面掘下げ	23.0			口縁20	7.5YR8/4	
236	須恵器	杯B	第3面掘下げ	14.8	5.3		60	N5/0	
237	須恵器	皿	第3面掘下げ			7.6	高台10	N6/0	

観察表16 その他の平安時代遺構出土土器一覧表 (図版48、図61)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
238	土師器	甕	土坑366	22.4			口縁20		
239	須恵器	蓋	土坑846	13.2			10	N7/0~6/0	
240	須恵器	杯	土坑846	9.2			10	5YR6/1	
241	須恵器	杯	溝706	14.2			5	2.5Y7/1~6/1	
242	緑釉陶器	皿	溝759			6.4	50	断5Y8/1	
243	灰釉陶器	椀	溝706			7.6	25	釉7.5Y7/2~6/2 外・内N7/0~6/1	
244	灰釉陶器	壺	ピット1022		残存3.5	16.6	底部30	釉5Y7/2 断10YR7/1	
245	土師器	皿A	土坑839	14.5	2.3		30	7.5YR8/3~8./4	
246	土師器	皿A	ピット787	17.2			25	2.5YR8/4	
247	土師器	皿N	ピット815	15.6			20	10YR8/2	
248	土師器	高杯	ピット815				体部	10YR8/3~7/3	
249	灰釉陶器	椀	土坑923			8.0	底部50	2.5Y8/1~7/1	
250	土師器	皿N	ピット799	11.8			30	7.5Y8/4	
251	土師器	皿N	ピット799	14.6			25	10YR8/4~7/4	
252	土師器	皿N	土坑227	13.8	2.7		50	10YR8/3	埋納土坑
253	土師器	皿N	土坑227	14.8	2.3		30	7.5YR7/4	埋納土坑
254	須恵器	椀	土坑669	20.4			5	5Y7/1~6/1	
255	瓦器	椀	溝759	13.4	5.4		10	外・内10YR3/1 断N8/0	
256	白磁	椀	土坑669	14.4			10	釉7.5YR8/2~7/2 断7.5YR8/1	
257	白磁	椀	溝771	16.4			10	外・内7.5Y7/1~7/2 断7.5Y8/1	

観察表17 井戸767ほか出土土器一覧表 (図版48、図62・63)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
258	土師器	皿N	井戸767	8.4	1.5		20	2.5YR7/1	
259	土師器	皿N	井戸767	9.0	1.2		30	10YR8/1~8/2	
260	土師器	皿N	井戸767	9.4	1.5		25	10YR8/1~8/2	
261	瓦器	椀	井戸767	15.6	5.3		40	N1.5/0	
262	白磁	壺	井戸767	11.4			口縁20	2.5Y7/2~7/3	
263	瓦器	鍋	溝630	24.7			口縁25	N7/0~4/0	
264	瓦器	盤	土坑54		残存6.3	41.4	底部70	5Y8/1	
265	須恵器	鉢	土坑405	28.4	残存10.8		20	2.5Y6/2	
266	土師器	皿Sh	第1面検出中	6.6		2.0	40	2.5Y8/2	

観察表18 井戸687出土土器一覧表 (図版49、図64)

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
267	染付	椀	井戸687	6.9	4.6	3.1	95		
268	染付	椀	井戸687	7.2	3.2	2.7	95		
269	染付	椀	井戸687	5.8	6.0	2.7	40		
270	染付	椀	井戸687	6.7	7.7	4.0	90		
271	染付	皿	井戸687	12.5	2.3	6.6	95		

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
272	染付	皿	井戸687	12.6	2.4	6.9	25		
273	染付	蓋	井戸687	7.3	2.5		100		
274	磁器	硯	井戸687		2.2		70		幅7.4
275	施釉陶器	椀	井戸687	7.4	3.9	2.8	50	釉5Y8/2 断5Y8/2	
276	施釉陶器	椀	井戸687	6.2	6.2	3.5	60	釉5Y8/2 断5Y8/1	
277	施釉陶器	土瓶蓋	井戸687	7.0	3.2		100	釉2.5Y8/1 断10YR8/4	
278	施釉陶器	土瓶蓋	井戸687	6.4	3.1		100	釉2.5Y8/1 断2.5Y8/4	
279	施釉陶器	土瓶	井戸687	9.7	9.5		10	釉2.5Y8/1 断2.5Y7/4	
280	土師質土器	でんぼ	井戸687	8.8	2.5		60	10YR7/3	柚子型
281	瓦器	火鉢	井戸687		22.1		50	外10YR5/3~4/3 内7.5YR7/4~6/4 断7.5YR6/4	幅24.6

観察表19 井戸703・679・674、土坑704出土土器一覧表（図版49、図65～68）

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
282	磁器	猪口	井戸703	5.9	3.8	2.6	100		
283	染付	小杯	井戸703	6.8	2.7	2.4	95		
284	染付	急須	井戸703	7.9	9.0	8.3	60		
285	施釉陶器	土瓶	井戸679		残存7.0		10	釉2.5Y8/1 断2.5Y8/4	
286	施釉陶器	鍋	井戸679	21.4			80	釉10Y8/2~7/2 断N8/0	
287	土師質土器	焙烙	井戸679	33.0			25	外10YR4/1~3/1 内10YR8/3	
288	土師器	皿Nr	土坑704	5.0	1.2		40	10YR7/4~6/4	
289	土師器	皿Nr	土坑704	5.0	1.3		40	10YR7/3	
290	瓦器	鉢	土坑704	23.0	25.2	20.0	底部100	2.5Y5/1~4/1 断10YR7/3	
291	施釉陶器	灯明皿	土坑704	11.4	2.6	4.1	100	釉7.5Y6/1 外7.5YR6/2~4/2	口縁部外側に煤付着
292	焼締陶器	摺鉢	土坑704	40.4			20	2.5YR4/6	
293	土師器	皿	井戸674	10.0	1.8		50	7.5YR7/4	
294	土師質土器	焙烙	井戸674	25.0			15	7.5YR7/4	
295	土師質土器	焙烙	井戸674	27.4			10	外7.5YR8/4~8/6 内・断10YR8/4~7/4	
296	軟質施釉陶器	灯火具	井戸674		残存4.1	幅7.3	90	釉2.5Y5/6~5/4 断10YR8/3	

観察表20 その他の江戸時代遺構出土土器一覧表（図版49・50、図69）

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
297	土師器	皿Nr	窠19	4.8	1.8		70	2.5Y7/1	
298	土師器	皿Nr	ピット615	5.6	1.8		70	10YR8/3~8/4	
299	土師器	皿Nr	土坑705	6.0	1.2		70	2.5Y7/3	
300	土師器	皿Nr	ピット676	6.2	1.3		30	7.5YR7/4	
301	土師器	皿S	土坑94	10.6	1.8		30	10YR8/3	
302	土師器	皿S	土坑169	10.6	2.1		100	10YR8/2	口縁部に煤付着
303	土師器	皿S	土坑617	10.8	2.2		40	10YR7/3	
304	土師器	皿S	土坑617	10.9	2.6		80	10YR7/2	
305	施釉陶器	皿	土坑104	10.8	2.7		40	釉5Y7/4~6/4 断5Y8/2	
306	施釉陶器	皿	土坑105	11.7	3.2	4.5	90	釉7.5Y6/3 断2.5Y8/1	
307	施釉陶器	椀	土坑88	12.2	5.6	4.8	底部100	釉5YR7/2 断5YR7/4	内面錆絵
308	施釉陶器	椀	土坑74	11.4	5.6	4.6	底部100	釉5YR6/2、5YR7/1混 断7.5YR7/4	
309	施釉陶器	椀	土坑74	12.7	4.9	4.7	60	釉5Y8/2~7/2 断5Y8/	内面錆絵
310	施釉陶器	椀	土坑617		7.6		50	釉5Y7/3 断N8/0~7/0	伊賀産
311	施釉陶器	茶入	ピット601	5.1	5.7		50	釉2.5Y3/3 断2.5Y7/2	鉄釉

番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	胎土色調	備考
312	土師質土器	つぼつぼ	土坑115	3.2	2.3		100	10YR7/3	
313	土師質土器	でんぼ	土坑169	9.2	2.2		50	2.5Y8/3	
314	土師質土器	花塩壺蓋	土坑146	7.6	1.3		50	2.5Y8/2	「深草砂川権兵衛」の印
315	土師質土器	焼塩壺身	土坑146	6.8	7.6		40	5YR6/6	
316	土製品	人形型	土坑169	縦9.3		横10.9	95	10YR8/3~8/4	鶏 伏見人形
317	青花	椀	第1面検出中	16.8	8.3	7.1	40		景徳鎮窯系

観察表21 出土瓦類一覧表 (図版51~53、図70・71)

番号	種類	文様	遺構名	胎土色調	備考
318	軒丸瓦	蓮華文	濠150	N5/0	
319	軒丸瓦	蓮華文	第2面掘下げ	10YR6/1	
320	軒丸瓦	蓮華文	土坑173	N5/0	
321	軒丸瓦	蓮華文	重機掘削中	5Y7/1~6/1	
322	軒丸瓦	蓮華文	第2面掘下げ	5Y8/1~7/1	
323	軒丸瓦	巴文	土坑111	2.5Y4/1	
324	軒丸瓦	巴文	路面900A	2.5Y8/1	
325	軒丸瓦	巴文	路面900B	N6/0	
326	軒平瓦	唐草文	溝833下層	N7/0~6/0	大伴
327	軒平瓦	唐草文	井戸767	N5/0	
328	軒平瓦	唐草文	井戸767	N7/0~5/0	
329	軒平瓦	へら描き文	濠150	N3/0	
330	軒平瓦	唐草文	土坑165	10YR8/3	
331	軒平瓦	唐草文	井戸767	2.5Y7/1~5Y7/1	
332	軒平瓦	唐草文	土坑165	N6/0	
333	軒平瓦	唐草文	土坑165	N5/0	
334	軒平瓦	唐草文	重機掘削中	N6/0	
335	軒平瓦	剣頭文	土坑105	N6/0~5/0	
336	軒平瓦	花卉巴文	土坑209	N4/0	
337	軒平瓦	唐草文	地業60	2.5Y7/1	
338	飾り瓦	宝相華文	濠150	10YR6/3~4/1	
339	文字瓦		路面900C	5Y7/1~6/1	刻印あり
340	雁振瓦		第1面掘下げ	N7/0~6/0	

観察表22 出土銭貨一覧表 (図72)

番号	種類	初铸年代	遺構名	外径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
341	文久永寶	1863	現代盛土層	26.70	6.70	1.35	4.20	裏面に波文
342	寛永通寶	1636以降	土坑146	21.95	6.65	0.95	1.62	
343	寛永通寶	1636以降	土坑705	24.00	6.45	1.30	2.71	
344	寛永通寶	1636以降	現代盛土層	25.30	6.65	1.15	3.07	
345	寛永通寶	1636以降	現代盛土層	23.30	6.10	1.25	2.65	
346	寛永通寶	1636以降	土坑169	22.05	6.60	1.00	1.90	
347	寛永通寶	1636以降	第1面検出中	24.10	5.15	1.35	3.28	
348	寛永通寶	1636以降	ビット676	22.15	6.20	1.05	1.62	
349	寛〇〇寶		現代盛土層	22.70	6.10	1.40	2.25	寛永通寶か

観察表23 出土金属製品一覧表 (図73、写真13)

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(径)(cm)	高さ(cm)	材質	備考
350	煙管火皿	第1面検出中	6.8	1.1		真鍮	火皿1.6
351	煙管火皿	土坑115	6.1	1.1		真鍮	火皿1.6
352	煙管吸口	土坑209	7.5	1.1		真鍮	
353	煙管吸口	土坑115	5.9			真鍮	つぶれている
354	吊り金具	土坑146	6.3	0.7		銅	平安時代か
355	水滴	第1面検出中	4.6	2.1	1.2	真鍮	
356	火箸	井戸687	18.1	0.5		真鍮	飾り部分1.1

観察表24 出土木製品一覧表 (図版54、図74～77)

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(径)(cm)	高さ厚さ(cm)	残存	備考
357	板状	濠150	216.2	10.7	2.5	100	建築部材転用
358	板状	濠150	216.0	9.6	2.0	100	建築部材転用
359	板状	濠150	211.8	9.6	2.0	100	建築部材転用
360	板状	濠150	208.0	9.4	1.0	100	建築部材転用
361	板状	濠150	208.2	9.0	1.6	100	建築部材転用
362	板状	濠150	206.0	7.6	1.3	100	建築部材転用
363	杭	濠150	173.0	10.0			丸杭
364	部材	濠150	360.2	12.8	7.6		建築部材転用
365	部材	濠150	130.8	10.4	6.3		建築部材転用
366	部材	濠150	95.7以上	11.0	6.6		建築部材転用
367	部材	濠150	342.8	18.4	10.8		建築部材転用
368	下駄	井戸679	13.8	8.4	0.7	100	連歯下駄
369	下駄	井戸679	13.9	8.6	2.2	95	連歯下駄
370	下駄	井戸679	17.6	9.2	2.6	95	連歯下駄
371	下駄	井戸687	20.1	9.5	2.8	95	連歯下駄
372	下駄	井戸687	21.1	10.0	2.9	95	連歯下駄
373	下駄	井戸674	22.5	7.3	2.2	95	削り下駄
374	下駄	井戸679	20.4	8.8	2.3	95	削り下駄
375	下駄	井戸679	16.9	8.0	4.5	80	差歯下駄
376	下駄	井戸679	18.0	8.9	6.0	90	差歯下駄
377	下駄	井戸687	18.6	8.8	2.2	95	差歯下駄
378	盆	井戸687		径23.9	1.9	95	
379	櫛	土坑160	6.6	0.6	4.9	50	横櫛
380	木槌(頭部)	井戸679	10.2	径4.1		100	木製の楔付き、鉄製楔の痕跡あり
381	底板	井戸703		径6.1	0.5	90	桶の底板か
382	木札	井戸687	9.6	4.5	0.8	100	「は四十六」と墨書
383	部材	井戸679	20.9	径1.8			棒状
384	不明	井戸679	18.3	1.0	0.6	100	
385	部材	井戸679	18.7	3.0	4.0	100	
386	部材	井戸687	20.9	5.1	4.1	95	

観察表25 出土石製品一覧表 (図版55、図78・79)

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(径)(cm)	高さ(厚さ)(cm)	材質	備考
387	石製銚帯	溝833	2.65	2.55	0.7		丸銚
388	硯	第1面検出中	14.8	6.5	2.3	頁岩～粘板岩	裏面に「大正十四年十二月十七日 岡本スロ子 五年は組」の線刻

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(径)(cm)	高さ(厚さ)(cm)	材質	備考
389	硯	土坑146	15.4	8.2	1.9	頁岩～粘板岩	
390	砥石	土坑63	8.6	3.4	1.9	流紋岩	
391	砥石	第1面検出中	15.3	5.4	1.7	形質頁岩～形質粘板岩	
392	砥石	土坑45	9.9	5.0	1.1	形質頁岩～形質粘板岩	
393	石臼	土坑648	15.5	横23.5	9.2		
394	石臼	井戸107	21.7	幅11.0	8.4		
395	宝篋印塔	現代盛土層		8.7	13.1	花崗岩	宝珠・受花部
396	宝篋印塔	土坑104		9.5	残存高12.5	花崗岩	相輪部
397	宝篋印塔	現代盛土層		8.6	残存高14.2	花崗岩	相輪部
398	五輪塔	現代盛土層		13.0	18.0	花崗岩	空輪・風輪部
399	石塔	土坑680		13.1	残存高11.6	花崗岩	空輪部
400	石塔	土坑146	24.5	24.5	17.0	花崗岩	火輪部 4面に梵字

観察表26 出土ガラス製品一覧表 (図80、写真14)

番号	種類	遺構名	長さ(cm)	幅(径)(cm)	高さ(cm)	備考
401	インク瓶	井戸703		4.6	3.9	中にコルク栓あり
402	インク瓶	井戸687		5.7	5.4	中にコルク栓あり 春秋期用膳寫版インキの銘
403	フラスコか	井戸687		3.1	5.1	試験管か

観察表27 月輪小学校内出土土器一覧表 (図版56、図81、写真15)

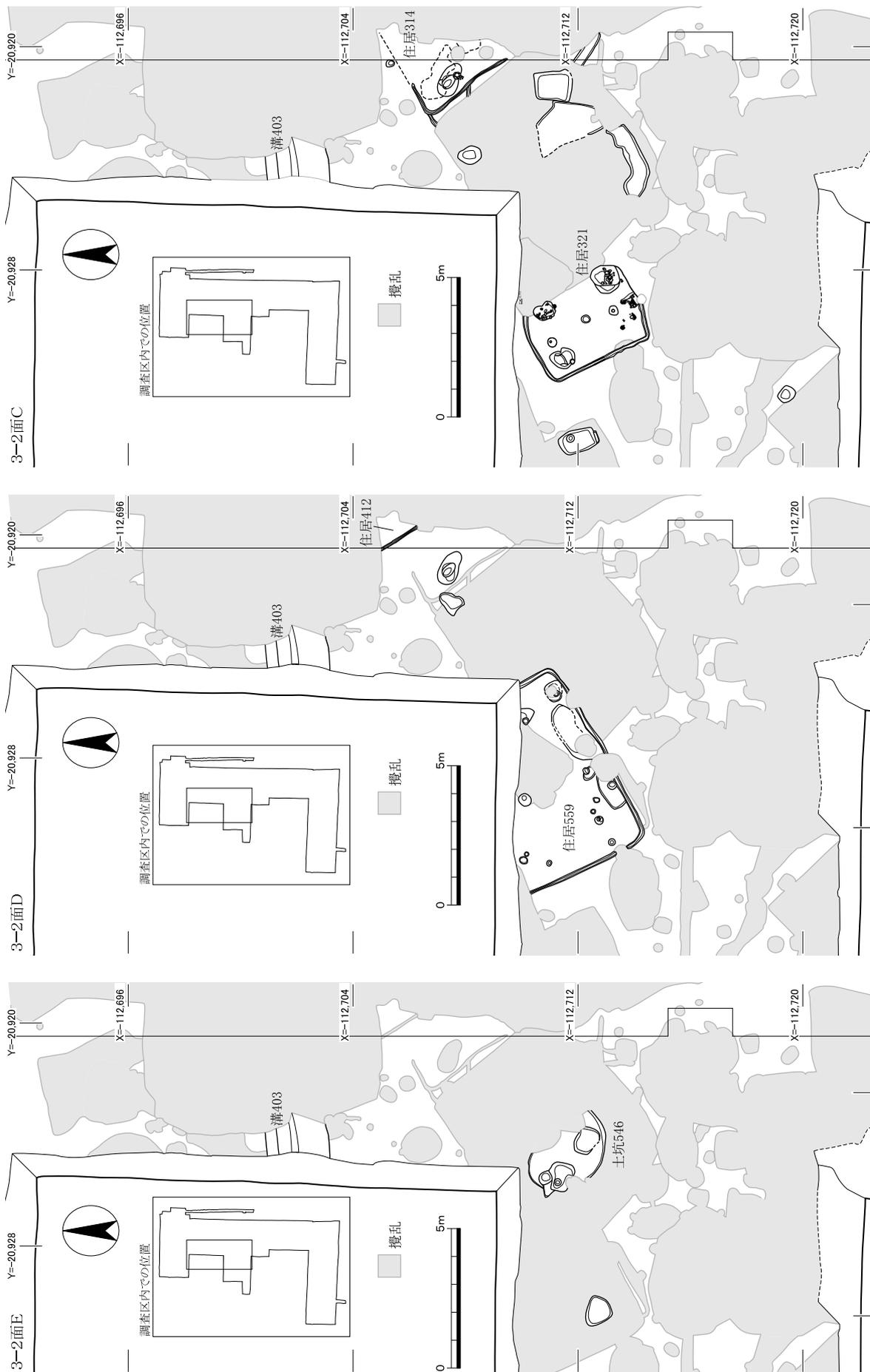
番号	器種	器形	遺構名	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存(%)	色調	胎土	備考
404	土師器	壺	落込み19	10.4			80	外10YR7/4 内7.5YR6/6	2.0mmまでの砂粒	布留式
405	土師器	壺	褐色砂礫	32.4			口縁20	外5YR7/6～7/4 断10YR8/3	0.5～4mm砂粒	二重口縁
406	土師器	甕	茶灰色泥砂	11.0	10.2		40	外7.5YR7/4 内5YR6/6	4mmまでの砂粒	
407	土師器	甕	落込み18	19.5	30.8		80	外10YR2/2 内・断2.5Y5/3～10YR5/3	0.5mm砂粒	庄内式
408	土師器	甕	落込み18	25.0			10	外7.5YR7/4 内10YR8/3～7/3	2mmまでの砂粒	庄内式
409	土師器	甕	落込み19	30.6			15	外2.5Y3/2 内2.5Y3/1 断2.5Y6/3～5/3	3mmまでの砂粒	在地産
410	土師器	甕	褐色砂礫	17.4			25	5YR7/6	5mmまでの砂粒	布留式
411	土師器	甕	灰色泥砂	12.2			70	外2.5Y6/3		布留式
412	土師器	甕	落込み19	13.4			10	10YR8/3～7/3	1mmまでの砂粒	近江型
413	土師器	高杯	褐色砂礫	15.0			60	2.5Y7/4	3mmまでの砂粒	
414	土師器	器台	灰色泥砂			16.0	底部35	7.5YR7/4～7/2		
415	土師器	器台	褐色砂礫	9.7			口縁90	5YR6/6～6/8		小型器台
416	土師器	甗	褐色砂礫			2.5	底部80	10YR7/4～6/4		底部穿孔
417	土師器	製塩土器	褐色砂礫	9.5			80	7.5YR8/3	0.5～3.0mm砂粒	体部11.1

観察表28 一橋小学校内2次調査出土瓦類一覧表 (図82～84)

番号	種類	文様	遺構名	胎土色調	備考
418	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N5/0	1類
419	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N7/0	2類
420	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N8/0～6/0	3類
421	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N6/0	4類
422	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N5/0	5類
423	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N7/0	6類
424	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N8/6～8/5	7類
425	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N7/0～5/0	8類

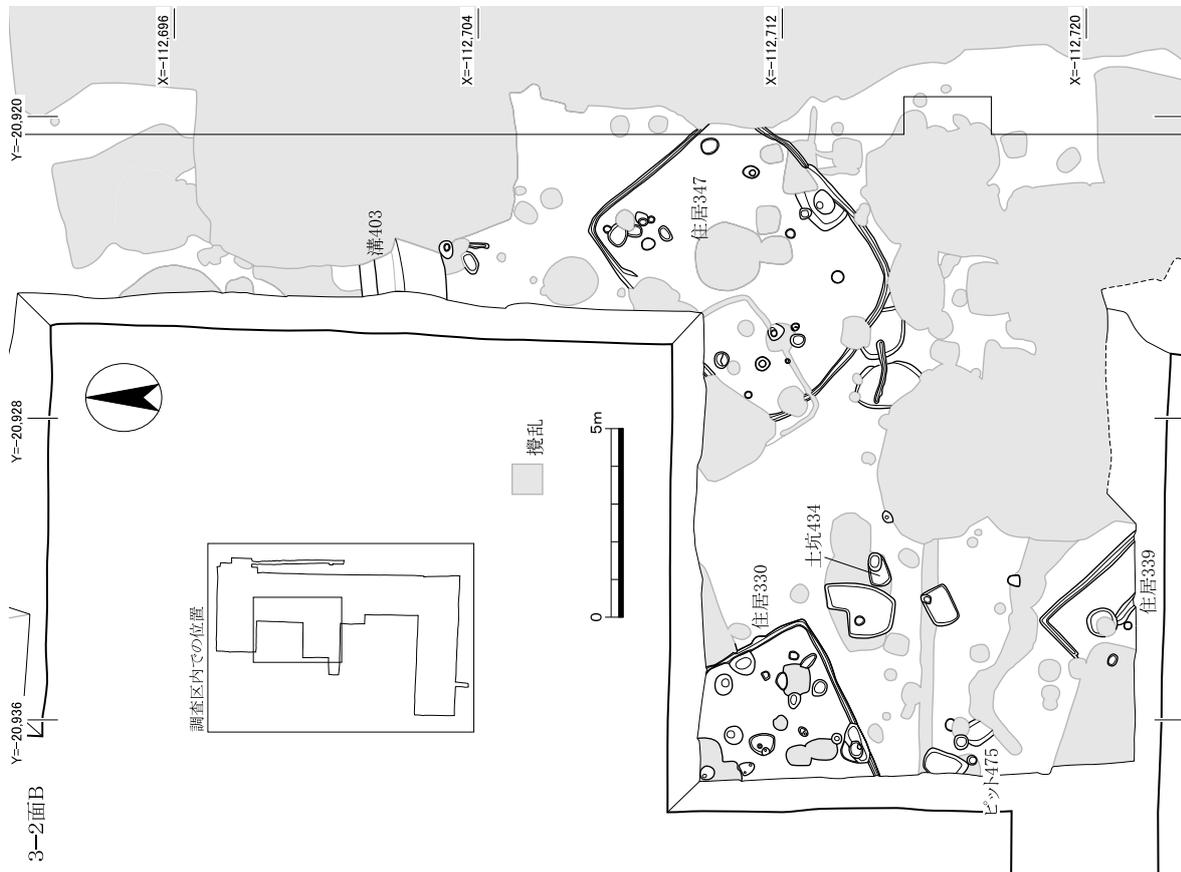
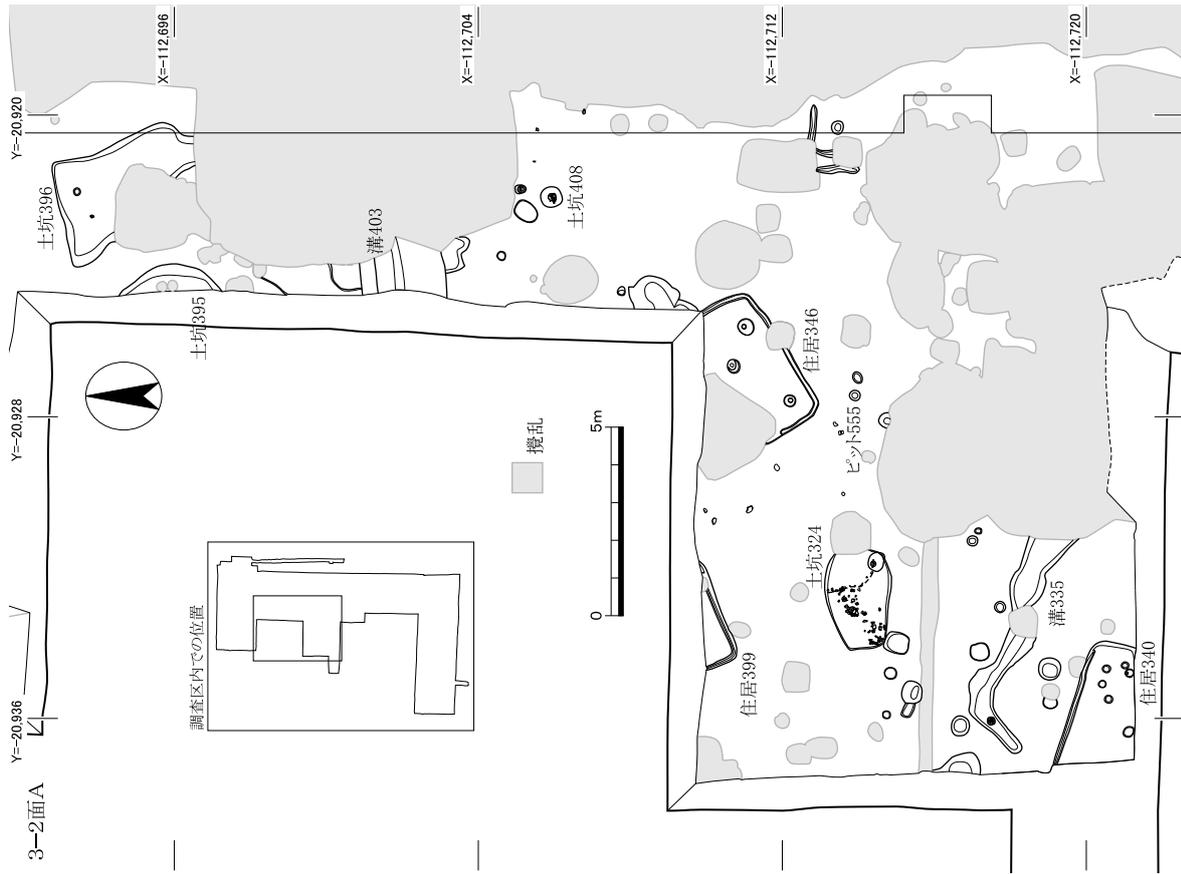
番号	種類	文様	遺構名	胎土色調	備考
426	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N6/0~5/0	9類
427	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N7/0	10類
428	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	N6/0~5/0	11類
429	軒丸瓦	蓮華文	井戸1	2.5Y6/1	12類
430	軒丸瓦	巴文	井戸1	2.5Y7/1~6/1	13類
431	軒丸瓦	巴文	井戸1	10YR8/2	14類
432	軒平瓦	花文	井戸1	N5/0	1類
433	軒平瓦	花文	井戸1	N7/0~3/0	2類
434	軒平瓦	唐草文	井戸1	N3/0	3類
435	軒平瓦	唐草文	井戸1	N7/0	4類
436	軒平瓦	唐草文	井戸1	2.5R7/1	5類
437	軒平瓦	唐草文	井戸1	N4/0	6類
438	軒平瓦	唐草文	井戸1	5Y7/1~6/1	7類
439	軒平瓦	唐草文	井戸1	N6/0~5/0	8類
440	軒平瓦	唐草文	井戸1	N7/0	9類
441	軒平瓦	唐草文	井戸1	N6/0	10類
442	軒平瓦	劍頭文	井戸1	N8/0	11類
443	軒平瓦	劍頭文	井戸1	5Y8/1	12類
444	軒平瓦	劍頭文	井戸1	2.5Y8/2	13類
445	軒平瓦	格子文	井戸1	5Y7/1~7/2	14類
446	軒平瓦	巴文	井戸1	N5/0	15類
447	軒平瓦	雁巴文	井戸1	N7/0~3/0	16類
448	軒平瓦	連珠文	井戸1	N5/0~4/0	17類
449	鬼瓦	鬼面文	井戸1	N6/0~5/0	
450	鬼瓦	鬼面文	井戸1	N7/0	
451	鬼瓦	不明	井戸1	N7/0	

図 版

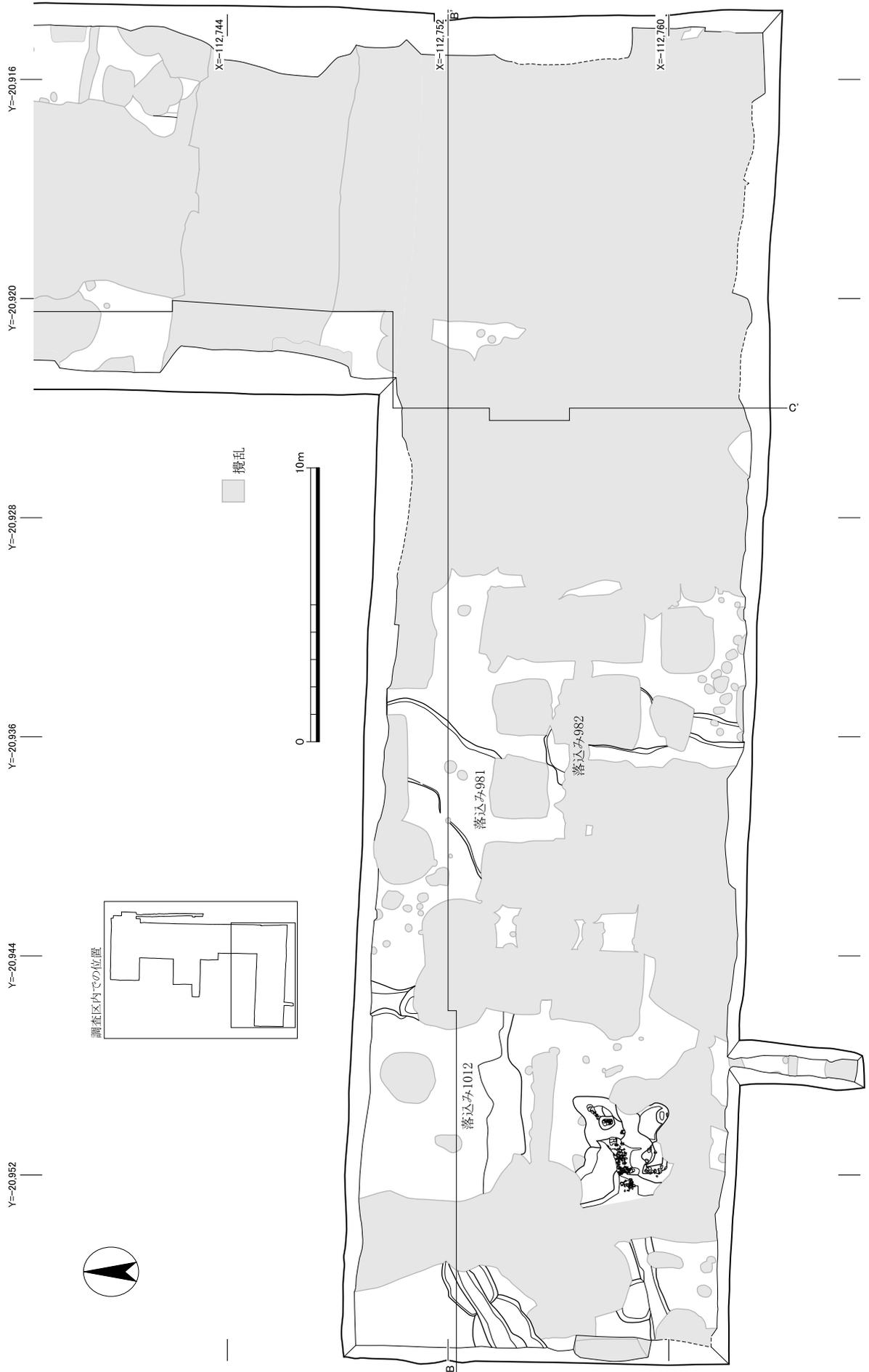


第3-2面中部遺構平面図1 (1:200)

図版2 遺構

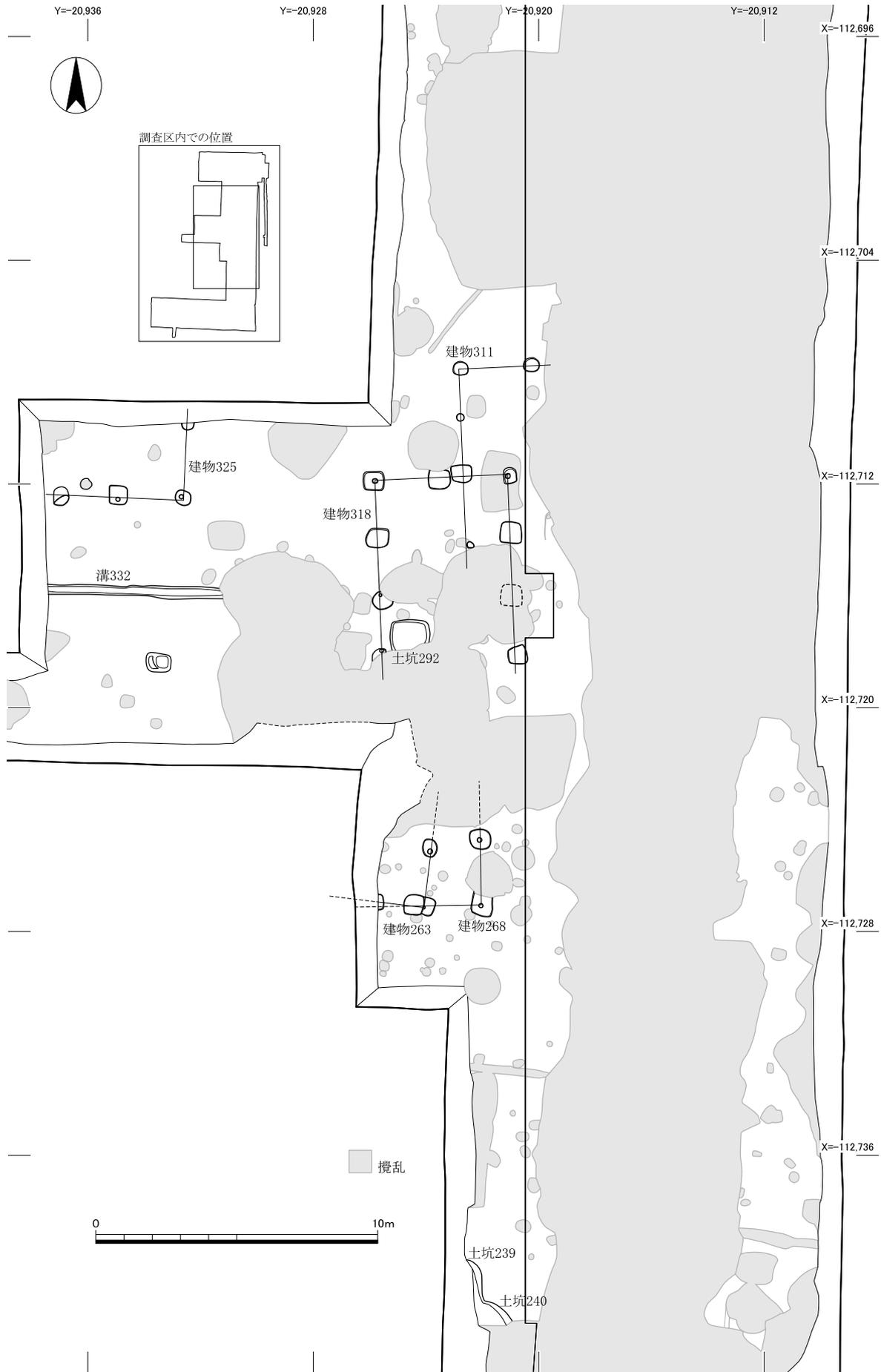


第3-2面中部遺構平面図2 (1:200)



第3-2面南部遺構平面図3 (1:200)

図版 4
遺構



第3-1面中部遺構平面図 (1:200)



第2面北部遺構平面図 (1:200)

図版6
遺構



第2面中部遺構平面図 (1 : 200)

図版 8
遺構



第1-3面北部遺構平面図(1:200)

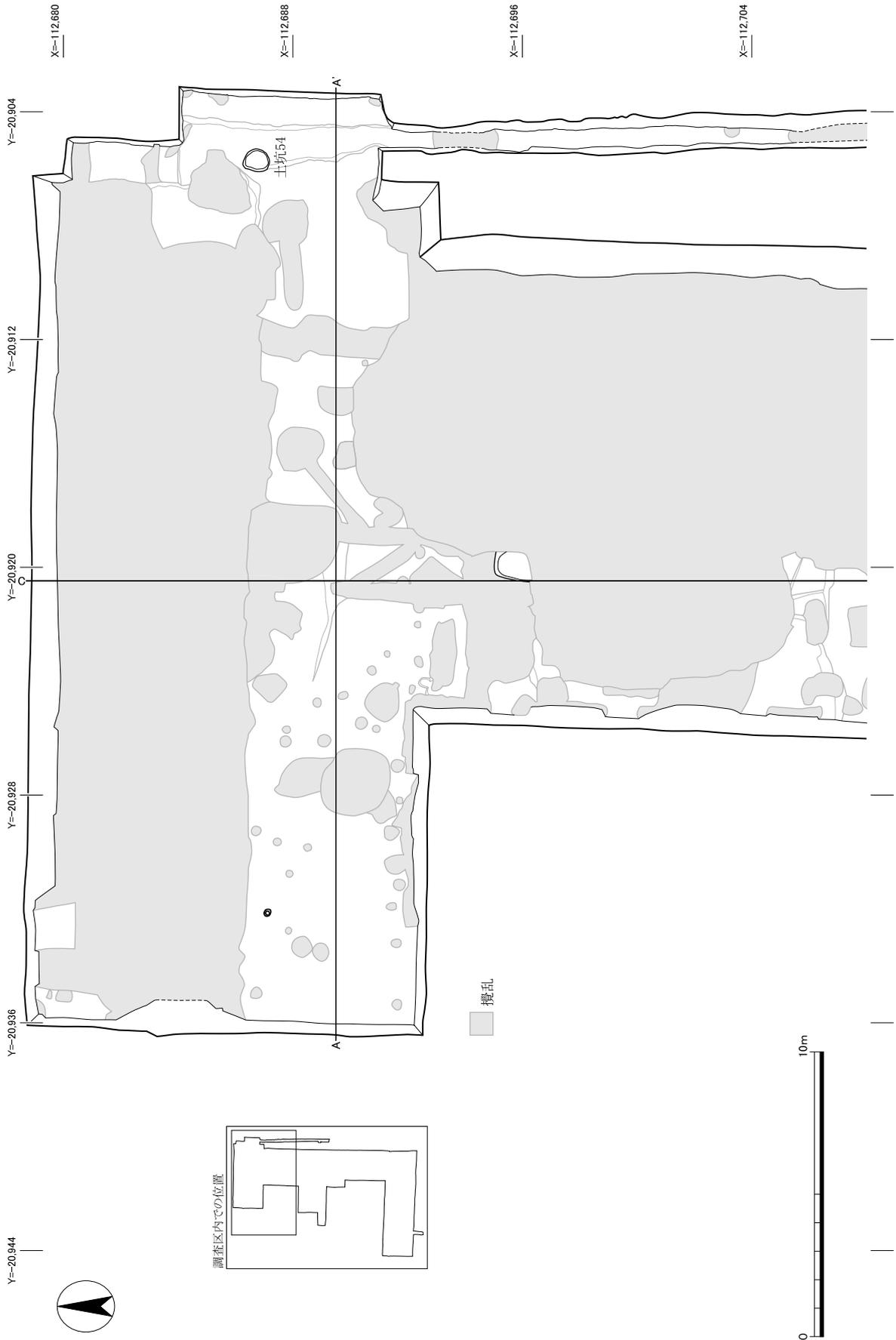


第1 - 3面中部遺構平面図 (1 : 200)

図版 10
遺構



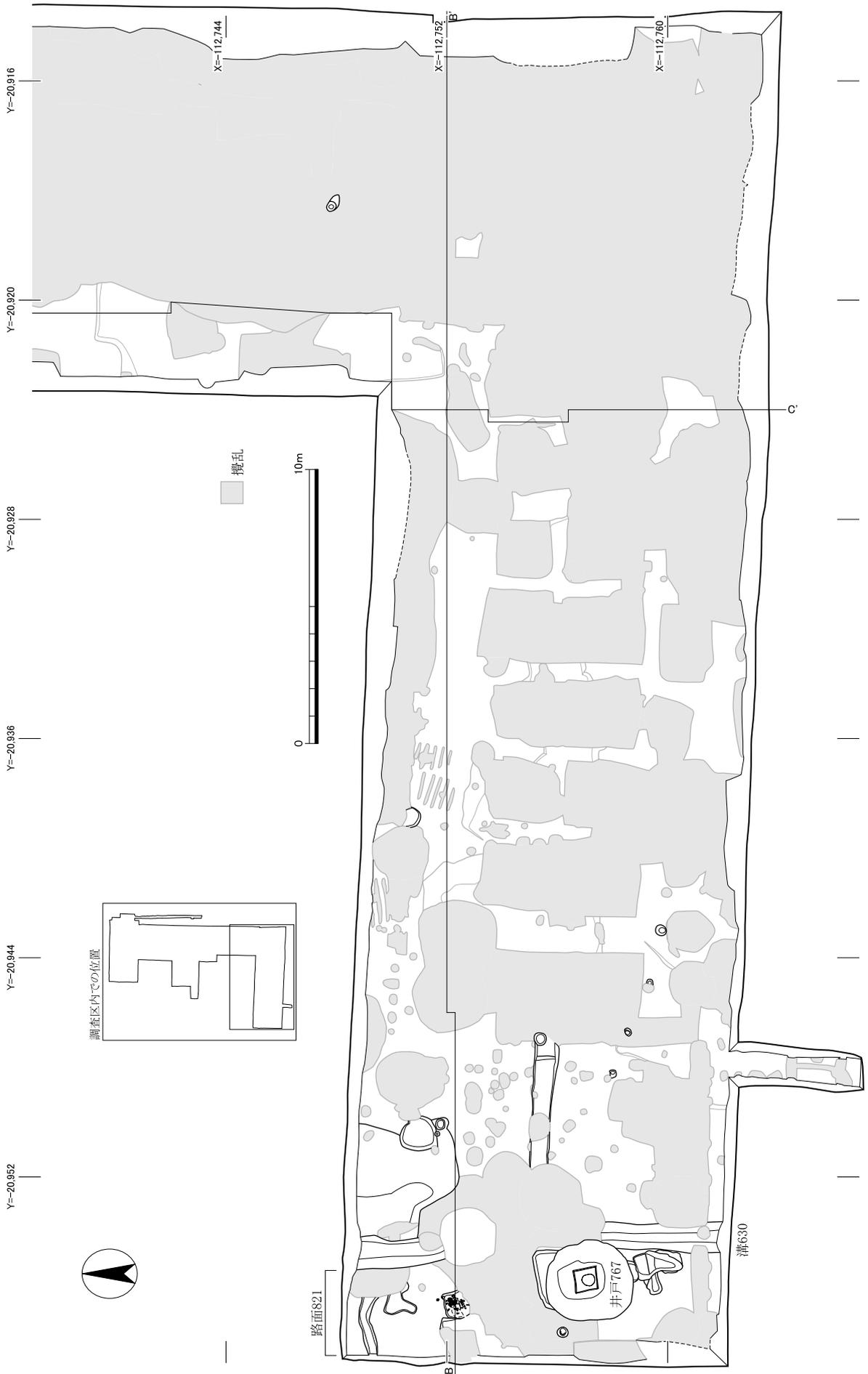
第1 - 3面南部遺構平面図 (1 : 200)



第1 - 2面北部遺構平面図 (1 : 200)



第1 - 2面中部遺構平面図 (1 : 200)



第1 - 2面南部遺構平面図 (1 : 200)



第 1 - 1 面北部遺構平面図 (1 : 200)

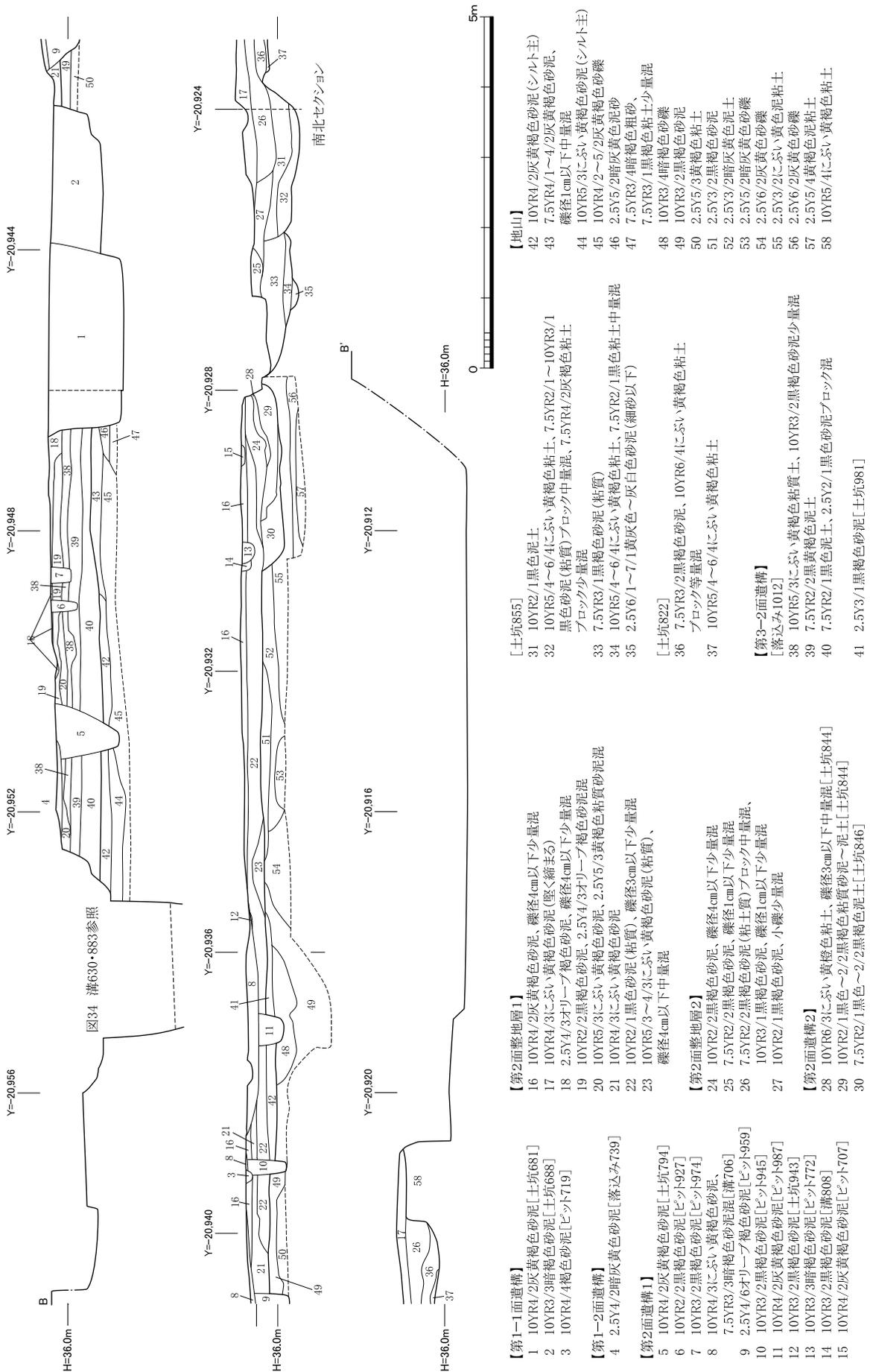


第1-1面中部遺構平面図 (1:200)

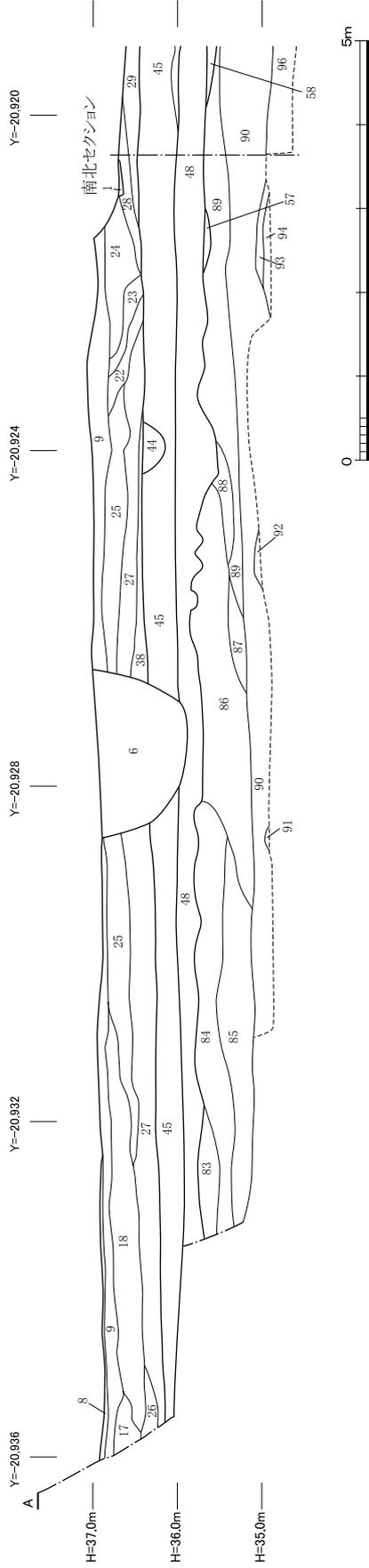
図版 16
遺構



第1-1面南部遺構平面図 (1:200)



南部東西セクション断面図 (1 : 80)



【第1-1面遺構】

- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥[溝141]
- 2 10YR4/4褐色砂泥[溝143]
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥[溝22]
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭少量混[土坑30]
- 5 2.5Y4/2暗黄褐色砂泥[土坑235]

【第1-2面遺構】

- 6 10YR4/2灰黄褐色砂泥[井戸165]

【第1-3面遺構1】

- 7 10YR3/4暗褐色砂泥、炭混[ピット233]

【第1面整地層1】

- 8 10YR4/4褐色砂、礫径0.5~10cm多量混
- 9 10YR3/3暗褐色砂泥、7.5YR3/4暗褐色砂礫少量混、礫径0.5~4cm
- 10 10YR7/6明黄褐色砂泥(粘質、礫径0.5~7cmごく少量混)
- 11 10YR4/2灰黄褐色砂泥(固く縮まる)、礫径0.5~3cmごく少量混
- 12 10YR3/3暗褐色粗砂、10YR5/3にぶい黄褐色細砂ブロック混、礫径0.5~4cmごく少量混
- 13 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径0.5~2cmごく少量混
- 14 10YR4/1褐色砂泥
- 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径0.5~5cmごく少量混
- 16 10YR5/2灰黄褐色砂泥(やや粘質、固く縮まる)
- 17 10YR3/4暗褐色砂泥、10YR3/3泥土ブロック混、礫径0.5~3cmごく少量混
- 18 10YR3/3暗褐色砂泥、2.5YR6/2灰黄色泥土ブロック、10YR3/4暗褐色泥土ブロック混、礫径0.5~8cmごく少量混、炭混
- 19 10YR4/1褐色砂泥(粘質、固く縮まる)
- 20 10YR4/1褐色砂泥(やや粘質)
- 21 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、10YR4/2灰黄褐色砂泥(粘質)混、礫径0.5~8cm少量混
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫径0.5~8cmごく少量混

- 23 10YR4/4褐色粗砂、礫径0.5~6cmごく少量混

- 24 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、礫径0.5~5cmごく少量混

- 25 7.5YR4/2灰褐色砂泥、2.5Y7/3浅黄色泥土ブロック少量混、礫径0.5~8cm少量混

- 26 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭混、礫径0.5~2cmごく少量混

- 27 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR6/3にぶい黄褐色泥土ブロック少量混、炭混、礫径0.5~6cm少量混

- 28 10YR5/2灰黄褐色粗砂、礫径0.5~4cmごく少量混

- 29 10YR4/2灰黄褐色細砂

- 30 10YR3/3暗褐色粗砂、礫径0.5~6cm少量混

- 31 10YR4/1褐色砂泥(粘質、固く縮まる)、礫径0.5~1cmごく少量混

- 32 10YR4/2灰黄褐色粗砂、10YR4/1褐色砂泥(やや粘質)相互混入、礫径0.5~3cmごく少量混

- 33 10YR4/1褐色砂泥(粘質)、炭混

- 34 10YR4/1褐色砂泥(やや粘質)、10YR4/6褐色砂泥(やや粘質)混

- 35 10YR3/1黒褐色粗砂、礫径0.5~9cm中量混

- 36 10YR4/4褐色砂泥、礫径0.5~7cmごく少量混

- 37 10YR4/1褐色砂泥(やや粘質)、礫径0.5~5cmごく少量混

- 38 10YR4/1褐色砂泥(やや粘質)、10YR2/1黒色砂泥(粘質)混

- 39 10YR4/1褐色砂泥(やや粘質)、10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(やや粘質)混、礫径0.5~3cmごく少量混

- 40 10YR3/2黒褐色砂礫、礫径0.5~8cm主

- 41 10YR4/2灰黄褐色砂泥(やや粘質)、礫径0.5~6cmごく少量混

【第1-3面遺構2】

- 42 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径0.5~5cmごく少量混、土師片多量混、炭混[土坑171]

- 43 10YR3/4黒褐色砂泥、礫径0.5~3cmごく少量混、土師片多量混、炭混[土坑171]

- 44 10YR3/2黒褐色砂礫、礫径0.5~8cm主[土坑204]

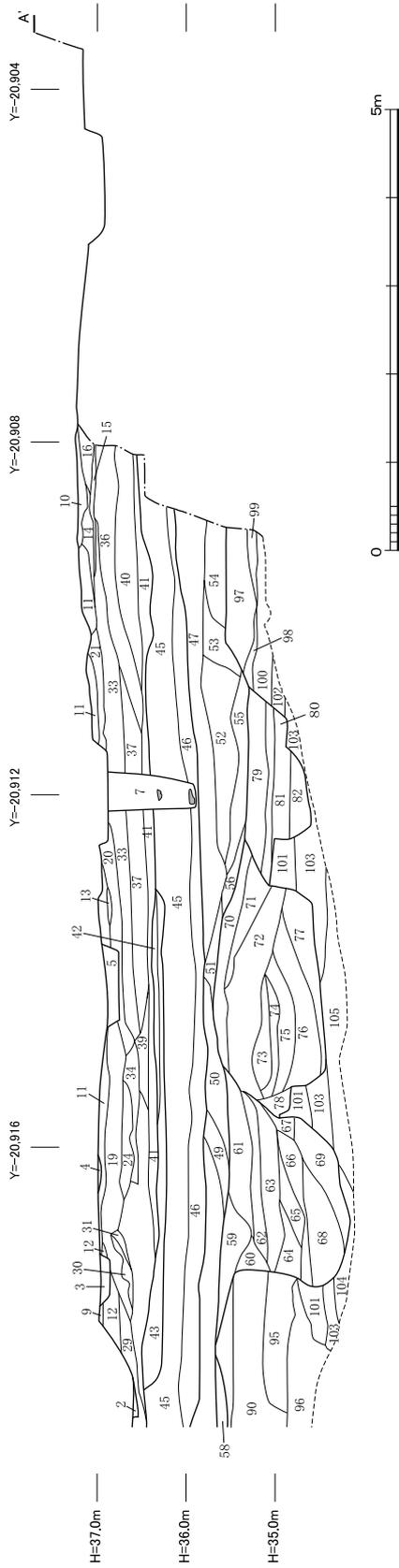
【第1面整地層2】

- 45 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径0.5~4cmごく少量混、炭混

- 46 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径0.5~15cm少量混

北部東西セクション断面図1 (1:80)

北部東西セクション断面図2 (1 : 80)



【第2面整地層1】

- 47 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径3～10cm少量混
- 48 7.5YR2/3極暗褐色～3/2黒褐色砂泥、礫径1～10cm多量混
- 49 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 50 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径1～5cmごく少量混
- 51 10YR4/4褐色泥砂
- 52 10YR2/3黒褐色砂泥、礫径2～10cm多量混
- 53 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径3～10cm少量混
- 54 7.5YR2/3極暗褐色砂泥、礫径1～10cm多量混
- 55 10YR3/2黒褐色砂泥
- 56 10YR4/2灰黄褐色砂泥

【第2面遺構2】

- 57 10YR4/2灰黄褐色砂泥〔土取穴448〕
 - 58 10YR4/2灰黄褐色砂泥〔土取穴437〕
- 〔土取穴374〕
- 59 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫径1～10cm多量混
 - 60 10YR4/4褐色粗砂、礫径2～10cm多量混
 - 61 10YR2/2黒褐色泥土、礫径1～5cmごく少量混
 - 62 10YR8/3浅黄褐色泥土、7.5YR4/4褐色砂泥相互混入、礫径1～3cmごく少量混
 - 63 10YR4/2灰黄褐色泥土、礫径1～4cmごく少量混
 - 64 10YR4/3にぶい黄褐色粗砂、礫径1～8cm多量混
 - 65 10YR4/2灰黄褐色泥土、礫径1～4cmごく少量混
 - 66 10YR4/4褐色砂泥
 - 67 7.5YR3/2黒褐色砂泥、礫径1～3cmごく少量混
 - 68 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、礫径1～5cm少量混
 - 69 10YR2/3黒褐色泥土、礫径1～4cmごく少量混

〔土取穴373〕

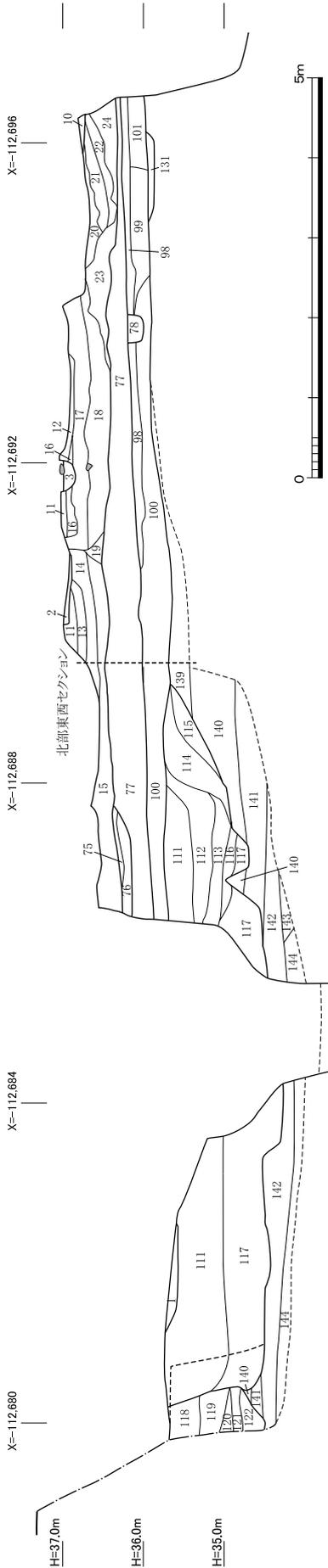
- 70 10YR2/3黒褐色砂泥
- 71 10YR5/3にぶい黄褐色泥土、礫径2～5cmごく少量混
- 72 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径2～15cmごく少量混
- 73 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径1～5cm中量混
- 74 10YR2/2黒褐色泥土、礫径2～5cmごく少量混
- 75 7.5YR2/3極暗褐色泥土、礫径2～3cmごく少量混
- 76 10YR3/2黒褐色泥土
- 77 10YR2/3黒褐色泥土
- 78 10YR6/3にぶい黄褐色泥土、10YR2/2黒褐色粘土相互混入、礫径2～5cmごく少量混

〔土取穴436〕

- 79 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、礫径1～3cm多量混
- 80 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径3cm多量混
- 81 10YR5/2灰黄褐色泥土、礫径2～7cm多量混
- 82 10YR6/4にぶい黄褐色泥土、礫径3～5cm少量混

【地山】

- 83 2.5Y5/3黄褐色細砂、礫径1～5cm多量混
- 84 2.5Y5/2暗灰黄色細砂、礫径1～15cm多量混
- 85 5Y4/3暗オリーブ色細砂、礫径1～20cm多量混
- 86 10YR5/2灰黄褐色細砂、礫径1～15cm多量混
- 87 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂、礫径5cm以下主
- 88 2.5Y5/4黄褐色粗砂
- 89 10YR4/4褐色粗砂、礫径2～10cm多量混
- 90 7.5YR3/3～3/4暗褐色粗砂～砂礫、径5cm以下主
- 91 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
- 92 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 93 10YR5/4にぶい黄褐色シルト
- 94 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 95 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂、礫径12cm以下ごく少量混
- 96 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂、礫径5cm以下多量混
- 97 7.5YR3/4暗褐色砂礫、径10cm以下主
- 98 10YR6/6明黄褐色砂泥、7.5YR4/1褐色粘土、礫径0.8cm以下少量混
- 99 10YR6/2明黄褐色粘土
- 100 2.5Y6/2灰黄色微砂
- 101 7.5YR4/1褐色粘土
- 102 10YR6/2灰黄褐色粘土(火山灰か?)
- 103 5Y7/3浅黄色粘土
- 104 5Y6/1灰色微砂、礫径0.8cm以下少量
- 105 5Y7/3浅黄色粘土、礫径5cm以下多量混



南北セクション断面図1 (1 : 80)

【第1-1面遺構】

- 1 10YR3/2黒褐色細砂[土坑211]
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥[溝142]
- 3 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混[土坑074]
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥[土坑169]
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥[土坑343]
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥[土坑138]
- 7 10YR4/2灰黄褐色砂泥[土坑156]
- 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥[土坑137]

【第1-2面遺構】

- 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥[土坑95]

【第1面整地層1】

- 11 10YR3/3暗褐色細砂、7.5YR3/4暗褐色砂少量混、礫径0.5~4cm
- 12 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(やや砂っぽい)、礫径3cm以下少量混
- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径0.5~5cmごく少量混
- 14 10YR5/2灰黄褐色粗砂、礫径0.5~4cmごく少量混
- 15 10YR4/2灰黄褐色細砂
- 16 10YR4/2灰黄褐色砂泥に10YR5/3にぶい黄褐色砂泥(やや粘質)混じる、礫径2cm以下少量混
- 17 10YR4/1褐灰色砂泥(やや粘質)、10YR6/4にぶい黄褐色砂泥土ブロック中量混、10YR3/2黒褐色砂泥・10YR5/2灰黄褐色砂泥少量混、礫径3cm以下少量混
- 18 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径9cm以下少量混
- 19 10YR4/1褐灰色粘土
- 20 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(微砂~シルト)、10YR3/1黒褐色砂泥(微砂~シルト)混
- 21 10YR4/1褐灰色粘土、10YR3/1黒褐色砂泥土混
- 22 10YR4/2灰黄褐色砂泥土、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥土混
- 23 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径6cm以下中量混
- 24 10YR4/1褐灰色砂泥、礫径6cm以下中量混
- 25 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm以下中量混

- 26 10YR4/3にぶい黄褐色粘土・10YR5/6黄褐色粘土ブロック相互混入
- 27 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、礫径6cm以下中量混
- 28 10YR4/3にぶい黄褐色・10YR5/6黄褐色粘土ブロック相互混入
- 29 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径1cm以下少量混、炭混
- 30 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径5cm以下少量混、炭混
- 31 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径4cm以下少量混
- 32 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥(固く締まる)、礫径~2cm以下少量混
- 33 7.5YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径2cm以下少量混
- 34 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥、礫径5cm以下中量混
- 35 10YR5/1褐灰色砂泥
- 36 10YR4/1褐灰色砂泥
- 37 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 38 10YR5/6黄褐色砂泥(固く締まる)、礫径8cm以下少量混、炭少量混
- 39 10YR4/4褐色砂泥(固く締まる)、礫径3cm以下少量混
- 40 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥(固く締まる)、2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥等量混、礫径3cm以下少量混
- 41 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥(固く締まる)、礫径3cm以下少量混
- 42 10YR2/3黒褐色砂泥
- 43 10YR6/2灰黄褐色砂泥(固く締まる)、礫径5cm以下少量混
- 44 10YR3/2黒褐色粘土
- 45 10YR4/3灰黄褐色砂泥、10YR7/4にぶい黄褐色砂泥土ブロック中量混、礫径3cm以下少量混
- 46 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、10YR4/1褐灰色砂泥土ブロック中量混、礫径3cm以下少量混
- 47 10YR5/6黄褐色砂泥(粗砂混じり)
- 48 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 49 10YR5/2灰黄褐色砂泥、10YR6/4にぶい黄褐色砂泥混
- 50 10YR5/2灰黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 51 10YR4/1褐灰色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 52 10YR4/1褐灰色砂泥土
- 53 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥土
- 54 10YR7/4にぶい黄褐色砂泥土、10YR4/1褐灰色砂泥土混
- 55 10YR4/1褐灰色砂泥+10YR5/6黄褐色砂泥、礫径5cm以下ごく少量混

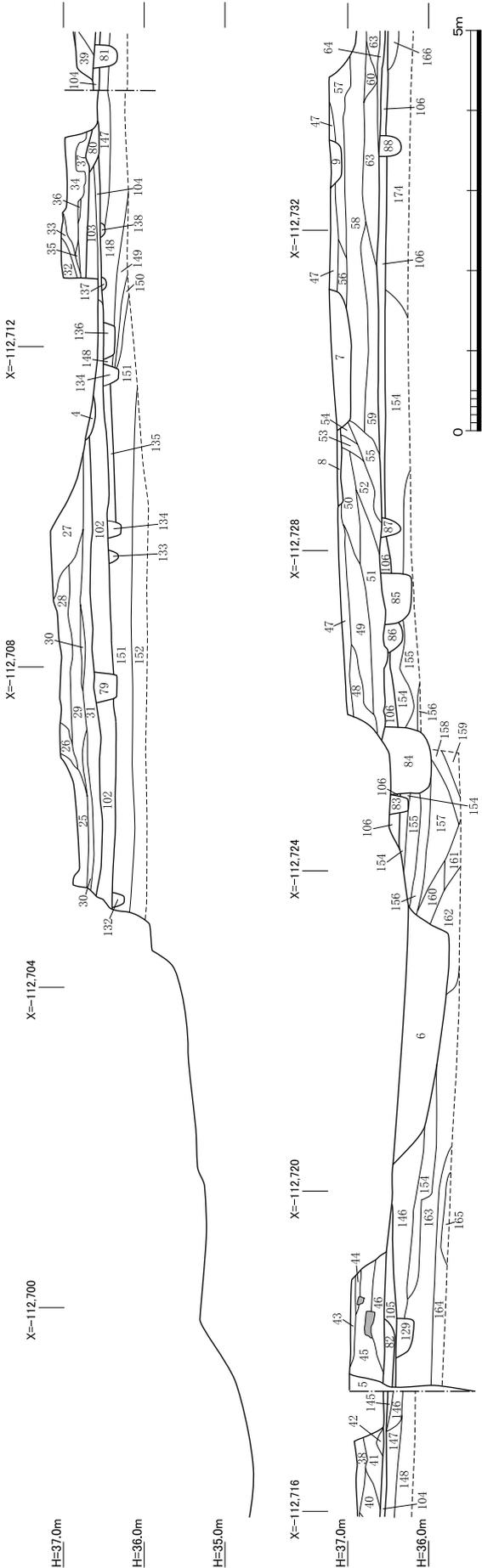
- 56 10YR5/1褐灰色粗砂、礫径4cm以下中量混
- 57 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 58 10YR5/2にぶい黄褐色砂泥、10YR5/6黄褐色砂泥混
- 59 10YR5/3にぶい黄褐色・10YR6/3にぶい黄褐色砂泥混、10YR5/2灰黄褐色砂泥土ブロック混、礫径4cm以下少量混
- 60 10YR4/4褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 61 10YR5/2灰黄褐色~5/3にぶい黄褐色砂泥、10YR6/2~6/3灰黄褐色~5/3にぶい黄褐色砂泥土ブロック混、礫径5cm以下少量混
- 62 10YR5/2灰黄褐色砂泥、10YR6/4にぶい黄褐色砂泥土ブロック・10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径6cm以下中量混
- 63 10YR4/1褐灰色粗砂混、礫径6cm以下中量混
- 64 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭混
- 65 10YR4/1褐灰色砂泥、礫径5cm以下少量混
- 66 10YR4/2灰黄褐色砂泥(やや粘質)、炭混
- 67 10YR5/6黄褐色シルト
- 68 10YR4/2灰黄褐色砂泥、炭混
- 69 10YR3/2黒褐色砂泥、炭多量混
- 70 10YR3/3暗褐色砂泥、土器片多量混
- 71 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径6cm以下少量混、炭混
- 72 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径2cm以下少量混
- 73 10YR2/2黒褐色砂泥、2.5Y5/2暗炭黄色粘土ブロック混、礫径1cm以下少量混、炭少量混
- 74 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR7/3にぶい黄褐色粘土ブロック混、礫径1cm以下少量混

【第1-3面遺構2】

- [土坑171]
- 75 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径0.5~5cmごく少量混、土器器片多量混、炭混
 - 76 10YR3/4黒褐色砂泥、礫径0.5~3cmごく少量混、土器器片多量混、炭混

【第1面整地層2】

- 77 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径0.5~4cmごく少量混、炭混



南北セクション断面図2 (1:80)

- 【第2面遺構1】
- 78 10YR3/4暗褐色砂泥[ピット174]
 - 79 10YR3/2黒褐色砂泥[ピット407]
 - 80 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥[土坑188]
 - 81 10YR3/2黒褐色砂泥(微砂以下)、礫径2cm以下少量混、灰少量混
 - 82 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥[土坑189]
 - 83 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥[ピット341]
 - 84 10YR5/2~4/2灰黄褐色砂泥、10YR3/2黒褐色砂泥・10YR4/4褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混[ピット282]
 - 85 10YR2/3黒褐色砂泥[ピット285]
 - 86 10YR2/2黒褐色砂泥[ピット284]
 - 87 10YR2/2黒褐色砂泥[ピット316]
 - 88 10YR4/2灰黄褐色砂泥[溝194]
 - 89 10YR4/1褐灰色砂泥[土坑195]
 - 90 10YR4/2灰黄褐色砂泥[ピット277]
 - 91 10YR4/1褐灰色砂泥[ピット278柱当]
 - 92 10YR4/2灰黄褐色砂泥[ピット278掘形]
 - 93 10YR4/2灰黄褐色砂泥[ピット238]
 - 94 10YR4/2灰黄褐色砂泥[ピット815]
- 【土坑817】
- 95 10YR2/1黒色砂泥、10YR5/6黄褐色シルトブロック混
 - 96 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/2灰黄褐色砂泥混、同色混砂礫混、10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック混
 - 97 10YR5/6黄褐色粘土、10YR4/2灰黄褐色砂礫混
- 【第2面遺構2】
- [土坑366~448]
 - 111 7.5YR4/1褐灰色砂泥、10YR5/6黄褐色砂泥混、礫径1~10cm以下多量混
 - 112 10YR3/1黒褐色砂泥、礫径5cm以下多量混
 - 113 10YR4/1褐灰色細砂、礫径5cm以下多量混
 - 114 10YR4/2灰黄褐色細砂、礫径5cm以下多量混
 - 115 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR4/4褐色粗砂混
 - 116 2.5Y5/3黄褐色細砂、礫径3cm以下多量混
 - 117 2.5Y4/1黄灰色細砂、10YR4/3~3/3暗褐色砂泥混、礫径10cm以下多量混
- 【第2面遺構3】
- 98 7.5YR4/1褐灰色砂泥、礫径5cm以下中量混
 - 99 7.5YR3/1黒褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
 - 100 7.5YR2/3極暗褐色~3/2黒褐色砂泥、礫径1~10cm多量混
 - 101 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - 102 10YR3/2黒褐色砂泥(やや粘質)、礫径3cm以下少量混、炭混
 - 103 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
 - 104 10YR3/3暗褐色砂泥(やや粘質)、炭・焼土混
 - 105 10YR4/4褐色砂泥、礫径8cm以下多量混
 - 106 10YR4/2灰黄褐色粗砂
 - 107 10YR3/4黒褐色砂泥(やや粘質)、礫径3cm以下少量混
 - 108 10YR3/3暗褐色砂泥に10YR4/4褐色砂泥ブロック混、礫径1cm以下少量混
 - 109 10YR4/4褐色砂泥、礫径3cm以下多量混
 - 110 10YR4/2灰黄褐色砂泥、2.5Y5/2灰黄褐色砂泥・10YR4/3~3/3暗褐色砂泥・礫径3cm以下多量混
- 【土坑855】
- 123 10YR2/1黒色粘土
 - 124 10YR3/1黒褐色粘土、2.5Y5/3黄褐色泥砂ブロック混
 - 125 2.5Y5/3黄褐色シルト質細砂
 - 126 2.5Y6/1黄灰色砂泥
- 【土坑854】
- 127 10YR2/1黒色粘土に2.5Y5/3黄褐色粘土ブロック混、礫径1cm以下少量混
 - 128 2.5Y5/3黄褐色粘土、礫径1cm以下中量混
 - 129 2.5Y6/3にぶい黄色粘土に10YR2/1黒色粘土ブロック混
- 【第3-1面遺構】
- 130 10YR3/2黒褐色砂泥[柱穴298(建物318)]
- 【土坑】
- 118 10YR4/2灰黄褐色泥混じり砂礫、礫径10cm以下
 - 119 7.5YR4/2~4/3灰褐色~にぶい褐色泥混じり砂礫、礫径10cm以下(0.5cm以下主)
 - 120 10YR5/2灰黄褐色泥砂、礫径3cm以下中量混
 - 121 10YR6/2灰黄褐色砂泥(細砂以下)
 - 122 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫、礫径3cm以下

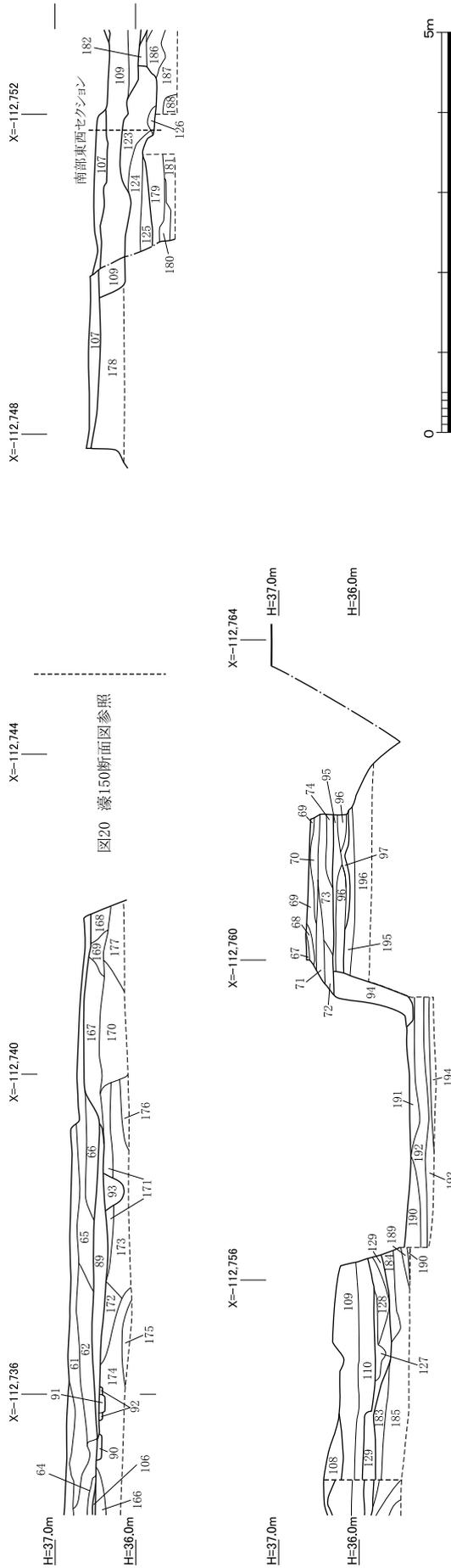


図20 壕150断面図参照

【第3-2面遺構】

- 131 10YR3/3暗褐色砂泥[土坑396]
- 132 10YR4/2灰黄褐色砂泥[溝414(住居412壁溝)]
- 133 10YR3/2黑褐色砂泥[溝468(住居314壁溝)]
- 134 10YR4/1~4/2褐色砂泥[溝348・548(住居347壁溝)]
- 135 10YR4/2灰黄褐色砂泥[住居347床土]
- 136 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥[溝459]
- 137 10YR3/2黑褐色砂泥[溝392]
- 138 10YR3/2黑褐色砂泥[ピット391]

【地山】

- 139 10YR4/4褐色粗砂、礫径2~10cm多量混
- 140 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(微砂以下)
- 141 10YR3/1黑褐色泥土
- 142 2.5Y6/2暗褐色砂泥、礫径1cm以下少量混
- 143 2.5YR6/1黄褐色砂泥、礫径1cm以下中量混
- 144 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、礫径4cm以下中量混
- 145 10YR6/4黄褐色砂泥
- 146 10YR3/2~3/3黑褐色~暗褐色砂泥混じり砂礫、礫径5cm以下
- 147 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR6/2灰黄褐色砂泥中量混
- 148 10YR5/4~6/4にぶい黄褐色~黄褐色砂泥(微砂以下)
- 149 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(微砂以下)
- 150 10YR6/2暗褐色砂泥、礫径3cm以下中量混
- 151 10YR5/3~6/3にぶい黄褐色~にぶい黄褐色砂泥(微砂以下)、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混

【第3-1面遺構】

- 152 2.5Y6/2暗褐色砂泥
- 153 10YR3/3~4/3暗褐色~にぶい黄褐色砂礫(砂少ない)、礫径10cm以下
- 154 2.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥~泥砂(細砂主)、10YR5/1褐色砂泥・10YR6/6明黄褐色砂泥少量混、礫径5cm以下少量混
- 155 10YR4/2~2.5Y5/2暗黄褐色~暗灰黄色砂泥混じり砂礫
- 156 10YR4/3にぶい褐色砂泥混じり砂礫(泥分かなり多い)、礫径5cm以下(3~5cm主)
- 157 10YR5/2~4/2暗黄褐色砂泥、10YR3/2黑褐色砂泥・10YR4/4褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混
- 158 10YR4/3にぶい黄褐色細砂
- 159 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥混じり砂礫(泥分少量)、礫径5cm以下
- 160 10YR5/6黄褐色砂泥
- 161 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、10YR4/1褐色砂泥土混
- 162 10YR3/3~4/3暗褐色~にぶい黄褐色砂礫(砂少ない)、礫径10cm以下
- 163 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥(微砂~シルト主)
- 164 2.5Y6/2暗黄褐色砂泥、礫径1cm以下中量混
- 165 10YR4/2暗黄褐色砂泥、礫径3cm以下ごく少量混
- 166 10YR5/2暗黄褐色砂泥(シルト~細砂)、10YR3/2黑褐色砂泥中量混
- 167 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(泥分少量)、礫径5cm以下
- 168 10YR4/2暗黄褐色砂泥、7.5YR5/6明褐色砂泥ブロック混、礫径2cm以下少量混
- 169 10YR6/8明黄褐色砂泥土(~砂混、微砂以下)、10YR4/2暗黄褐色砂泥~砂泥少量混、礫径2cm以下少量混
- 170 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径5cm以下
- 171 10YR5/6黄褐色砂泥、礫中量混
- 172 2.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥(砂分細砂主)
- 173 7.5YR3/3~10YR3/3暗褐色砂礫、礫径3cm以下

【第2面遺構】

- 174 2.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥~泥砂(細砂主)
- 175 10YR5/2暗黄褐色~2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(粗砂主体)、礫径1cm以下中量混
- 176 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 177 10YR5/6黄褐色砂泥
- 178 10YR3/1黄褐色砂泥、礫径1cm以下少量混
- 179 2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥、礫径1cm以下少量混
- 180 2.5Y5/4黄褐色砂泥
- 181 2.5Y5/3黄褐色砂礫
- 182 2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥
- 183 2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥、2.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥
- 184 2.5Y7/2暗黄褐色砂泥
- 185 2.5Y6/2暗黄褐色砂礫
- 186 2.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥
- 187 2.5Y6/3にぶい黄褐色砂礫
- 188 2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥
- 189 2.5Y5/4黄褐色砂泥
- 190 5Y6/1灰黄色砂礫
- 191 2.5Y5/6黄褐色砂礫
- 192 2.5Y7/2暗黄褐色砂泥
- 193 2.5Y4/2暗灰黄色粘土
- 194 2.5Y7/3にぶい黄褐色粘土
- 195 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘土
- 196 2.5Y6/2暗黄褐色粘土





1 竪穴住居全景（東から）



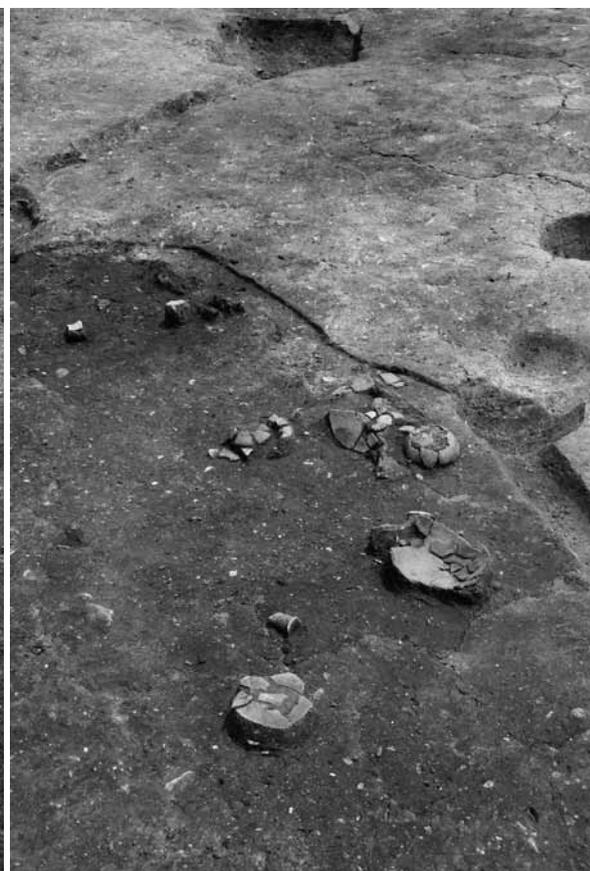
2 竪穴住居559（北から）



1 竪穴住居 321 (北西から)



2 竪穴住居 321 炉 452 (北から)



3 竪穴住居 321 土器出土状況 (西から)



1 豎穴住居321貯蔵穴512（北西から）



2 豎穴住居321貯蔵穴512（西から）



3 豎穴住居347（北西から）



1 竪穴住居 347貯藏穴 453 (北東から)



2 竪穴住居 339 (北西から)



3 竪穴住居 330 (北東から)



4 竪穴住居 330貯藏穴 378 (北東から)



1 豎穴住居340 (東から)



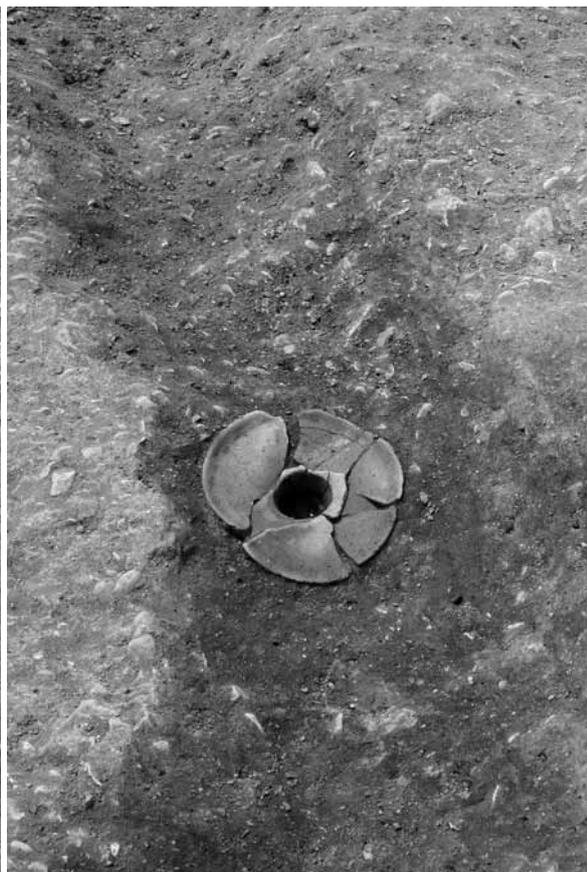
2 豎穴住居346 (北東から)



3 溝403 (東から)



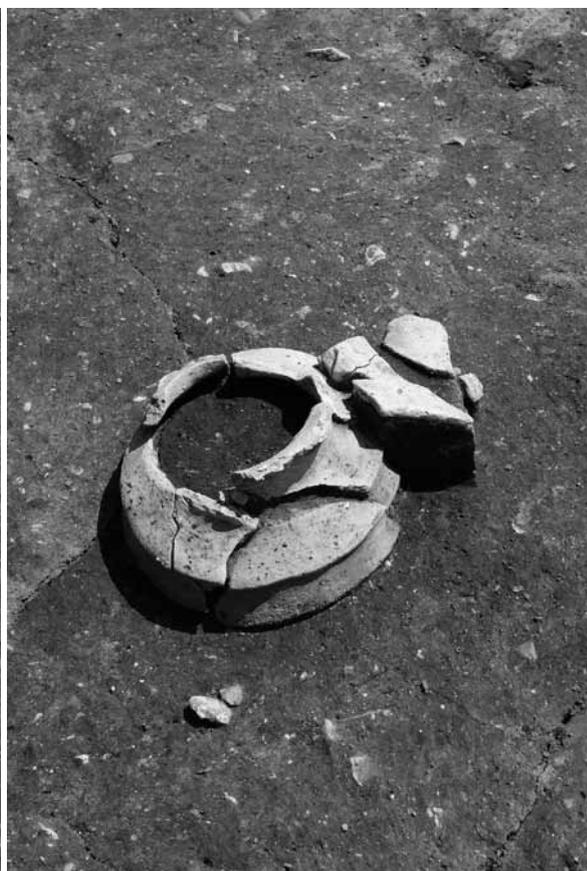
1 土坑434土器出土状況（西から）



2 溝335土器出土状況（北から）



3 土坑324土器出土状況（北から）



4 竪穴住居314土器出土状況（南西から）



1 掘立柱建物全景（北西から）



2 掘立柱建物318（北西から）



1 掘立柱建物263・268（西から）



2 柱穴304（東から）



3 柱穴261（南から）



4 柱穴307（南から）



5 柱穴250（東から）



1 1区北部第2面全景（南西から）



2 1区南部第2面全景（東から）



1 壕150 (北東から)



2 壕150断面 (東から)



1 濠150板列（東から）



2 濠150杭と綱出土状況（南西から）



3 濠150断面（東から）



1 2区第2面全景（北東から）



2 路面900C（北から）



3 路面900C拡大（北から）



1 1区土取穴群（南西から）



2 2区土取穴群（北西から）



1 2区第1面全景（北東から）



2 2区西端部第1面（北から）



1 最勝光院整地層（西から）



2 最勝光院地業55（北西から）



1 最勝光院地業55石列（東から）



2 最勝光院地業55（北西から）



1 最勝光院地業55 (南西から)



2 最勝光院地業55石面 (北西から)



1 最勝光院整地層断割（南西から）



2 最勝光院整地層断割（西から）



1 最勝光院地業55拡張区1 (南から)



2 地業60 (南西から)



3 地業60 (西から)



4 地業166 (南東から)



1 溝833・路面900B（北から）



2 路面900B（北から）



3 拡張区3 溝880（北から）



1 1区北部第1面全景（南東から）



2 1区南部第1面全景（東から）



1 井戸767 (北から)



2 井戸767曲物出土状況 (北から)



3 土坑54瓦器盤出土状況 (西から)

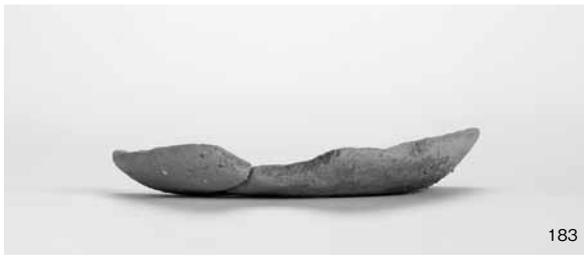


古墳時代の土器類



古墳時代・奈良時代の土器類





平安時代から室町時代の土器類



江戸時代以降の土器類



江戸時代以降の土器類



軒丸瓦



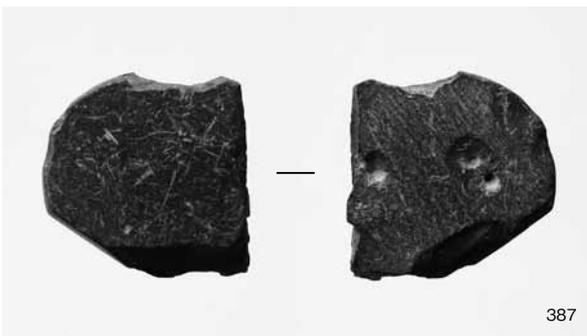
軒平瓦



軒平瓦・その他の瓦



木製品





月輪小学校内出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほうじゅうじどのあと							
書名	法住寺殿跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-10							
編著者名	小檜山一良・上村和直・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほうじゅうじどのあと 法住寺殿跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 ほんまちどおりじゅつちようめ 本町通10丁目 しもいけだちよう 下池田町	26100	546	34度 59分 01秒	135度 46分 15秒	2012年1月 10日～2012 年7月31日	2,285㎡	小・中学校 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
法住寺殿跡	寺院跡 ・ 離宮跡	古墳時代	竪穴建物、土坑、 溝、ピット、落込 み状遺構	土師器		古墳時代初期の竪 穴住居を10棟検出 した。 奈良時代の掘立柱 建物を5棟検出し た。 平安時代後期の建 物地業を検出した。		
		奈良時代	掘立柱建物、土坑、 ピット	土師器、須恵器、瓦				
		平安時代	地業、柱列、溝、 濠、路面、土坑、 ピット	土師器、須恵器、緑釉 陶器、黒色土器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦類、金 属製品、木製品、石製 品、獣骨				
		鎌倉時代	井戸	土師器、須恵器、焼締 陶器、施釉陶器、瓦器、 瓦類、木製品				
		室町時代	溝、路面、土坑、 ピット	土師器、瓦器、国産陶 磁器、輸入陶磁器、瓦 類				
		近世以降	柱列、溝、路面、 土坑、井戸、ピッ ト	土師器、土師質土器、 瓦器、国産陶磁器、輸 入陶磁器、瓦類、金属 製品、木製品、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-10

法住寺殿跡

発行日 2013年1月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961